
ONE PIECE ~ Another World ~

Ryota

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECE ～Another World～

【Nコード】

N9323P

【作者名】

Ryota

【あらすじ】

「麦わらのルフィ」が活躍している世界とは別の世界・・・
また、この世界にも”一つつなぎの大秘宝”^{ワンピース}は存在しているらしい・・・

この少年ウオート・D・ドラもまた、”ひとつつなぎの大秘宝”^{ワンピース}を探し求める一人である・・・
そんな、彼らの冒険の物語である。

第1章 青髪との出会い（前書き）

さあ、新しい小説の始まりです！

第1章 青髪との出会い

ここは、東の海にある、王国の片隅にある村・・・

名をスイレイ村と言う。

今、この村に大海賊が来ていた・・・

そして、その大海賊と酒場で仲良く話をする少年が居た・・・

ドラ「なあ、ジャッカル？今日こそ・・・」

ジャッカル「ダメだ！」

ドラ「まだ、何も言って無いじゃないか！」

ジャッカル「どうせ、また、海へ連れて行ってくれ！だろ？」

ドラ「ダメなのかよ・・・」

ジャッカル「おめえはまだ海の怖さを分かつちやいねんだから・・・」

ドラ「そんなの、分かっているよ！」

ジャッカル「じゃ、どういうことだ？」

ドラ「そ、それは・・・」

ジャッカル「ほれ、見る！分かつちゃね〜！あと、おめえはまだガキだからな！」

ドラ「俺だって、もうガキじゃない！立派な大人だ！！もうすぐ9歳になるんだからな！」

ジャッカル「おおっ、そうか・・・まあ、これ飲めよ！」

とジャッカルはドラにジュースを渡した。

ドラ「おっ！サンキュー！」（ゴクゴク・・・）

ジャッカル「ぷー、ほらガキだ！」

ドラ「あ〜〜！ジャッカル！きたね〜ぞ〜！！！」

ワッハッハッハッハッ！

酒場中で笑い声上がる。

ドラ「わ、笑うな！！！」

と、ドラが顔を赤くしながら、青髪海賊団の乗組員達クルーに怒った。

ジャッカル「ドラ、おめえの海に行きたい気持ちは良く分かったがな・・・おめえの想像している海とはかけ離れている・・・特に”グランドライン偉大なる航路”はそんじょそこの海とは全く違うんだ！ましてやおめえは泳げねんだからな！」

ドラ「いつか、泳げるようになったら連れてってくれるか？」

ジャッカル「嫌だね！でも、まあ、明日は海へは連れてってあげられねえけど、船にやら乗せてやってもいいぞ！」

ドラ「本当か！！」

と目を輝かせて言った。

ジャッカル「ああ、男との約束だ！おっと、時間だ・・・これからまた、海へ行ってくる・・・明日の朝には帰って来れるだろう・・・そのときに乗せてやるよ！」

ドラ「約束だよ！！」

ジャッカル「ああ！よし野郎共！！出航だ！今日は例の島へ行くぞ！！」

乗組員^{クルー}「おおっ！！」

青髪海賊団は、酒場を出て行った。

第1章 青髪との出会い（後書き）

新連載、始まりました!!

原作のワンピースと似ているところがいくつか出てくると思います・
・

今回は、悪魔の実が登場!!

果たして、どんな実なのでしょう!?

楽しみに!!

第2章 悪魔の実登場！ミズミズの実の能力

翌朝・・・

一人の少年が朝早くから港に出ていた。

ドラ「早く、ジャッカル達、帰ってこないかな？」

そう、今日は念願の船に乗せてくれる日だ。

但し、海には出してもらえない・・・

沖の方に一隻の船が見えた。

ドラ「あつ！ジャッカル達だ！！」

船がこちらにやってきた。

ドラ「お～～い！！」

ジャッカル「待たせたな！ドラ！」

船が港に着いた。

ジャッカル「約束だ！乗りな！」

ドラ「いやっほ～！」

勢いよく船に乗り込んだ。

ドラ「すっげえ〜〜〜!!」

ジャッカル「これが俺たちの海賊船、パイレーツ・ドラゴンだ!」

ドラ「なあ、海賊船ってみんな、こうなのか?」

ジャッカル「まあ、大体かな?それと、船首は船長の好みだ!この海賊船の船首はドラゴンの首を彫ったものだよ!」

ドラ「へえ〜かつこいい〜〜〜!!」

ギュルルルルル・・・

ドラの腹が鳴った。

ジャッカル「どうやら、朝飯を食っていないようだね!飯を食っていけ!野郎共!飯の支度だ!!」

乗組員^{クルー}「おおっ!」

暫くして・・・

ジャッカル「存分に食ってけ!」

ドラ「うまそう〜!!いったきま〜す!!」

ガツガツ、ムシヤムシヤ・・・

すごい勢いで食べていく。

ジャッカル「いつも、思うけど、大食いだな・・・」

ドラ「そうか？」

ジャッカル（自分じゃ気づいていないんだ・・・）

ドラ「はぁ~~~~食った、食った・・・」

ジャッカル「って、半分以上、一人で食いおつた!!」

ドラ「まだ、腹八分目だけだな・・・」

ジャッカル「まだ、食うのかよ!!」

すかさず、ツツコミを入れた。

ジャッカル「毎度毎度、驚くわあ!この食いつぶり・・・なあ、パーキンス？」

パーキンス「ええ・・・いつも驚くよ!」

パーキンスと呼ばれたこの男は青髪海賊団副船長だ。

ジャッカル「こいつは、将来、大物になりそうだな・・・」

パーキンス「大食いだけで？」

ハッハッハッハッハッ

二人は笑っていた。

そこへ、一人の男が飛び込んできた。

ジャッカル「どうした？ジャック？」

ジャック「大変です、お頭！あ、悪魔の実がありません！！」

ジャッカル「な、何だって！！よく探したのか？」

ジャック「ええ！」

ドラ「なあ、ジャッカル？悪魔の実って何だ？」

ジャッカル「悪魔の実っていうのは別名「海の悪魔の化身」と言われていて、食べた者は特殊な能力が身に付くんだ。実際には多くの種類が存在していて、食べた事で得る能力も実の種類によって様々であるんだが、普通の人間では得る事の出来ない能力が身に付くものだ！それを売れば、1億ベリーにもなるんだ。そして、悪魔の実を口にした者は海に嫌われ、元々泳げる・泳げないにかかわらず、一生力ナツチになるんだ！。そして、海に入ると体から全ての力が抜けて能力を使うこともできなくなり、沈んでしまうんだ！」

ドラ「へえ！そんなものがあるんだ・・・そう言えばさ、その宝箱見たいの中に入っていたものは何だったんだ？すっげーマジかったんだけどさ・・・」

ジャッカル「なに！！お前、この中のもの食ったのか？」

ドラ「ああ！デザートだと思って・・・マジかったけどよ・・・」

ジャック「もしかして、こういう奴か？」

とジャックが悪魔の実の絵を見せた。

ドラ「ああ、そんな奴！」

ジャッカル「なんてことを・・・お前が食ったのは、ミズミズの実と言う、悪魔の実だ！！そいつを食うと、体が水になるんだ！！そして、お前は、一生力ナツチだぞ！！」

ドラ「そ、そんな・・・」

ジャッカル「ドラ、どこか、体に異変はないか？」

ドラ「いや別に・・・あつ！」

ドラの右腕が水になり、床に落ちた。

バsshャーン！！

ドラ「う、腕が！！取れた！！ど、どうしよう・・・！？」

ジャッカル「戻れと念じてみる！」

ドラ「う、うん・・・」

床に落ちた水が浮き、腕にくつつき、元の形に戻った。

ジャッカル「ちなみに、そいつは自然系ロギアという、希少な実だ！刀も

鉄砲も効かないぞ！」

ドラ「すっげえ〜!!」

ジャッカル「喜ぶなよ！おめえはカナヅチなんだからな！」

ドラ「うん・・・」

ジャッカル「さて、宴の続きだ!!」

ワーーー

パイレーツ・ドラゴン号は再び騒がしくなった。

第2章 悪魔の実登場！ミズミズの実の能力（後書き）

悪魔の実の登場です！！

ロギア
自然系です！

次回は、青髪との別れです・・・

ドラはどうするのか！？

楽しみに！！

第3章 青髪との約束

ドラ「もう行っちゃうの？」

ジャッカル「ああ・・・長かった拠点も今日で終わりだ・・・」

今日は、青髪海賊団がスイレイ村を出航する日だった。

辺りを涼しい秋風が吹いていた。

夏が終わり、秋が訪れようとしていた。

ドラ「なんか、寂しいな・・・」

ジャッカル「なあゝに、また、会えるって・・・!」

ドラ「もう、連れてっていきって言わない!」

ジャッカル「ほうゝまっ!連れていけっって言われても、連れて行かんけどな!」

ドラ「ああ!だから、決めたんだ!!」

ジャッカル「何を??」

ドラ「自分でなるって!」

ジャッカル「なにに?」

ドラ「決めたんだ！俺は、海賊王になる！」^{ワンピース}「一つつなぎの大秘宝」
を見つけて！！そして・・・」

ジャッカル「ほう」

ドラ「そして！この一味にも負けない、仲間を集めて、いつか、
この一味を越えてみせる！！」

ジャッカル「ほう、俺たちを越えるか！」

ドラ「ああ！！海賊王には俺になるんだ！！」

ジャッカル「そうか！なるほど・・・」

そう言つて、ジャッカルは首に掛かっているペンダントを取った。

ジャッカル「ドラ！これをお前に預ける！これは、俺の大事な宝物
だ！いつか、立派な海賊になって俺に返しに來い！絶対だぞ！それ
まで、お前が持っている！」

ドラ「いいの？これはジャッカル・・・」

ジャッカル「いいんだ・・・俺たちを越えるんだろう！それくらい
はして貰わないとな！」

ドラ「う、うん！！」

ジャッカル「ドラ、泣くな、男だろう！また、会える！」

ドラ「な、泣いてなんか・・・いねーよ！！」

ドラは下を向いて涙を堪えていた。

ジャッカル「ドラ！また会おう！その日まで、俺を忘れるな！」

ドラ「あ、会ったり前だ！」

目一杯の声で叫んだ！

ジャッカル「その息だ！あばよ！」

そう言うと、ジャッカル達は船に乗り込み、スレイ村を後にした。

ドラ「ジャッカル・・・俺は、強くなって、お前を越えるからな」
「！！！」

大声で叫んだ・・・

そして、このことがこの少年が、大海原へと旅立つきっかけにもなった。

それは、また10年後の話である・・・

夕日に、貰ったペンダントが輝いていた。

ー青髪海賊団ー

パーキンス「良いですか？船長・・・あれはあなたの大事な・・・」

ジャッカル「なあくに……どつてことない……あいつは将来、大物になるぞ！」

パーキンス「でしょうね……」

ジャッカル「よおし野郎共！！宴だ！！ドラの将来と世界の未来に乾杯だ！！」

パーキンス「つて、船長、あんた、さつき出る前も宴だつて騒いでたでしょうが！」

ジャッカル「あれ？そうだったけ？まあ、気にするな！」

パーキンス「明日、動けなくなりますよ！」

ジャッカル「大丈夫！！」

満面の笑みでグッドとサインを出した。

パーキンス（ヤレヤレ……）

パイレーツ・ドラゴン号の上は再び賑やかになった。

第3章 青髪との約束（後書き）

ドラの幼少期編が終わりました！！

次回からは、旅立つ、10年後からのスタートです！！

楽しみに！！

第4章 冒険の夜明け（前書き）

ドラが18歳になった頃からスタートです！

いよいよ大海原へ旅立ちます！

第4章 冒険の夜明け

村人A「おうゝいドラ！本当にそれで良いのか？」

ドラ「ああ！最初は一人で動かせた方が良いから！」

村人B「だからって、そんな、漁船で行かなくても・・・」

ドラは村にあつた小型の漁船を拝借していた。

村人A「どうせなら、もっと大きいので出港すれば良いのに！」

ドラ「だいじょぶ！」

村人C「また、根拠もないことを・・・」

ドラ「とりあえず！みんな、見送り、ありがとう！！俺、行つてくる！！」

村人達「元気であゝ！」

ドラは、船に帆を張り、船を出した。

冒険の始まりには気持ちの良い朝だ・・・

ドラ（ジャッカル・・・俺、行くよ！そして、なるんだ！！海賊王に！！）

「うおおおおおおおおお！！！」

村長「相変わらず、元気な奴じゃな・・・出発からこんなのだと、先が思いやられるわい・・・」

出航から暫くして・・・

ドラ「いやあ、どっちが”グランドライン偉大なる航路”だ!？」

ドラは、船の上で腕組みをして首を傾けていた。

辺りは、四方八方が海である。

ドラ「まっ！いいか！まずは、仲間を集めないとな・・・」

ドラは辺りを見渡した。

ドラ「ん？」

島が見えた。

緑が生い茂っているジャングルのようだ・・・

ドラ「ありゃ、無人島だな・・・腹減ったし行ってみるか・・・」

ちなみに、ドラは出航前の宴で大鍋を2つ空にしています・・・

ドラは目の前の無人島に向かって進路を変えた。

―無人島―

??「グルルルル」

??「どうした?なんか、あつたのか?ん?」

海の方こうに1隻の船が見える。

??「助け船か!?」

と望遠鏡を取り出して、覗いてみる。

目に止まる物があつた。

ドクロのマークだ。

青い竜にドクロのマーク・・・

??「なっ!!海賊船・・・!?にしては、お粗末だな・・・でた
とこ、出港したてのルーキーか?」

ナゾの少年は手配書を取り出した。

??「やっぱり、まだ海賊に成り立てだな・・・賞金首ではないな・
・・」

??「グルルルルル」

??「さて!俺がどうにかする、お前は俺が合図するまで待っていろ!」

ナゾの少年は、そう言い残すと、浜辺に向かった。

ードラの船ー

ドラ「いやぁーやっと着いた！！冒険最初の島だぁー！」

ドラは船を島に着け、船から降りた。

そして、辺りを見渡した。

ドラ「なんか、食いモンないかなぁー」

??「動くな！海賊！！」

ドラ「だ、だれだ！？」

??「今すぐ、この島から出ていけ！！ここにはお前の欲しい物など無い！」

ドラ「イヤだ！俺が出て行きたいときに出て行く！勝手に決めるな！」

??「なっ！？そっから、一歩でも前に出るな！！」

ドラ「何でだ！？」

??「お前の心臓をこの銃口が狙っている！」

ドラ「あつそ！」

??「それにここは、俺の島だぞ！」

ドラ「あ！そうなの・・・じゃ、お邪魔します！」

??「そういうわけじゃねーよ！」

すかさずツツコミを入れる。

ドラ「あれっ？違うの？」

??「いや、違うないけど・・・とにかく、この島から出ていけ！死にたくなければ！」

ドラ「あつそ！じゃ、なんか、飯頂戴！腹減ってよー」

??「何も、分かっていないだろう！て言っか、空気読めよ！今がそう言う状況じゃないことを！」

ドラ「分かった、入れてくれないなら、勝手に入る！」

??「つて、何も分かっちゃいねーだろう！！」

ドラ「お邪魔します！」

??「くそっ！本当はしたくないけど・・・入ってくるなー！！！」

パンツ

渴いた銃音が島中に響いた・・・

第4章 冒険の夜明け（後書き）

「登場人物キャラクター紹介？」

名前：ウォート・D・ドラ

海賊団：水龍海賊団 船長

悪魔の実：ミズミズの実（自然系）
ロギア

能力：体を自由自在に水に変えることができる水人間。

夢：ワンピース「一つつなぎの大秘宝」を見つけて海賊王になること。

また、大海賊青髪ジャッカルを越すこと。

そして、彼から貰ったペンダントを返すこと。

特徴：一見クールに見えるが、ボケをかますることがよくある。

なにより、仲間思いな船長である。

これから、ドラと関わりを持った人たちを登場人物キャラクター紹介で書いていきたいと思います！

今回は、無人島で出会ったナゾの少年との話です。
お楽しみに！！

第5章 猛獣と一緒の少年

パンツ！

渴いた銃声音が島中に響いた。

??「お、俺は・・・夢を見ているのか・・・確かに心臓に・・・」

ドラ「残念だったなあ」

体に穴が空いたまま立っている。

穴から水が垂れていた。

??「ま、まさか・・・悪魔の実か!？」

ドラ「ああ・・・そうだ！俺はミズミズの実を食べた水人間だ！」

??「しかも、自然系ロギアか・・・」

ドラ「俺も、種明かしをしたんだ・・・出てこいよ！」

??「ふん・・・良いだろう！」

ガサッ！

??「俺は、狙撃手！狙撃の腕は天下一のショットだ！」

ドラ「ふん、そうか・・・俺は、ウオート・D・ドラ！海賊王に

なる男だ！」

シヨット「ふんっ！海賊王、海賊王って・・・バカだねえ」

ドラ「なにっ!？」

シヨット「だってそうだろう！あるかどうか分からない、”一つ
ツナギの大神宝”を探すなんてな！まして、あるかどうか分からないものために命だって落とすかも知れないんだぜ！」

ドラ「あっそ！俺はのために戦って死ねるんだったら俺は、構わねえ！」

シヨット「お前！死は恐くないのか？」

ドラ「何言っているんだ恐いよ！そりゃ〜でもな、海軍に追われていればいつも死と隣あわせだろうよ！」

シヨット「ふっ！お前、面白いな！お前は何ものだ？」

ドラ「俺は、ただの海賊だ！！あっ！でも海賊王になったら、ただの海賊じゃなくなるな・・・」

シヨット「つくづく面白い奴だな！そうだ、俺の家族を紹介しよう！」

ドラ「え！？おめえ、家族がいるのか？」

シヨット「ああ！おいで！」

ピューウ

と口笛を鳴らした。

ガサガサ・・・

ドラ「ん？・・・どわぁ~~~~！な、なんじゃこりや~~~~！」

シヨット「紹介しよう！僕の家族のサーベルタイガーのベルだ！」

ベル「グオオ！」

ドラ「お前・・・マジか？虎が？」

シヨット「ああそうだ、こいつは俺がこの島にたどり着いたときに食料を探していたときに見つけたんだ、こいつは親を亡くしていて俺が、食べ物を分けてやったら、一緒に着いてきたんだ・・・でも、言うことはよく聞くよ！」

ドラ「スツゲエ~~~~！う、うまそぉ~~~~！」

シヨット「つて、食おうとするな！！話聞いていたか？」

ベル「グオオオ！」

ドラ「おわっ！なんだこいつ！」

シヨット「君が食べようとしたから怒っちゃったよ！」

ドラ「マジか？」

ベル「グオオオオオオ」

ドラ「うわあああ！！・・・って俺、水だから大丈夫だ！アハハハハハ」

ガブツ

バツシャーン！

ドラは水になった。

ベル「ガル！？」

ドラ「ニツシツシツシツ」

ショット「ベル、そこらにしておきな！」

ベル「ガルルル・・・」

ドラ「あっそうだ！なあ、お前さあゝ海賊やらなか？楽しゝぞ！」

ショット「えっ？お前とか？」

ドラ「ああ、そうだ！」

ショット「それじゃ、ベルも一緒だが・・・」

ドラ「マジで！じゃ、非常食で！」

シヨット「ふざけるなー！」

ドカッ！

バツシャーン

ドラ「だから、俺は、殴れないって！」

シヨット「良いだろう！ベルも一緒だぞ！」

ドラ「おおー！良いぞ！確か、お前は、狙撃が天下第一とか言っていたなー！」

シヨット「ああ！そうだ！」

ドラ「じゃ、お前は、狙撃手だ！よろしくな！」

シヨット「こつちこそ！」

二人は互いに握手を交わした。

シヨット「それにしても、この船はどうかと・・・嵐が来たらすぐぶっ壊れるぞー！」

ドラ「あつ！やっぱり？村で一番、古い奴貰ってきたからな・・・」

シヨット「なら、俺が作った船に乗っていくか？」

ドラ「お前、船大工なのか？」

シヨット「いや、この島に流れ着いた難破船を改造したんだ！俺、手先が器用でな！」

ドラ「マジかー！」

シヨット「ああ！島の反対側においてある、ちょうど、今日辺りにこの島を出ようと思っていた頃だ・・・」

ドラ「よし！行ってみようぜ！」

ー島の反対側ー

シヨット「アレだ！」

ドラ「おおう！カッケェー！！スツゲエェー！」

目が輝いていた。

シヨット「アハハハ・・・」

ドラ「なあ、なんて言うんだ？この船？」

シヨット「こいつはフライング・サーベル号だ！」

ドラ「カッケェー名前だー！飛ぶのか？この船は？」

シヨット「飛ばねーよー！」

ドラ「そつか！しつかし！まああの船首はカッケな！よしっ！
決めた！あれ、俺の特等席な！」

シヨット「あそこか？」

虎の顔をした船首だ。

ドラ「ああそうだ！」

シヨット「落っこちねるか？」

ドラ「だいじょうぶ！」

シヨット「どつから、そんな自信が・・・」

ドラ「とにかく、出港だ！」

シヨット「そうだな・・・」

二人と1匹は船に乗り出した。

そして、船に帆を張り、船を出した。

第5章 猛獣と一緒の少年（後書き）

―海軍船―

海兵「少佐！！前方に、船が一隻見えます！！海賊船だと思われま
す！」

少佐「旗印は？」

海兵「ええ、ドクロに・・・青い竜？ですかね・・・」

少佐「小物か・・・出たばかりの海賊か・・・進路を変更！目標、
目の前の海賊船！！」

海兵「はっ！」

海軍の軍艦はゆっくりと進路を変え、海賊船の方へ向かった。

――
登場人物キャラクター紹介？

名前：シヨット

海賊団：水龍海賊団 狙撃手

悪魔の実：ー

能力：ー

特徴：サーベルタイガーのベルといつも一緒にいる。

ドラのボケにいつもツツコミを入れている。

登場人物キャラクター紹介？

名前：ベル（サーベルタイガー）

海賊団：水龍海賊団 ペット（？）

特徴：いつも、シヨットと一緒にいる。

過去に親を亡くし、無人島に流れ着いたシヨットに拾われた。

新たな仲間が加わりました！！

これから、どうなるんでしょう！？

次回は海軍が現れ、大変なことに！？

お楽しみに！！

第6章 海軍の脅威！！

ドラ「はあゝ暇だな」

シヨット「そんなものだって！海賊は・・・まあ、海軍がきたら別
だけどな・・・」

ドラ「なあ？海軍って強いのか？」

シヨット「強いと言えば・・・三大将だな！あと、海軍最高機関元
帥だな・・・」

ドラ「そいつらは・・・強いのか・・・！！」

シヨット「ま、待て！戦ってみたいような目をしているけどそれだ
けはやけておけ！！」

ドラ「えっ？何でだ？でも、良く分かったな！俺が戦いたいって・
」

シヨット「だって、目が輝いていたんだもん・・・それは、さてお
き・・・そいつらに会ったが最後！！二度と、この海を見ることが
できねーぞ！！」

ドラ「何でだ？」

シヨット「今までに大将に敵った奴なんぞ居ないからだ！！」

ドラ「海賊王も！？」

シヨット「それは、話が別だ！」

ピュッダッパッン！！

ドラ「な、なんだ！？」

シヨット「か、海軍だ！！」

ドラ「大将かぁッ！！」

シヨット「いや、目を輝かせて言っな！！違う、支部の船だ！！」

ドラ「じゃ、ぶっ壊せば良いのか？」

シヨット「な、なんで・・・？」

ドラ「だって、そうすれば・・・追って来ないじゃないか！」

シヨット「あっ！なるほど・・・って、俺たちが死ぬかも知れない
だろう！！」

ドラ「だいじょぶッ！！」

シヨット「また、根拠もないことを・・・」

シヨットは頭を抱えた・・・

シヨット「やるしかなか・・・よしっ！ベル！行くぞ！！」

ベル「グワァッ！」

ドラ「おうゝなんだアレは・・・船が廻りに来ているぞ!!」

ショット「囲まれているしゝゝゝ!!」

海軍『今のは威嚇だ!おとなしく降参しないと次は海の藻屑もくずになつて貰うぞ!』

ドラ「それ、どういう意味だ?」

ショット「だから、沈められるんだって!」

ドラ「そりゃ!大変だ!!さつさと片付けるぞ!!」

ショット「ハイハイ・・・」

ドラ「ぶつ壊せば良いんだろう!喰らえ!!水龍!!」

ドラの右腕が液体に変わり、龍になり、前方の船に向かって飛ばした。

ドーン!!

海軍の軍艦が一隻、大破した。

ドラ「いっちょあがり!」

ショット「へえゝあいつ、やるな・・・俺たちも負けていられねえ!ベル!行くぞ!!」

ショットはベルの背中に乗り、近くに寄ってきた、軍艦に乗り込んだ。

ショット「少しは、楽しませてくれよ！」

ショットは腰から、2丁、銃を取り出した。

ショットはベルから飛び降りた。

ショット「ベル！GO！！」

ベルは海兵達に向かって突進した。

海兵「うわああああ！！」

次々と吹っ飛ばされていく。

ショット「ツインショット！！」

両手の銃から弾丸を撃ちまくる。

海兵「ひ、怯むな！！相手は一人だ！！」

ショット「数が多ければ良いんじゃないぜ！そこの新人とは一緒にしないでくれ！」

ショット「ちなみに、一つ間違っているぞ！一人じゃない！二人だ！！」

海兵「うおおおおー!!」

ベル「ぐおおおおー!!」

ドン!

海兵「うわああああー!!」

次々と吹っ飛ばされ、海に落ちていく。

ショット「ファイナーだ!!ベル!」

そう言うと、ベルの背中に乗り、上へ飛んだ。

ショットは背中に担いでいた、バズーカーを取り出した。

ショット「チェックメイトだ!バースト!!」

バズーカーが発射する。

ドガン!

軍艦が真ん中から割れ、海に沈んでいく。

ショット「ふうー一丁上がり!」

ドラ「おっ!そっちも終わったみたいだな!」

ショット「ああ・・・!!って、お前、一人であの数の軍艦を沈めたのかよ!」

ドラ「ああ！」

シヨット「お、恐ろしい・・・でも、まだ、一隻残っているぜ！」

ドラ「ああ、それがよく俺は海軍少佐だ！攻撃したらお前らの命はないぞ！とか言ってくるんですよ」

シヨット「な、なんだって～～～！！本部の船が～～～！！」

海軍少佐「俺は、海軍本部少佐のハワード少佐だ！貴様らを逮捕する！」

ドラ「逮捕だつてよ！」

シヨット「な～ここは、逃げないか？」

ハワード少佐「よくまあ俺の船を沈めてくれたな～！」

ドラ「気にするなよ～人生、いろいろあるよ～！」

ハワード少佐「そうだよな～いろいろ・・・って、お前が壊したんだろう！～！」

ドラ「あれ？そうだったけ？じゃ、ごめんなさ～い！」

ハワード少佐「謝って済む問題じゃね～！！！」

ドラ「あっそ！じゃ、これで！」

ハワード少佐「どれで??逃がさんぞ!」

ドラ「いゝや、逃げる!」

ハワード少佐「ほおこの船は貴様らの船よりも速く進むぞ!」

ドラ「果たして、そいつはどうか?」

ハワード少佐「?」

ドラ「喰らえ〜!!^{ビッグウェーブ}大波!!」

ハワード少佐「なっ!なぜ海を操れる・・・!」

大波を起こして、少佐の船を直撃した。

ハワード少佐「畜生!!覚えておけ〜!!お、俺は泳げ・・・ブクブクブク・・・」

ハワード少佐は波に飲み込まれていった。

ショット「すげ〜な・・・お前・・・」

ドラ「ニッシッシッシ!ほらな、逃げられる!行こうぜ!船を出すぞ!」

ショット「おう!」

フライング・タイガー号は再び^{グランドライン}”偉大なる航路”を目指した。

第6章 海軍の脅威!! (後書き)

└登場人物キャラクター紹介?┐

名前：ハワード

所属：海軍本部

階級：少佐

悪魔の実：?

能力：?

特徴：執着心が強く、狙った獲物は絶対に逃がさない。

そのことから、「黒猫」とも言われている。

海軍との戦いを描いてみました!

また、ハワード少佐は出てきますよ!?

読者の皆さんからの質問を受け付けたるコーナーを設けたいと思
っています。

略して「S・D・U」です!

意味は「質問(S)ドンドン(D)受けるぜ(U)」です!

方法は、メッセージで送るか、感想で書いてください!

よろしく願います!!

次回も、お楽しみに!!

第7章 レストラン・パイレーツ 動物と話す料理長！？

ドラ「ああ〜〜〜〜・・・」

シヨット「う〜〜〜〜〜！」

ドラ「腹減った〜〜〜！」

シヨット「同じく・・・」

ドラ「力が出ねえ〜！」

シヨット「おかしいだろう！一週間分の食料を一昨日立ち寄った島で調達したって言うのに・・・」

ドラ「そりゃ、おかしいだろう！三日分だったんじゃないの？」

シヨット「違うわい！お前が、たったの3日で食料を食い尽くしたんだろ！決められた分を用意したのに・・・お前は、夜な夜な、冷蔵庫、食料庫をあさり、たったの3日でなくしたんだろが！」

ドラ「あれっ？そうだったけ・・・？」

シヨット「そうだよ！」

でっかい声でツツコミを入れる。

ドラ「なんだよ！元気じゃないか！」

シヨット「あ！本当だ！・・・って、お前のせいだよ！」

ドラ「あつ！島が見えた！」

シヨット「本当か！今度こそ、食料を調達だ！今度は1ヶ月分だな！」

ドラ「その前に飯屋だ！」

シヨット「そうだな！ベル！飯を食いに行くぞ！」

シヨットは寝転がっている、ベルことサーベルタイガーに声を掛けた。

ベル「グワァ！」

一行は島に着いた。

ドラ「ついた〜〜〜！！飯屋〜〜〜！！！」

シヨット「あつ！待てよ！ドラ！」

シヨットが声を掛ける前にドラは走っていった。

シヨット「そんなに、急いだって、飯屋は逃げね〜よ！ベル！行こう！」

ーレストラン前ー

シヨット「いたいた！ドラ！そこで、何やっているんだよ！」

ドラ「いや、それがよくレストランの名前が面白れ〜な〜と思ってよ！ほら！」

シヨット「えつと・・・『レストラン・パイレーツ』？海賊か？」

ドラ「入ってみようぜ！」

シヨット「いや、ちよつと待て！ベルは？」

ドラ「そんなの、大丈夫だろう！」

シヨット「本当か？」

ドラ「よし、入ろう！」

ガラッ！

扉を開けた。

シヨット「へえ〜中は、意外と広いな〜！まるで海賊船の様だ！」

コック「いらつしやい！」

と近くにいたコックが声を掛けた。

シヨット「あの〜すみませんが・・・こいつはOKですか？」

と、ベルを見せた。

コック「ええ！大丈夫ですよ！うちの料理長はお変わり者なので・・・」

シヨット「そうですか・・・」

ドラ「腹減ったな〜！」

二人と1匹は席に着いた。

??「お前さん達・・・海賊だろう？」

よ、コックの格好をした、一人の男が声を掛けた。

彼の肩には、鷹が止まっていた。

ドラ・シヨット「えっ？」

ドラ「誰だ？おめえ〜？」

??「失礼！俺は、ここのレストランの料理長をやっている者だ！ちなみにウェイターは一昨日、全員夜逃げした！」

シヨット「そ、そうかい・・・」

ドラ「でもよくなんで、俺たちが海賊だって分かったんだ？」

??「なぜかって・・・それわな・・・こいつが教えてくれたのさ！」

と、肩に止まっている、鷹を指さした。

ドラ・シヨット「へっ?」

ドラ「なんで、鳥が?」

??「さっきな、こいつがこの島に海賊が来たって教えてくれたんだ!それも、お腹をすかせているように見えたと言っていた。そして、君たちが来たから、そうじゃないかな?と思っただけさ!」

シヨット「そう言うこと聞いているんじゃない!なんで、動物がそう言っているんだよ!まさか・・・」

??「失礼!俺は、悪魔の実、ヒソヒソの実を食べたのさ!こいつは、動物の言葉が分かるのさ!」

ドラ「やっぱり、悪魔の実か・・・そーいやーおめえ、名前は?」

??「あれ?まだ言っていなかったか?俺は、ここのレストランの料理長をやっている、オーナー・レーツだ!以後お見知りおきを!それと、食事だ!ごゆっくり・・・」

レーツは、料理をテーブルに置くと静かに下がっていった。

ドラ「へえー能力者か・・・面白い奴だな」

第7章 レストラン・パイレーツ 動物と話す料理長！？（後書き）

└登場人物キャラクター紹介？┐

名前：オーナー・レーツ

所属：レストラン・パイレーツ 料理長

悪魔の実：ヒソヒソの実

能力：動物と会話ができる

特徴：料理長を務めているほどで、その腕は超一流。

いつも、肩に相棒の鷹を乗っけている。

夢：世界中の海の食材が一つに集まる、幻の海”オールブルー”を見つけること

――――
次回は、このレストランが海賊に襲撃を受ける。

しかし、このレストランには、すごい秘密が・・・

お楽しみに！！

第8章 レストラン襲撃!? 隻眼のギラースの魔の手

ドラ「この飯はうめえな!!」

ショット「確かにな・・・でも・・・お前はどれだけ食ったよ!!」

ドラの前には皿が山積みになっていた。

ショット「そして、やめておけよ!金がそこを突きそうなんだから・・・」

ドラ「そうだな・・・腹八分目って言うしな!」

ショット「そんだけ食って八分目って言うな!!」

ドラ「ところでよ!なあ、レーツ?」

レーツ「なにかな?」

ドラ「俺の仲間になれよ!お前は俺の船の料理人コックになれよ!」

ショット「い、いきなり・・・」

レーツ「残念だけど・・・俺は、このレストランがあるしな!」

ドラ「なあゝ良いだろう!!海賊やろっぜ!!」

ショット「お前、諦めろよ!こいつにはこの場所レストラン・バイレーツがあるだろう!」

レーツ「ああ、そうだ！悪いが諦めてくれないか？」

ドラ「ええゝやろうぜ！！楽しいぜえゝ！！」

シヨット「いや、どんな誘い方だよ！」

バンッ

突然、レストランの扉が開いた。

外から、ゾロゾロと店内に人が入ってきた。

??「邪魔するぜ！」

シヨット「だ、誰だ！！」

??「ほうゝそこのお前！俺を知らないのか？ここらじゃ有名な方
だけどな！これでなゝ」

と自分の左目を指した。

左目には傷があり、失明しているようだ。

シヨット「ま、まさか！！」

シヨットは自分のバックから、手配書の束を取り出し、捲った。

シヨット「や、やっぱり！！」

ドラ「どうした？シヨット！右目だけのおっさんがどうかしたのか？」

??「お、おっさんだとー！！」

シヨット「ああ、あいつは、東の海の中でも賞金額がベスト3の**イーストブル**物の賞金首ギラース海賊団船長の『隻眼のギラース』だ！あいつに賭けられた懸賞金は、2500万ベリーだ！！」

ギラース「ほお、お前らは、賞金稼ぎか？」

ドラ「違う！海賊だ！！」

ギラース「なるほど・・・海賊か・・・お前らのような小物にはようわはない！悪いがこのレストランを・・・いや・・・この島を頂きに来た！！」

全員「なっ！！」

ギラース「と言うわけだ・・・従業員以外この店から出て行け！！」

客「う、うわあああああああ！！」

客達は急いで店から出て行った。

ドラ「ムシャムシャ・・・ガツガツ・・・」

ドラは、逃げた客が残っていた食事を食べていた。

ギラース「ん？その海賊！！聞こえなかったか？出て行けと言ったんだぞ！」

ドラ「あ？しかし、うめゝなゝ！！！」

ギラース「聞こえなかったのか！さもなければこの銃口が貴様の心臓を狙っているぞ！」

ドラ「なあ？お変わりくれねえゝか？」

ギラース「そうか、そんなに死にたいようだな！ならば潔く散れ！！」

パンツ！

濁いた銃声音が店内に響いた。

シヨット「ああ、バカな奴・・・」

ギラース「ハッハッハッハッハ・・・はあ？」

ドラ「ふうゝ危ねえゝな！」

ギラース「た、弾・・・当たったよね？」

ドラ「ああ！当たったぞ！でも俺には効かねえゝ！だって、水だから！」

ギラース「なっ！悪魔の実か！！」

ドラ「ああ！そうだ！俺は、ミズミズの実を食べた水人間だ！！」

ギラース「ちっ！自然系ロギアか！」

ドラ「さ〜てと・・・お前！レーツに謝れ！！」

ギラース「はっ？」

ドラ「お前は、レーツの店を汚したんだ！！」

ギラース「おい！お前ら！聞いたか？謝れだ！とよ！ギャッハッハッハッハッ！」

船員A「ええ！聞きましたよ！お頭！」

船員B「バカな奴ですね！」

ギラース「俺は、謝らね〜よ！それが普通の海賊だ！！おい！お前ら！こいつに本当の海賊の恐ろしさを教えてやれ！」

船員「へい！！！」

船員「うおおおおお！！！」

シヨット「バカだな・・・あいつら！なあ？ベル？」

ベル「グワアオ」

船員C「死ねえ〜！！！」

と剣を振り落とした。

スパーン！

船員C「え？」

ドラ「バカだな！俺は自然系ロギアだって言っただろう！だから切れないよ！」

船員C「し、しまった！！」

ドラ「今度はこっちからな！水銃スイガン！！」

両手の指先から、水をピストルの弾の様にして打った。

船員「うわああああ！！」

次々と当たって、ギラース海賊団の乗組員クルー達は倒れていった。

ギラース「お、おのれ！！」

ドラ「さあ！残りはお前だけだ！！」

ギラース「たしか、お前は自然系ロギアだったよな！なあ？海楼石かいろうせきって知っているか？」

ドラ「あ？なんだそれ？」

ギラース「これだよ！！」

そう言うと、ポケットから手錠のような物を取り出し、ドラの腕に素早く片方だけはめた。

ドラ「な、何だこれ？・・・あれっ？ち、力が・・・抜けてゆく・・・」

ギラース「ギャッハッハッハッハッ！海楼石わな・・・海の成分が含まれた石なんだよ！そいつは、能力者に効果があり、能力者は能力が使えなくなるのさ！簡単に言つと、海に入った状態と同じなんだよ！」

シヨット「でも、なんでお前が？」

ギラース「こいつわな！海軍の軍艦からくすねてきた奴なんだよ！ギャッハッハッハッハッ！」

ドラ「く、くそっ！力が・・・」

ギラース「これで貴様を殴れるのさ！おらあゝ！！！」

バキッ！！

ドラ「ぐはっ！」

ギラース「おらおら！」

バキッ、ドカツ

ドラが転がったところで何度も踏みつけた。

ショット「ちっ！行くぞ！ベル！」

ベル「グワアオー！」

ショット「おい！その足をどける！」

ガチャ

ショットはギラースに銃を向けた。

ギラース「ほう！何のまねだ？撃ってみろよ！」

ショット「いいだろう！！喰らえ！」

パンッ

カキンッ

ショット「なにっ！」

ギラース「おつと言い忘れてた！俺は能力者なんだよ！俺は力チ力チの実を食べた石人間だ！俺の体は鋼鉄のように硬くできるのさ！だから！鋼鉄ナックル！！」

ギラースは手を鋼鉄にし、ショットを殴った。

ショット「ぐはっ！」

ベル「グワッ！」

シヨット「バ、バカ・・・や・やめ・・・ろ・・・」

ベル「ギャイン！」

ベルも呆気なく吹っ飛ばされていく。

ギラース「ギャツハツハツハツ！言い様だ！！」

レーツ「その足をどける！！」

ギラース「はっ？お前までも海賊に手を貸すのか？」

レーツ「いや違う！自分の店を守るだけさ！お前！俺の怖さを知らないな？」

第8章 レストラン襲撃！？ 隻眼のギラースの魔の手（後書き）

└登場人物キャラクター紹介？┐

名前：ギラース

異名：隻眼のギラース

悪魔の実：カチカチの実

能力：体を石のように硬くすることができる

特徴：左目に傷があり、右目だけが見えるようになっている。

大物の海賊の登場です！！

次回は、レーツが参戦！！

店を守れるのでしょうか？

お楽しみに！！

第9章 レイツ参戦！？ そしてドラ復活！！（前書き）

―海軍軍艦―

海兵「大変です！！ハワード大佐！！」

ハワード大佐「どうした？」

海兵「この近くの島で海賊『隻眼のギラス』が暴れているとの情報が入りました！」

ハワード大佐「分かった！すぐに向かおう！」

海兵「あ！それとなんですけど・・・」

ハワード大佐「どうした？」

海兵「この間の海賊もいるとのことですよ！」

ハワード大佐「あの水野郎か？」

海兵「ええ！」

ハワード大佐「よし！なら尚更のことだ！全海兵に伝える！すぐにその島に向かう！海賊2名とその一味を捕らえる準備をしろ！」

海兵「はっ！！」

ハワード大佐「この間の借りをキッチリ返させて貰うぞ！」

ハワード大佐の軍艦は進路を変えて進んだ。

第9章 レーツ参戦！？ そしてドラ復活！！

ギラース「ギャッハッハッハッ！誰に物を言っているんだ？」

レーツ「まず聞いておく！この手錠の鍵は何処だ？」

ギラース「そんなもん、言うわけ無いだろう！たえ、この右の胸ポケットに入っていることなんて口が裂けても言えないな！」

レーツ「なるほど、そこか！」

ギラース「し、しまった！！貴様！よくも、俺から聞き出そうとしたな！」

レーツ「いや、お前が勝手に言っただろう！」

ギラース「黙れ！！鋼鉄ナックル！！」

ギラースは素早く移動し、レーツに殴りかかった。

レーツ「そんな、甘っちょろいパンチなんて食らうかよ！」

レーツはそれをヒラリと避けた。

ギラース「ふん！中々だな！」

レーツ「お前！本気で行くぞ！」

バサッ

レーツはコックのスーツを脱いだ。

レーツ「まずは鍵を頂くとしよう!」

コック「出た! !まさか、思いもしないよな! スーツの中に刀があるなんて・・・」

レーツ「今回は急いでいるのでな! ホークス! 離れている!」

とレーツは肩に止まっている鷹ホークスに言った。

バサッバサッ

ホークスは空中へと飛んだ。

レーツ「覚悟はいいな!」

そう言うと、腰に掛けてある鞘から刀を二本取り出した。

コック「しかも、いきなり二本の本気モードだ! !」

ギラース「たかが二本で何ができる? ああ?」

レーツ「二刀流 かぎ爪! !」

レーツは刀を前に出し、素早くギラースに近づいた。

スパンッ

ギラス「ぎゃああああ・・・あれ？・・・何ともない！！ギヤツハツハツハツハツ！外したな！」

レーツ「なに、言っているんだ！よく見てみる！これは何だ？」

ギラス「なっ！いつの間に！！」

レーツの刀の先に鍵が引つかかっていた。

レーツ「ほらよ！これを使え！」

レーツはショットに投げて渡した。

ショット「サンキュー！よし！ドラ！今開けるぞ！」

ドラ「た、頼む~~~~」

ガチャツ

手錠が外れた。

ドラ「ふゝ戻った！！まずは、右目のおっさんにお礼をしておかないやな！」

ギラス「あっ？」

ドラ「おっさんのおかげで、新しい技を思いついたのさ！手錠が掛かっているときにな！」

ギラス「だ、だから何だ！」

ドラ「レーツ！ありがとな！後は俺にやらせてくれ！」

レーツ「好きにしろ！久しぶりに暴れたから疲れた！任せたぞ！」

ドラ「さてと！行きますか！覚悟しろよ！」

ギラース「だから、何だ！！鋼鉄ナツ・・・」

ドラ「だから、そんな攻撃、俺には通用しないって！行くぞ！うおおおおおおお！！！」

ドラの背中から水がわき出てきた。

それは、まさに龍のようだ。

ドラ「水龍！！強化版だ！突っ込め！！！」

ドラは、水でできた龍を前に飛ばすように操った。

ギラース「ま、まさか！！ぐわああああ！！！」

ドガン！！

レストランの壁を壊し、外に飛ばされた。

ギラース「お、おのれ・・・」

スタッ

ドラが外に出てきた。

ドラ「お前は、このレストランを汚した！その罪は重いぞ！！」

ギラース「畜生・・・」

ドラ「水の部屋ウォータールーム！！」

ポンッ

周囲に水を集め、ギラースを包み込むようにして、水の部屋すなわち、水の球をつくった。

ギラース「ブクブクブク・・・」

ギラースは溺れかかっている。

ドラ「終わりだ！」

そう言うと同時に手を出し、グッと握った。

ドラ「クラッシュ！！」

バッシャン！

水の球は外から圧力が加えられ、潰れた。

ギラースは、水圧に押され、ボロボロだ。

ドラ「どんなもんだい！！」

ショット「スゲー！」

レーツ「中々だな！」

ドラ「おい！！レーツ！お前の飯、また食いたいな！！」

レーツ「フツ！良いだろう！お前らの食事は俺に任せろ！！」

ヤッターと叫ぶドラ、太陽の光がまぶしく照らしていた。

第9章 レーッ参戦！？ そしてドラ復活！！（後書き）

さて、新しい仲間、レーッが加わりました！

今回は、前書きでも出しましたが、

あの人の登場です！！

S・D・Uコーナー、受け付けています！

感想やメッセージで送って下さい！

次回もお楽しみに！！

第10章 海軍包囲網を突破しろ！ ハワード大佐の能力

ドラ「さてと・・・飯でも食いますか・・・」

シヨット「アホか!!」

バシンッ

すかさずツツコミを入れる。

バシャーン

だが、叩いても水になるだけだ・・・

ドラ「何するんだよ!!」

シヨット「なんで、飯食うの？普通は船に戻るぞ！だろう？この騒ぎを聞きつけて海軍が来そう出しよ!!」

ドラ「そっか・・・よし、飯、食うぞ!!」

シヨット「だから、違うつて!!さっき、あんなに食っただろう!!」

ドラ「ええゝ腹減つてよゝ!!」

レーツ「まあまあ、船長さんよ！俺が後で作ってやるからよ！我慢しろよ!!」

ドラ「分かった！よし、船に戻るぞ!!こいつはどうする?」

と柱に縛り付けた、ギラスを見た。

シヨット「ほつとけ！こいつは海軍に捕まるからな！海楼石の手錠も掛けているんだ！そのままにしておけ！」

レーツ「この店の修繕費はこいつの懸賞金からだな！お前ら！後は頼んだぞ！」

コック一同「へい！！行つてらっしゃい！！」

ドラ達は、港へと戻ろうとした。

そのときだ。

??「待ちな！そう簡単にこの町からは出さないぞ！」

ドラ「誰だ！？」

??「忘れたとは言わせない！！お前らは既に包囲されている！」

ドラ・シヨット・レーツ「なにっ！？」

レーツ「ああ、本当みたいだ！ホークスがそう言っている。この街の影に隠れているみたいだ！」

ドラ「出てこい！！」

??「良いだろう！全軍！構え！！」

ダダダダダダッ

海兵達が物陰から姿を現し、姿を見せた。

??「俺を、忘れたか！俺はお前に溺れさせられた、ハワード大佐だ！！」

シヨット「あれ？少佐じゃなかったけ？」

ハワード大佐「この一週間で昇格したのだ！！」

レーツ「たったの一週間か・・・確か、この男は、海軍の中でもやっかいな奴の一人だぞ！こんな奴に目を付けられていたとわな・・・」

ドラ「あゝ思い出した！！変なおっさんだっけ？」

ハワード大佐「変なおっさんじゃね〜〜〜！！ハワード大佐だ！！この間は俺の能力を見せられなかったからな！！」

シヨット「言うことは、お前も能力者か？」

ハワード大佐「そう言うことだ！全隊、撃て〜〜！！」

シヨット「いきなりか！！」

ドラ「させねえ〜！ウォーターウォール水の壁！！」

水の壁が海軍の発砲を止めた。

シヨット「助かったぜ！俺たちも行くぞ！ベルは、そっちだ！」

ベル「グワオオオ！」

レーツ「今日は客が多いな！どのようなコースにしましょうか？こは贅沢に行くか？満喫フルコースで御案内します！二刀流 散切り！」

レーツは二本の刀を素早く動かし、海軍に斬りかかった。

海兵「うわあああああー！」

レーツ「続いて、竜、巻！！」

海軍達を空へと上げた。

海兵「うわあああああー！」

レーツ「最後にメインディッシュとなります！ホークス！頼むぞ！」

レーツはホークスの足に掴まり、空へと飛んだ。

レーツ「二刀流奥義 空中大回転斬り！！」

ホークスから離れると、そのまま、空中で刀を振るった。

海兵「ぐわあああああー！」

ドサッ、ドサッ・・・

次々と海兵達が切られ、地面に落ちていく。

レーツ「デザートはいるかい？」

スタツ

キレイに着地をした。

ドラ「めんどくせー！W水龍拳！！」

両腕を水にして、巨大な龍の形にして、両腕同時に前に飛ばした。

海兵「ぐはあああああ！！」

ドラ「どんな、もんだい！！」

ハワード大佐「おのれ！今回は陸上だからな！逃がさんぞ！」

シューシュー

ハワード大佐が黒い煙に包まれていった。

ドラ「やっぱり、能力者！！しかも、自然 ログア 系か！」

ハワード大佐「その通りだ！俺は、ガスガスの実のガス人間だ！」

海兵A「大変だ！大佐がガスになったぞ！マスクを付けろ！！こ、これが大佐の異名の『黒狼のハワード』だ！！」

ドラ「ちっ！厄介だな！おい！お前ら！先に船の所へ行っておけ！」

ショット「何言っているんだ！こいつは、一人じゃ・・・」

ドラ「お前らをまき添いになんてしたくね^{ウオーターウォール}！！こいつは俺との一騎打ちだ！！道は俺が造っておいてやる！水の壁！！」

海兵達が入れないように、船までの道を造った。

ショット「で、でも・・・」

レーツ「ショット、行くぞ！こいつは・・・」

ドラ「これは、船長命令だ！！」

レーツ「その通りだ！船長命令は絶対だ！仕方ない！行くぞ！」

ショット「ちっ！必ず、後を追って来いよ！船の出す準備をしておく！」

ドラ「おう！」

ハワード大佐「逃がさないぞ！」

ドラ「何処へ行くつもりだ？お前の相手は俺だろうが！！水龍拳！！」

大佐目掛けて飛ばした。

ハワード大佐「ちっ！雑魚は、後か・・・まずはお前だ！」

シューシュー

辺りにガスが充満する音が聞こえる。

ドラ「ウォータールーム水の部屋！」

ハワード大佐「なにっ！」

大佐の周りを水が包んでいった。

ハワード大佐「簡単にいくと思うな！スモッグクロガスの爪！」

水を切り裂いた。

ドラ「やっぱり、簡単にはいかないか……こっから、こっから！」

第10章 海軍包囲網を突破しろ！ ハワード大佐の能力（後書き）

ハワード大佐の再登場！！

今回は二人の激闘をお送りします！

楽しみに！！

S・B・U（質問ドンドン受けるぜ）コーナーへの質問等々お待ちしています！

何でも良いですよ！

感想かメッセージで送って下さい！

第11章 激闘！能力者の戦い ガスVS水

ドラ「やっぱり、ガスは掴めね〜な・・・」

ハワード大佐「水というのは厄介だね〜」

ドラ「W水龍拳！！」

ドラは、両手を水にし、龍の形にして、ハワード大佐に向けて放つ。

ハワード大佐「ハッハッハッハッダメ元で突っ込んできたか！」

それをヒラリと交わした。

ドラ「本当にそうかな？」

ハワード大佐「なにつ！」

見るとハワード大佐の頭上にドラが現れた。

ドラ「ウォータールーム水の部屋！！」

ハワード大佐「し、しまった！！や、やめろ！！」

龍の水を集め、ハワード大佐を囲み始めた。

ポンッ

ハワード大佐「ブクブクブクブク・・・」

ドラ「よしっ！クラッシュ！！」

バsshャーン

ハワード大佐は攻撃をともに食らい地面に落下した。

が、落ちたところにはハワード大佐の姿は見えない。

ドラ「なにっ！バカな！」

ハワード大佐「だから、やめておけと言ったのに！」

ドラ「なっ！いつの間に！！」

ハワード大佐「お前がつぶしたのは俺の分身さ！俺は、ガスで実像を作れるのさ！」

ドラ「なるほど！」

ハワード大佐「感心している暇があるのか？スモッグベインガスの矢！」

ハワード大佐は目の前にガスで矢を作り、目の前に広げた。

その数、50。

ドラ「これはこれは・・・団体さんで・・・」

ヒュンヒュンヒュンヒュン・・・

無数の矢がドラ目掛けて飛んでくる。

ドラ「ぐはっ！バ、バカな・・・な・・・」

ハワード大佐「びつくりするだろう！何で水なのに当たるのか！実は俺のガスは特殊でな、暫く浴びていると能力者は能力が低下するんだ！今は、結構な時間が経っているから、能力は使えても、水には中々なれないんだよ！」

ドラ「なるほど・・・道理で動きにくいと思ったぜ！だが、ここでは、負けていけない！無理でも必ず、道がある！！」

ハワード大佐「無理でも、道はあるだと！ふざけるな！お前ら海賊の運命は海賊行為を始めてからもう決まっているんだよ！海軍に捕まり、処刑さ！これがお前らの道だ。あきらめな！」

ドラ「うるせー！！お前が、俺の・・・俺たちの運命を決めるんじゃないー！！自分達の道は自分達で決めるだろうが！！いい加減なことは言っな！！」

ハワード大佐「何度でも言え！これで最後だ！」

ハワード大佐「スモッグ・クロガスの爪」

ドラ「ぐはああああ！！」

ドラ（畜生！もうダメか・・・ジャッカル・・・俺はここまでなのかな？）

ー回想ー

ジャッカル「このペンダントをお前に預ける！いつか、立派な海賊になって俺に返しに來い！」

ドラ「良いのか？これはジャッカルのこと……」

ジャッカル「俺たちを超えるんだろう！？それくらいのことはしないとな！」

ー現在ー

ドラ（ジャッカルと約束したんだ！！ここで終わりはしない！でも、まずはあのガスを何とかしないと……ガスは……ん？アレだ！！）

ドラは、ボロボロになりながらも立ち上がり、ある物所へ向かった。

ハワード大佐「まだ、やるのか？」

辺りには、ガスが充満する音が響いている。

ドラ「一つ教えて貰いたい！ガスに火を近づけると、どうなるんだ？」

ハワード大佐「ふっ！今更、何を！頭がおかしくなったのか？それは、勿論、爆発す……！ま、まさか！？」

ドラ「その通りだ！」

ドラは落ちていたマツチ箱を拾った。

ハワード大佐「そ、そんなことしたら、お前の命も危ういぞ!」

ドラ「最初に言っただろう!俺は海賊王になるって!そのために戦って死ねるなら俺は何とも思わない!でも、まだ、死ぬわけには行かないんでね!約束があるんでな!ほら、土産だ!受け取れ!」

ドラはそう言うと、マツチを箱から出して、火を付けた。

シュッ

ドガン!!

辺りにとてつもない爆発が起こった。

まるで、原子爆弾が落ちたかのように・・・

第11章 激闘！能力者の戦い ガスVS水（後書き）

大爆発・・・

ドラはどうなったのか？

次回に続く！！

お楽しみに！！

～SDUのコーナー～

最初の1通が届いたので紹介します！

ちなみにSDUは『質問ドンドン受けるぜ』の略です。

では、早速行ってみましょう！

Q：いつかは分からないけど、麦わら海賊団と共闘するのですか？

byトリプルミーミング

A：皆さんも疑問に思っていたことだと思います！

ちなみに、この共闘は共に闘うで良いんですね？

この話は、ルフィの世界とは全く違う世界です！

だから、今のところは共闘にはならないと思います・・・
しかし！！

番外編等で出そうかな？と思っています！

出てきても敵対になりそうです！

よろしいでしょうか？

質問、まだまだ受け付けています！

どしどし、送って下さい！！

第12章 ドラの生死の行方

時は少し戻り、フライング・タイガー号では・・・

シヨット「大丈夫か？あいつは？」

レーツ「今、待つしかないぞ！」

シヨット「何かできることは・・・」

レーツ「お！お客さんだぞ！」

シヨット「今できることは、逃げ道を確保することだな！」

海兵A「海賊共を捕らえるんだ！！奴の部下は逃げた奴だから弱いぞ！」

海兵「おおおおお！！！」

シヨット・レーツ「ムカツ」

シヨット「今の言葉は」

レーツ「聞き捨てならんな！」

シヨット「俺たちの強さを」

レーツ「甘く見ない方がよいぜ！」

ショット「ベル！行くぞ！」

ベル「グオオオオオ」

レーツ「ホークス！船まで頼む！」

二人と2匹は海軍の船に飛び乗った。

海兵B「海賊達が来たぞ〜！！！返り討ちにしてやれ〜！！！」

海兵「うおおおおおおお！！！」

レーツ「フルコースで御案内します！」

ショット「ベル！お前はそっちだ！」

レーツ「二刀流 カマイタチ！！！」

海兵「うわああああ！！！」

ドドーン！

ショット「猛獣に注意を！ベル！」

ベル「グオオオオオオ！」

ベルが海兵達に突進して激突する。

ドーン！

海兵「うわあああああ！！」

シヨット「即席バズーカー（連射可能）火炎流星団！！」

シヨットは即席バズーカーで空に連発した。

海兵C「何処狙っているんだ！？俺たちはここだぞ！」

半分バカにした様子で海兵の一人がそう言った。

シヨット「それは、暫くすれば分かる！空をってみろ！」

海兵D「え？空・・・」

海兵C「なっ！」

見上げると先ほど連発した奴が降り注いできた。

ドガン！ドガン！・・・

海兵「うわあああああ！！」

レーツ「おい！船を燃やすなよ！」

シヨット「大丈夫だ！それにしても、だいぶ数が減ったな！」

海兵A「な、なんだこいつら・・・くそ強いぞ！」

シヨット「な！言っただろう！」

レーツ「俺たちをバカにて貰っては困るって！」

ショット「終わりだな！」

レーツ「二刀流奥義 風車かざぐるま!!」

二本の刀の柄の部分にくっつけ、風車の勢いで回した。

凄まじい衝撃波が残りの海兵達を吹っ飛ばした。

レーツ「終了！」

ショット「おゝい!!レーツ!すげゝモン見つけたぞ!!ほら!!」

ショットは海軍の倉庫から出てきてそう言った。

レーツ「おゝこりゃゝすげゝ量の宝だな!!」

ショット「恐らく、海賊から取り上げたものだろう!貰っていいぞ!!」

レーツ「そうだな!運び込むか!!」

ショット達は、宝を船に運び込んだ。

運び終えた頃に・・・

ドガン!!

辺りが揺れるような爆発音が響いた。

シヨット「な、何だ??」

レーツ「あの、方角は・・・ドラのいるところだ!」

シヨット「あいつに何か・・・」

ブルブルブル　ブルブルブル

レーツの小型電伝虫が鳴った。

レーツ「何だ・・・?」

ブルブルブル　ガチャ

レーツ「もしもし?」

??『もしもし!!レーツさんか?大変だ!!』

レーツ「どうした?何かあった?」

どうやら電話の相手はレーツのレストランのコックらしい。

コック『レーツさん!!聞いてくれ!ドラさんが!!』

レーツ「ドラに何かあったのか?」

コック『あの爆発を起こしたのはドラさんなんだ!!』

レーツ「なっ！しかし・・・どうしてまた？」

レーツ「ああ、そうか、分かった・・・ああ！」

ガチャ

ショット「どうしたんだ？ドラに何かあったのか？」

レーツ「あいつらが言うにはドラは自爆したらしい！」

ショット「なっ！！そんな・・・でも、どうして！」

レーツ「奴は、ガスだ！火を付ければ爆発するだろう！しかも、あんな量だ！」

ショット「それで、爆発させたのか？」

レーツ「ああ！奴の姿は見えなかったそうだ！」

ショット「そ、そんな・・・これからだったのに・・・」

レーツ「ああ！まさか、死ぬとは・・・これからが始まりだったのに・・・」

??「誰が、死んだって？」

ショット・レーツ「え？」

聞き覚えのある声が聞こえた。

??「冒険はこれからだぜ!」

シヨット「お、俺は・・・夢を見ているのか・・・」

レーツ「・・・幽霊か・・・?」

??「幽霊な訳ね〜だろう!」

シヨット「ド・・・」

シヨット・レーツ「ドラ!」

ドラ「待たせたな!シッシッシッシッ」

シヨット「しかし、何で?俺たちはもう・・・」

ドラ「何だよ!生きてちゃ、悪いのか?」

シヨット「そう言う訳じゃ・・・」

レーツ「あの爆発でよく生きていたな!」

ドラ「な〜にあの最後にちょっとしたことをしたのさ!」

レーツ「何をしたんだ?」

ドラ「分身を作ったのさ!」

レーツ「なるほど・・・分身を使い、火を付けた訳か!」

ドラ「ああ！よし！行くか！！出航だ！！」

シヨット「ああ！」

レーツ「よし！飯の支度でもするか！海軍の船から食料をすべて頂いたからな！」

ドラ「あ！そうだ！レーツ！あの船・・・ぶっ壊しておいて！」

レーツ「了解！」

シヨット「なるほど！追ってこられないようにするのか！」

ドラ「ああ！」

レーツ「二刀流奥義 チェンソー 大回転斬り！！」

船を真っ二つに割った。

レーツ「終了！」

ドラ「よし！出航だ！碇を上げる！帆を広げる！！」

フライング・タイガー号は”グランドライン偉大なる航路”を目指した。

新たな仲間、料理人コックのレーツを入れて・・・

第12章 ドラの生死の行方（後書き）

次回は、また新たな仲間（？）の登場です！！

お楽しみに！！

第13章 海賊専門の泥棒? フェアリー登場

ドラ「ああゝ暇だゝ!!」

シヨット「よく言っわ! さっき、何隻か海賊船を沈めたくせに!」

レーツ「恐らく、全部に賞金首がいたぞ!」

シヨット「もしかすると、手配されるかもよ!」

ドラ「額はどれくらいかな?」

シヨット「誰だっ!」

シヨットは不意に後ろを振り向く。

レーツ「どうした?」

シヨット「いや、誰かに見られていたような・・・気のせいかな!」

レーツ「一応! 確認してくれば! 追っ手かも知れないぜ!」

シヨット「そうだな・・・」

シヨットは倉庫の方へ向かった。

ガチャ

倉庫の扉を開けた。

ショット（やっぱり、気配がする・・・そこか！）

ショット「おい！隠れているのは分かっているんだ！密航なら船を間違えたようだな！ここは海賊船だぞ！」

ガタンッ

不意に物音がした。

ショット「そこか！」

ショットはピストルを抜こうとした。

??「動くな！」

向こうもピストルを構えている。

ショット「え？」

彼は目を見張った。

ピストルを握っているのは女性だったからだ。

??「動くな！」

ショット「おいおい！お嬢さん！そんな物騒な物を持つなよ！」

??「黙れ！」

ショット「仕方ないな！」

ショットは腰に手を伸ばし、ピストルを取り出した。

??「動くなと言っているだろう!!」

彼女はピストルから弾を撃った。

パンッ

パンッ

濁いた銃声音が二発分聞こえた。

レーツ「どうした！」

ドラ「何だ？」

物音を聞いて二人が駆けつけてきた。

レーツ「おいおい！何やっているんだよ！」

ショット「なあゝに峰打ちだ！」

ドラ「何で？この船に？」

レーツ「おいおい！ショット！女性に向かって発砲するなんて！」

ショット「仕方ねえゝだろう！ピストルを持っているんだから！俺が撃たれたらどうするんだよ！」

レーツ「あゝ撃たれる！そして、くたばっておけ！」

シヨット「なんだと〜！」

レーツ「お！やるのか？」

ドラ「待て！先に運ぼう！」

シヨット「そうだな！」

三人はベッドへと運んだ。

・・・

??「こゝここは・・・？」

ドラ「おっ！目を覚ましたか？」

レーツ「お嬢さん！どこかおケガは？うちのバカが先ほどは失礼しました」

シヨット「誰がバカだって？」

ドラ「ところで、君は誰だ？どうしてこの船に？」

??「人に名前を聞くときは自分から名乗るのが礼儀でしょう！」

ドラ「それもそうだな！俺は、ウォート・D・ドラ！海賊王になる男だ！！」

シヨット「俺は、シヨット！狙撃の腕は天下一品だ！」

レーツ「俺は、オーナー・レーツ！この船の料理人^{コック}をやっている！」

ドラ「で？君は？」

？？「私は、フェアリー！」

ドラ「フェアリーって言うのか？何でこの船に？」

フェアリー「単刀直入に言うわ！私はこの船の宝を奪いに来た。海賊専門の泥棒よ！」

シヨット「でも、泥棒は、犯罪だろう！？」

フェアリー「何言っているの？海賊の物を盗んだって、黙認されるのよ！知らなかったの？」

レーツ「そう言えばそうだったな！」

シヨット「でも、泥棒は泥棒だろう！」

フェアリー「なに？海賊の犯罪者に説教はされたはないわ！」

シヨット「なっ！！！」

ドラ「アッハッハッハッハッ！！確かにそうだな！で、お前の

専門は？」

フェアリー「聞いてなかったの？海賊船専門の泥棒よ！」

ドラ「違う違う！それ以外だよ！」

フェアリー「氣象士よ！私の生まれた島は氣象情報などがとても優れているところなの！」

ドラ「そっか！じゃ、お前！俺の仲間になれよ！お前は俺たちの航海士だ！」

フェアリー「はあ？何言っているの？私が海賊になれて！冗談じゃない！私はね、この世で一番嫌いなのがね、海賊なの！人のものを平気で奪う、野蛮な館だからよ！」

ドラ「でも、俺たちは違うぞ！」

フェアリー「海賊は海賊！！みんな、一緒よ！！！」

フェアリー（ん？そうだ！こいつらを利用すれば・・・上手くいけば、隙を見て宝を盗んでいけるかも！ついでに、島まで連れて行って貰おう！うん！それがいい！）

フェアリー「待って！ちょっと、気が変わったわ！仲間にはならないけど・・・手を組んであげて良いわ！」

ドラ「本当か！」

フェアリー「ただし！私を自分の島に着くまでの間だけよ！」

ドラ「分かった！」

フェアリー「交渉成立ね！」

ドラ「よし！野郎共！宴の準備だ！！」

フライング・タイガー号は騒がしくなっていた。

第13章 海賊専門の泥棒? フェアリー登場(後書き)

└登場人物キャラクター紹介?┐

名前:フェアリー

所属:水龍海賊団 航海士 (島に着くまで)

悪魔の実:ー

能力:ー

特徴:自称、海賊専門の泥棒。この世で一番嫌いなものは海賊。
水龍海賊団と手を組んでいる。

新たな仲間?の登場です!!

これからどうなっていくのでしょうか!?

今後にご期待を!!

次回もお楽しみに!!

第14章 クロ帽子海賊団登場！！ 船上の大決闘！？

ドラ「あゝ暇だな」

ショット「なんか、いつもそれだな！」

レーツ「暇だったら夕飯の魚でも釣っておけ！」

ショット「あいつ、もうやっているよ！」

レーツ「はやっ！」

フェアリー「アンタ達いつも、こつなの？本当に海賊？」

ドラ「ああ、海賊だ！」

ショット「お前が自信持つて言うな！だらだらしているくせに！」

ドラ「へいへい・・・」

ショット「ん？何だ？あれは？」

ドラ「何だ？島か？」

ショット「いや・・・船・・・？」

レーツ「何だ、なんか見えたのか？」

ショット「あれは、海賊船だね」

レーツ「どこの海賊だ？旗印は？」

シヨット「ええ〜と・・・ドクロに・・・黒い帽子・・・クロ帽子ハット海賊団だ！」

レーツ「おいおい・・・確か、その船長は・・・賞金3千万ベリーのクロ帽子のジャックじゃないか!!」

ドラ「そいつ・・・強いのか？」

シヨット「強いも何も・・・東イーストの海の賞金額ベスト3の海賊だぜ！」

ドラ「へえ〜〜！」

レーツ「で、船長！どうするんだ？」

ドラ「向こうが攻撃を仕掛けてきたら反撃する！」

レーツ「じゃ、準備した方が良いな・・・」

シヨット「マジか！」

レーツ「無視するはずがね〜だろう！」

シヨット「そうだな！」

ークロ帽子ハット海賊団ー

乗組員「お頭！！前方に海賊船が見えます！」

ジャック「ほうく旗印は？」

乗組員「そ、それが・・・ドクロに青い龍です・・・」

ジャック「見たことがないな！」

乗組員「確か、その海賊団の船長は懸賞金は0何ですが・・・あの、隻眼のギラースを倒した男です！」

ジャック「ほうく未知の海賊か・・・面白い！」

乗組員「どうします？」

ジャック「俺たちの海賊団のルールは分かるな？」

乗組員「は、はい！！目の前の海賊はすべて潰すです！！」

ジャック「その通りだ！すぐ全員に知らせろ！戦闘のシユン美だ！」

乗組員「はっ！」

ー水龍海賊団ー

レーツ「準備はできたぞ！」

シヨット「戦闘の時は向こうの船だな！この船でやったらひとまりもない！」

ドラ「もう仕掛けて良いか？」

レーツ「待てよ！まだだ！」

ドラ「ええ、向こうが攻撃を仕掛けてきたら遅いじゃないかよ、この船、沈んじゃうよ！」

シヨット「そいつは、ダメだ！！この船は沈めちゃダメ！！」

ドラ「じゃ、決まりだな！船を近づける！！」

レーツ「マジか！」

フェアリー「いつてらっしゃい！」

ドラ「なんだ？フェアリーも来ないのか？」

フェアリー「この船の番をしておいてやるって言ってるの！」

ドラ「そっか！よろしく！」

フェアリー「ええ・・・」

ドラ「行くぞ！！」

フライング・タイガー号はクロ帽子海賊団ハットの船に近づけ乗り込んだ。

ークロ帽子海賊団ハットー

乗組員「お頭！！奴らが乗り込んで来ました！！」

ジャック「なにっ！ふっ！もう来たか！相手をしてやれ！」

乗組員「はっ！」

ー甲板ー

ドラ「なんだ、結構いるじゃねえか！」

ショット「面白いじゃん！」

レーツ「これが終わったら夕飯だな！今日は肉にするか！」

ドラ「マジで！！大盛りな！」

レーツ「任せろ！」

乗組員A「おい！お前ら！夕飯なんて食えないんだよ！」

乗組員B「なんでかってそれはここで死ぬからだよ！！」

レーツ「それはどうかな・・・」

ドラ「お前ら、下がってろ！ここは俺が先にやる」

レーツ「どうぞ！少しは残して置けよ！楽しみが無くなる」

ショット「暇だからねえ」

ドラ「大丈夫だ！！W水龍拳！！」

ドラは両腕を水にし、龍の形にし、前方へ打った。

ドガン！

乗組員「うわああああああ！！」

半分が吹っ飛び、その半分が海に落ちた。

レーツ「二刀流奥義 大車輪！！」

レーツは刀を二本持ち、回転しながら斬りつける。

乗組員「うわああああああ！！」

また、海へ吹っ飛んで行つた。

シヨット「タイガージェットアタック！！」

ベルに乗り、突進する。

乗組員「うわああああああ！！」

また、海へ落ちていった。

乗組員C「な、何だ・・・こいつら・・・くそ強い！！」

ドラ「ウォータールーム水の部屋！！」

乗組員達を水の球に閉じ込める。

ドラ「クラッシュ!!」

乗組員「ぐはああああ!!」

レーツ「お前ら弱いな!!」

ージャックの部屋ー

ブルブルブルブルブルブルブル

ガチャ

ジャック「どうした?」

乗組員「報告します!!」

ジャック「終わったか?」

乗組員「ほぼ壊滅状態です!!」

ジャック「あいつらか?」

乗組員「いえ!こちらが壊滅状態です!!」

ジャック「なにっ!本当か!!」

乗組員『ええ！！こいつら強すぎます！！俺たちにはもう手が終えません！！早く！！』

ジャック「わかった！すぐそちらに向かう」

ガチャ

ジャック「どうやら、侮っていたようだな・・・クッククッククッ
クッ」

ジャックは立ち上がった。

ジャック「俺を動かすとは・・・只者じゃないな・・・面白い！」

ジャック「たとえ能力者だろうと俺には勝てないのさ・・・クック
クッククッククッ」

第14章 クロ帽子海賊団登場！！ 船上の大決闘！？（後書き）

次回、クロ帽子のジャックと決戦！！

楽しみに！！

第15章 クロ帽子のジャック登場 摩訶不思議な能力

ドラ「ところで、ここの船長は？」

シヨット「さあ、逃げたんじゃない！恐くなって！」

レーツ「それは、無いぜ！賞金三千万ベリーの首が逃げるはず無いだろう！」

??「やれやれ・・・ここまでやるとは・・・」

ドラ「誰だ!？」

シヨット「まさかつ！」

後ろを振り向くと、黒い帽子をかぶり、黒いスーツを着た男が立っていた。

ドラ「お前がクロ帽子のおっさんか？」

ジャック「おっさんじゃねえよ!!これでも、20後半だ！」

ドラ「それじゃ、おっさんだな！俺たちから見て・・・!」

ジャック「黙れ!しかし、我が船員達をここまでやるとわな・・・次は俺が相手しよう!」

ドラ「望むところだ!」

ジャック「君は能力者だつてね！」

ドラ「ああ、そうだ！俺はミスミズの実を食べた水人間だ！」

レーツ「ドラ！気をつけろ！そいつも、能力者だ！」

ドラ「そうか！でも、俺には関係ねえ！」

ジャック「そいつはどうか？」

ドラ「やってみれば分かるだろう！！W水龍拳！！」

ドラの両腕が水になりそれが龍になりジャック目掛けて飛ばした。

ジャック「ショーの始まりだ！」

ドパーン！！

水が勢いよくはじけた。

ドラ「どうだ！！」

ジャック「おやおや・・・この程度で壊れるとは・・・かなり、微量にしたのだな・・・」

ドラ「なっ！！」

ショット「無傷だと！」

レーツ「これが能力か？」

ジャック「一つ言っておこう！今は俺の能力ではないぞ！」

ドラ「なっ！！じゃ、どうやって！？」

ジャック「例えば、こういうこともできるぞ！」

シュン

ジャックの姿が消えた。

ドラ「ど、どこにいった！？」

ジャック「ここだ！はあああ！！」

ドカッ

ドラ「ぐはあっ！」

ドラが殴られ、吹っ飛ばされた。

ショット「え？」

レーツ「あいつは水だぞ！なんで？」

ショット「お、おい！ま、まさか・・・今は・・・本当にアンタ！三千万ベリーなのか！？」

レーツ「どうしたんだ？ショット！今更そんなことを聞いて！」

ジャック「世間じゃそんなに悪いことはしてないんでね・・・懸賞金の額はその強さだけでは無いんだからな！」

ドラ「いててて・・・何があつたんだ？」

ジャック「今のも俺の能力ではないぞ！」

シヨット「やっぱり、そうだ！勘違いじゃない！ドラ！お前はそいつには勝てねえ〜！」

ドラ「どういう意味だ？」

シヨット「そいつは、覇氣使いだ！！」

レーツ「なにっ！」

ドラ「何だ、それは？」

シヨット「覇氣つてのは・・・3種類あり、”見聞色の覇氣””武装色の覇氣””霸王色の覇氣”がるんだ！ちなみに、ドラを殴ることができたのは、武装色の覇氣だ！そして、ドラの攻撃を弾いたのは霸王色の覇氣だ！霸王色の覇氣は威圧で相手を気絶させたりするだけだが、威圧で水を壊しただけなんだ！」

ジャック「ご名答！俺は、覇氣というものを持っているんだな！だから、お前は俺には勝てないのさ！」

シヨット「覇氣使いは大抵は大物海賊ぐらい何だよ！使っているのは、こんな海にはいないはずだ！」

ジャック「俺は、好きこのんでこの海に来たのだ！もう少し言えば、俺は”^{グランドライン}偉大なる航路”から来たのさ！」

ドラ「本当か！」

ジャック「嘘を言うはずが無いだろう！」

レーツ「じゃ、何で、懸賞金がそんなに低いんだ？」

ジャック「そうそう、言い忘れていたよ！その手配書・・・昔の奴さ！」

シヨット「なにっ！！！」

ジャック「俺の懸賞金は・・・九千万ベリーだ！」

レーツ・シヨット「なにっ！！バ、バカな！！！」

ジャック「本当さ！だから、こんなに強いのだ！」

ドラ「懸賞金なんて関係ねえ！！だから、何だ！！！」

ジャック「悪いが水で俺を閉じこめても意味は無いぞ！」

ドラ「なっ！^{ウォータールーム}水の部屋！！！」

ジャック「よっと！だから、無理だと言っただろう！」

ドラ「なら、これなら・・・」

ジャック「無理なものは無理だよ！この船を沈めるつもりかい？」

ドラ「やっぱり・・・大波！！」
ビックウェーブ

ジャック「懲りないねえ！手品の鳥！！」
マジックバード

ジャックの体が複数のハトのなり、空へと飛んでいく。

ドラ「鳥になった！！」

そして、ハトたちは空中で集まり、ジャックの姿へと変わった。

レーツ「こ、これが、こいつの能力・・・」

レーツ達は、船の残骸に乗っていた。

ジャック「俺はデジデジの実食った、手品人間だ！手品つまりマジックを利用した能力さ！」

ドラ「くっ！」（こいつ、強い！！やっぱり、俺じゃ無理なのか！？）

第15章 クロ帽子のジャック登場 摩訶不思議な能力（後書き）

まさかの覇気使いでした!!

ドラはジャックに勝てるのでしょうか!?

次回もお楽しみに!!

第16章 クロ帽子のジャックの真の正体

ジャック「ここまでだな！終わりにしよう！」

ドラ「くそっ！」

ジャック「手品の剣^{マジックソード}！！」

ジャックは剣を作り出した。

ジャック「終わりだ！！はっ！」

ドラ「畜生！！」

レーツ「ドラ！！」

シヨット「ドラ！！」

キランとドラのペンダントが光った。

ジャック「なっ！そ、そのペンダントは・・・」

ドラ「これがどうした？」

ジャック「そのペンダント・・・どこで手に入れた？もしや青髪から譲り受けたのか？」

ドラ「えっ？お前、ジャッカルのことを知っているのか？」

ジャック「知っているも何も、あいつは俺と同じ海賊王の船に乗っていたんだからな！」

ドラ「えっ！嘘！本当か？」

ジャック「ああ、あいつとは同期だったのさ！」

ドラ「へえ！ジャッカルは海賊王の船に乗っていたんだ！」

ジャック「ああ！青髪からはよくお前の話をしていたんだ！自慢そうにな！誰もが驚いたさ！あいつが東の海から帰ってきたらあいつの大切なペンダントが無かったからな！」

ドラ「そっか！」

ジャック「そして、聞いたんだよ！」

ー回想ー

ジャック「おい！ジャッカル！お前、ペンダントはどうしたんだ？」

ジャッカル「ああ、それか・・・実はな、東の海に船長と同じ面影イーストブルのある一人のガキにあつたんだ！そいつが面白いように俺たちが船出の時に言つたんだよ！」

ジャック「なんて？」

ジャッカル「俺は海賊王になる！って！」

ジャック「へえ」

ジャッカル「俺は未来へ賭けてきたのさ！」

ジャック「お前の大事なペンダントが無くなる程か・・・会っていたいな！」

ジャッカル「いずれ会えるだろう！」

ジャック「そうだな！」

ー現代ー

ジャック「そう言うわけさ！」

ドラ「へえ・・・ジャッカル、元気にしているかな」

ジャック「あいつもお前に会いたがっていたぞ！」

ドラ「そっか！早く会えるといいな」

ジャック「そうだな！」

二人の会話を見守る者達がいた。

シヨット「なあ、さっきまで敵同士だった奴らが仲良く話しているぜ！」

レーツ「だな！まさか、ドラが青髪とつながりがあるとわな・・・
恐れ入ったぜ！」

シヨット「確か、あいつには越えたい奴がいるって言ってたけど・・・
まさか、それが青髪だったとわな・・・」

ジャック「さあ〜と・・・俺もそろそろ偉大なる航路グランドラインに戻るとするか！良い土産話ができたからな・・・あと、海軍にも報告に行かないとな！」

ドラ「えっ？何で海軍に？」

ジャック「あれ？言ってなかったけ？俺、王家七武海なんだ！」

シヨット・レーツ「ええ〜〜〜〜〜〜〜〜！！！」

ドラ「なんだ？王家七武海って？」

シヨット「知らないのか？海軍三大勢力のひとつ王家七武海を！」

レーツ「海賊なのに、海賊を取り締まる機関だ！そして海軍から追われはしないのさ！」

ドラ「へえ〜」

シヨット「まさか、ドラとほぼ互角で闘っていた奴が七武海なんて・・・」

ジャック「そう言うわけだ！さて、俺は帰らせて貰うぜ！海軍に東イストブルの海に小間白い奴がいるとも言っというてやるうかな！」

ドラ「おう！何でも言っておいておけ！」

ジャック「わかったよ！じゃな！手品の鳥マジックバード！！」

ジャックは複数のハトになり空へと飛んでいった。

ドラ「ジャッカルが海賊王の船に乗っていたのか〜〜！」

第16章 クロ帽子のジャックの真の正体（後書き）

└ 登場人物キャラクター紹介? ┘

名前：ジャック

所属：王家七武海

異名：クロ帽子

悪魔の実：テジテジの実

能力：手品を体全体ですることが出来る。

特徴：元海賊王のクルー

ジャッカルとは同じ船の同期

黒い帽子を被っているのが特徴

まさかの七武海でした!!

次回はどうなるのか!?

お楽しみに!!

第17章 遂にドラの手配書が！気になる額は！？

ドラ「ああゝ暇だぁゝ！！」

シヨット「またか！これで何回目だよ！？」

ドラ「だってよゝ魚が全然釣れないじゃないかよぉゝ！」

シヨット「いいか！魚釣りつてのはな辛抱強く待たなきゃいけないんだよ！」

二人は晩飯用の魚を釣ろうとしていた。

しかし、1時間が経過したが1匹も釣れない。

レーツ「おゝい釣れたか？」

ドラ・シヨット「いや、全然！」

レーツ「それが、釣れなかったらお前ら！晩飯ぬきな！」

ドラ・シヨット「ええゝ！！」

レーツ「ええゝじゃないだろう！二人で冷蔵庫の中身をほとんど空にしたんだからな！それくらいの代償は払って貰うぞ！」

ドラ・シヨット「ブウゝブウゝブウゝブウゝ！！！」

二人がブーイングを起こす。

レーツ「ピキッ！」

ドカツ！バキッ！

ドラ・シヨット「痛てえ〜！！何するんだよ！」

ドラ「何で、俺を殴れるんだよ！」

レーツ「これのおかげさ！」

と右腕を見せた。

シヨット「それは？」

右手の中指には緑色の指輪がはまっていた。

レーツ「この前、海軍の軍艦から頂いてきた・・・海楼石の指輪さ
！」

シヨット「なるほど！だから殴れるのか！」

レーツ「お前ら！つべこべ言わずに釣りの続きでもしとけ！」

ドラ・シヨット「へえ〜い」

フェアリー「本当にバカねえ〜アンタ達！」

ドラ・シヨット「なにを！」

フェアリーは新聞を読みながらそう言った。

パラッ

新聞から一枚の紙が落ちた。

シヨット「ん！？これは・・・」

4人「あああああ~~~~」

4人はその紙を見て驚いた。

ー海軍本部ー

大佐「ええ〜！異例の海賊が現れました！！」

大勢の昇降クラスの海兵の前でそう言った。

どこかの会議室のような和室の部屋だ。

大佐「東の海^{イーストブルー}の凶悪な海賊達を次々と倒し、あの懸賞金2千5百万ベリーー 隻眼のギラーズを倒した男です！！そしては我が海軍のハワード大佐を重傷に追い込んだ張本人です！この男は悪魔^{ロギア}の実の能力者しかも自然系です！」

そう言つと手配書を取り出し、自分の机の上に置いた。

大佐「このことから踏まえて懸賞額は3千5百万ベリーー！初等手配

からにしては高額の異例の額ですがそう高くはありません！『水龍のドラ』を手配します！」

バンツと手配書を叩いた。

大佐「弱音の吐く奴はこの場から立ち去れ！！絶対的正義の名の下で！！」

海兵「うおおおおおおお！！」

ーフライング・タイガー号ー

ドラ「うっほー！！遂に賞金首になった！！」

レーツ「おいおい！マジかよ！！」

シヨット「異名が水龍かよ！！」

フェアリー「きつとこれから海軍本部も動くわよ！本部の人間は手強いわよ！！」

レーツ「大丈夫！フェアリーちゃんは俺が守るから！！」

ドラ「この調子で”グランドライン偉大なる航路”へ行くぞ！！」

レーツ・シヨット「おおおおお！！」

フェアリー「ちよつと！私の島にちゃんと連れてってからよ！！」

ドラ「分かってる！分かってる！」

懸賞金も遂につき、水龍海賊団は”^{グランドライン}偉大なる航路”を目指した。

第17章 遂にドラの手配書が！気になる額は！？（後書き）

遂に懸賞金が付きました！！

次回はいよいよフェアリーの故郷へ行きます！！

楽しみに！！

第18章 到着！ フェアリーの故郷

ドラ「ああゝゝゝ腹減ったゝゝ」

シヨット「よく言っわ！さっき、鍋を二つも空にしたくせに！」

ドラ「でもよあゝ！腹が減ってよゝ」

シヨット「しかも、また冷蔵庫をあさり、レーツに殴られ・・・毎度毎度、少しは学習しろよ！」

ドラの頭には大きなたんこぶができていた。

シヨット「それにしても・・・」

ドラ「釣れねえゝ！！」

いつものように釣りをしていた。

レーツ「おうゝい！なんか釣れたか？」

ドラ・シヨット「いや、全然！！」

レーツ「おい！ドラ！それ釣れなかったらお前だけ夕飯ぬきな！」

ドラ「ええゝゝゝ！！」

レーツ「ええゝじゃない！冷蔵庫を空寸前にしやがって！昨日は魚が釣れたから良いものの今度やつたら皿洗いに飯抜きな！」

ドラ「ええ〜〜〜〜!!」

シヨット「バカだなあ〜!!」

ドラ「チエツ!」

シヨット「ところで今、フェアリーの故郷に向かっているんだよね?」

ドラ「ああ、そうだ!」

シヨット「どんな所なんだ?」

シヨットは、甲板で新聞を読んでいるフェアリーに話しかけた。

フェアリー「どんな所って・・・気象を研究している島で・・・名前をウエザーアイランドって言うの!」

ドラ「気象かあ・・・なあ、それってうまいのか?」

シヨット「いや、食べ物じゃねえ〜よ!!」

シヨットがツツコミを入れた。

フェアリー「そうそう、グランドライン”偉大なる航路”に行くって言うてたわよね?」

ドラ「ああ、そうだ!」

フェアリー「ウェザーアイランドの先にローグタウンって言う島があるわ！別名始まりと終わりの町・・・」

ドラ「確か・・・海賊王が生まれ処刑された町だろう？」

フェアリー「ええ・・・」

レーツ「初めは始まりの町と言われていたが海賊王が処刑されてからは終わりの町とも呼ばれるようになった・・・」

フェアリー「そこで、物資の調達をすると良いわ！でも海兵がいるから気をつけてね！」

ドラ「おう！でもよろしくフェアリーも行こうぜ！！」

フェアリー「だから、手を組んだだけって言っているでしょう！」

ドラ「だけどよろしく気が変わったりとか・・・」

フェアリー「変わるわけ無いでしょう！！」

ドラ「そんなあ・・・」

レーツ「なあ、あれがウェザーアイランドか？目の前の島が！」

フェアリー「ええそうみたいね！」

ドラ「なあ？フェアリー」

フェアリー「なに？」

ドラ「お前・・・なんか隠していないか？」

フェアリー「えっ!？」

ドラ「普通の人には海賊とは手を組まないハズだろう！」

フェアリー「・・・」

レーツ「おい!ドラ!!訳の分からないこと言っているんじゃないか?フェアリーちゃんがそんなことするはず無いだろう!」

ドラ「俺が見た限りじゃあの島は今楽しくないんじゃないか?」

フェアリー「えっ?」

ドラ「本当のことを言ったらどうだ?」

フェアリー「・・・」

ショット「おいおい!どつという意味だ?」

ドラ「これはあくまでも俺の予想だ!もしかすると・・・あの島は今海賊に乗っ取られているんじゃないか?違ければ良いんだ!」

フェアリー「!?!」

ドラ「しかも並大抵の海賊ではない!」

フェアリー「!?!」

ドラ「どうやらあっているみたいだな！」

フェアリー「・・・」

ドラ「まあ、話したければ話さなくていい！」

フェアリー「どうしてわかったの？」

ドラ「ううん・・・感だ！」

フェアリー「はあっ!？」

フェアリーはさすがにあきれたようだ。

フェアリー「まあ、いいわ！確かに乗っ取られているの！それも東¹
ストブル
の海最強の海賊よ！」

ドラ「最強!!会ってみたいなあゝ!!」

ドラは目を輝かせて言った。

ショット「マジかよ!!」

レーツ「こうなったドラは止められないな！」

ドラ「ようするに・・・その最強の海賊をブッ倒せば良いんだな？」

フェアリー「えっ!?!でも・・・」

ドラ「俺は仲間を見捨てたりはしねえー!!」

フェアリー「でも・・・まだ誰も仲間だなんて・・・」

ドラ「この船に乗っている限りはずっと俺たちの仲間だ!!」

フェアリーは3人を見渡した。

ドラ「よし!!最強の海賊をぶっ飛ばすぞおー!!」

レーツ・シヨット「おうーっ!!」

ドラ「あっ!」

シヨット「どうした?」

ドラ「飯だぁー!!レーツ!!海賊弁当を頼む!!」

レーツ「よし、来た!残り物で作ってやる!待ってる!」

海賊弁当とは・・・

スタミナを付けるべく、肉を中心とした弁当で野菜はほとんど入っていない・・・

ドラが冒険の際によく注文するものだ。

ーウエザーアイランドー

??「どうした?外が騒がしいぞ!」

部下「はっ！それが妙な海賊船が現れたとかで・・・」

??「何処の海賊だ？」

部下「そ、それがまだ・・・」

プルプルプルプルプルプッ ガチャッ

??「もしもどうした？」

電伝虫の受話器を取った。

部下『旗印が分かりました！！』

??「どこだ？」

部下『そ、それが・・・今話題のルーキー！！』『水龍のドラ』の船です！！』

??「ほぉーあの海賊か・・・面白い！」

部下『どうします？』

??「構わん・・・ほっておけ！」

部下『はっ？』

??「こちらからは手出しをするな・・・」

部下『了解です！！』

ガチャッ

??「水龍のドラか・・・クックックックッ」

謎の人物はドラの手配書を眺めてそう言った・・・

第18章 到着！ フェアリーの故郷（後書き）

フェアリーの故郷に着きました！！

今回は謎の人物の正体が明らかに！？

楽しみに！！

第19章 ウェザーアイランドの苦しい現状 殺し屋登場！

ドラ「へえ、ここがフェアリーの故郷かあ」

ドラ達はウェザーアイランドに着いた。

そして船から降りているところだった。

ショット「空気もいいし・・・良いところじゃないか！」

レーツ「確かに支配されているような気はしないしな・・・」

フェアリー「確かにそうかも知れないけど・・・これは表の島よ！裏の島は支配される島・・・」

ドラ「で、その海賊はどこに居るんだ？」

フェアリー「しっ！そう言うことは言わない方が良いわ！」

ドラ「何でだ？」

フェアリー「実はこの島は常に監視されているの！ほら！」

とフェアリーが指を指した先には監視用電伝虫がいた。

ショット「なるほど・・・なあ？あれがたくさんあるのかい？この島に？」

フェアリー「ええ！音まで拾っているから気をつけて！」

ドラ「なるほど・・・」

シヨット「油断は禁物か・・・」

ドラ「なあ・・・俺・・・腹減った!」

3人「はあ?」

レーツ「確かにまだ何も食べていなかったな・・・」

フェアリー「じゃ、私の家においでよ!案内するから!」

ドラ「本当か?」

フェアリー「ええ!」

ー???ー

??「例の海賊共はどうした?」

部下「はっ!今のところ目立つような行動はしておりません!」

??「そうか・・・」

部下「そ、それなんですが・・・」

??「どうした?」

部下「あの例の小娘・・・フェアリーがその海賊と一緒に行動しているらしいのです！」

??「本当か？」

部下「ええ・・・どうします？」

??「今回の作戦に支障が出なければ放っておけ！だが・・・」

部下「だが・・・？」

??「だが、今回の作戦に支障が出るようなら直ちに捕らえろ！その海賊と共にな？」

部下「はっ！」

??「そしてもう一つ・・・常に監視用電伝虫から目を離すな！」

部下「はっ！」

??「あつ！あともう一つだけ・・・」

部下「な、なんでしょう・・・」

??「俺の飯はまだかあああああああ！！！」

部下「あああああああ！！申し訳ありません！！直ちに手配を！！」

??「すぐにしろ!!今から20分以内に料理を持ってこい!!!
!!じゃなければその責任者を始末する!!」

部下「はっ!!ただいま!!」

部下はそう言うのと逃げるように調理場へと向かった。

??「『水龍のドラ』か・・・ルーキーが嘗めたまねをするんじゃないぞ・・・」

ーフェアリー家ー

ドラ「これうめえゝな!!」

ガツガツとドラが中心に食っていた。

レーツ「ちょっとは遠慮しろよ!大食いバカが!」

シヨット「相変わらず、すごい食いつぶりだな・・・」

ドラ「そうか・・・まだいけるぞ!」

シヨット「そう言う問題じゃねえ!」

フェアリー「私の家の食料が・・・」

レーツ「わりいなフェアリーちゃん!こいつに飯食わせると言うことはこれを覚悟しておけないとな・・・」

ドラ「ぷはあああ！食った、食った！」

ショット・レーツ「全部食いおった!!」

テーブルの上に置いてあつた料理が全部無くなった。

ショット「おれら・・・全然食っていないんだけど・・・」

レーツ「誰が・・・俺たちの分まで食って良いって言った!!」

レーツはドラをぶん殴った。

ドカツ！

ドラ「痛つてええええええ!!」

ドラは頭に大きなたんこぶを作った。

ドラ「殴らなくても良いだろう！」

レーツ「これが殴らなくていられるかよ!!」

ドラ「っで！どうするんだ？」

フェアリー「ええ、そのことなんだけど・・・」

この様子を秘かに監視するものがいた電伝虫ではなく・・・

??「頭！やつが例のことをじゃべろとしています・・・どうしま

す？」

と小型電伝虫を使って相手に話していた。

??『そうか報告ありがとう・・・』

相手はどうやらあの謎の人物らしい・・・

??『なら、早速だが・・・小娘を連れてこい！強制に！これくらいなら楽だろう？』海鯨のシャーク『』

シャークと呼ばれた男はこう答えた。

シャーク「ええ、任してください！おれは東の海きつての殺し屋で
すぜ！お代の方はしっかりと頂きますぜ！」

??『ああ、頼んだよ！』

ドラ「で、そいつの名前はなんて言うんだ？」

フェアリー「ええ！その海賊は・・・東の海最強の海賊・・・『黒
鯨のシャーク』！懸賞金4千万ベリー！」

シヨット「よ、4千万ベリー！？ドラより500万ベリー上じゃないか！！」

フェアリー「ええ、そして東の海きつての殺し屋『海鯨のシャーク』
と手を組んでいるらしいわ！」

レーツ「まじか？」

フェアリー「ええ・・・そして・・・」

バンツ！

と家の扉が勢いよく開いた。

レーツ「誰だ！？」

レーツは腰の刀に手をやった。

??「お話はそこまでだ・・・」

ドラ「誰だ？」

??「先ほどのお話の中に出てきた・・・殺し屋さ！」

シヨット「まさか・・・海鮫！？」

シャーク「その通りさ！」

ドラ「何のようだ？」

シャーク「なあくに・・・すぐに終わるさ！用があるのはその小娘だ！」（ニヤツ）

レーツ「フェアリーちゃんに何のようだ？」

シャーク「こつ言つ用だよ!」

シュン・・・

ショット「き、消えた・・・」

シャーク「シャツシャツシャツシャツ! この俺様のスピードのは誰もついて来れないだろう!」

レーツ「いつの間に!」

フェアリーはシャークに捕まっていた。

そして、眠っていた。

シャーク「動くな! この娘の命は無いぞ! それともう一つ良いことを教えてやろう! 俺は『海鮫』とは他にも異名があるのさ・・・」
眠り鮫のシャーク『ていうな・・・』

ドラ「どういう意味だ?」

シャーク「こつ言つ意味さ! 眠り光線!」
スリープレーザー

・ シャークの指の先からピンク色のレーザーが出て3人に当たった・

その途端・・・

ドラ「あれ・・・なんだか・・・眠く・・・ZZZZZZZ」

ショット「し、しまった・・・悪魔の・・・ZZZZZZZ」

レーツ「油断を・・・していた・・・ZZZZZZZ」

3人はぐっすりと眠ってしまった・・・

シャーク「任務完了！^{ミッション}この娘は預かっていくぜ！」

シャークはフェアリーの家から出て行つた。

第19章 ウェザーアイランドの苦しい現状 殺し屋登場！（後書き）

フェアリーが奴らに捕まってしまいました！！

次回はどうなるのか！？

早く起きろおゝ3人とも！！

次回もお楽しみに！！

シャー「な、なぜここが分かった!？」

ドラ「ん?・・・それはな・・・」

シャー「それは・・・」

ドラ「カンだ!!」

シャー「なっ!？」

彼らがここにたどり着いた訳はと言つと・・・

時はさかのぼり・・・1時間前・・・

第20章 潜入！海鯨のアジト！

ドラ「ふわあああああ．．．よく寝たあゝ！」

シヨット「なんで俺たちは．．．」

レーツ「確か．．．」

ドラ「あれ？フェアリーは？」

シヨット「そうだ！！確か．．．あの変な殺し屋とか言う奴に．．．」

レーツ「捕まり．．．俺たちが助けようとしたら．．．」

ドラ「眠くなった．．．そうだ！！フェアリー！！」

シヨット「もしかすると、もう奴らのアジトに！！」

レーツ「こうしちゃいられねえゝ！！早く探さないと！！」

シヨット「でもどうやって？」

ドラ「行くぞあゝ！！お前ら！！」

シヨット「って．．．話聞いてなかったのか？どこに居るか分からないだろう！！」

レーツ「そうだ．．．当てもなく探すのも良くは無い．．．」

ドラ」でも、このままじっとしていたって・・・」

シヨット「そうだ！！ベルの鼻でにおいを嗅いで探すのは？」

レーツ「ネコだぞ・・・」

シヨット「レーツ、頼んできて？」

レーツ「やらないよりはマシか！」

レーツはベルの所まで行った。

レーツ「おい！ベル？力貸してくれないか？」

ベル「グワォ！」

レーツ「良いって！それで何だが・・・臭いかげるか？」

ベル「グワァ・・・」

レーツ「良く分かんないってでもやってみるってよ！」

シヨット「よし！その息だ！！」

レーツ「これだ！良く覚えてくれ！」

ベル「・・・グワァ？」

レーツ「・・・ダメだこりゃ・・・無理だとよ！」

ショット「そんな〜！」

ドラ「よし！こうなったら自分達で探すぞ！」

ショット「どうやって？」

ドラ「そりゃあ〜・・・勝手に歩いて探すだろう？」

ショット「計画性が全然ない・・・」

レーツ「歩いてどうするんだ？」

ドラ「そりゃあ〜・・・歩いてりゃあ〜そのうち見つかるだろう？」

ショット・レーツ「・・・」

(こいつ・・・本当にダメだ・・・)

彼らはそう心の中で思った。

レーツ「でも・・・何もしないよりはマシだろう！」

ショット「そうかも知れないな・・・行くか！」

ドラ「行くぞっ！」

レーツ「で・・・どこから行くんだ？」

ドラ「ええ〜と・・・あっち！」

とデタラメに指を指した。

レーツ「じゃ、行くか！」

3人はドラの指さした方向に向かった。

暫くすると・・・

レーツ「うーん・・・これは・・・」

ショット「まさか・・・これが・・・」

ドラ「なっ！言っただろう！歩いてれば見つかるって！」

レーツ「本当に・・・」

ショット「たどり着いた〜〜！！」

ショット・レーツ（し、信じられん・・・）

目の前にはいかにもアジトラらしい建物があった。

入り組んだところにあつたが・・・

ドラが適当に指を指していった先にあつた。

ドラ「よし！行くか！」

ショット「ちょっと！待て！普通、真っ正面から行くか？」

レーツ「ここは裏口からが・・・」

ショット「分かったか裏口から・・・」

ドラ「うおおおおおおお！！」

ショット「全然、話聞いてねえ！！」

ドラは正面から突っ込んでいった。

レーツ「・・・やっぱりあいつに何言っても無駄か・・・仕方ない！予定より少し早いが暴れるか・・・」

ショット「あのバカ！仕事を増やしやがって！」

ドラの後を追い、アジトの中に入っていた。

部下A「侵入者だ！！追い払ええ！！」

ドラ「そこをドケエ！！W水龍拳！！」

ドガン！！

部下達を躊躇為しにぶっ飛ばす。

ショット「あいつ容赦なしだな・・・」

レーツ「バカ！よそ見してんな！来るぞ！」

ショット「おっ！団体さんで！」

シヨットは腰から2丁のピストルを引き抜いた。

シヨット「君たちに怨みは無いが先を急ぐのでね！」

レーツ「ホークス！君は空から空中から敵の様子を知らせてくれ！」

ホークス「クワアア！」

レーツ「よし！良い子だ！頼んだぞ！」

ホークスは頭上へ飛んでいった。

レーツ「結構、いるみたいだな！」

部下B「必ず捕まえるー！！！」

レーツ「2刀流奥義 大車輪！！！」

部下「うわああああああ！！！」

レーツの周りから次々と部下達が吹っ飛ばされていく。

レーツ「口ほどにもねえな・・・雑魚共が！」

ドラ「おうーい！お前ら！！奴らの場所が分かったぞ！」

レーツ「本当か？」

ドラ「ああ！どうやら頂上だ！！！」

ショット「ちっ！上か！」

レーツ「上に行けば良いんだな・・・」

ショット「おいおいどうするつもりだ？」

レーツ「二人とも！俺に掴まれ！！ベルは壁づたいに登ってこい！
！行くぞ！」

二人はレーツに掴まった。

レーツ「振り落とされるなよ！ドラ！天井をぶっ壊すのをよろしく
！」

ドラ「任せろ！」

ショット「マジかあ」

レーツ「2刀流奥義 風車！！」

地面に向けて思いっきり放った。

3人はその勢いで空中へ飛んでいった。

ドラ「水龍！！」

ドラは水の龍を作り出し天井を次々にぶっ壊していった。

ドドーン！！

ようやく最上階へとたどり着いた。

ドラ「フェアリーを返せえゝ!!」

とこれがここまで来る過程であつた。

第20章 潜入！海鯨のアジト！（後書き）

3人のフェアリー救出大作戦が始まりました！！

フェアリーを無事に助けられることができるのでしょうか！？

次回に続きます！！

お楽しみに！！

第21章 VS海鮫のシャーク その脅威の能力

シャー「ま、まさか・・・カンでここまで来るとは・・・大したものだ・・・海鮫！こいつらの相手をしてやれ！」

そう言うのと部屋の奥からシャークが姿を現した。

シャーク「この分のお代もしっかりと頂くぜ！」

シャー「分かっている！」

ドラ「フェアリーを返しやかれえ〜！！！」

シャー「落ちる着くがよい！」

ドラ「落ちついていられるかよ！」

シャー「なら、この私と海鮫を倒してみよ！なら返そう！」

ドラ「それだけえねえ〜！」

シャー「なんだ？他にもあるのか？宝か？」

ドラ「違う！！この島だああああ！！！」

シャー「フツ！海賊が人助けか？バカだな！海賊っているのはな！支配する立場にいるんだよ！」

ドラ「ふざけるなあああああ！！海賊が支配する？ふざけるな！」

俺たちも海賊だ！だが支配なんてしない！俺は自由があれば良いんだ！！」

シャー「フツ！まだ言つか！海鮫！始末しとけ！」

シャーク「了解！」

シャー「ヒッヒッヒッヒッヒッヒッ……俺は暫く向こうの部屋にでもいるとするか……」

ドラ「待て！逃げる気か！」

シャー「逃げる？そんな卑怯なことはしないさ！ヒッヒッヒッヒッヒッヒッ……」

シャーは奥の部屋へと消えていった。

シャーク「と言っわけだ！相手になって貰っぞ！」

ドラ「上等だ！！」

レーツ「ドラ！気をつけろ！そいつの能力はさっきも見ただろう？」

ドラ「ああ！見た！良いかお前ら！手出すんじゃない！これは俺とあいつの戦いだ！」

シヨット「分かっているって！」

レーツ「負けんなよ！」

ドラ「行くぞ！！W水龍拳^{ツイン}！」

シャーク「さすがは水龍の異名を持つ奴・・・だが遅い！」

ヒラリと交わした。

ドラ「そうはさせない！水の部屋^{ウォータールーム}！！」

シャークを閉じ込めた。

シャーク「ちっ！こんな技を持っているとは・・・ブクブクブク
ブク・・・」

能力者のせいか溺れている。

ドラ「クラッシュ！！」

バシャーン！！

シャーク「ぐはっ！・・・」

ドラ「よし！弱いなあゝお前！」

シャーク「・・・・・・・・」(ニヤッ)

ドラ「え？」

シャーク「効かねえゝなゝ！」

ドラ「バカな！」

シャーク「鉄塊^{テツカイ}!!」

ドラ「どういうことだ・・・?」

シャーク「シャツシャツシャツシャツシャツシャツ・・・」

ドラ「なんで・・・」

シャーク「実は・・・俺は元海軍の人間さ!」

ドラ「なっ!」

シャット「バカなっ!」

レーツ「マジか?」

シャーク「ちなみに階級は中将だった!」

ドラ「えっ!!・・・ってどれくらいすごいんだ?」

ショット・レーツ「ズゴー!!」

二人はズッコケた。

ショット「知らないのかよ!!」

レーツ「中将って言うのは大将より一つ下の階級でその中には大將と同じくらいの強さの奴が何人かいるんだ!」

ドラ「なるほど・・・ってこいつは海軍かああああ！？」

シヨット・レーツ「いや、だから元海軍だから・・・」

軽くツツコミを入れた。

ドラ「なんだあゝそう言うことなら最初から言えよあゝ」

シヨット・レーツ「いや、だから最初から言っているし・・・」

またもや軽くツツコミを入れた。

シャーク「ちなみに今のは六式と言う奴の一つでな・・・」

ドラ「なんだ？六式って？」

シヨット「いや・・・俺にも・・・レーツは？」

レーツ「いやすまん・・・俺も全然・・・確か中将クラスの奴が使うと聞いていたが・・・」

シャーク「こつ言つのもできるぞ・・・」

ドラ「ゴクッ」

シャーク「嵐脚ランキヤク！！」

そう言うと、シャークは足を思いっきり空を蹴った。

スパーン！！

足から斬撃が繰り出された。

ドラ「な、なんだ!？」

バシャーン!

ドラを切り裂き壁に当たった。

壁には刀で切ったような後がついた。

ドラ「な、なんだ・・・今は!？まっ!俺には効かないけど!」

シャーク「そうだったな・・・貴様は水人間だからな・・・」

ドラ「水銃^{スイガン}!」

指先から水の弾を撃った。

シャーク「剃^{ソル}!」

シュン!!

一瞬にして姿が消えた。

ドラ「なにっ!」

シャーク「こっちだ!」

ドラ「いつの間に!」

シャーク「指銃^{シガン}!!」

ブスッ

ビシャッ!

ショット「なっ!指で穴を開けた!？」

レーツ「あいつが水で良かった・・・」

ドラ「効かねえっ!!」

シャーク「やっぱりね・・・」

ドラ「近くに來たのが運の尽きだな!水龍!!」

ドラは背中から龍を作り出した。

シャーク「おおおっこれまた大きいねえっ!」

ドラ「喰らえ!!はっ!」

水の龍でぶつけようとするが・・・

シャーク「だが甘かったな・・・月歩^{ゲッポウ}!!」

ポンッポンッポンッ!

空中を蹴って、空へと逃れた。

ドラ「えっ!？」

レーツ「あの野郎・・・空中を蹴ってやがる・・・」

ショット「ありえねえ」

レーツ「ありえるさ!あれが六式さ!」

ショット「つてお前が自慢げに言っなあ~~~~!」

ドラ「この野郎~~~~!!」

シャーク「どうやらお前の運もここまでだな・・・」

レーツ「あっ!」

ショット「どうした?」

レーツ「ほら、さっきあいつがフェアリーちゃんをさらって行ったときあっただろう?」

ショット「ああ・・・それがどうした?」

レーツ「確かあいつ目にも止まらぬ早さで動いたよな?」

ショット「ああ・・・そう言えばそうだな・・・」

レーツ「あれがさっきの剃^{ソル}とか言う奴だろう・・・」

ショット「つで?」

レーツ「えっ?」

ショット「それがどうした?」

レーツ「だから・・・すごいなあゝって・・・」

ショット「今、分かったから何なんだよ!!」

レーツ「う、うるせえゝ今気づいたから言っただよ!! テメエゝ俺をバカにするのかゝゝ?」

ショット「はっ? おめえゝが最初に言ってきたんだろぅが! アホ野郎!」

レーツ「んだと!! 貴様!! やるのか?」

ショット「おっ! 望むところだ! 掛かって来いよ!」

レーツ「ぐっ! 上等だ、コラアアアアアア!!」

スガン ババン スガン ドカン・・・

二人は何故かケンカになり・・・

シャーク「何やっているんだ・・・あいつら・・・」

ドラ「よそ見している暇なんかねえゝぞ!! 水龍拳!!」

シャーク「ちっ！鉄塊テツカイ！！」

ガキンッ！

ドラ「ちっ！やっぱり厄介だな・・・」

ドラとシャークは向かい合い睨み合い・・・

その隣でショットとレーツはケンカ・・・

第21章 VS海蛟のシャーク その脅威の能力（後書き）

～登場人物キャラクター紹介？～

名前：シャーク

所属：海軍本部中将↓東の海殺し屋
イーストブル

↓黒鯨海賊団

悪魔の実：ネムネムの実

能力：相手を眠らせる。

得意技：六式：剃ソル 嵐脚ランキヤク 鉄塊テツカイ 指銃シガン 月歩ゲツボウ 紙絵カミエ

シャークが元海軍で六式使いでした！！

あの二人はケンカを始めましたが・・・

次回もシャークとの戦いは続きます！

お楽しみに！！

龍はシャーク目掛けて突っ込んだ。

シャーク「空中でも避けれるぜ！^{ゲッボウ}月歩」

ポンッポンッ

宙を蹴ってヒラリと交わした。

シャーク「甘かったな・・・」

ドラ「そいつはどうか・・・」(ニヤッ)

シャーク「シャッ？」

ドラ「後ろをってみろ！」

シャーク「後ろ・・・！？」

シャークの後ろに先ほど交わした龍がいた。

シャーク「なっ！」

ドラ「そいつは生き物のように動くんだ！形が崩れるまでな！」

シャーク「そうかあ・・・！っていきなりピーンチー！」

ドラ「くたばれえー！！！」

シャーク「くそっ！」

ドガン！

シャークにまともに当たった。

ドラ「少しは頭を使い！」

シャーク「・・・まだまだ！！お前の方が甘かったみたいだな！」

ドラ「ちっ！そう簡単には終わらないか・・・」

シャークは地面へ着地した。

ドラ「もう一回！！水龍拳！！！」

シャーク「させない！^{ソル}剃！」

ドラ「ちっ！またか・・・どこだ・・・」

シャーク「^{シガンガトリング}指銃銃乱打！！！」

シャークはドラに目にも止まらぬ早さで指した。

しかも、連続で・・・

ドラ「きかねえ！て・・・うわぁっ！」

バシャーン！

ドラは水になった。

ドラ「なるほど・・・攻撃できないようにするのか・・・」

シャーク「効かなくても攻撃は阻止できるからな!」

ドラ「厄介だな・・・ん?・・・そうだ!!アレを上手く利用すれば・・・!」

シャーク「なんだ・・・?ブツブツと・・・」

ドラ「まっ!見れば分かる!」

シャーク「面白い!月歩!」
ゲッボウ

シャークは宙へと飛んだ。

ドラ「いくつぜえ!水龍!」

龍を出した。

シャーク「なんだ・・・またそれが・・・?」

ドラ「今度も避けてみれよ!」

シャーク「月歩!」
ゲッボウ

なんなく交わした。

シャーク「で、後ろに来るんだろう?・・・?いない・・・」

ドラ「水の水路!」
ウォータースライダー

シャーク「う、上かつ！」

シャークは真上を向いた。

シャーク「ち、違う・・・どこに・・・？」

ドラ「こっちだー!!」

シャーク「いつの間に!!」

目の前にさっきまで姿が見えなかった龍がいた。

そして・・・ドラも・・・

ドラ「これをスライダー代わりにしたのさ!!」

シャーク「近距離でやるのか・・・？」

ドラ「ああそうだ!!氷結水龍拳!!」

シャーク「なっ！固まっている！何故？」

ドラ「くたばれえー!!」

固まった、水龍拳がシャークを直撃しようとする。

シャーク「ちっ！良いだろう！最強の鉄塊で受け止めてやる!!鉄塊・剛!!」
デッカイ・ゴゴ

ガキンッ！

ドラ「うおおおおおおお！！」

ドラはシャークをぶっ飛ばした。

シュルルル

シャークは地面目がかけて落ちていく。

ドガン！！

ドラ「どうだ！！」

スタツとドラは着地した。

シャーク「・・・」

シャークは無言にまま立っていた。

ドラ「まだ立っていられるのか？ならもう一度！」

シャーク「・・・くっ！」

ドサッ

シャークは倒れた。

ドラ「・・・！勝ったあああ！！」

シャーク「・・・俺の負けだな！」

ドラ「なんだ？まだしゃべれるのか？」

シャーク「一つ聞かせてくれ！」

ドラ「なんだ？」

シャーク「なぜ最後のアレは固まっていたんだ？」

ドラ「ああ！それか・・・それわな・・・上の方にな冷却器があつたんだよ！最初に飛んだときに気がついてな！それで固めてぶん殴ったんだ！」

シャーク「ふっ！なかなかやるな・・・そんな機転が利くとは・・・」

??「おやおや・・・負けたのかあ！海鮫ともあろうものが！ああ・・・」

シャーク「くっ！」

ドラ「てめえ！は！！黒鯨！！」

シャーク「雑魚には興味はない！敗北者は消えろ！」

ドカツ！

シャークはシャークを踏みつけた。

ドラ「おい！そいつはもう動けねえ！そこまですることは無いだろう！」

シャー「この時代は勝者だけが残る時代・・・敗北者はいなくて良い！消えろ！」

ポチッ

シャーは手に持っていた機械を操作して・・・

パカッ

シャークの上の床が開き、

シャーク「てめえ！裏切るのかあああああ！！」

シャークは下へと落ちていった。

シャー「さて邪魔者は消えた・・・」

ドラ「てめえ！仲間じゃないのか？」

シャー「ああそつだ！一時期わ・・・だが敗者は仲間などではない！」

ドラ「おめえ！だけは絶対に許さない！！」

第22章 遂に決着!! ドラの新技炸裂! (後書き)

シャークは倒しましたが・・・

シャーが現れた!! (名前がややこしくてすみません・・・)

ドラは勝てるのでしょうか?

次回に続く!!

お楽しみに!!

シャーの手から水龍が飛び出してきた。

ドラ「なっ！くっ！」

まともに当たるが効果はない。

シャー「どうだ・・・自分の攻撃が自分に当たるのは・・・まっ！
自然系じゃ意味ないな！」

ドラ「てめえも能力者が・・・」

シャー「いかにも・・・俺様はキュウキュウの実の吸収人間・・・
どんな攻撃もこの手で吸収する。そして今の様に出すこともできた
り、逆にそれを自分のエネルギーにもできるのさ！」

ドラ「ちっ！」

レーツ「厄介だな・・・」

ドラ「じゃ、俺が攻撃しなければ良いんだな？」

シャー「シツシツシツシツシツシツ・・・違うな！これは一度
吸収した技を記憶できるのさ！」

ドラ「なっ！っていうことは・・・」

シャー「そう、お前をさわることもできる技を持っているのさ！」

ドラ「じゃ、覇気もか？」

シャー「それは無いな！覇気使いとは闘ったことがないからな・・・だが、お前は水・・・こんなものもあるぞ！」^{リバー}解除・エレキショック」

シャーの手から電撃が放出された。

ドラ「ぐはあああああああ！！！」

もろに電撃が当たった。

ドラ「くっ・・・しびれる・・・」

シャー「どうだ？電気の威力は？ええ？」

ショット「やばいぞ！何とかしないと！」

レーツ「だが、俺たちには・・・こうなったら・・・このアジト中に使えそうなものを探すぞ！」

ショット「探すってこの中をか？」

レーツ「そうだ！」

ショット「了解！早くしねえと死んじまうぞ！あいつが！」

レーツ「行くぞ！」

二人は部屋を飛び出した。

ドラ「はあはあはあ・・・」

シャー「なんだよ？もっと楽しませてくれよ！俺を倒せば鍵は手に入るんだから！ほら」

とシャーは鍵を取り出してドラに見せた。

ドラ「それができたらもうやっている！これならどうだ！『水の部
イルム
屋』！」

シャー「吸収！・・・ちっ！水の中だから・・・ブクブクブクブク・・・」

ドラ「クラッシュ！」

バシャーン！！

シャー「くっ！」

ドサッ

シャーは地面に落下する。

シャー「まだまだだな・・・『^{リバー}解除・エレキボール』！」

今度は手から電気の球を出した。

ドラ「ん？なんだそれ？」

エレキボールはノロノロとドラの方へ向かって来た。

ドラ「こんなの簡単に避けるじゃないか！よっと！」

余裕をかまして避けた・・・が

ドラ「ほら簡単！」

シャー「それは、どうかな？後ろをしてみる！」

ドラ「えっ？後ろ？」

ドラは後ろを振り向いた。

ドラ「なっ！」

そこには先ほど避けたエレキボールがゆっくりと廻りこちら進路を変えていた。

シャー「言い忘れたがそいつは追尾式だ！」

ドラ「なにiiiiiiii！」

ドラ「畜生！！！」

ドラは懸命に逃げた。

シャーはそれを見て面白そうに笑っていた。

「黒鯨アジトF1階」

シヨット「まさか、ここに地下があるとはな・・・」

レーツ「どうやら倉庫らしいな・・・」

シヨット「なんで分かるんだ？」

レーツ「だってここに・・・」

と指を指した先には案内板があった。

シヨット「なっ！ここはデパートかつ！！」

思いつきりツツコミを入れた。

――		――	
		黒鯨のアジトの案内板	
		――	
		地下4階：牢屋	
		――	
		地下1～3階：倉庫	
		――	
		1階：受付	
		――	
		2階：部下の部屋	
		――	
		3階：情報収集係	
		――	

—	4階：海鮫の部屋	—
—	5階：????	—
—	6階：海鮫の部屋	—
—	*牢屋の入るにはボスの鍵が 必要です	—
—		—

レーツ「この案内板・・・挑発しているな！なんだ？最後の は？」

シヨット「まあまあ落ちついて・・・」

レーツ「5階は字が薄れてよく読めないな・・・」

シヨット「で、この倉庫を探すのか？」

レーツ「ああ、そつだ・・・しかし・・・なんで3階分も倉庫なんだ？」

シヨット「さあ・・・」

レーツ「よし、片っ端からぶっ壊すぞ！」

シヨット「はっ？何言っているの？」

レーツ「何って？その名の通り・・・」

ショット「崩れるだろうが!!」

レーツ「崩れねえ!」

ショット「なんでそう言い切れるんだよ!」

レーツ「カンだ!」

ショット「てめえもドラかつ! いい加減にしろ! 俺まで死んじまうだろう!」

レーツ「おつ!なんだ?このマーク・・・」

ショット「つて、お前、俺の話を聞いているのか?」

レーツ「海賊旗・・・?」

ショット「いや、どう見ても危険のマークだろう!」

そこにはドクロのマークが描かれたドアがあった。

レーツ「入るなってことか?」

ショット「そうだろうな・・・」

レーツ「そう言う入りたくなるのが・・・」

ショット「海賊だああああ!!」

レーツ「おりゃっ!」

ドアを真っ二つに切った。

ショット「・・・」

レーツ「何があるのかな・・・ん？なんだこりゃ？」

ショット「なんかあったのか？」

レーツ「ああ、この中には箱が一つだ・・・」

ショット「開けてみるか・・・鍵が掛かっている・・・こんなもの俺に掛ければどうってこと無い！」

暫くガチャガチャといじっていると・・・

カチンッ

錠が開く音がした。

ショット「よし！ビンゴ！何が入っているのかなあ・・・」

ショットは箱を開けた・・・

ショット「え！？こ、これは・・・」

レーツ「なんでこんなものが・・・」

第23章 連戦黒鯨のシャー 厳しいバトル（後書き）

〔登場人物キャラクター紹介？〕

名前：シャー

所属：黒鯨海賊団

異名：黒鯨のシャー

悪魔の実：キュウキュウの実

能力：どんな攻撃でも吸収する。

それを記憶できたり、また使うことができる

ショット達が見つけた箱に入っていたものは・・・

次回に続きます！

お楽しみに！！

第24章 ショット覚醒!? 新たなる力を手に入れた男

ドラ「こんな時になにやっているんだ! あいつらは・・・ちっ!」

シャー「なかなかすばしっこいねえ」
『^{リバース}解除・エレキボール』!

ドラ「またかよ! 水龍拳!」

シャー「甘い!」
『^{リバース}解除・エレキショット』!

ドラ「ぐはああああああ!」

シャー「シツシツシツシツシツシツ・・・終わりにしよう・・・」
『^{リバース}解除・エレキソード』!

シャーは手から電気の剣を取り出しドラを突き刺そうとした。

シャー「終わりだ!」

ドラ「くっ!」

??「^{ブリザード}吹雪!」

シャー「な、なんだ!」

辺りに吹雪が舞い始めた。

??「そこまでだ・・・船長を離しな!」

奥から一人の男が姿を現した。

ドラ「あつ！ショット！！」

シャー「こ、これは貴様の仕業か！？」

ショット「ご名答！」

シャー「し、しかし・・・お前にはこんな能力は・・・」

ショット「ああ、それが・・・じつはな・・・」

時は少し戻り・・・

レーツ「おいおい・・・これは悪魔の実じゃないか！」

ショット「なんでこんな所に？」

レーツ「恐らく誰かに食べさせようとしたんじゃないのか？」

二人の前には白色で黒い唐草模様が入った実が箱の中に入っていた。

レーツ「おい！ショット！お前が食べよ！」

ショット「はっ！なんで？」

レーツ「だって俺は能力者だもん！」

ショット「あれ？そうだったけ・・・」

レーツ「ヒソヒソの実だよ！」

シヨット「だから、俺に食えと!？」

レーツ「ああ、そうだ!これは何の実だ・・・?」

シヨット「食うまで分からないか・・・食えば良いんだな!」

レーツ「ああ、そうだ!」

シヨット「しょうがないなあゝ食うか!いただきます!」

と言ってシヨットは悪魔の実の皮を剥き口に入れた。

レーツ「どうだ?なんか体に異変は?」

シヨット「・・・うつ!」

レーツ「どうした?体に異変が起きたか?」

シヨット「・・・まずいつ!」

レーツ「ガクッ・・・そりや当たり前だ!悪魔の実だもん!で、どうだ?」

シヨット「良く分からんが・・・」

レーツ「じゃ、殴ってみるか?」

シヨット「はっ！なんでそうなるの？」

レーツ「ん？ちよつと待て！箱の奥に紙がある・・・ええゝ何々・・・
・どうやらこの実の説明らしいな・・・」

シヨット「何の実だ？」

レーツ「ええゝ『ユキユキの実』の自然系だ！^{ロギア}」

シヨット「まじかあ！早速やってみよう！」

シヨットはなにやら念じ始めた。

するとシヨットの体は雪に変化した。

シヨット「おおゝすげゝ！！」

レーツ「あとは、雪を降らせることもできるみたいだな！とりあえず・・・ドラの所へ戻るぜ！」

シヨット「ああ！」

――――

シヨット「言うわけだ！」

シャー「じゃ、てめえゝあの悪魔の実を食ったのか？」

シヨット「ああ、そうだ！おかげでオレら全員が能力者じゃねえゝか！」

ドラ「シヨット・・・お前・・・」

シヨット「ああ、しゃべるな！ドラは体を休めておけ！こっからは俺が相手だ！」

シャー「いくら変わろうと関係がない！次は火の能力を使うとするか！」

シヨット「まあ、待てよ！雪つてのはな・・・全てを吸い尽くせねえんだよ！」

シャー「・・・？」

シヨット「こつ言つ意味さ！吹雪ブリザード！！」

さつきよりも一層に雪が強くなった。

シヨット「こいつは威力は無いが・・・ちよつと特殊でな・・・この雪はな・・・外の海を蒸発させた水の粒を固まらせたのさ！」

シャー「どついう意味だ？」

シヨット「まだ分らないのか？お前の体に触れば雪は溶け水になる・・・するとそれは海水だ！」

シャー「！まさか・・・」

シヨット「そのまさかさ！お前は海に浸かったのと同じ状態になるのさー！」

シャー「どうりで力が入らんわけだ・・・」

ショット「つまり！この吹雪の中ではお前は能力を使えねえ〜んだよ！」

シャー「ちっ！厄介だな・・・」

ショット「と言っわけだ！くたばれ！氷結剣！」
アイスブレード

ショットは雪を固め剣を作った。

シャー「ふん！たかが氷が本物の剣に勝てるかよ！」

シャーは腰から刀を取り出した。

ショット「そいつはどうか？」

シャー「笑わせるな！おりやああああ！！！」

シャーは刀をショットに向かって振り下ろした。

ガキンッ

ショット「な！言っただろう！」

氷の剣で受け止めていた。

シャー「なっ！」

ショット「はっ！」

ショットは力をこめてシャーの刀をはじき飛ばした。

ショット「俺は余り剣を好まない・・・俺が好むのは・・・」

ショットは剣を引つ込め雪を操った。

ショット「アイスバズーカー氷結砲弾！！」

氷で銃を作った。

それも巨大な奴を・・・

シャー「おのれえゝゝゝゝ！！」

ショット「終わりだ！」

ショットは引き金を引いた。

ドガンー！！

銃口が火を噴いた。

シャー「ぐはあああああああ！！」

シャーはまともに食らい、外へと吹っ飛ばされていった。

ショット「ふう・・・」

ドラ「すつげえゝなあゝショット！」

ショット「まあな！それより！早く行くぞ！今の衝撃でこのアジトが崩れそうだ！」

ドラ「まじかつ！でもフェアリーが！」

ショット「あいつは大丈夫だ！今レーツが助けに行った。」

ドラ「でも鍵がないと・・・」

ショット「あいつに鍵はいらねえゝよ！」

ドラ「え？」

ショット「だって、すぐ壊すもん！」

ドラ「そつか！じゃ、急ぐぞ！！！」

ドラとショットは大急ぎでアジトから逃げ出した。

ー黒鯨のアジトF4階ー

レーツ「おりゃー！！」

ズパーン！！

なんなく檻をぶった切った。

レーツ「フェアリーちゃん！助けに来たよ！！」

フェアリー「・・・」

レーツ「さっ！急ごう！って・・・まだ寝てる・・・」

シャーク「・・・くっ！」

レーツ「なんだ？お前もいたんだ！」

シャーク「けっ！俺のことは放っておけ！俺ももう死ぬ！」

レーツ「そっか！お前も来い！」

シャーク「はっ！ふざけるな！」

レーツ「ぐずぐず言っでねえ〜で行くぞ！」

レーツはシャークも抱え、外へ抜け出した。

第24章 ショット覚醒！？ 新たな力を手に入れた男（後書き）

無事にフェアリーを助け出しましたねえ！

ショットも能力者に！

次回もお楽しみに！！

第25章 始まりと終わりの町 ローグタウンを目指せ（前書き）

当所の更新予定と大幅にずれてしまいました・・・

申し訳ありません！

今日からまた更新再開を致します！

なお、人気投票は投票者があまりにも少なかったので

中止とさせて頂きます。

次回にご期待を！

では25章の始まりです！

第25章 始まりと終わりの町 ローグタウンを目指せ

ドラ「あと、どのくらいだ？」

・・・シーン・・・

ドラ「あれ？どうしたんだ？みんな？元気がないな？」

レーツ「昨日の宴で2日酔いだ！ボケエ！」

ショット「しかし、ドラも物好きだな・・・まさか、こいつを連れてくるとは・・・」

と、ショットは甲板にいる、一人の男のことを指さした。

ドラ「あいつの行き場所を与えただけだよ！あいつの場所を俺たちが奪ったんだから・・・」

甲板にいるのはシャークだった・・・

時はさかのぼり、2日前・・・

レーツ「お前もこい！」

レーツはフェアリーを抱え向こう側にいる男に声を掛けた。

シャーク「ふざけるな！俺はもうここで終わりだ！おれはもう生きていても意味がない・・・」

レーツ「なに、言っているんだ！もうじきここも崩壊する！早く！」

シャーク「・・・俺のことは放っておけ！」

レーツ「バカ野郎！俺だってこんなことはしたくはねえ！」

シャーク「じゃ、早く行くんだな！」

レーツ「そいつはできねえんだよ！船長命令でな！」

シャーク「あいつがか？」

レーツ「そうだよ！お前だって本当はこんな所から抜けたかったんじゃないか？」

シャーク「所詮、俺は海軍の裏切り者・・・ここで死んだ方がマシだ・・・」

レーツ「ちっ！お前を連れて行かないと船長にどやされるだけなんだよ！」

レーツは無理矢理、シャークを抱え、崩壊する建物から無事脱出した。

ドラ「おい！シャーク？お前の専門は？」

シャーク「・・・」

ドラ「おい！聞いているのか？」

シャーク「ひとつ、聞かせてくれ！それに答えてくれたら俺も答える・・・」

ドラ「いいぞ！」

シャーク「俺は・・・ここにいて良いのか？だって、俺はお前らに攻撃もしたし、仲間もさらったんだぞ！それでもか？もしかしたら裏切るかも知れないんだぞ！」

ドラ「当たり前だ！お前はここにいて良いぞ！俺たちを攻撃したのも、フェアリーをさらったのも・・・全部、あの海鯨と言う奴に言われてやったんだろう？金目当てに・・・それなら関係ないよ！俺たちは了解済みだ！もし、お前が裏切ったのならそのときはそのときだ！俺たちがなんとかするさ！じゃ、俺の質問に答えてくれ！」

シャーク「・・・ふっ！面白い奴だな！俺の専門・・・職業でいいのか？科学者だ！」

ドラ「科学者？」

シャーク「ああ、そうだ！」

ドラ「じゃ、お前は水龍海賊団の科学者に決定だ！！」

シヨット「おい！お前！科学者なのか？」

シャーク「ああ、そうだ！」

シヨット「じゃ、射程距離の長い砲台を開発してくれ！」

レーツ「じゃ、俺の頼み事も聞いてくれ！盗み食いする奴を捕まえる物を開発してくれ！対能力者用に！」

シャーク「おいおい、注文が多すぎだ！良いけど、時間がかかるし・・・材料がない！」

シヨット「そんなあゝ！」

フェアリー「材料ならたくさんあるわ！」

シャーク「どこに？」

フェアリー「これから行く島に！」

ドラ「次はどこだ？」

フェアリー「次の島は、始まりと終わりの町　ローグタウンよ！」

ドラ「海賊王が生まれて、処刑された町か？」

フェアリー「ええ、そうよ！そこで材料を調達すればいいわ！お金もたくさんあるし・・・」

シャーク「それなら上手くいきそうだ・・・」

フェアリー「みんなも知つての通り、ローグタウンを抜ければ”赤レッドライン”に着くわ！そこから”偉大なる航路”に入るわ！」

ドラ「ついにか！！やっと、ジャッカル達のいる海に入るんだ！どんな冒険が待っているのかな？」

レーツ「とりあえず、まずはローグタウンで調達だ”偉大なる航路”グランドラインに向けての準備だな！」

フェアリー「あ！見えてきた！あれが始まりと終わりの町　ローグタウンよ！」

・ フライング・タイガー号はローグタウンに到着しようとしていた・

第25章 始まりと終わりの町 ローグタウンを目指せ（後書き）

長らくお待たせ致しました！

いよいよ、グランドラインに入ります！（まだ、先だけど・・・）

次回もお楽しみに！！

第26章 ローグタウンで資材調達

フライング・タイガー号はローグタウンの港に停留した。

ドラ「よし！行くか！」

レーツ「おい！ドラ！待て！」

レーツがドラが行こうとするのを止めた。

ドラ「何だよ？」

レーツ「くれぐれも俺たちが海賊だと言っことをしゃべるなよ！出航に支障がでるからな！」

ドラ「分かっているって！」

シャーク「それじゃ、船番でも決めるか？」

シヨット「船番なら、ベルがやるよ！な？」

ベル「グワッ！」

任せると言わんばかりに叫んだ。

ドラ「じゃ、ベル！船番は任せたぞ！じゃ、各自必要な資材を調達しろよ！」

ドラは真っ先に船を飛び出した。

レーツ「俺は、食材を買ってくるか！」

レーツはドラの後を追うようにして船から飛び降りた。

ホークスも一緒についてって行った。

シャーク「お前らのリクエスト通りのを作る素材を集めるか！」

シャークも船を飛び出した。

フェアリー「情報収集かな？行ってくるね！」

フェアリーも飛び出した。

ショット「俺は、特に買う物は……」

ショットは船を見渡した。

ショット「そうだな……何があっても良いように……修復用の板と……砲弾だな……よしっ！行ってくるか！」

ショットはベルに行ってくるねと言い船を出た。

ローグタウン東側ー

レーツ「ここは新鮮な魚を売っているのか……」

レーツとホークスはローグタウン東側の魚市場に来ていた。

レーツ「どれも良さそうだな・・・」

レーツはいろいろと見ていった。

ふと、目に止まる魚が目に入った。

レーツ「これは・・・ここらじゃ見たことの無い魚だな・・・」

魚屋の主人「おっ！あんちゃん！お目が高いね！そいつは、サウスフル南の海
の高級魚だよ！ここらじゃ、珍しい一品だよ！」

レーツ「サウスフル南の海の魚がこんな所にいるのか？」

魚屋の主人「ごくまれに流れてくるんだよ！大嵐の次の日などな！」

レーツ「へえ！おやじ！こいつをくれないか！あと、そのほかの生
きの良い奴を何匹か！」

魚屋の主人「へい！まいど！！」

レーツは魚を主人から受け取った。

レーツ「結構な量だな・・・」

レーツは船へと向かった。

ーローグタウン西側ー

シャーク「おっさん！あれとこれとそれとあと・・・」

ガラクタ屋の主人「まいど！でも、兄ちゃん、こんなに何に使うんだい？」

シャーク「なあくにちよつとした工作さ！」

ガラクタ屋の主人「そうかい！」

シャーク「これだけあれば足りるな・・・」

ガラクタ屋の主人「なあ、兄ちゃん・・・もしかして海賊かい？」

シャーク「え！？何言っているんだよ！」

シャークは突然の質問に戸惑った。

ガラクタ屋の主人「なあくに安心せい！海軍には言わんからな！でも、気をつけるこつたな！ここの海軍支部は海賊を見つけたら、この町から逃さないからな！」

シャーク「そうか！ご忠告、ありがとう！大丈夫だ！」

ガラクタ屋の主人「そうかい！気をつけるこつた！」

シャークはガラクタ屋を後にした。

シャーク（なんだ、あのじいさん・・・何者だ？なんで俺の正体が・

・・只者じゃなさそうだな

シャークは考え事をしながら、船に向かった。

シャーク（どっかで見たことあるんだけどな・・・）

ーローグタウン中央ー

ドラ「ほおーここが海賊王が処刑された場所か・・・」

ドラは、処刑台の前に来ていた。

ドラ「そして、この町で海賊王が生まれたんだ！」

ドラは辺りを見渡した。

ドラ「もう少し、近くに行ってみよう！」

ドラは掛けだした。

ドラ「近くに行くほど、でっかいなあー！」

ドラは処刑台の目の前にきた。

ドラ「よし！登ってみよう！・・・あれ？」

ドラは登ろうとしたが、処刑台の周りにはロープが張ってあった。

ドラ「なんだよ！入れないのか・・・まっ！いいか！処刑台でも見れたしな！このまま、”^{グランドライン}偉大なる航路”へ行こう！！」

ドラは、処刑台のもう一度見上げ、その場を去った。

ー海軍支部ー

海兵「間違いありません！」

??「本当か？」

海兵「ええ！懸賞金3千5千万ベリー 『水龍のドラ』です！あと、その一味も一緒です！」

??「クツクツクツクツ・・・この前の借りをキッチリと返させて貰うぞ！」

海兵「どうしましょう？」

??「しばらく、様子を見るか！各部隊に伝える！なにか動きがあったらすぐに知らせろ！奴らの船を張っておけ！」

海兵「はっ！」

海兵は部屋を出て行った。

??「今度は逃がさないぞ！」

シューシューとガスが洩れる音がした。

第26章 ローグタウンで資材調達（後書き）

今回はのんびりと資材調達でした！

次回はまた海軍に追われます！（予定）

楽しみに！！

第27章 海軍の手から逃げる！

シヨット「これで、後はドラだけか・・・」

レーツ「早めに出た方が良いな！俺たちの存在がばれ掛かっている・
・」

シャーク「とりあえず、俺は作業に掛かるからな！」

シャークは砲弾室に向かった。

ホークス「クワアアア！」

レーツ「ホークス！どうした？」

ホークスはレーツの肩に止まり・・・

レーツ「なにっ！本当か！・・・早めに出航した方がいいな・・・」

シヨット「どうした？」

レーツ「どうやら、海軍がこの船を見張っていやがる・・・」

全員「なっ！」

フェアリー「どうやら、バレるのが早かったわね！」

シヨット「どうする？雪でも降らせて視界を悪くするか？」

レーツ「そうだな・・・ドラが戻ってきてからだな・・・おっ！戻ってきた！」

ドラは甲板へと上がってきた。

ドラ「どうしたんだ？みんな？真剣な顔をして・・・」

レーツ「海軍にばれた！すぐにでも出航するぞ！」

ドラ「そうか！」

シヨット「んじゃ、吹雪にするぜ！暖かいコートでも着ているんだな！吹雪ブリザード！！」

粉雪が舞ったかと思うと激しい雪が吹き付けた。

前が見えないほどの吹雪になった。

ドラ「よし！出航だ！」

ー岩陰ー

海兵「こちら、第2部隊！突然、吹雪が！！前が見えません！」

支部『何を言っている！雪など降っていないぞ！』

海兵「で、でも雪が・・・奴らの船が雪で見えません！」

支部『分かった！すぐに援軍を送る！それまで・・・』

海兵「奴らの船が動きしました！かすかながら灯台の方へ向かってるように思われます！」

支部『分かった！すぐに向かう！』

ーフライング・タイガー号ー

ドラ「で！どうするんだ？」

フェアリー「とりあえず！これから、グランドライン”偉大なる航路”に入るんだけど・・・」

ドラ「いよいよか！」

フェアリー「その前に”レッドライン赤い大陸”を目指さなくてはいけないの！恐らく！あっちの方向よ！」

フェアリーは灯台の光の方を指さした。

ドラ「よし！行こう！面舵いっぱい！」

船を灯台の方へと向けた。

ピュー・・・ダーン！！

船のわきで水しぶきが上がった。

ドラ「うわっ！なんだ！？」

シヨット「ちっ！海軍だ！もうきやがった！」

ドラ「よし！シヨット！吹雪をあいづらの方へ向けてくれ！」

シヨット「了解！」

ドラ「よし！その間に全速前進だ！！」

シャーク「おう！い！できたぞ！最高の大砲が！！飛距離はなんと500m！」

シヨット「サンキュー！！それを後ろに運んでくれ！」

シャーク「分かった！」

シャークは大砲を運んできた。

シヨット「よし！これで反撃だ！まずは普通の砲弾で試すか！」

シヨットは砲弾を詰め、火を放った。

ダーン！

海軍の軍艦目指して砲弾が飛んだ。

シヨット「この位置なら確実に本体に喰らうはずだ！」

ドガンー！！

ショットの予想通り軍艦のど真ん中に命中した。

ショット「これで追ってこられないだろ！」

ドラ「おゝい！！アレじゃないか！」

ドラが前の方から叫んだ。

レーツ「どうした？」

ドラ「ほら！あれが”赤い大陸”^{レッドライン}じゃない？」

フェアリー「思ったより早かったわね！あれよ！でも・・・どうしてもあの大陸に向かっているの！」

ショット「でも入り口は見えないぞ！」

フェアリー「そうじゃないの！山を登っているの！」

全員「山？」

フェアリー「ええ！確かに運河が山を登っているの！」

レーツ「マジか・・・山を船で登るなんて聞いたこと無いぞ！」

フェアリー「でも、分かったことがあるわ！」

ドラ「え？なにが？」

フェアリー「グランドライン偉大なる航路”に入る前に半数以上の船が入る前に沈没しているわ!”

ショット「なっ!!その間に何が起こるんだ!?”

ショットは一人、唸っていた・・・

ドラ「おうゝい!入り口が見えたぞ!本当に山を登っているぜ!”

レーツ「本当だ・・・”

フェアリー「そうか!恐らく、この風と海流の勢いがすごく、その力で登っているんだわ!”

ドラ「よし!海軍を追い払ったことだし・・・行くぞ!”グランドライン偉大なる航路”へ!”

全員「おおおおおおお!!”

フライング・タイガー号は運河へと入り、山を登った。

ドラ（ジャッカル、やっときたぜ!ジャッカル達のいる海へ!!待ってろよ!）

第27章 海軍の手から逃げる！（後書き）

ついに、グランドラインへ！

次回は新章へ！

と、その前におまけです！

お楽しみに！

第28章 新しいことをやるにはそれなりの覚悟が必要だ

ドラ「はい、と言うわけで次回から新章に入るので急遽、集まって貰いました！」

レーツ「フライング・タイガー号の食堂を使ってお送りしまぁ〜す！」

シヨット「なに、今日はずっとこんな感じでやるの？」

ドラ「ああ、そうだ！だって、銀。だってこついつのやるじゃん・・」

シヨット「そう言う問題じゃねえ〜よ！今回は新章だと思ってくれている読者もいるんだぞ！」

ドラ「細かいことは気にするなよ！」

シヨット「いや、気にするよ！」

レーツ「だいたい、今日のタイトルは何だよ？なに、『新しいことをやるにはそれなりの覚悟が必要だ』って・・何の話だよ！」

ドラ「いいじゃん！銀。みたいでさぁ〜！たまにはやってみたかったんだよね！」

シヨット「つう〜か銀。ネタから離れる！どんだけこだわっているんだよ！」

ドラ「銀。はいいよ！ボケとツツコミが満載じゃないか！」

シヨット「もういいよ！元的话题に戻せよ！だいたい、他のメンバーはどうしんだ？」

ドラ「今日は休暇を取って貰いました！」

シヨット「はっ？じゃ、なんで俺たちはいるんだよ！」

ドラ「え？暇そうじゃん！」

シヨット「お前が暇そうなんだろう！」

レーツ「始まってすでもうグダグダになってきてるし・・・」

ドラ「じゃ、話を元に戻して・・・次回から新章なんだけど・・・どうします？」

シヨット「つて、決めてなかったのか！？」

ドラ「ほら、制作者も忙しいんだよ！締切まで間に合わないとか・・・」

シヨット「そんなのあるわけ無いだろう！なんで、この小説に締切があるんだよ！」

ドラ「ちっ！ばれたか・・・」

シヨット「ばれたかじゃねえ！何でお前が作者の代弁になっているんだよ！」

ドラ「これには深いわけが・・・」

シヨット「ねえよ!」

レーツ「で、どうするんだ?この3人で・・・?」

ドラ「そもそも3人じゃ決めることもできねえよ!3人寄れば文殊の知恵とか言うけどさ・・・この3人じゃ無理無理!」

シヨット「まさか、そのことわざだけでオレらを集めたの?」

ドラ「まあ、それもあるけど・・・銀。だって3人じゃね?」

シヨット「そのネタから離れる!」

ドラ「あゝもうやめやめ!はい、じゃ今日のONEPIECE

Another World はこれで終わりです!また次回もお楽しみに!!」

シヨット「まてまて!まだ終了できる時間じゃねえよ!」

ドラ「え?そうなの?」

レーツ「だいたい、今日は何のために集まったんだよ?」

ショット「そうだよ！まだ、何も決まっていけないじゃん！」

ドラ「それじゃ、どうする？ここはやっぱり・・・」

ショット「やっぱり・・・？」

レーツ「やっぱり・・・？」

ドラ「・・・」

ショット「・・・」

レーツ「・・・」

ドラ「・・・ゆっくり行くか？」

ショット「そう言う意味だよ！！！！」

ドラ「ほら、あんまり急ぎすぎるとアニメが原作に追いついてしま
うだろうー！」

ショット「これ、アニメじゃねえよ！」

レーツ「いや、一理あるが・・・それはまだ先の話ではないか？」

ドラ「じゃ、普通に行く？それとも・・・」

ショット「またグダグダに・・・どうするの？」

ドラ「よし！もうアレしかねえ！」

ショット「なんだよ！あるんだったら最初から言えよ！」

ドラ「だって先に言っちゃたら、すぐに終わって面白くないだろう」

レーツ「なるほどそれを考えてワザとグダグダにしたのか・・・」

ショット「いや、こいつに限ってそれはないだろう・・・」

ドラ「よぉくし、言うぞ！！よぉく聞け！俺が船長だ！」

ショット・レーツ「ガクッ！」

ショットとレーツは派手にズッコケた。

ショット「いや、それは誰でも知っているからね！まじめにやれよ」

ドラ「いや、普通はここはボケをかまして・・・」

ショット「かまさなくていいよ！早くやれよ！」

ドラ「よぉく聞け！・・・その最終手段とは・・・」

ショット「最終手段とは・・・？」

レーツ「最終手段とは・・・？」

ドラ「・・・」

ショット「・・・」

レーツ「・・・」

ドラ「あとは・・・作者！よろしく！」

ショット・レーツ「ガクッ！」

ショット「結局、作者に任せたあゝゝゝ！！！」

レーツ「あいつらしい答えだな・・・」

ショット「いや、そこは誉めている場合じゃねえゝよ！て言うか今日、集まって意味あるの？」

ドラ「今日、集まった意味はな・・・新章入る前に緊張を解こう！っていう会なの！わかった？特に君たち二人が力みすぎているなあゝってことでこの場をもうけたわけ！分かった？」

ショット「なるほどゝ！さすがは船長だな！じゃ、良いところまで来たので終わりにするか？」

レーツ「そうだな・・・最後は船長が閉めるよ！」

ドラ「はい、と言うわけで次回から新章に突入です！！新しい仲間が増えるのか？新たな強敵ライバルに出会うのか？楽しい冒険の始まりです！！お楽しみに！！では新章でお会いしましょう！！！」

「ショット・レーツ」バイバァーイ!!」

第28章 新しいことをやるにはそれなりの覚悟が必要だ（後書き）

ドラ（ふう〜思いつきでやったのをばれずにすんだな・・・あいつらをだますなんて余裕よ！とりあえず、またやるときは慎重にやらんとな・・・ていうかそんな理由で集めるわけ無いじゃん！単に俺が暇だから集めたんだよ！今日、休暇に設定するんじゃないかった・・・）

とまあ、こんな感じでやってみました・・・

新章をお楽しみに！！

第29章 常識の通じない海 それがグランドライン（前書き）

グランドライン
―偉大なる航路上のとある島―

海賊「なっ！なんで貴様がここに！」

??「お前らには用はない！幹部はどこだ！！」

海賊「ク、クロ帽子が来やがった！」

ジャック「ちよつとした土産を持ってきた！」

海賊「頭ぐ！！大変です！クロ帽子が来ました！」

幹部達はのんきに宴でもやっていた。

??「ほおぐクロ帽子とはとんだ珍客だな！」

ジャック「なにを言っている！戦友に向かって！なあ？ジャッカル？」

ジャッカル「ハッハッハッハッハッ！今日は何のようだ？面白いことでもあったのか？お前は政府の使いで東の海イーストブルーに行っていたのではないか？帰りがちと早いな？」

ジャック「なあぐイーストブルーに東の海で面白い男にあつてなあぐ！船長と同じこと言っている奴がな！この男だ！どうやら賞金首になったみたいでなあぐ！」

ジャックは懷から一枚の手配書を出した。

ジャッカル「ほぉーあいつが・・・ドラがきたか？」

ジャック「恐らく、今頃は”グランドライン偉大なる航路”に入つた頃ではないかな？」

ジャッカル「ハッハッハッハッハッハッ！おゝい！お前ら！宴だ！酒、持つてこゝい！どうだ？お前も飲んでいけよ！」

パーキンス「何言つてるんすか？あんた、二日酔いで機嫌悪いじゃないですか？余計に機嫌が悪くなるぜ！」

ジャッカル「ハッハッハッハッハッハッ！そうだっけ？まあいい、これとこれとは別だあああ！」

この島では日没まで騒ぎ声は沈まなかつたそうだ・・・

第29章 常識の通じない海 それがグランドライン

ドラ「ついに！！」グランドライン偉大なる航路”に入ったああああ！！！”

船は山を下って、海へと入った。

ドラ「で、どうするんだ？」

フェアリー「ええ」とたしか・・・この近くにグランドラインについて教えてくれる所があるらしいんだけど・・・」

ドラ「あれじゃね？あそこの島みたいな所！家があるぜ！」

レーツ「おいおい・・・本当か？もしかしたら・・・あの家の中にはたくさんの海軍が居たりして・・・」

シヨット「さすがにそれは無いんじゃない？」

ドラ「とりあえず・・・行ってみよう！！！」

船を島へと進路を変えた。

シヨット「て言うかさあ・・・なんで」グランドライン偉大なる航路”について知っていて、海を渡らないんだ？」

レーツ「そいつはそうだな・・・そんな人いないんじゃないの？」

フェアリー「でも・・・聞かないよりはマシでしょ！当たって砕ける、よ！」

ドラ「じゃ、聞くか？すいませ〜ん！誰か居ますか？？」

シヨット「早速、行きやがった！・・・でも船の上からでつかい声出すなよ！」

ドラ「あり？居ないのかな・・・？」

??「なんじゃ、うるさい奴らじゃな！」

家の中から一人の老人が出てきた。

レーツ「だ、だれだ？てめえ〜は??？」

??「おいおい、人に物を尋ねるときは自分から言うのが礼儀じゃろ？」

レーツ「ああ〜そうだった、すまなかったな！俺は・・・」

??「分かれば良いのじゃ！ワシはレック・・・この灯台の管理人じゃー！」

シヨット「つて、この人、さつきは良いこと言っておきながら自分から先に言っちゃったよ！」

レック「フオッフオッフオッフオッフオッフ！そう警戒なさんな！武器でも出すとケガするぞ！」

レーツ「へえ〜誰がケガするんだ・・・？」

レーク「フオツフオツフオツフオツ！・・・ワシじゃ！」

レーツ「てめえ〜かよー！！なんだよ、あのじいさん！むかつく！！俺が根性をたたき直そうか・・・」

シヨット「まあまあ、落ちついて！」

レーク「とりあえず、立ち話もなんだし、ほれ、島に上がってこい！」

一同は少しためらった・・・

レーツ「おいおい、やけに気前が良いじゃないか・・・なにか裏でも・・・」

シヨット「まさか・・・地雷でも埋まっているって言うのか？」

ドラ（おい！みんな！あのじいさんは大丈夫だ！）

レーツ（なんでそう言いきれるんだよ！？）

ドラ（オレのカンだ！）

シヨット（カンかよ・・・）

レーク「おう〜い！どうした？早くこんか？なあ〜に安心せい！地雷など埋まってないわい！」

シヨット（聞こえてたよ〜！！このじいさん！なんかすんません・・・）

ドラ「よし！行こう！」

ドラは先陣を切って船を飛び出した。

ショット「ためらっていても仕方がねえ」

続いてドンドン飛び出した。

レーク「で、ワシに何か用かいの？」

ドラ「あ！そうそう、俺たちグランドラインについて聞きたいんだけどよろしいさんなんか知っているか？」

レーク「そうかそうか・・・グランドラインについてか・・・何も言えることはないのお」

ドラ「そんなあああ！！！」

ドラはガツカリとした様子を見せた。

レーク「だが、これだけは言える・・・この海では常識など通用せん・・・」

フェアリー「ど、どういうこと？」

レーク「お前さん方が今まで生きてきたなかでの常識は全て通用せんのじゃ！例えば、季節によっての別々の島がある。春島、夏島、

秋島、冬島じゃ！そしてたまに季節が変わる・・・天候もしょっちゅう変わる・・・」

フェアリー「それくらいは大丈夫じゃない・・・」

レーク「まだもう一つある・・・お主、方位磁針は持っておるか？」

フェアリー「ええ！ここに・・・」

レーク「そいつを見てみる！」

フェアリー「ただの方位磁針じゃ・・・えっ？」

その方位磁針を見るとグルグル回っていた、まるで壊れてしまったかのように・・・

フェアリー「ど、どういうこと・・・」

レーク「この”^{グランドライン}偉大なる航路”の島々はみな磁気を持っておる、それも強烈な奴を・・・普通の方位磁針じゃ意味がない・・・」

フェアリー「じゃ、どうすれば・・・」

レーク「そう、この海は普通の航海術は通用せんのだよ！お主、それでも行くか？」

フェアリー「ねえ？聞いていた？どうすれば・・・もちろん行くわ！」

レーク「そうか・・・ではこれを・・・」

レークは球体を渡した。

フェアリー「これは・・・？」

球体の中には磁針が入っていた。

レーク「これは記録^{ログ}磁針と言ってな・・・島々の放つ磁気を指すのじゃ、このグランドラインには幾つもの島がある・・・その中の一つの島を指すのじゃ！そして島に着いたら記録^{ログ}を貯めるのじゃ！記録^{ログ}は次の島を指し示すためのものじゃ！記録^{ログ}は島によってたまる時間が違う・・・1時間だったり、1日だったり、1週間だったり、1年じったり、まちまちじゃ！」

フェアリー「じゃ、それを目印に航海をしろと・・・？」

レーク「そうじゃ・・・そして最初の島に行くためにここに永久磁^{エターナルボ}針^{ーリス}がある。これはその名の通り、ずっと、一つの島を指しているのじゃ！この中から一つを選んで自分達の行く道を選ぶのじゃ！」

ドラ達の前には5つの永久磁針^{エターナルボリス}があった。

砂時計のような形になっている。

そこには島の名前が刻んであった。

フェアリー「で、どうするの？船長さん？」

ドラ「そうだなあ・・・」

ドラはいろいろと見比べていた。

ショット「エターナルボース永久磁針はどれも一緒だぞ！」

ドラ「そうだなあゝ・・・」

じつと見つめてそして・・・

ドラ「よし！決めた！！これだ！！」

ドラは一つのエターナルボース永久磁針を手にとった。

第29章 常識の通じない海 それがグランドライン（後書き）

新章の始まりです！！

ドラの選んだ島とは・・・

ドラ達の冒険が今始まるうとします！！

次回もお楽しみに！！

*この小説に対しての意見・感想・質問をどしどし送って下さい！！
キャラクターへの質問もありです！！

第30章 船は急には止まらない！

ドラ「最初の島はここだ！！」

ドラは一つの永久指針エターナルポースを手にした。

そこには、『スノーアイランド』と書いてあった。

レック「この島はその名の通り冬島でスキーが盛んな島じゃ！」

シヨット「へえそれは良いねえ！」

ドラ「よし！スノーアイランド目指して行くぞー！！」

全員「オオオオオオオ！！」

ドラ「じいさん！いろいろとありがとう！」

レック「なあくに良いってことよ！それよりこれからこれまで以上に過酷な旅が待っているだろうがくじけずに進めよ！」

ドラ「ああ！」

一同は船に乗り込んだ。

ドラ「じいさん！本当にありがとう！」

レック「ああ！気いゝ付けて行けえー！！水龍！」

ドラ「え？じいさん・・・知っているのか？」

レック「合ったり前じゃ！お前さんは賞金首じゃろうが！」

ドラ「あ！そつか！じゃあゝな！！」

レック「行つてこい！！」

フライング・タイガー号は最初の島、『スノーアイランド』を目指して出航した。

レック（そして、世界を見てくるのだ！ドラ君・・・）

ドラ「よし！行くぞ！！」

レーツ「相変わらず賑やかだな・・・」

甲板ではドラ、ショット、ベルと騒いでいた。

シャーク「おうゝい・・・おっ！もう出航かあゝ！それより、レーツ頼まれていた奴できたぞ」

レーツ「本当か？今行く！」

レーツはシャークと一緒に食堂へ向かった。

フェアリー「風良し！方向良し！今のところは問題なさそうね・・・」

辺りは良い風が吹いていた。

良い出航日和だ。

暫くして・・・

フェアリー「・・・あああああああ！！」

突然、フェアリーが大声を上げた。

ドラ「ん？どうした？フェアリー？」

フェアリー「い、急いで！！」

ドラ「どうした？」

フェアリー「少し、目を離れた隙に進路が・・・すぐに、船を逆方向に向けて！！」

ドラ「なに、言っているんだ？さっきと変わっていないじゃないかよ！！」

ショット「それに、船は急には止まらない！！」

フェアリー「そんなのんきなこと言っている場合じゃ無いの！！急いで！！進路を反対側に変えて！！」

ドラ「はいようー！」

ドラとショットはマストを畳みに、マストを登っていった。

フェアリー「レーツー！」

レーツ「なんだ？」

フェアリー「すぐに進路を反対方向に向けてー！」

レーツ「了解ー！何かに掴まっているー！」

レーツは走って舵の所まで行った。

ドラ「おおーいー！マストは畳んだぞー！ー！」

レーツ「OKー！方向は6時ー！船を反転させるぞー！ー！」

レーツは思いっきり舵をきった。

ギギイイイ

船が傾く音がした。

ドラ「うっほおおおおー！」

ショット「うわああああー！」

ドラとショットは振り落とされないように、マストに掴まっていた。

ギギイイイイイ

船のきしむ音がまた響いた。

レーツ「フェアリーちゃん！こんな感じ〜？」

フェアリー「うん！こんな感じで良いわ！ふう〜」

フェアリーはため息の安堵がもれた。

ドラ「これで進路は良いんだな？」

フェアリー「ええ！大丈夫よ！」

ショット「さすがはグランドライン！気を緩めちゃいけないなあ〜」

レーツ「って・・・お前らが一番、気を緩めていたんじゃないか！
！」

ドラ「あれ？そうだったっけ？」

アハハハハハハハ

船に笑い声が響いた。

かくして水龍の一味は”グランドライン偉大なる航路”最初の島、『スノーアイランド』を目指して・・・

船を進めていく・・・

第30章 船は急には止まらない！（後書き）

最初に島にはまだ時間が掛かるのでは？

こんな調子で進めていきます・・・

次回もお楽しみに！！

第31章 バカは風邪を引かないって言うのは迷信だぁ！（前書き）

シヨット「ふわぁぁぁぁ」

シヨットは大きなあくびをした。

シヨット「見張りというのも面倒だな・・・それに眠いし・・・」

今日はシヨットの見張り当番だ。

空にはキレイな満月が昇っていた。

シヨット「いいよなぁ～みんな呑気に寝ていて・・・」

空は快晴だが、時折、肌寒い風が吹いてくる。

ヒュウウウウウ～

シヨット「サムツ！そろつと、『スノーアイランド』の氣候に入つたのかな？雪でも降りそうだぜ・・・ていうか俺、雪だから寒くねえ～よ！～」

夜はまだ長い・・・

第31章 バカは風邪を引かないって言うのは迷信だぁ！

翌朝・・・

??「ハ、ハ、ハ、ハックション!」

大きなクシャミが船の中に響いた。

レーツ「たくゝ寒いのにこんな格好で寝るからだぞ!ドラ!」

船室のベットにはドラが寝ていた。

顔を真っ赤にして・・・

レーツ「熱もくそ高いし・・・こりゃあゝ暫く、安静にしとけよ!」

シヨット「バカは風邪を引かないんじゃないか?」

ドラ「うゝうるへえゝ」

レーツ「なんか、食えるか?おかゆでも作るか?」

ドラ「たゝたぶん・・・」

レーツ「よし!シヨット!部屋出るぞ!すぐ作るからな!」

ガチャ

レーツとシヨットは部屋を出て行った。

フェアリー「様子は？」

レーツ「ありやあゝダメだ！熱で参つてやがる・・・薬もねえゝし・・・医者もいねえゝよ・・・」

シヨット「シャーク！お前は作れないのか？バ力を直すく・・・」

レーツ「アホか！」

ポカッ

すかさずレーツ殴った。

シヨット「イテッ！冗談だよ！風邪を直す薬・・・」

シャーク「いや、俺は医学にカンしては0歳児並だ・・・全く手がつかねえゝでも、バ力を直す奴なら頑張れば・・・」

レーツ「作らんくていい！！」

シャークのボケに突っ込んだ。

レーツ「あいつのことだ・・・一日寝れば直るだろう！心配すんな！」

シヨット「それまでは・・・俺が船長代理だ！！」

フェアリー「アンタじゃ無理よ！ここはレーツが良いわ！」

ショット「ええゝそんなあゝ」

レーツ「じゃ、俺があいつが直るまで船長代理だ!!」

ショット「で、お前はドラにおかゆを作るんじゃ無いんですか？船長代理さん！」

レーツ「お前・・・いじらしく言うなよ！とりあえず、騒ぐなよ！あいつの迷惑になるからな！」

レーツはそう言うと、キッチンへと向かった。

ショット「はあゝ天気も怪しくなつて来たしなあゝ」

フェアリー「そうね・・・そろつと雪・・・吹雪が来そう！みんな暖かい格好した方がいいわ！」

全員「了解!!」

一同はコートを着にそれぞれの部屋に行った。

ードラの寝ている船室―

ガチャ

入り口のドアが開いた。

レーツ「おうゝいドラ！起きているか？飯できたけど食べそうか？」

ドラ「ゴホッ！ああ、食いたい・・・」

レーツ「そうか、自分で食べそうか？おいとくぞー！」

ドラ「サンキュー」

レーツ「しっかり食って、しっかり寝て、早く直すんだぞ！」

ドラ「ああ・・・ワリイゝな・・・」

レーツ「なゝゝに良いってことよ！」

レーツはそう言つと部屋を出て行つた。

ドラは一人、レーツが持ってきた『特製おかゆ』を食べた。

ドラ「は、早く直さねえゝとな・・・」

ドラはおかゆを食べ終わるとベットに横になった。

そして、眠りについた。

ドラ「ZZZ・・・」

そして、夜になり、翌朝・・・

ドラ「な、直ったあああああ!!」

ドラの元気な声が船に響いた。

レーツ「良かったな！」

シヨット「お前が元気じゃないと変だぜ!この船のムードが・・・」

ドラ「みんな!迷惑掛けたな・・・これからまたやっていこう!!」

全員「オオオオオオオ!!」

フライング・タイガー号にはまたいつもの活気が戻り一同は『スノーアイランド』を目指すのであった。

第31章 バカは風邪を引かないって言うのは迷信だぁ！（後書き）

今回はドラの風邪が引いた編をお送りしました・・・

いやぁ～みんなやさしいですね！

次回もお楽しみに！！

第32章 雪のリゾート地 スノーアイランド

ドラ「最初の島に到着だ！！・・・ってサムツ！」

ドラは雪が降っているのに、相変わらずいつもの様に薄着をしていた。

ショット「当たり前だ！厚着をしておけ！また風邪を引くぞ！」

ここは”偉大なる航路”^{グランドライン}の最初の島の一つ・・・

スノーアイランド

フェアリー「それにしても・・・良い感じの所じゃない？」

レーツ「この島の記録はどれくらいで溜まるの？」^{ログ}

フェアリー「わからない・・・後で聞いてみるわ！」

ドラ「よし！！！」

ショット「待て！」

ドラが飛び出そうとしているのを引き留めた。

ドラ「何だよ？」

ショット「お前・・・絶対、遊ばうとしていただろう・・・？」

ドラ「え．．．え？．．．そんなわけ．．．無いじゃん．．．」

ドラは顔をそらして口笛を吹いていた。

しかし、ドラの顔には汗がびっしり流れていた。

シヨット「いゝやお前は遊ぼうとしている！まずは宿探しと．．．食料調達だからな！」

ドラ「へいへい．．．その後は？」

シヨット「何だっけしたって良い！」

一同はスノーアイランドの中心街へと向かった。

ー中心街ー

シヨット「へえゝさすがはリゾート地．．．賑やかじゃん！」

中心街は賑わっていた。

レーツ「それと．．．ドラ！分かっていると思うが．．．お前は賞金首なんだよ！目立つ行動は控えろよ！」

ドラ「へいへい．．．」

シャーク「ここなら良い研究材料が手に入りそうだ．．．」

一同は中心街の中心の広場に出た。

フェアリー「それじゃ・・・ここで一回解散とするね！待ち合わせ場所は中央の時計台ね？分かった？」

一同「へい！」

シャーク「修学旅行かよ！」

ショット「先生！！おやつはいくらまでですか？」

レート「ボケなくて良い！ちなみに500円までだ！」

シャーク「つか、おやつアリ？500円って太っ腹！」

レート「だろ？」

3人は方向がすれた話で盛り上がっていた。

後ろのものすごい殺気に気づかず・・・

フェアリー「アホかあああああ！！！」

バコッ

ショット「イテッ！！！」

レート「ッッ！！！」

シャーク「イタッ！」

ショット・レーツ・シャーク「何するんだよ!!」

フェアリー「アンタ達!!何しているの?恥ずかしいだろう!!」

ショット「え?何で?」

フェアリー「よく周りを見てみる!」

レーツ「え?」

通行人の視線がこちらに向いていた。

レーツ「あ・・・」

フェアリー「分かったら・・・静かにね!」

3人「はぁい・・・」

かくして一味はそれぞれの行動に移ったのであった・・・

第32章 雪のリゾート地 スノーアイランド（後書き）

遂に到着しました！！

今回は、いきなりトラブル発生！？

楽しみに！！

第33章 寒いところでは暖をとれ！（前書き）

― ”^{グランドライン}偉大なる航路” 上のある島―

?? 「いよいよ、この計画を実行するときが来た・・・」

手下 「そうですね！どこからでしょうか？」

?? 「そうだな・・・手始めに『スノーアイランド』から占領していくか・・・」

手下 「はっ！」

?? 「そうだな・・・あいつに向かわせる！」

手下 「あいつと言いますと？」

?? 「奴なら雪の地形を上手く利用できるからな・・・」

手下 「あの方ですね！了解しました！知らせて参ります！」

手下は部屋から出て行った。

?? 「国盗り合戦の開幕だな・・・」

謎の影の高笑いが部屋中・・・

いや、島中に響いた・・・

第33章 寒いところでは暖をとれ！

ドラ「各自やることをって言っていたけど・・・無いよなあ〜オレ・・・遊んじゃうか・・・？」

ドラは一人、中心街から港に出る通りを歩いていた。

ドラ「船で寝てるか・・・寒いし・・・」

ドラは船に行くことにした・・・

レーツ「ていうか・・・この前も食料調達しなかったかな・・・？」

レーツは商店街を歩いていた。

いつものように食料調達をしながら

レーツ「いや！確かにした！！4日前に・・・あの時は一週間分の食料を調達したつもりなんだけど・・・あのバカ船長がたった4日で無くなるとは・・・今度は一ヶ月分だな・・・金あるかな？」

レーツはブツブツ言いながら、買い物をしていった。

フェアリー「とりあえず・・・この先の航海に役立つ物が・・・海図か・・・」

フェアリーは航海士用の店にいた。

フェアリー「あいつらにもこの先のことも説明しないと・・・」

フェアリーはそう言ったがあることに気がついた。

フェアリー「あつ！・・・あいつらに説明して理解できるかな？一部を除いて・・・バカ野郎だらけだし・・・」

フェアリーは頭をかいた。

フェアリー「なんとか理解して貰わないと・・・そうだ！本屋に『サルでも分かる』^{グランドライン}偉大なる航路”の渡り方』とか『サルでも分かる航海術』とか『サルでも分かる』^{グランドライン}偉大なる航路”の説明』って言う本はないかな・・・？さすがに無かったりして・・・」

フェアリーは本屋へと向かった。

ー本屋ー

フェアリー「ええ」と、航海術のコーナーは・・・あそこか・・・」

フェアリーは航海術のコーナーに向かった。

フェアリー「無いとは思うけど・・・つてあつた！？」

なんとサルでも分かるシリーズがあつたのだ。

フェアリー「まずは」^{グランドライン}偉大なる航路”の渡り方か・・・」

フェアリーは『サルでも分かる』^{グランドライン}「偉大なる航路」の渡り方』を手
取った。

フェアリー「なんか・・・結構薄いんですけど・・・」

フェアリーは本の1Pを開いた。

フェアリー「ええゝなにになに・・・」まず、入り方について・・・
リヴアースマウンテンを登ります。そして流れに沿って下ります。
入ります。後は自分の運と感に頼って航海を進めて下さい！幸運を
祈ります！』ってそれだけかああああ！！なによ！幸運を祈りま
すって・・・ん？でも次のページは・・・『ここからはご覧のスポ
ンサーの提供でお送りします！・・・一旦CMです！』・・・って
何じゃこりやあああ！！」

フェアリー「ろくな物がないわ！次は・・・」サルでも分かる航海
術』つか・・・あんまり期待がでなさそう・・・」

フェアリーはその本を棚から手に取った。

フェアリー「ええゝと・・・」この本を読んでいる方・・・この本
は航海術に関してです・・・興味のない方にはオススメできません
・・・直ちに閉じて下さい！』つをそれらしいこと書いてある・・・
これなら期待できるかも・・・」

フェアリーは次のページをめくった。

フェアリー「『航海術は己の鍛錬一つで変わります・・・私が言え

るのはそれだけです。あとは自分を信じて・・・頑張りましょう！次のページからは航海術免許獲得試験のための予想問題です。頑張りましょう！』って何これ？航海術について書いてあるんじゃないの？・・・ん？なんか下に書いてある・・・『P・S・この本が航海術の説明だとだと思った人はバカです！ちゃんと読んで下さい！予想問題ってかいてあるよ（笑）』笑うなああああ！なんだよ！それ！最終的に人をおちよくっているじゃん！しかもよく見たら予想問題って書いてあるし・・・結局・・・本に頼るなっということか・・・はあゝゝ・・・」

フェアリーはトボトボと本屋を出て行った。

シャーク「オレ・・・着いていく船・・・間違えたかな・・・？」

シヨット「いや、間違えてないさ！どうして？」

シャーク「いや、あの船長で大丈夫かな？って思ってさ！暴れるなとは言われているけどさ・・・今までの様子だと守りそうもないな・・・」

シヨット「確かに・・・でも、あいつは自分なりに考えているんじゃないかな？」

シャーク「そおゝか・・・」

シヨット「たぶん・・・」

シャーク「そうだな！さつさと買う物、買っちゃおうぜ！」

ショット「おお！」

ショットとシャークは雑貨屋で買う物を決めていった・・・

雑貨屋を出た二人は大きな荷物を抱えていた。

ショット「さて、船に戻るか！この荷物を置かないとな・・・」

ドカーン！！

不意に港の方から大きな爆発音が聞こえた。

ショット・シャーク「！？」

ショット「まさか・・・」

シャーク「まさか・・・さすがにな・・・」

ショット「あのバカでもしないぜ・・・」

シャーク「と、とにかく急げえ！！」

二人はダッシュで港の船が止めてある所へ向かった。

ースノーアイランド港

ショット・シャーク「！？」

ショット「予想が的中だ！」

シャーク「なあ？ショット？」

ショット「なんだ？」

シャーク「オレ、乗る船間違えたみたいだ・・・」

ショット「・・・オレも今そう思った・・・」

二人の目の前にはドラVS謎集団を繰り広げていた・・・

第33章 寒いところでは暖をとれ！（後書き）

今回は買い物編をお送りしました・・・

次回は水龍海賊団VS謎の集団です！

楽しみに！

第34章 仏の顔も3度まで！って言っけど我慢なんかできやしない！

シヨット「派手にやっているなあ」

シャーク「そこ感心している場合？海軍が来ちまうぜ！」

ドラがこちらの存在に気づいた。

ドラ「お前ら！何やっているんだよ！手伝ってくれよ！倒しても、いつこうに減らないんだよぉ！」

シヨット「減らないって・・・お前・・・この人数を倒してもか・・・？」

シャーク「化け物だな・・・」

二人の目の前には、ボロボロになって山積みになっている人たちがいた。

それも結構な量だ・・・

それでもまだドラと対峙しているのはたくさんいる。

ドラ「頼むぜえ！」

シヨット「たぐっしょうがねえな・・・やるか・・・」

シャーク「ほどほどにしておけよ！海軍が来るかもな！」

ショット「来たら、返り討ちにしてやるぜ！」

二人はドラの闘っている中に飛び込んだ。

ドラ「水龍拳！！」

腕を水に変化させ、龍に変形させた。

そのまま、前へ、ぶっ飛ばした。

謎の集団「ぐはああああ！！」

派手に吹っ飛んで行く。

ショット「吹雪！^{フニザーデ}！」

雪が降っていたのが一気に吹雪に変わった。

ショット「ここの地はオレ様に適した気候だ！勝てないぜ・・・」

シャーク「シャッシャッシャッシャッ・・・さっき買った、名刀でも喰らわせてやる！」

シャークは懷から、刀を抜いた。

シャーク「『名刀 疾風桜』の威力とくと見よ！必殺 桜吹雪！」

シャークは自分のネムネムの実の能力を刀に通した。

疾風桜の刃はピンク色のオーラをまとった。

そのまま相手に斬りつけた。

これに斬られた奴は眠るように呻き声を上げずに事切れる。
刀を振り回したときにオーラがぶれるのでそれが桜の花びらが散っているように見えることからとった

（本人談より）

シヨット「中々やるじゃねえ〜か！雪の剣！」
スノーブレイド

シヨットは雪を集めて、一本の剣を作った。

シヨット「雪の銃！」
スノーピストル

今度は銃を作った。

片手に剣。

片手に銃を持って・・・

斬って、撃って、斬って、撃って・・・

これを繰り返していく。

暫くして・・・

ドラ「ふう〜だいぶ減ったな・・・」

シヨット「ああ・・・」

シャーク「はあはあ・・・」

シヨット「おい！シャーク？大丈夫か？結構息が切れているけど・・・？」

シャークは大丈夫だと言わんばかりに、待てと手を出した。

謎の集団「あの男、もうダメそうだぞ！一気に掛かれ！」

謎の集団はシャーク目掛けて、攻撃を仕掛けていった。

シヨット「マジかよ！助けに行かなくちゃ！」

シヨットが飛び出そうとしたとき、ガシッと肩を掴んでドラが止めた。

シヨット「何だよ！？あいつは疲れ切っているんだぞ！」

ドラ「大丈夫だ！それより、自分のことを心配した方が良い・・・来るぞ！」

残りの部隊がこちらに攻撃を仕掛けてきた。

謎の集団「一気に斬りかかれ！」

シャークに斬りかかろうとした。

シャーク「はあはあ・・・」

ズガン！

謎の集団「ど、どうだ・・・！？」

シャーク「バカ共・・・誰が疲れているって言った？」

謎の集団「なにっ！」

シャーク「オレなら倒せると思ったか？」

なんと、全ての攻撃を刀一本で受け止めていた。

シャーク「おりやあああああゝ！！」

シャークは力任せに押しのけた。

謎の集団「！？」

謎集団は後ろへと後退させられた。

謎集団「き、貴様・・・だましたな・・・」

シャーク「誰もだましていないさ！オレは、ただ、息継ぎをしていただけだ！『疲れた』とは一言も言っていないぞ！」

謎の集団「！　そう言うことか・・・」

シャーク「良いことを教えてやるつか！オレは狂言の天才だ！つまり、だまし屋だ！」

謎の集団「くっ・・・」

シャーク「あの世で、後悔するんだな！！必殺　桜吹雪！」

謎の集団「！？」

バタバタバタバタ・・・

シャークに斬りかかった奴らは、一瞬にしてやられた・・・

ドラ「ほらな！言っただろう！」

ショット「・・・なるほど・・・」

シャーク「こっちは片付いたぞ！」

ドラ「こっちも今終わったところだ！」

ショット「こいつらも山積みにしておこう！」

暫くして・・・

謎の集団が山積みになれたのが3つほどできた。

高さは、3メートルくらいのが・・・

ドラ「ふう～終わった・・・」

シヨット・シャーク「終わったじゃねえ〜!!」

ドラ「な、なんだよ!？」

シヨット「あれほど、暴れるな!って言われたろっが!」

ドラ「だって、あいつらがオレの昼寝の邪魔をするんだもん!」

シャーク「まあまあ・・・終わったことはしょうがないしさ!ドラ!これでも飲んでみなよ!」

ドラ「お!サンキュー」

とシャークが渡したのは、コーラとラムネだ・・・

シャーク「良いこと教えてやるか?コーラの中にラムネを入れて飲むと、力がわいてきて、体力も復活するんだぜ!」

ドラ「マジか!よし!早速、試してみよう!」

ドラがそう言っつて、コーラの中にラムネを入れた。

その瞬間、二人はドラから遠ざかった・・・

ブシューーーーー!!

コーラから、大噴火が起こった。

ドラ「どわあああああ!!!」

シャーク「シャツシャツシャツシャツシャツシャツ！」

シャークは大笑いをしている・・・

シヨット「アホだろう！だましのプロだとか言うことの奴の言葉を信用するか？まず、体力が復活つてまずねえだろう！」

ドラ「シャーク！！てめえ！！だましたな！！！！！」

ドラの顔はコーラまみれになっていた・・・

シャーク「バカだあ！！！！シャツシャツシャツシャツシャツシャツシャツ！！！」

まだ、大笑いしている・・・

ドラ「てめえ！！ぜってえ！！許さない！！水龍拳！！！」

シャーク「でも力がわいてくるだろう！」

ドラ「うるせえ！！！！確かにわいてくるわ！！こんなにされたんだからね！！！！コーラくせえ！！！」

ドガン！ドガン！

ドラ「おらあゝ待てえ！！！！！」

シャーク「待てと言って待つバカはいねえよ！！お前だけじゃねえか！！！」

ドラ「うるせえー！！^{ッイン}W水龍拳！！」

港で大暴れ・・・

シヨット「やれやれ・・・はあ」

シヨットはその様子を見てため息をついていた・・・

ドラ「待てええええ！！」

シャーク「やだよあ！！」

ドガンー！！ドガンー！！

第34章 仏の顔も3度まで！って言うけど我慢なんかできやしない！（後書き）

騒がしく、今回の章が終わりました・・・

謎の集団のことは次回、明らかにします！！

お楽しみに！！

ドラ「までえこらあ～～～！！」

シャーク「や～だよあ～～！！」

ドガン！！ドガン！！

ヤレヤレ・・・

第35章 真の黒幕登場！ その真の目的とは！？

シヨット「やっど・・・落ちついたか・・・」

ドラ「まだだ！！」

シヨット「おちつけえ〜！どっから敵が来るか分かんないんだぞ！」

シャーク「そうだそうだ！！」

シヨット「シャークも暫く黙っておけ！」

シャーク「ちえっ！」

港は穴だらけだ・・・

二人が追いかけてこをしたおかげで・・・

今にも海軍が乗り込んで来そうな勢いだ・・・

シヨット「どうするんだよ？」

ドラ「なんとかなる！」

シヨット「ならねえ〜よ！」

ドラ「もみ消す！」

シヨット「もう、消せねえ〜よ！」

シャーク「良い、言い訳を考えなくては・・・」

ショット「はい！そこお黙つとけ〜！」

ドラ「・・・！？」

ショット「どうした？ドラ？」

ドラ「ものすごい、力のある奴がこっちを見ている・・・」

ショット「なにっ！どこに？」

ドラ達は辺りをキョロキョロした。

ショット「いないんじゃないの！？」

ドラ「！あれだあああ！」

ドラは近く高台を指さした。

ショット「！」

シャーク「・・・！？マジかよ・・・」

ドラ「知っているのか？」

シャーク「知っているも何も・・・あいつは・・・」

??「皆さん・・・ご機嫌よう！今の戦いブリは見せて頂きまし

たよ!」

高台にいる男が話しかけてきた。

男は高台を高台から飛び降り、こちらにやってきた。

シャーク「・・・」

??「おや?これはこれは・・・珍しい人に会いましたな・・・シヤーク中将?」

シャーク「くっ!」

ドラ「なんで、海軍にいたことを知っているんだ?」

シャーク「知っているも何も・・・こいつは王下七武海の一角『百鬼夜行海賊団』の幹部だ!」

ドラ「!」

ショット「!」

ドラ「七武海・・・ってあのクロ帽子の奴みたいなの?」

シャーク「クロ帽子を知っているのか?まあ、そんなやつだ!」

??「さすが海軍中将・・・いや元と言った方が良いかな?」

シャーク「何で、てめえらがいやがる!」

ドラ「なあ？シャーク・・・こいつ、誰だ？」

シャーク「ああ、こいつは『百鬼夜行海賊団』幹部　化け猫のキャッツだ！」

キャッツ「こいつとは失礼ですね・・・あなたが七武海に誘ったのでしょうか・・・？」

シャーク「ああ、そうだよ！政府の命令でな！」

ドラ「へえ〜！」

シャーク「で、何のようだ？」

キャッツ「なあ〜に今日はこの島に強者がいないか見に来ただけですよ！ただの下見です・・・だが、今回は当たりのようだ・・・」

ショット「七武海は、海賊を取り締まる、海賊だろう？何で、こんな所に？」

キャッツ「さつきも言ったでしょう？下見だって！強者の海賊がいないか見に来たのですよ！本当はこのまま、この島を我が海賊団の島に加えようとしたいのですが・・・そうも行かないようですね？ルーキー海賊　『水龍のドラ』君？」

ドラ「！　へえ〜こんな所までオレが有名だとはな・・・」

キャッツ「君の噂はこの”グランドライン偉大なる航路”まで届いているよ！」

ドラ「へえ〜そうかい・・・」

キャッツ「今日は挨拶代わりだな・・・次会うときは容赦しないよ・・・それじゃ・・・」

キャッツの廻りにつむじ風が吹き始めた。

キャッツ「このことは我が船長^{キャプテン}にも伝えておくよ!」

そう言つとキャッツの周りには雪煙が舞い、視界が見えるようになったときにはキャッツの姿はもうどこにも無かつた。

ドラ「王下七武海か・・・」

シヨット「どうやら宣戦布告されたようだぞ・・・どうするんだ?」

シャーク「最悪だ・・・」

シヨット「どうした?」

シャーク「奴に目を付けられたが最後、その海賊とその一味は・・・」

シヨット「その一味は?」

シャーク「その一味は・・・全滅だ!」

シヨット「なあゝにいゝ!?」

ドラ「ところで、あいつらのボスの名前は?」

シャーク「元懸賞金1億3千万ベリー　百鬼夜行海賊団船長　『総
大将　ヒヤツキ』だ!」

シヨット「い、一億3千万!? ドラよりはるかに上じゃないか!」

ドラ「面白くなってきたあゝ!」

シヨット「面白くねえゝよ! むしろ、ヤバイよ!!-- どうするんだよ
おおおおお!!--」

シヨットのつめき声が当たりに響いた。

シヨット「いや、響いていないし!」

ドラ「シヨットはビシッとツツコミを入れた。」

シヨット「何で、ドラがナレーターやっているの? 黙れよ!」

ドラ「と、シヨットはおもむろに叫んだ。」

シヨット「叫んでねえゝよ!」

辺りは粉雪が舞っていた。「ドラ

シヨット「また、お前かよ!」

第35章 真の黒幕登場！ その真の目的とは！？（後書き）

黒幕の正体が明らかに！

彼らの目的とは！？

次回もお楽しみに！！

第36章 備えあれば憂いなし！（前書き）

ー???ー

??「お前か？早かつたな？首尾はどうだ？キャッツ？」

キャッツ「いえ、とんだ邪魔が入りました・・・あの、『スノーア
イランド』に今噂のルーキー海賊『水龍のドラ』がいました」

??「で、お前はむざむざ負けて引き返してきたのか？」

キャッツ「たつた、3人であの多人数を倒しました！ほんの数分で・
・・宣戦布告を仕掛けて参りました」

??「ほおゝあの人数をか・・・面白いな・・・」

キャッツ「あと、あの海賊団の中に元海軍中将シャークがおりまし
た」

??「なるほど・・・行方不明だと聞いていたが・・・そこにいた
か・・・」

キャッツ「次はどう致しましょうか？奴らの次に行く島は検討が着
いていますが・・・いかがなさいますよう？総大将？」

??「そうだな・・・」

??「総大将！ここは私目に行かせて下さい！」

奥にいた一人の男が話しかけてきた。

??「お前か・・・良いだろう！相手をしてこい！」

キャッツ「なっ！いえ、総大将！私が・・・」

??「お前にはまだ死なれては困るのでな・・・もう少し待っておれ！」

キャッツ「・・・はっ！」

??「では、行つて参ります！」

男はお辞儀すると、部屋を出て行つた。

その後を追いかけるようにしてキャッツも出て行つた。

??「良いのか？あいつに任せて？ヒヤッキ？」

奥から一人の男が現れた。

ヒヤッキ「・・・お前か、いつの間に・・・」

??「おれは、そういう奴だよ・・・」

ヒヤッキ「そうだったな・・・大丈夫だろう・・・任せて・・・」

??「まあ、君が言うなら・・・奴は恐らくヘマをすると思つよ！」

ヒヤッキ「そうか・・・お前には別の頼みたいことがあるんだが・・・」

・良いか？」

??「もちろんさ！で、なんだい？」

第36章 備えあれば憂いなし！

フェアリー「で、何！！ノコノコ帰らせちゃったわけ？倒さないで？」

ドラ「しょうがねえくだろう！勝手に消えちゃったんだし・・・」

フェアリー「どうするのよ！明日にでもまた敵が来るわよ！」

レーツ「で、この島の記録はどれくらいで貯まるんだい？」

フェアリー「1日・・・」

ショット「なら、明日にでも出航だ！こうしていらねえく！！」

シャーク「待て！奴らは俺たちが次に行く島を知っているぞ！」

全員「えっ！」

シャーク「この”グランドライン偉大なる航路”は何本かの航路に分かれているんだ！ある航路を選べばその航路の決まった島しか進めない・・・つまり、知っている奴は次どこに行くかを知っている。ましては七武海なら当然だ・・・」

ショット「じゃ、どうするんだよ！」

ドラ「アホか！んなもの最初から決まっているだろう！」

全員「えっ？」

ショット「ま、まさか・・・」

ドラ「真っ向からぶつかれば良いじゃん！」

全員「や、やっぱいいいいいい！！」

ドラ「じゃ、決まりだな！明日の早朝に出発だ！」

ショット「ま、待てよ・・・」

ドラ「船長命令な！」

レーツ「それなら、仕方ないな・・・船長命令は絶対だからな！」

シャーク「そうだな、決戦に備えて、準備をしなければ・・・」

ドラ「じゃ、明日の早朝出発で良いな？」

レーツ・シャーク「おお！」

ショット・フェアリー「はぁい・・・」

ドラ「じゃ、各自で準備を！明け方にはここに集合な？」

かくして、水龍の一味は次なる決戦に向けて、準備を進めるのであった・・・

次なる敵は、イーストブル東の海の奴らとは格が違うぞ！

彼らの運命はいかに！？

・
・
・
続く
・
・

第36章 備えあれば憂いなし！（後書き）

短くてすみません・・・

今日のネタはここでネタ切れです・・・

前書きが思った以上に長くなってしまいました・・・

本編が短くてすみません・・・

今回はもう少し長くしようと頑張ります！

そろつと新章にはいると思います！！

次回もお楽しみに！！

第37章 敵の総大将 ヒヤツキの秘密（前書き）

「????」

ヒヤツキ「どうした？」

??「伝令がきたよ！どうやら彼らが動き出したみたいだ・・・」

ヒヤツキ「そうか・・・分かった！お前は昨日、言ったとおりに頼む・・・」

??「分かっているよ！あと、例の島にあいつを向かわせたけど・・・たぶん、我慢できずに飛び出しちゃうよ！」

ヒヤツキ「そのときはそのときだ・・・」

??「それじゃ、行ってくるね！」

謎の男はヒヤツキの部屋から出て行った。

第37章 敵の総大将 ヒヤツキの秘密

ドラ「みんな！そろったか？」

ドラは船の甲板でそう叫ぶように聞いた。

全員「おお～～～～・・・」

一同の声には力が無かった。

ドラ「どうした？元気が無いじゃん！」

レーツ「ZZZ・・・」

レーツに至っては立ったまま寝ている。

ドラ「レーツ！立ったまま寝るな！！」

ショット「おいおい、勘弁してくれよ！こんな朝っぱらから大きな声出すなよ！こっちは眠いんだから・・・」

ドラ「フェアリー！記録^{ログ}は？」

フェアリー「OKよ！溜まったわ！次の島を指している！」

ドラ「次の島に敵が潜んでいるかもな！」

ショット「出るんだったらさっさと行こうぜ！」

ドラ「よぉ〜し！！出航だぁ〜〜〜！！」

フライング・タイガー号は次の島に向けてスノーアイランドの港を出港した。

ドラ「次の島はどんなだろうなぁ〜〜」

ドラは期待に胸を膨らませていた。

ドラの周りにはキラキラ光るオーラの様な物が出ていた。

シヨット「なんだ・・・？あいつ・・・」

その光景をシヨットが見てあきれていた。

シャーク「そうだ！今のうちに『百鬼夜行海賊団』について教えておくか・・・」

レーツ「そうだな参考までに聞いておこう！」

ドラ「なんだなんだ？？」

シャーク「『百鬼夜行海賊団』は船長一人 幹部が十数人 船員が数百人の規模の大きい海賊団だ。船長の『総大将 ヒヤッキ』はバケバケの実の能力者だ！」

シヨット「なんだ？バケバケの実って？」

シャーク「その能力はどんな物にも化けることができる。そして、化けた相手の能力まで使うことができる。」

シヨット「マジかつ！」

シャーク「ああ・・・世界政府が奴を危険視したのは数十年前だ！ちなみにあいつは南の海出身だ。サウスフルーその頃は、まだ『百鬼夜行海賊団』もそこまで大きくは無かった・・・」

レーツ「じゃ、何で大きくなったんだ？」

シャーク「実は最初はいっつは能力者じゃ無かったんだ！その幹部達に能力者が多くいた。本気をだせば船長をしのぐほど力を持つて奴もいた・・・」

シヨット「じゃ、なんで??」

シャーク「どうやってかは知らないが奴は悪魔の実を見つけ、それを食った」

シヨット「それからか・・・？奴らの勢力が大きくなったのは・・・」

シャーク「ああ、そうだ・・・奴は能力者になった途端に手近な島を次々に侵略していった・・・」

レーツ「マジかよ・・・海軍はどうしたんだよ？まあ、俺たちが言えるたちじゃないけどな・・・」

シャーク「当然、海軍も出動したぞ！でも敵わなかった・・・」

シヨット「マジかよ・・・」

シャーク「当然、世界政府もこれには無視をしていらなかった・
・そして、奴を七武海に入れるという話になった・・・・奴を敵にし
たら、政府でも敵わないと思ったのだろう・・・」

ドラ「それでお前が行ったのか？」

フェアリー「でも、何であなたが・・・？」

シャーク「それはだな・・・奴の侵略を阻止するために海軍を派遣
した。その指揮を執っていたのがオレなんだよ・・・その責任的な
奴かな・・・」

シヨット「マジかよ！」

シャーク「ああ、奴あつたときは一目で分かったね・・・七武海に
なっても政府の言うことはザラに聞かないなと・・・」

―数十年前―

とある沖合で二隻の船が睨み合いをしていた。

片方は海軍の戦艦でもう片方は海賊船だ。

シャーク「オレは海軍中将　シャークという者だ！今日は話があっ
てきた。」

ヒヤツキ「海軍がオレに何のようだ？まさか、自首しろとも？」

シャーク「まさか・・・お前に自首を勧めたところで素直に受け入れないだろう？」

ヒヤツキ「だろうな・・・じゃ、何のようだ？『海鮫のシャーク』中將？」

シャーク「珍しいな！最近じゃそうは誰も呼んでくれないな・・・まあいい本題に入ろう！単刀直入に言う！ヒヤツキ！お前を七武海に勧誘にきた！！」

ヒヤツキ「！？・・・オレが七武海か・・・？」

シャーク「ああそくだ！！政府からの推薦状もある！！」

シャークは懷から一枚の書類を出し、ヒヤツキに見せた。

ヒヤツキ「嘘じゃないみたいだな・・・」

シャーク「嘘だったら、こんな所までこないよ！」

ヒヤツキ「だろうな！これはオレを危険視していることか？」

シャーク「簡単に言えばそくだ！お前を敵にはしたくは無いいみたいだ！」

ヒヤツキ「なるほど・・・」

シャーク「君もさすがにバカでは無いはず・・・お前は数々の悪事をはたらいてきた本当のことならお前は死刑だ！だが、ここで七武海に入ればお前は海軍から追われることもない・・・どうだ？悪い話じゃないだろう？」

ヒヤツキ「だが、政府の言うことを聞かなければならない・・・」

シャーク「まあ、そうだな・・・でも、大抵の野郎は政府の招集には来ないぞ！きてもほんの数人だ」

ヒヤツキ「確かに悪い話じゃない・・・もしオレがここで断ったらどうする？」

シャーク「そのときは力ずくでもテメエを海底監獄インペルダウにぶち込むまでよ・・・」

ヒヤツキ「おおゝあそこはイヤだな・・・二度と太陽の光を浴びれなくなるぜ・・・」

シャーク「どうする？お前の返答次第でこの先の道が変わるぞ・・・どうする？」

ヒヤツキ「少し時間を貰おう・・・良いか？」

シャーク「良いぜ！」

ヒヤツキは幹部を引き連れて海賊船の奥に入ってしまった。

暫くして・・・

ヒヤツキ「待たせたな・・・」

シャーク「答えを聞こうか？」

ヒヤツキ「答えは・・・イエスだ！」

シャーク「その答えを聞いたかった。もしノーだったら後が大変でなあゝ」

ヒヤツキ「で、オレはどうすれば良いんだ？」

シャーク「あとで政府から『伝書バット』が来るだろう！それに詳しいことが書いてある・・・それと七武海入ったからには民間人には・・・」

ヒヤツキ「手を出すな！だろう？」

シャーク「ああ、そうだ・・・今度は聖地マリージョアで会おう！またな！」

シャークの戦艦はゆっくりと海賊船から離れ、元来た道に戻っていた。

シャーク「って言うわけだ・・・」

ドラ「でもさあゝお前の昔話を聞いて何になるんだ？」

シャーク「うつ！それは・・・だから奴のことについて・・・」

ドラ「て言うかさ！お前・・・お前とヒヤツキは好敵手ライバルだったって
言いたいのか？」

シャーク「ギクツ！」

シヨット「でも、今の話じゃそう言うことは良く分からないぞ・・・」

シャーク「いや・・・だから・・・それは・・・」

ドラ「よぉ～するに・・・お前は昔、めっちゃ活躍していたぞ！つ
てことを自慢したいだけかじゃないか！」

シャーク「ギクツ！」

フェアリー「ちょっとドラ！いくら何でも凶星なんだから少しは遠
慮なさいよ！」

ドラ（そうか・・・？本当のことを言っただけだけど・・・）

シヨット（おいおい・・・お前ら！声がでかすぎだぞ！聞こえちま
うぞー！）

レーツ（いや、もう聞こえているんじゃないか？ほらー！）

レーツが指を指すとその先にはシャークが絶望（？）までは行かな
いがいじけていた。

周りには黒いオーラが漂っていた・・・

ドラ「うわあああ！！シャーク！冗談だつて！冗談！本気にするなよ！」

ドラが必死にカバーしようとしてた・・・

第37章 敵の総大将 ヒヤツキの秘密（後書き）

少し過去を取り入れてみました・・・

どうでしょうか？

次回もお楽しみに！！

第38章 何事にも積極的に取り組み！

ドラ「はい、と言うわけで次回から新章に入るので急遽、集まって貰いました！」

レーツ「フライング・タイガー号の食堂を使ってお送りしまぁ〜す！」

シヨット「なに、今日はずっとこんな感じでやるの？」

ドラ「ああ、そうだ！だって、銀。だってこついつのやるじゃん・・」

シヨット「ていうか、この前も同じこと言わなかったか？しかも前とメンツ同じだし！」

ドラ「ああ、そくだよ！使い回しにしているんだよ！」

シヨット「何で使い回し？どんだけサボっているんだよ！」

ドラ「まあ、いろいろあるんだよ！」

シヨット「いろいろって何だよ！」

ドラ「まあ、要するに、この一年頑張ったね！って言うことを・・・」

シヨット「違ううううう！！まだ、連載開始してから数ヶ月しか経っていないよ！」

ショットは二人のアップーを食らい天井にぶつかり床に落ちた。

ショット「いててて・・・」

ドラ「おらおらおらおらおら!!」

レーツ「おらおらおらおら!!」

ショット「二人とも落ち着けええええ!!」

ドカドカバキバキグシュベチバキグフベシズガドカ

ショット「殴り合いの音が変になってる・・・」

ドカドカバキバキバブドキザシズシベシ・・・

・・・しばらくお待ち下さい・・・

ショット「やっと落ち着いたか・・・」

ドラ「よし! いい汗かいたし本題にでも入りますか!」

レーツ「そうだな!」

シヨット「次は百鬼夜行海賊団と全面对決編だな！」

ドラ「そうなんだけど・・・章タイトルがまだ決まっていないみたいだ・・・」

レーツ「で、この3人で決めるわけだ！」

ドラ「言うこと！」

シヨット「じゃ、ここは無難に『激闘！百鬼夜行海賊団編』は？」

ドラ「アホかああああああああああ！！！」

ドカッ！

シヨット「ぐはっ！」

またまたアッパーを入れた。

シヨット「くっ！中々良いパンチだったぜ・・・ってなにやらせんじゃあああなんで殴られるの？」

ドラ「イラッてきたから・・・友達二人でカードを買って自分はレアカードがでず、あいつがレアカードを出したときくらいにイラッときた！」

シヨット「なに、そのたとえ！？」

3人「うううん・・・決まらん！」

ドラ「じゃ、この際アレを使うしかないな！」

ショット「アレって?」

レーツ「まさか、アレを使うちまうのか!？」

シヨット「だから、アレって何だよ!？」

ドラ「うむ……と言うわけで、後は作者！頼むぞ！」

シヨット「作者に振ったあああああ！」

ドラ「じゃ、これで一件落着・・・」

[illegible]

ドラ「何だよ？まだやるのか？もう当所の約束は、もう果たしたぜ
シヨッサン！」

シヨット「誰だよ！シヨツサンって！」

ドラ「もう俺たちにできることはやり尽くしました。後は本人の意志が……」

「シヨット、重傷人を手術し終わった医者じゃねえええええ！」

レーツ「まあまあ、彼にも考えがあるんだよ！ ショッサン！」

「シヨットだから、シヨツサンって誰ええええ！」

レーツ「じゃ、締め言葉を言って終わりにしない？」

ドラ「そうだな！」

シヨット「ちゃんと良いこと言えよ！」

ドラ「まあ〜なんだ・・・このONE POECE Another Word を初めて見た方！まあ、居ないと思うけど・・・いつもこんな感じでえ〜〜す！」

シヨット「嘘つけええええ！！！」

レーツ「でもなんだかんだ言ってこんな感じじゃね？」

シヨット「明らかに違うよ！いつもはまじめにやっているよ！」

ドラ「おいおい！嘘言っちゃいかんよ！現実から逃げてはいけない！それを受け止める！」

シヨット「お前が一番、受け止めるおおお！！！」

ドラ「何言っているんだ？何事にも積極的に取り組まなきゃ始まらないぜ！」

シヨット「それ、今回のタイトル！」

ドラ「違う違う！何事も積極的に言わなきゃ始まらないぜ！」

シヨット「いや、そうじゃ無いんだけど・・・て言うか締めの言葉

をって言ってから10行経っているよ!」

ドラ「違う!正確には9行だ!」

ショット「何でそう言うことだけは細かいの!?」

ワーワーワーワーワーワー・・・

Ryota「騒がしいですが・・・いつもはまじめにやっていますよ!では次回から新章に突入です!お楽しみに!」

ドラ「ってあああ!!オレの台詞を!」

Ryota「君たちがうるさいからだろう!これじゃ苦情の電話やらコメントやらがたくさん・・・」

ドラ「来てたまるかああああ!」

第38章 何事にも積極的に取り組み！（後書き）

と言うわけで、次回から新章です！

お楽しみに！！

（ってさっきも言ったか・・・）

第39章 急なお客には気をつける！（前書き）

今日から新章突入です！！

第39章 急なお客には気をつける！

ドラ「ふわああああ〜」

ドラは大きなあくびをした。

シヨット「それにしても何も無いなあ〜！」

今日の天気は快晴。

レーツ「何もないのが一番だよ！」

ドラ「暇だあああ〜！」

レーツ「ドラ！暇だったら、夕食の魚でも釣ってこい！」

ドラ「えええ〜何でオレがあ〜？」

レーツ「よし！飯入らないんだな！」

ドラ「ああ〜嘘嘘！！冗談！是非やらせて頂きます！」

ドラは飛び起きると倉庫から釣り道具を取り出すと甲板に出て釣りを始めた。

シヨット「さてと、オレは弾薬庫の整理でもしてきますか！」

シヨットは弾薬庫へと向かった。

ドラ「おっ！掛かった！こいつは大物だああ！！」

ドラが勢いよく竿を引き上げた。

ドラ「・・・」

ドラが釣ったのは小さな魚だった。

シャーク「どこが大物なんだよ！！」

ドラ「うるせえ〜！今回はちょっと調子が悪いだけだ！！」

シャーク「ええ〜今回は？今回もだろう？」

ドラ「黙ってる〜！！」

レーツ「このまま何事もなく次の島に行きたいものだな・・・」

??「そうとお〜お暇な海賊さんたちですね？」

ドラ「！？」

レーツ「！？」

シャーク「！？」

フェアリー「！？」

ドラ「誰だっ！」

??「ここですよ!」

全員が見上げると船の船室の屋根に座っている男が居た。

??「皆さん・・・こんにちは!」

ドラ「お前は誰だ!?!」

??「私は・・・百鬼夜行海賊団 幹部を指せて貰っている、『怪鳥のウイング』といいます・・・」

レーツ「百鬼夜行海賊団だと!?!」

ウイング「ええ・・・今日はお知らせに来たんだ!」

ドラ「お知らせ?」

ウイング「うん!そうだよ!」

レーツ「なんだ・・・罨でも仕掛けようってか?」

ウイング「違う違う!君たちの次に行く島について教えようかと思っ
てね!」

ドラ「お前!知っているのか?」

ウイング「ああ・・・知っているよ・・・君たちが次に行く島には
僕たちの仲間がいるよ!」

レーツ「やっぱり・・・」

ウィング「そいつは少し厄介でねえ！一度暴れ出すと手が付けられなくなる奴なんだよ！まあ、せいぜい死なないように頑張つてね！」

ドラ「おい！何でそんなことを教えるんだ？敵である俺たちに！？」

ウィング「ん？何でかって・・・そりゃ面白くしたいからだよ！少しハンデがあつた方が面白いじゃん！」

レーツ「それだけか・・・？」

ウィング「うん！それだけだよ！僕は早く君たちと闘いたいんだけど・・・あつそうそう・・・次の島に居る奴だけど・・・あいつ・・・覇氣使いだから！頑張つてね！」

ドラ「なにっ！」

ウィング「あいつだけじゃない・・・僕たち幹部は全員覇氣使いだ！もつとも霸王色の覇氣は使える人は船長と僕だけだけだな！」

ドラ「お前も覇氣使いか・・・」

ウィング「そうさ！まあ、次にあつたときは容赦しないよ！あと、このことはうちの船長には内緒だからね！独断で来ているから！僕たち百鬼夜行海賊団 幹部が相手だからな！じゃね！」

そう言つとウィングは驚の姿になると空へと消えていった。

ドラ「なんだ！？あいつの能力・・・」

シャーク「奴は『トリトリの実 モデル：鳥』^{クロウ}だ！希少な悪魔の能力者だ！・・・奴は百鬼夜行海賊団の中でも一番船長に近い奴だ！」

レーツ「そんなやつが・・・どうしてこの船に・・・」

シャーク「分からん・・・ただ奴は気まぐれで面白いことが好きだ・・・まあ、次の島の敵が吉と出るか凶とでるかについては次第だな・・・」

フェアリー「言っているうちに見えたわ！アレよ！」

フェアリーが指を指す向こうには島が一つ見えた。

ドラ「あそこにつええ！奴が居るんだな・・・」

フライング・タイガー号は決戦の開始の島に向かった。

第39章 急なお客には気をつける！（後書き）

いよいよ次回から全面（？）対決の始まりです！

お楽しみに！！

シヨット「あれ？今日、オレ出番少なくて！？どついうこと！？」

いろいろあるんだよ！

シヨット「いろいろってなんだよおおおお！！次回こそは！！」

まあ、頑張つてね・・・

第40章 粘り強さは世界一！（前書き）

―名も無き無人島―

部下「頭！水龍海賊団の奴らがやってきました！」

??「なるほど・・・あいつの言ったとおりだ・・・」

部下「どう致します?」

??「全員に伝える！全軍で迎え撃てと！」

部下「はっ!!」

第40章 粘り強さは世界一！

レーツ「おっ！早速お出向かいだぞ！」

ドラ「レーツ！どうした？」

見張り台にいるレーツにドラが話しかけた。

レーツ「海岸を固めていやがる・・・やられる前にこっちから仕掛けるか？」

ドラ「いや・・・様子を見よう・・・」

シヨット「砲撃の準備はOKだ！！」

シャーク「どうやら・・・あの島は無人島らしいな・・・」

レーツ「だからあんなに堂々とできるのか・・・」

フライング・タイガー号は海岸へと近づいていった。

『アーアー水龍海賊団の諸君・・・よく来た！』

島から電伝虫のスピーカーを通して話しかけてきた。

『我々としては無駄な争いはしたくはない・・・そこで交渉と行こうか・・・』

レーツ「交渉だと・・・」

シヨット「おい！ドラ！これは何かの罠かも知れねえぞ！」

ドラ「おい！その交渉ってのは何だ？」

シヨット「つておう！い！何、話に乗っているんだ！」

『その交渉は・・・我々百鬼夜行海賊団の下に着かないか？』

ドラ「はっ？」

『そうすれば我々にたてついたことは白紙にしてやる・・・どうだ？悪い話じゃ無いだろう・・・そうだな更に・・・お前の賞金額と同じ金額も与えるぞ！どうだ？』

レーツ「結局戦力が欲しいだけか・・・ドラ・・・どうするんだ？」

シヨット「おいおい・・・金なんかで動くんじゃねえぞ！」

ドラ「ふん！オレの答えは最初から決まってる！」

『では答えを聞こうか・・・』

ドラ「・・・シヨット！頼んだぞ！」

シヨット「はいよ！そうこなくちゃ！」

シヨットは大砲に近づくとひもに着火した。

ドーン！！

ドラ「これがオレの答えだあああああ!!」

『なるほど・・・あくまでも我々と交戦するのか・・・相手になるぞ!!野郎共!!掛かれえええ!!』

ドラ「よし!俺たちも行くぞ!!」

ドラたちは大砲を撃ちながら岸に船を近づけていった。

「???」

ウィング「どうやら始まったみたいだよ!」

ヒャッキ「そうか・・・交渉は決裂か・・・」

ウィング「まあ、こうなるって分かっていたじゃん!」

ヒャッキ「そうだな・・・後は奴の対処だ・・・」

ウィング「それなら準備は万全さ!」

ヒャッキ「これが吉と出るか凶と出るか・・・見物だな・・・」

ウィング「そうそう・・・彼のデータを集めたんだけど・・・面白
いことが分かったんだ!」

ヒャッキ「彼というのは『水龍のドラ』のことか?」

ウイング「うん！彼は結構、顔が広いみたいだよ・・・幼少時代にはかの四皇『青髪のジャッカル』と知り合っただらしい・・・そしてこないだには、我等の同士王下七武海『クロ帽子のジャック』と一戦交えたらしい・・・そのときは互角だったらしい・・・」

ヒヤッキ「そいつは面白いな・・・奴を倒せば青髪やクロ帽子が黙ってないと・・・」

ウイング「それは無いと思うよ！青髪は今はこの海には居ない・・・そう易々来れるはずがない・・・クロ帽子に至ってはまた政府からの使いで北の海ノースブルーに行っている・・・やるなら今だ・・・」

ヒヤッキ「それじゃ・・・奴の手柄次第だな・・・」

ウイング「そう言うことになるね！」

ー名も無き島ー

ドラ「水龍拳！！」

部下「ぐはあああああああ！！！」

ショットスノーショット「雪の弾！！！」

部下「ぐはあああああああ！！！」

レーツ「二刀流 かぎ爪！！！」

部下「ぐはあああああああ!!」

シャーク「必殺 桜吹雪!!」

部下「!?!」

フェアリー「アンタ達しつかりやりなさい!!」

ショット「つて・・・ teme はなんで何もしねえんだよ!!」

フェアリー「あらあゝ私はレディよ!レディに闘わせるなんてねえゝ」

ショット「んなこと言っている場合じゃねえゝ!!」

部下A「な、何だこいつら・・・くそ強ええゝ!!」

ドラ「俺たちをどかしたければなゝブルドーザーでも持ってこいてんだ!」

レーツ「新鮮な海の食材を1年分持つてくるんだな!」

シャーク「研究材料、2年分持つてくるんだな!」

フェアリー「1000億ベリー持つてくるんだな!!」

ショット「あんたら簡単に動くんだな・・・」

ショットが軽くツツコミを入れた。

部下B「畜生！！こうなったらやけだ！！」

束になって突っ込んできた。

ドラ「おいおい・・・そろいもそろって・・・なんかの団体行事ですか？」

シヨット「最後の悪あがきって奴かあゝ！」

ドラ「これでくたばれ！W水龍拳^{ツイン}！！」

部下「ぐはあああああああ！！」

全ての部下たちがぶっ飛ばされた。

ドラ「ふうゝこれで片付いたか・・・」

??「ハッハッハッハッハッ！さすがだな・・・これまでも我が部隊をコテンパンにしてくれるとは・・・」

レーツ「おいでなすったか！」

??「我が名は百鬼夜行海賊団 幹部 『鎌鼬^{カマイタチ}のイタチ』だ！！」

第40章 粘り強さは世界一！（後書き）

と言うわけでイタチの登場です・・・

次回はバトル開始！！

まあ、能力は大体察しがつくと思います・・・

次回もお楽しみに！！

第41章 かつこつけている奴はすぐ終わる！

ドラ「あいつ・・・幹部・・・」

イタチ「よくも我の部下を潰してくれたな！！」

ドラ「オカマイタチのイタチ・・・」

イタチ「違うううう！！オカマじゃなくて鎌鼬！」

ドラ「そつかあ・・・どっちでもいいだろう？」

イタチ「良くねえええええ！！」

ドラ「そつか・・・じゃ、くたばれ！！水龍拳！！」

イタチ「えっ？」

ドガン！

イタチ「あ~~~~~れ~~~~~！！」

イタチは吹っ飛ばされていった。

ドラ「一件落着！」

シヨット「はやっ！！おかしいだろう！！」

ドラ「なにが？」

シヨット「何がつて・・・全部だよおおお！！え？何もつ終わり？」

ドラ「だって、吹っ飛んで行つたんだし・・・」

シヨット「幹部つてあんななの？」

??「んな訳ねえくだろう！！」

空から人が降つてきた。

スタッ！

ドラ「あれ？」

??「ワツハツハツハツハツ！ただ今地獄から帰ってきました！！・・・つて何言わせるんじゃくくくく！！」

ドラ「じゃ、もう一回！」

イタチ「いや、もうここは勝負でしょう！？」

ドラ「そつか・・・じゃ、くたばれ！水龍拳！！」

イタチ「2度も上手くいくと思うな！！辻斬り！！」

スパーン！

ドラの水龍拳が真つ二つに割れた。

ドラ「なっ!?!」

イタチ「これがオレの能力・・・キリキリの実の刻み人間だ!?!」

ドラ「なるほど・・・簡単にはいかないと・・・」

イタチ「連続辻斬り!?!」

ヒュンヒュンヒュンヒュン・・・

空を切る音が聞こえる。

ドラ「!?!?・・・くっ!?!」

ズザザザザッ

ドラ「ぐはっ!」

ドラの体に傷がついていく。

ショット「なっ! あいつは水なのに・・・」

イタチ「オレは武装色の覇気使いだ! 俺の前ではたとえ自然系^{ロギア}だろ
うと・・・関係ねえ」

ドラ「関係なくない・・・水^{ウォーター}の部屋^{ルーム}!?!」

イタチ「甘い!?! つむじ風!?!」

イタチを覆うとしていた水をつむじ風を起こし切り裂いた。

ドラ「ちっ！」

イタチ「所詮はそんな者か・・・そんなんじゃ総大将には勝てないぞ・・・」

ドラ「オレは・・・水龍海賊団の船長だあああああ！！こんな所では負けない！」

イタチ「辻斬り！！！」

ドラ「ウォーターウォール水の壁！！！」

水の壁を作り出した。

しかし、呆気なく壊れた。

イタチ「俺の前では貴様の能力など・・・無に等しい！！！」

シヨット「ちっ！助太刀するぞ！」

ドラ「やめろ！！これはオレのケンカだ！！手を出すな！！！」

シヨット「んなこと言っている場合かよ！！！」

レーツ「やめろ！あいつはそんなことでは引き下がらんぞ！」

シャーク「いつものことだろう・・・」

イタチ「あきらめの悪い奴だな・・・連続辻斬り!!」

ヒュンヒュンヒュンヒュン・・・

ズザザザザッ・・・

ドラ「ぐはっ!」

ドラは我慢がでずに膝をついた。

イタチ「お前の体は限界が来ているんだよ!残念だがこれが現実だ・
・・・」

ドラ「うるせえええええええ!!限界がなんだ!そんな限界・・・
越えてみせる!それが現実って言っならそんな現実・・・クソ喰ら
えだああああああああああ!!」

イタチ「なら、その限界を超えてみるよ!!」

ドラ「・・・はっはっはっはっはっはっ・・・」

イタチ「終わりだ・・・大鎌スラッシュ!!」

鎌のように動かしドラに斬りつけた。

ズパーン!!

辺りに衝撃で土煙が舞う。

イタチ「終わったな・・・」

シヨット「・・・まさか・・・」

シュ~~~~

土煙が次第に晴れてきた。

イタチ「!?!?・・・」

視界が晴れた先には何も無かった。

イタチ「なにっ!?ど、どこに・・・」

??「水幻影・・・水鏡華」
スイキョウカ

イタチ「なっ!?!」

なんと、イタチの後ろにドラが姿を現していた。

ドラ「いくら大丈夫でも至近距離からはさすがに無理だろう・・・」

イタチ「いつの間に!?!」

ドラ「これがオレの限界を超えた力だ・・・水龍拳!?!」

イタチ「くっ!」

ドガン!!

イタチ「ぐはあああああああ!?!」

まともに食らったイタチはそのまま吹っ飛び倒れた。

ドラ「ふう」

シヨット「倒しやがった!」

レーツ「中々やるな!」

シャーク「なんつゝ奴だ・・・」

ドラ「お前ら!勝ったぞ!」

シヨット「すげえな!!さっきの奴・・・どうやったんだ?」

ドラ「あつ!あれか・・・それがよ・・・水分身の要領で実態をブ
レさせられるかな・・・って思つてよ!一か八かの大掛に掛けたん
だ!まっ!どうやったかはあんまり覚えていないんだけど・・・」

シャーク「幻影だな・・・」

シヨット「幻影・・・?」

シャーク「ああ・・・幻を見せたのだよ!」

シヨット「幻!」

シャーク「だろうな・・・」

イタチ「くっ!おのれ・・・」

ドラ「なんだ？まだ生きていたのか？」

イタチ「こゝ、こんなところで・・・終わって・・・たまるか・・・」

ヒラヒラヒラ・・・

黒い羽が空から降ってきた。

ドラ「羽・・・？はっ！？」

ドラは空を見上げた・・・

??「残念だよ！まさか、こんなに早く終わるとは・・・」

第41章 かつこついている奴はすぐ終わる！（後書き）

ドラの新ワザが炸裂して・・・
↑炸裂したのか？

勝利で終わりました！！

次回、声の主が明らかに！？

大体、検討が着くと思いますが・・・

お楽しみに！！

第42章 〈番外編〉 替え歌をやるのは結構大変だ！（前書き）

いきなりですが・・・番外編です！

今回は、替え歌に挑戦してみました！

その名も・・・

Another Worldのメンバー（一部）で「ウエスタンシ
ョー」！

思いつきでやってみました！

注）キャラが崩壊しています・・・

ご勘弁を・・・

それでは、どうぞ！！

第42章 〽番外編〽 替え歌をやるのは結構大変だ！

ONE PIECE Another World のメンバー（一部）でウエスタンショー

ドラ「へい！レーツ！君ってさ、しつこすぎるね！フェアリーのことはもう、諦めなよ！」

レーツ「おあいにく様、そうはいかねあってことさ！彼女こそオレ様のDestiny！」

フェアリー「ふ〽たりともいい加減にして！み〽んな〽が見てるでしょ！」

ドラ・レーツ「それは言わねあって話だっぜ！だって、男は力で勝負！」

〽間奏〽

レーツ「おうおう、お疲れ！」

ドラ「お疲れッス！」

レーツ「ドラ君！最近どうよ？」

ドラ「あ！もう小説とかBANKAIで！」

レーツ「あ！マジでえ〽調子いいって感じ〽」

ドラ「ああ〜もう〜やめて下さいよ！レーツさん！あ！そろそろ、
2番始まりますよ！」

レーツ「あ！マジで？」

〜2番〜

レーツ「♪^{マイ}My ^{スウィーティスト}sweet ^{フェアリー}est fairy ^{ガール}girl 愛し
てるんだぜ！分からなければ、また、拉致・監禁！」

ドラ「♪いい〜のち掛けて、守りとおお〜すう〜けど、彼女のハー
トは守れないの！」

フェアリー「♪ふう〜たり共、いい加減にして！誰に口を聞いているの？」

ドラ・レーツ「♪ツンデレなとも魅力てえ〜き、だって男は力で
勝負ー！」

??「♪ちよつと待って！もうひい〜とりお忘れえ〜じゃないです
か？シヨオ〜ット参上！お待たせ！」

シヨット「♪え？なにになになにに！ゴメンゴメンゴメンゴメン！」

レーツ「♪KY！KYなあ？まじ空気嫁ゴルラァ！」

ドラ「♪ちよ〜ずいてつるとまじ、踏み潰すぞ！」

フェアリー「KYな野郎は！一人で結構！KYの癖えゝに生意気ね！」

ドラ・レーツ「ルックスだけは、最強だけえゝど」

ドラ「だって、男は力で勝負！」

レーツ「男は力で勝負！」

フェアリー「男は顔で勝負！」

ラストゝ

ドラ「いつやあゝつかれましたねえゝ」

レーツ「どうよ！この後、一杯いくか？」

ドラ「あ！すいません、今日、アレがコレでこうなんでえゝ・・・」

レーツ「あ！マジでえゝ？今度、オレも参加していい？」

ドラ「ちよつちよ、これマイク切れて無いみたいですよ！」

レーツ「え？ヤベエ！マジでえゝ？」

シヨット「ここに来て、母キャラ！？ていうか、育てられていないし……」

ドラ「また、そんなこと言ってえ〜！」

シヨット「その母キャラ、やめろおおおおお……！」

第42章 番外編 替え歌をやるのは結構大変だ！（後書き）

いつまで経っても切りがないのでここまで！

なんか、ひどくなってますみません・・・

次回から本編に戻り、まじめにやります・・・

では、次回もお楽しみに！！

ドラ「て言うか、今日ってこんだけ!？」

シヨット「お前が言うな!！」

第43章 ドラの新しいワザ！またまた登場！！

ドラ「お、お前は！？」

？？「ホント、残念だよ・・・」

上空から黒い鳥・・・鳥が舞い降りてきた。

イタチ「助けに来たのか・・・？」

シヨット「チツ！新手か・・・！？」

イタチ「共に奴を倒すぞ！・・・ウイング！」

ウイング「そうだな・・・共になあ・・・」(ニヤッ)

地面に着地すると、人間の姿に戻った。

そして、イタチのもとに向かった。

イタチ「す、すまねえ・・・」

ウイング「なあゝに気にするなよ！」

ウイングはイタチに手を差し延べた。

イタチ「すまねえ」

ウイング「・・・」

イタチを立ち上がらせた。

イタチ「よし・・・やるか・・・」

ウイング「そうだな・・・まずは邪魔者から・・・」

イタチ「よし！行くぞ！ウィン・・・！？」

ドスッ！

ウイング「気安く呼ぶなよ！」

イタチ「な、何を・・・ぐはっ！」

一同「なっ！？」

見るとイタチの背中から腹にかけて剣が突き刺さっていた。

イタチ「てめえ・・・裏切るのか・・・」

イタチは腹を抱えて何とか立っている様子だった。

ウイング「裏切るだあ・・・！？バカ言っくなよ！俺たちは同じ幹部だぜ！」

イタチ「じゃ、何で・・・」

ウイング「何でだろうな・・・？彼からの命令だよ！ヒヤッキが君には必要ないってね！」

イタチ「なっ！じゃ、最初から・・・」

ウイング「もし、勝っていたら、こうはならなかったぜ！」

イタチ「お、おのれえゝ・・・」

ウイング「恨むなら彼を恨むんだな！」

イタチ「・・・・・・・・フツ！」

ウイング（わ、笑った！？）

イタチ「コレが最後か・・・もう少し暴れたかったな・・・」

ドサッ

イタチはそのまま地面に倒れた。

ウイング（死に際に笑うとは・・・覚悟を決めたのか・・・フツ！
まあ、良い・・・）

ウイングはそのままその場所を立ち去ろうとした・・・

そのときだ・・・

??「待てよ！！」

急に大きな声が聞こえた。

ウィング「ん？何だい？ドラ君？」

ドラ「テメエ！何で斬った！？仲間じゃ無いのか？？」

ウィング「仲間ねえ！僕たちはそんなじゃ無いよ！！もつともそんな柔な考えで集っているんじゃないだよ！」

ドラ「でも、同じ船に乗っているんだろ？どうして！？」

ウィング「彼は戦力には足りないのだよ・・・ただのオマケだ！」

ドラはその言葉にふっきれた。

ドラ「テメエ！あんな奴を・・・オマケとは何だ！？同じ船に乗っているのに！？」

ウィング「だから、何だ？」

ドラ「うおおおおおおおおお！！！」

ウィング「暴走か？」

ドラ「テメエ！だけは許さん！！水龍拳！！！」

ウィング「今は君とは闘っている暇は無いんでねえ・・・少しだけなら相手になろうか？」

そう言うと、ウィングは人獣型に変化した。

動物系^{ソオン}の姿は大きく分けて3つある。

一つは人間時の姿・・・人型

もう一つは動物と人間の間姿・・・人獣型

最後は動物時の姿・・・獣型

動物系ソオンの能力者はこの力をふんだんに使い、戦いにおいて、上手く使いこなしているのだ。

背中から黒い翼が2枚、足はかぎ爪、顔は烏と人間が混ざった姿、胴体は人間と同様の姿・・・それはまさしく、古の妖怪『カラス天狗』の様だ・・・

ウィング「唐草ツバメ二枚返し!!」

ウィングは翼で水龍拳を弾いた。

ドラ「そつとや、そつとで上手くいきそくに無いな・・・」

ウィング「君の力はそんなものかい？がっかりだな・・・」

ドラ「まだまだ・・・」

ウィング「なら今度はこっちから行くよ!翼の剣!!」
ウィング・ブレード

ウィングは翼を武装色の覇気で纏うと、ドラ目掛けて、ものすごいスピードで飛び込んできた。

ドラ「・・・ちっ!」

ドラが真っ二つに切られた。

ウィングはヤッタと言う感覚になったが違和感を覚えた・・・

ウィング（！？・・・何故だ・・・手応えを感じなかった・・・）

ドラ「そっいやくオメエはまだオレの新しい能力を知らなかったよな・・・」

ウィング「何っ！？」

ウィングは振り返った。

ウィング「なっ！」

見るとドラの斬られた所はユラユラと揺れていた。

ドラ「水幻影 水鏡華」

ウィング「ば、バカな！？」

ウィングは両方の翼から羽を抜き取り、剣にして両手に持った。

ウィング「おのれえゝ！！はあゝ」

ウィングはドラに斬りかかった。

だが、実体がつかめず、ただ、二つにするだけであった。

ドラ「おまえじゃ、今のオレには勝てないぞ・・・」

ウィング「ちっ！」

ドラ「水幻影 影武者！」

ドラはそう言うと、ウィングの目の前にある、人物を作り出した。

ウィング「なっ！？」

第43章 ドラの新しいワザ！またまた登場！！（後書き）

ウィングの前に作り出した人物とは！？

次回にご期待を！！

楽しみに！！

第44章 偽物はすぐにバレるから要注意！

ウィング「な！？なんで・・・こいつが・・・」

ドラ「どうだ？思い出したか？」

ウィングの前にはイタチが姿を現していた。

ドラ「少しは悔やむだろうな？」

ウィング「・・・クツクツクツクツ」

ドラ「何だ？何がおかしい？」

ウィング「クツハツハツハツハツハツハツ！！」

ドラ「遂に頭までおかしくなったか？」

ウィング「バカだな！オレがこんなので動揺すると思ったか？」

ドラ「どういうことだ？」

ウィング「だって、奴は死んでないもの・・・！」

ドラ「・・・そっか・・・ならいい・・・」

ウィング「ついに諦めたか！動揺作戦は失敗だな！クツクツクツクツ」

ドラ「・・・いや、この時を待っていたんだよ！」

ウイング「なにっ!？」

ドラ「騙し合いなら負けないぞ!幻影!奴を潰せ！」

イタチの影武者がウイング目掛けて攻撃を放った。

イタチ影武者「連続 辻斬り・・・」

ウイング「なにっ!くっ！」

ドラ「どうだ?こいつは動かすこともできるんだぜ！」

ウイング「なるほど、だが、所詮は幻・・・」

ドラ「そうさ!所詮は幻だよ！」

ウイング「・・・!？」

ドラ「なんだ・・・？」

ウイング「ちっ!どうやら、君との勝負はお預けみたいだね！」

ドラ「どういう意味だ？」

ウイング「ヒヤツキが僕らに招集を掛けた！」

ドラ「は?そんなの聞こえなかったぞ！」

ウィング「当たり前だ！僕らにだけ聞こえるんだから・・・一つ、教えてあげよう！君たちの次に行く島は僕らの本拠地だ！総員で君たちを歓迎するよ！」

ドラ「なにっ!？」

ウィング「君とはそのときに決着を付けようじゃないか！じゃない！」

そう言うウィングは人獣型から獣型に姿を変え、空へと飛び去った。

イタチを連れて・・・

ドラ「次が・・・大決戦だ・・・」

バタッ

そう言うドラは倒れた。

第44章 偽物はすぐにバレるから要注意！（後書き）

短くなってしまいました・・・

今回は一呼吸置いての休息です！

その次から最終決戦のスタートです！！

お楽しみに！！

追伸

更新が遅く、誠に申し訳ありません・・・

こちらも忙しく、時間が無いので・・・

金土日月は極力更新はするようにしたいと思います！

時間があれば、その都度更新していきたいと思います！

ご迷惑をおかけしますが、お許し下さい・・・

第45章 ひとときの休息（前書き）

ー???ー

ドラ「ここは・・・」

辺りは真っ白な風景が広がっている。

ドラ「・・・?」

??「聞こえるか?ドラ」

辺りが輝いた。

どこからか声が響いた。

ドラ「誰?」

??「お前の行動はいつも見ているぞ!」

ドラ「どういう意味だ?」

??「これから、お前はさらなる困難にぶつかるだろう・・・だが、仲間と共にその困難にめげずに突っ込むのだ!そうすれば、お前の真の力は発揮される!」

ドラ「え?それは、どういうことだ!?」

??「これからも、お前のことを見ているぞ!」

元の白の世界に戻った。

第45章 ひとときの休息

ドラ「……はっ!？」

ガバツ!

レーツ「お!目が覚めたか……」

ドラはベットに寝ていた。

フライング・タイガー号の寝室の様だ。

レーツがそばにいた。

恐らくずっと見ていてくれたのだろう……

ドラ「オレは……」

レーツ「まる2日、寝たまんまだったんだぞ!心配したぜ!」

ドラ「そんなに寝ていたのか?」

レーツ「まあ、ここ最近連続で闘っていたからな!無理もない!無茶はするなよ!」

ドラ「ああ……分かっている、ありがとう!」

レーツ「まあ、少しは休んでいるよ!まだ、完全に回復した訳じゃ無いからな!」

ドラ「ところで、他のみんなは？」

レーツ「外で食料調達さ！この島、いろいろと良い食材があつてな・
・・そうだ！なんか食うか？」

ドラ「そうだな、頂こうか！」

レーツ「OK！すぐに作ってくるな！」

そう言つとレーツは部屋から出て行つた。

一人になつたドラは・・・

ドラ「ふう〜最近みんなに迷惑掛けっぱなしだな・・・俺一人で何
でも突っ込んでっているしな・・・」

ドラは部屋の窓から外を見た。

天気は快晴だ。

ドラ（あの、夢は何だつたんだろう・・・）

??「これから、お前はさらなる困難にぶつかるだろう・・・だが、
仲間と共にその困難にめげずに突っ込むのだ！そうすれば、お前の
真の力は発揮される！」

ドラの脳裏に先ほどの言葉が浮かぶ。

ドラ「考えても無駄だな！要するに仲間と協力しろ！ってことだな

！レーツが飯を持ってくるまで少し横になるか！」

ドラはベッドに横になった。

ーフライング・タイガー号屋外（浜辺）ー

シヨット「シャーク！また、なんか作っているのか？」

食材調達を終えて戻ってきたシヨットが話しかけた。

背中の籠には大量の食料が入っていた。

しかし、すべて凍っていた。

シャーク「まあな！もう少しで完成なんだけど・・・」

シャークが真剣に何かの機械を作っていた。

シヨット「何だそれ？」

シャーク「秘密だ！完成したら教えてやるぜ！」

シヨット「そつか！それより、ドラの奴、目、覚めたかな？」

シャーク「え？オレの機械の話題それで終わり！？どんだけ興味無いんだよ！」

シヨット「気にするなよ！」

ドガンー！！

凄まじい爆発音が響いた。

ショット「うわっ！？」

二人は爆風に飛ばされた。

機械があつたところには大きなクレーターができていた。

シャーク「ううゝんおかしいな・・・あの回線はあそこじゃ無かつたか・・・」

ショット「つて・・・どんだけ威力あんだよ！！もし、船の上でやつていたら船、木っ端みじんじゃねえゝか！！」

シャーク「失敗は成功の元つて言うじゃん！！」

ショット「今はそう言う問題じゃねえええええええええええ！！」

ーフライング・タイガー号屋内ー

丁度爆発音が響いた頃に・・・

ドラ「うわっ！何だ！？敵か？雷か？地震か？オヤジか？」

ガチャ

レーツが入ってきた。

レーツ「全部、ちげえ〜よ！て言うか何で最後にオヤジ？」

ドラ「ほら！昔から言うだろう！地震、雷、ハゲ、オヤジって怖いものベスト4的な？」

レーツ「あつそ！ちなみに今は恐らく、シャークのバカ野郎がやったんだろう！さっきなんか作っていたしな！それより、できたぞ！オレの特製　無人島0円料理だ！」

ドラ「どつかで聞いたことがある名前だな・・・」

レーツ「食材はこの島から全て取って使ったものだ！元気が出るぞ！あと、海賊弁当も作つといたぞ！」

ドラ「お！サンキュー！」

レーツ「無理はするなよ！」

ドラ「分かっているって！あ！とりあえず、コレ食ったら出航な！記録も溜^{ログ}まつただろう？」

レーツ「もう、行くのか？」

ドラ「ああ、あいつとも決着を付けたいしな！」

レーツ「そうか・・・じゃ、みんなに伝えてくるぜ！お前は、ちゃんと体力を回復しておけよ！」

ドラ「ああ！」

ドラはレーツの作った料理をバクバク食っている。

レーツ「相変わらずすごい食べっぷりだな」

レーツはその光景を見ながらそう言った。

そして、部屋から出て行った。

第45章 ひとときの休息（後書き）

次回から、最終決戦の幕開けです！！

ドラたちは果たして勝てるのか？

楽しみに！！

第46章 全面対決です！（前書き）

ウィング「彼らが来たよ！」

ヒヤツキ「来たか！」

ウィング「どうするの？」

ヒヤツキ「数人でお出向かいをしてやれ！」

ウィング「分かったよ！」

第46章 全面対決です！

ドラ「見えたあゝ！あれが奴らの本拠地かあゝ」

レーツ「これで賞金首になるかも知れないんだぜ！」

シヨット「そうだな！」

フェアリー「賞金首にはなりたくないな・・・」

レーツ「フェアリーちゃんはオレが守るからね！」

フェアリー「今回だけは頼むわ！」

ドラ「よし！行くぞおめら！」

一同「おおー！」

ドラ「行くぜー！！」

そう言つとドラはまだ島に着いていないのに船から飛び出した。

一同「あ！？」

ドラ「ドラゴンウォーターロード水龍の水の道！」

ドラは水龍になり、勢いに任せて飛び出した。

レーツ「あの、バカ！」

一同「考えてから行動しろおおおお！！アホ船長おおおお！！」

全員、ドラの行動にあきれていた。

レーツ「こうしちゃいられねえ、船を急がせ！」

ショット「もうやってる！！」

―百鬼夜行海賊団本拠地　ゴーストバーク―

見張りA「ん？何だアレ・・・」

見張りの一人がなにか飛んでくるのに気づいた。

見張りB「なんか、こっちに近づいてきてる・・・」

見張りA「水の・・・龍・・・？」

見張りB「・・・やっぱ、こっちに来ている！！うわあああああ
あ！！！」

ドガンー！！

??「いつけねえ、勢い付け過ぎちまった！アハハハハハ！」

見張りA「何者だ！？」

??「おつと！オレは、ウォート・D・ドラだ！またの名を『水龍のドラ』だ！」

見張りB「何！？仕留めろ！！」

ドラ「オレを仕留める？やめとけ！ケガするぞ！」

それでもお構いなしに飛び込んでくる。

ドラ「ちっ！玉砕覚悟か・・・なら、仕方ないな！水龍拳！！」

ドガン！

見張りA・B「ぐはあああああああ！？」

見張りはいとも簡単に飛ばされた。

それと一緒に門も壊れた。

ドラ「よし！行くぞ！！」

ドラはゴーストバークの中に飛び込んだ。

『シンニユウシャ！シンニユウシャ！タダチニハイジヨセヨ！』

サイレンが鳴り響いた。

ドラ「おらおら！！」

次々と来る敵を片っ端からぶっ飛ばしていった。

部下A「な、なんだ！？桁違いだ！！」

??「情けないぞ！お前ら！それでも百鬼夜行海賊団か？」

部下達「あ！」

??「オレの部下がお世話になったな？『水龍のドラ』！」

ドラ「何者だ、テメエ〜？」

??「オレは百鬼夜行海賊団 幹部『金狐のフォック』だ！」

部下達「フォックさんだ！！そんな奴！倒しちゃってください！」

ドラ「そうかい！じゃ、とっと始めようぜ！」

フォック「望むところだ！」

ドラ「こっちから行くぜ！！水龍拳！！！」

フォックに向かってぶっ飛ばした。

フォック「遅い！」

ふわりと避けた。

ドラ「何！？」

フォック「君の動作は予備動作がありすぎて、軽く見切られるぞ！」

ドラ「うるせえ〜!!」

フォック「攻撃つてのはな、こっやって使っんだよ!金の剣!」
ゴールドブレイド

フォックの右腕が変化し、金色の剣に変わった。

ドラ「な!?何だ?その能力・・・」

フォック「そんなこと、聞いている暇があるのか?」

ドラ「なに!?!」

フォックはものすごい早さでドラに迫ってきた。

ドラ「ちっ!」

フォック「はっ!」

スパーン!

ドラは真っ二つに切られた。

フォック「終わりだな!」

ドラ「おわっちゃいねえ〜!」

フォック「何!?切られたはずでは・・・いや、むしろ水にはなれないはず・・・」

ドラ「水幻影　水鏡華・月」

フォック「なに!？」

ドラ「おい！お前！池に浮かぶ月を見たことあるか？」

フォック「それが何だ？」

ドラ「池に映った月はさわれない。手に届きそうに届かない。さわれば波紋が広がりぶれて見えにくくなる・・・」

フォック「だからなんだ？」

ドラ「つまり、それと同じ原理だよ！見えているのにさわれない、これがオレのこの前手に入れた能力の改良版だ！」

フォック「ちっ！」

ドラ「じゃ、反撃開始と行きますか？攻撃は素早くだよな？」（ニヤッ）

第46章 全面対決です！（後書き）

次回は遂に決着が！！

さらに、出遅れた彼らも合流！

お楽しみに！！

第47章 全身武器人間の登場！？

シヨット「あのバカ！先に行きやがって・・・」

レーツ「毎度毎度のことだろう！」

水龍海賊団がゴーストバークに到着した。

シャーク「それにしても・・・コレをあいつが全てやったのか・・・」

目の前には無数の部下達が半死の状態で転がっていた。

レーツ「いや、全部じゃ無いみたいだぜ・・・」

レーツが注意を促した。

シヨット「まだ、いるのかよ・・・」

目の前の暗闇からたくさんの百鬼夜行海賊団の部下達が現れた。

シヨット「俺たちとやろうってか・・・」

シャーク「おい！お前ら！先に行つてろ！」

シヨット「は？何言つてやがる！」

シャーク「ここは俺に任せろ・・・後から行く！ドラにそう伝えておいてくれ！」

シヨット「バカ言っているんじゃないねえ！お前一人でこの人数を相手するのか？」

レーツ「分かった！必ず追いつけよ！」

シャーク「当たり前だ！」

シヨット「レーツ！」

レーツ「今は信じるしかない・・・行くぞ！」

シヨット「ちっ！必ず来いよ！」

レーツ達はその場をあとにした。

シャーク「お前らの相手はオレだ！」

部下A「あいつを止めろ～～～！そして、幹部に昇格するんだあ～～～！」

シャーク「一気に決めるか・・・」

そう言うときシャークは空へと飛んだ。

シャーク「ゲッポウ月歩！！」

宙を蹴り、空へと上がった。

そして・・・

シャーク「嵐脚・枝垂れ桜!!」
ランキヤク

足から斬撃をくりだした。

部下達「ぐはあああああ!!」

次々に攻撃を喰らい倒れていく。

スタッ!

シャークが地面に着地した頃には敵は全滅していた。

シャーク「ふうゝ・・・!？」

ヒュン!!

突然、どこからか槍が飛んできた。

シャークは間一髪のところまで避けた。

シャーク「この槍は・・・そうか・・・この部隊はお前のところか・
・・・」

??「分かったか?不意打ちをよく交わすとはな・・・」

シャーク「元海軍も侮れないだろう?」

??「そうかもな・・・」

目の前に男が現れた。

シャーク「久しぶりだな・・・」

??「覚えてはいたみたいだな・・・もう一度自己紹介でもしておか・・・」

シャーク「しなくて結構！百鬼夜行海賊団 幹部『暗躍鬼のサーズ』よぉ〜！」

サーズ「なら結構・・・貴様と刃を交わす日がくるとは・・・」

シャーク「手加減ならしねえぞ！」

サーズ「貴様はオレの手の内を知っているだろう？」

シャーク「当たり前だ！ブキブキの実の武器人間さん？」

サーズ「なら話は早い・・・行くぞ！」

サーズはシャークを目掛けて飛び込んできた。

シャーク「前よりは素早くなっているな・・・だが・・・剃^{ソル}！」

シャークは地面を蹴り、サーズの攻撃を交わした。

そして・・・

シャーク「嵐脚^{ランキヤク}！！」

足から斬撃を繰り出した。

サーズ「ちっ！ガード！！」

サーズは体から盾を取りだし防いだ。

シャーク「武器を増やしたな・・・」

サーズ「トリブルクロー三枚爪！！」

サーズは両手からかぎ針を出し、シャークに斬りつけた。

シャーク（くっ！これは交わしきれん・・・）「デツカイ鉄塊！！」

シャークは体を鋼鉄のように硬くし、攻撃を防いだ。

サーズ「腕は落ちていないようだな・・・」

シャーク「ソル剃！！」

シャークは先手を掛けた。

サーズ「接近戦はオレの勝ちだぞ！！ 死角無し（イレイザー）！！」

サーズは全身から槍やら剣やらをありたっけ突きだした。

シャーク「！？」

サーズ「仕留めた・・・」

サーズは勝ち誇った。

シャーク「誰を仕留めたって？」

サーズ「何っ！？」

シャークはサーズの上に乗かっていた。

サーズ「確かに手応えがあつたはず・・・」

シャーク「確かに死角はなしだがこれだけあればあつたかどうかなんて分からねえくだろう？たとえ木の破片でも・・・」

サーズ「なっ！？」

見るとサーズの刃に当たっていたのはシャークではなく丸太だった。

サーズ「いつの間に・・・」

シャーク「剃^{ソル}で動いたときに拾つといたのさ・・・」

サーズ「・・・」

シャーク「今のお前は完全無防備だ！指銃^{シガン}！！」

シャークは人差し指をサーズに突き刺した。

サーズ「ぐはっ！」

シャーク「これで終わりだ!!」

シャークは地面を蹴った。

シャーク「ゲッポウ月歩!!」

シャークは宙を蹴った。

シャーク「トドメだ・・・」

サーズ「くっ! 勝った気でいるなよ!! デストロイランス無限の槍!!」

サーズはシャークに向かって無数の槍を飛ばした。

槍の雨のように・・・

シャーク「何っ!? まだ、これだけの力が・・・」

第47章 全身武器人間の登場！？（後書き）

シャークの運命はいかに！？

次回もお楽しみに！！

第48章 全身黄金人間の脅威の能力（前書き）

突然ですが・・・

ゴールデンウィーク
黄金週間特別企画！！

何でもありだよ～～～SP

ゴールデンウィーク
今日から黄金週間が始まります！！

それにあわせてスペシャルをやります！！

いくつか用意してありますよ！！

まず、一つ！！

ゴールデンウィーク
黄金週間期間中は一日の更新回数を2～3回でお送りします！！

二つ！！

リクエストを募集中！！なんでも良いです！！

三つ！！

コラボを予定！！どこするかは未定・・・

『激突！百鬼夜行海賊団編』を終えてからやろうと思います！

と言っわけでコラボを募集します！！

という感じでやっていきたいと思います!!

ゴールドエンウィーク
それでは黄金週間特別企画

何でもあります~~~~SPを開始します!!

第48章 全身黄金人間の脅威の能力

シャークに向かって無数の槍が飛んできた。

シャーク「くっ！！紙絵^{カミエ}！！」

シャークは紙一重で次々に槍を交わしていった。

サーズ「やはり・・・交わされたか・・・」

シャーク「今度こそトドメだ！！嵐脚^{ランキヤク}・枝垂れ桜！！」

シャークはサーズ目掛けて無数の斬撃をたたき込んだ。

ドドン！！

サーズにまともに直撃した。

辺りに煙が舞う。

シャークは地面に軽やかに着地した。

視界が晴れてきた。

シャーク「・・・なっ！？」

シャークは一瞬自分の目を疑った。

目の前には壊れた武器が散乱していただけだったからだ。

シャーク「奴は・・・」

??「しっかり狙わないとダメだろう？」

シャーク「!？」

シャークの背後にサーズがいつの間にか陣取っていた。

シャーク「しまっ・・・!？」

サーズ「暗殺乱舞!!」

サーズはシャークに向かって体から刀という刀を突き出した。

シャーク「ぐはああああ!!」

サーズ「惜しかったなあゝまあ、オレの武器をこれだけ壊したんだ！
！誉めてやろう！」

シャーク「くっ・・・」

サーズ「あと、良いことを教えてやろうか？今頃オレら幹部がお前の仲間を血祭りに上げているだろう・・・特にお前の船長さんはヤバイぞ・・・」

シャーク「なにっ!？」

サーズ「船長さんの相手は金狐だからなゝゝゝ」

シャーク「！？そ．．それは．ほんと．．か．．？」

サーズ「嘘を言っでどうする？」

シャーク「奴は．．危険．．だぞ．．」

サーズ「お前らの航海もここまでだ．．．オツカレサン！」

サーズはそう言うと刀を取り出しシャークに斬りつけた。

ーゴーストバーク中間地点ー

ドラ「なんだ！？その能力！！」

フォック「．．．」

ドラ「ちっ！無視かよ！なら、水龍拳！！」

ドラはフォックに向かってぶっ飛ばした。

フォック「．．．」

それを難なくヒラリと交わした。

そのままドラに向かって斬りつけた。

ドラ「くっ！？」

フォック「スキがありすぎ・・・」

ドラ「くっ！」

ドラは避けるのが精一杯だった。

ドラ（こうなったら・・・）

フォック「スキあり！！」

一瞬の隙についてドラを斬りつけた。

フォック「！？」

だが、実体がかめずぶれた。

ドラ「お前の方が隙だらけだぞ！特に懐が！」

フォック「！？」

ドラはフォックの右下がわから現れた。

ドラ「水龍拳！！」

思いつきりフォックにぶつけた。

シュー

思いつきり煙が上がった。

ドラ「何っ!？」

水はすぐに蒸発をしてしまった。

ドラ「なぜっ!？」

フォック「お前の方が隙だらけだ!」

フォックはドラを斬りつけた。

ブワン

また、ぶれた・・・

フォック「!？」（何故だ・・・こいつ実体がかめない・・・水にはなれないはず・・・）

ドラ「そいつはどいつのことだ?」

今度はフォックの背後から現れた。

ドラ「W^{ッイン}水龍拳!」

今度は両手から放った。

シャー

またもや蒸気をあげた。

フォック「教えてやろう!オレはゴルゴルの実の黄金人間だ!」

ドラ「お、黄金人間・・・？」

フォック「金が溶ける時は凄まじい温度になる、500度くらいかな？それを操り金を自由自在に変えているのだ。だから、水を喰らっても熱が凄まじいからすぐに蒸発するのさ！」

ドラ「なるほど・・・水人間のオレとは相性が良いと？」

フォック「そう言うことだ！終わりだ！！黄金の剣！！ゴールドブレード！」

ドラに斬りかかる。

ブワン

だが、ぶれる。

フォック「また！？」

ドラ「なら大量の水で冷やしてやるぜ！！それなら結構いけるだろう？」

フォック「なにっ！？」

ドラ「更に海水なら・・・ウォータールーム水の部屋！！」

フォック「何っ！？」

フォックの廻りに水の壁ができフォックを包んだ。

そのまま、水の球体に閉じ込めた。

フォック「くっ！？・・・・・・・・ブクブク・・・」

フォックは中で溺れていた。

シューシューだが、余熱のせいか徐々に蒸発して行っている。

ドラ「早くトドメを指さないとな！・・・・クラシュッ！！」

思いっきり水圧の力で潰した。

フォック「！？ぐはっ！？」

フォックは力尽きその場に倒れた。

ドラ「ふうゝ手強かった・・・・次はどんな奴が相手だ・・・・？」

ドラはその場でのびをした。

第48章 全身黄金人間の脅威の能力（後書き）

さあ〜ドンドン行きましょう!!

一話書くので結構疲れる・・・

だが、やってやる!!

次回もお楽しみに!!

第49章 化け猫の登場!! (前書き)

ゴールデンウィーク
黄金週間企画

第49章 化け猫の登場!!

レーツ達はと言うと・・・

シヨット「気味ワリィ〜よ〜」

フェアリー「本当・・・なんか出そう・・・」

レーツ（イライラ・・・）

シヨット「あのバカがサッサと倒してくれないかな・・・」

フェアリー「大丈夫かな・・・」

レーツ（イライラ・・・）「だったら、付いてくるなよ!!」

シヨット「そっちの方がもつと怖い!なあ?ベル?」

ベル「グワア?」

レーツ「意味分からん・・・と言っている」

シヨット「いや、意味分かれよ!!て言うか・・・こっちであって
いるのか?」

レーツ「間違えない・・・ベルの鼻は敏感だから・・・ホークス
も上空から探してくれている」

??「間違えないよ!こっちだもん!」

シヨット「だ、誰だ!？」

??「こっちが地獄の入り口だよ!」

レーツ「!？」

目の前の暗闇から人が出てきた・・・

しかし、その姿は人では無く、化け猫の样だった。

シヨット・フェアリー「出たあああああ!!!ぎゃあああああ
ああああ!!!」

二人は天でバラバラの方へ一目散に逃げていった。

ベルは仕方なくシヨットの後追った。

レーツ「バカ野郎!!」

??「おや、君と会うのは初めてだね・・・」

レーツ「誰だ？」

??「オレは百鬼夜行海賊団 幹部『化け猫のキャッツ』だ!その
節はアンタの船長にお世話になったな・・・」

レーツ「・・・あつ!いや、こちらこそ!おかまいなく!」

キャッツ「アダッ!?!なに、そのキャラは!?!何で!?!」

レーツ「おつとついつもの癖が・・・」

キャッツ「どんな癖だよ!!」

レーツ「お前の相手はオレみたいだな・・・」

キャッツ「そうだな・・・だが、ここでお前は散るのさ!!」

レーツ「へえゝそうかい・・・それはお前だ!!」

レーツは素早く懐から刀を二本抜くと、キャッツに斬りかかった。

レーツ「二刀流 かぎ爪!!」

レーツは二本の刀をかぎ爪のようにしてキャッツに斬りつけた。

キャッツ「二又 迅速の尾!!」

キャッツは尻尾でレーツの剣を受け止めた。

レーツ「何っ!?!」

キャッツ「そんなものか? 一又 鋭尾!!」

キャッツは尻尾に武装色の覇気を纏い、レーツに打ち付けた。

レーツ「くっ!?!」

キャッツ「まだまだ・・・イレイズクロ鋭い爪!!」

キャッツは爪を伸ばし、レーツに斬りつけた。

レーツ「くっ・・・」

キャッツ「どうした！？手も足も出せないか？」

レーツ「ふっ！そんなんじゃねえよ・・・甘すぎて反吐が出るぜ
！」

キャッツ「はっ！？追い詰められて頭までおかしくなったか？」

レーツ「ああ、おかしいぜ！お前の弱さがな！」

キャッツ「何っ！？貴様！！」

レーツ「少しは腕のある奴かと思ったけど・・・期待ハズレ！！」

キャッツ「はっ？・・・」

レーツ「お遊びはここまでだ！！」

レーツは刀を持ち替えた。

レーツ「二刀流鷹ストリートニードル 鋭い嘴！！」

レーツは二本の剣を嘴の様に構え、キャッツに突きつけた。

キャッツ「なにっ！？くっ！？」

キャッツはもろに攻撃を喰らった。

キャッツ「ぐはっ！」

そのまま倒れた。

レーツ「オレを嘗めるなよ！普段からトレーニングは欠かさずやってるんだ！」

キャッツ「ト、トレーニングだと・・・」

レーツ「ああ、重さ3？の調理道具を用意してあんだ！」

キャッツ「何っ！？3？の調理道具！？」

レーツ「オレ専用のな！」

キャッツ「バ、バカだろう・・・」

レーツ「さてと次に行くか！あっ！あの二人大丈夫かな・・・」

ーゴーストバーク港ー

サーズ「終わりだ！！」

サーズはシャークに剣を振り付けた。

シャーク（くっ！ここまでか・・・）

ガキン！？

サース「なにっ！？」

??「おいおい・・・諦めているんじゃないよ・・・後から付いてくるんだろ？」

シャーク「お前は・・・！！」

サース「何だ・・・死にに來たのか？」

??「水龍海賊団 狙撃手 レーツの登場だ！！」

サース「だが、君も終わりだ・・・」

ショット「そいつはどうか？ベル！！」

サース「??」

ドンッ！

ベル「グワァッ！！」

ベルは思いっきりサースに激突した。

サース「ぐっ・・・」

そして、運良くベルの牙が突き刺さった。

サーズ「ぐはっ!？」

サーズはそのまま勢いに乗って飛ばされた。

バツシャーン!!

サーズはそのまま海に落ちた・・・

シヨット「さあゝ掛かってこい!!」

・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・

シヨット「あれっ?上がってこない・・・」

シャーク「当たり前だ!能力者だからな!」

シヨット「勝ったゝゝゝ!!」

シャーク「いや、明らかに不意打ちだろう?格好つけてきたは良いものの最後はダサイな・・・」

シャークが軽くツツコミを入れた。

シヨット「んなこと言うなよ～～！オレが来なかったらお前、明らかに死んでいただろう！！」

シャーク「そうだな・・・でも、何で？」

シヨット「あっ！いや・・・何となく・・・」

そう言うシヨットは汗だくになっていた。

シヨット（ぜってえ～言えねえ～よ！驚かされて逃げてきたなんて・・・）

シャークの頭の上には「？」が浮かんでいた。

シャーク「まあ、ともかくありがとうな！」

シヨット「良いつてことよ！」

シャーク「じゃ、ドラの所に行くか！」

シヨット「へっ？」

シャーク「だから、ドラの所へ・・・」

シヨット「まじっ？」

シャーク「当たり前だろう？」

シヨット「はうっ！？急に『ゴーストバークに進んではいけない病』が・・・うっ！」

バタッ！

シヨットは大きさに倒れた。

シャーク「バカやってないで行くぞ！ベル！乗せてってくれよ！」

ベル「グワッ！」

ベルは待っていましたと言わんばかりに吠え、二人を乗つけて奥へと入っていった。

シヨット「たすけてえ〜〜〜〜！！！」

第49章 化け猫の登場!!（後書き）

はぁ〜疲れた!!

この調子で明日も頑張るぞ!!（オォー！）

と言っわけで次回もお楽しみに!!

第50章 最終決戦！ 動き出す敵の大将（前書き）

ウィング「幹部が全滅に近くなってきた・・・」

ヒヤツキ「奴らも中々やるな・・・」

ウィング「ここは僕が行こうか？」

ヒヤツキ「いや、あいつらを呼んでくれ！」

ウィング「大丈夫なのか？」

ヒヤツキ「それとオレも行くぞ！」

ウィング「あいつらでもきついぞ・・・」

ヒヤツキ「たかがルーキー海賊・・・潰してやるさ！」

ウィング「奴らを甘く見ない方がいいよ！」

ヒヤツキ「分かっているさ・・・」

遂に敵の大将のチームが動き出した！？

気になる勝負の行方は！？

第50章 最終決戦！ 動き出す敵の大将

ドラ「ここが奴らの城・・・」

ドラはゴーストバークの中心にある百鬼夜行海賊団の本拠地に来ていた。

ドラ「よし！行くぞ！！」

ドラは中に入ろうとした。

そのときだ・・・

??「待てよ！お前一人で行くなよ！自己中大魔王！」

ドラ「あっ！」

後ろの林からレーツが出てきた。

ドラ「レーツ！！てか、その傷大丈夫か？」

ボロボロになっているレーツを見て心配した。

レーツ「なあくに野良犬に噛まれた程度だ・・・心配は無いぜ！」

ドラ「そつか！じゃ、行くぞ！！」

??「待てええええ！！レーツだけじゃ無い！！俺たちを忘れるなあああああ！！」

林からベルが飛び出してきた。

その背中にシヨットとシャークが乗っていた。

ドラ「シヨット！シャーク！！無事か？」

シヨット「あたり前だ！！オレがこんなところでくたばるかよ！！」

レーツ「よく言っぜ！真っ先に逃げ出したくせに！」

シヨット「うつ・・・それは言っなよ・・・」

シャーク「なるほど・・・だからオレの所に来たのか・・・？」

シヨット「うつ・・・」

図星を付かれて黙り込んでしまった。

??「アンタ達！！負けたら承知しないわよ！！！！！！」

ドラ「フェアリー？」

フェアリーの声が聞こえてきた。

しかし、本人の姿は見あたらない・・・

フェアリー「ここよ～～～～！！」

上から声が聞こえているようだ。

一同は見上げてみた・・・

一同「!？」

見ると、城とは反対側の所に塔が立っていてその頂上から声を出しているようだ。

ショット「ってどんだけ遠くにいるんだよおおおおお!!」

シャーク「ていうか、何でそんなところに・・・」

ドラ「まっ！良いか！」

一同「いくねええええ!!」

ショット「一人、ほったらかしかよ!？」

ドラ「しょうがねえくだろう・・・」

シャーク「そうだな・・・」

レーツ「今やるべきことをやるんだな・・・」

ドラ「よしっ！お前ら!!行くぞ!!」

一同「オオオオオオ!!」

ドラ「水龍拳!!」

ドラはいきなり扉に向かって攻撃を仕掛けた。

一同「はっ？」

ドガン！！

扉は一瞬にして破壊された。

「よしっ！」

一同「よしっ！じゃねええええええ！！」

一斉にツッコミを入れた。

ドラ「どうした？お前ら？」

「シヨット「お前……もうちょい普通に入り方ができねえ」のか？」

シャーク「限度つてものがあるだろう!？」

ドラ「気にするな！水に流して忘れろ！」

一同「忘れられるかあああああ！！」

レーツ「ほら見る！お前が派手な入り方するからやつこさん方がお怒りだぞ・・・」

入り口の向こうには大量の部下達が待ち構えていた。

ドラ「ぶっ潰すぞ！！^{ツイン}W水龍拳！！」

敵に向かってぶっ放した。

部下「ぐはああああああ！！」

派手に吹っ飛んで行った。

レーツ「二刀流鷹 ^{ストレイトニードル} 鋭い嘴！！」

部下の軍団に向かって付きだした。

部下「ぐはっ！！」

次々に倒れていく。

シャーク「嵐脚^{ランキヤク}・枝垂れ桜！！」

足から斬撃を無数に繰り出した。

部下「！？」

部下達は眠るように倒れていく。

ショット「雪造形 虎の巻！！」

ショットは雪で虎を作ると部下目掛けて次々にタックルさせた。

部下「ぐはああああああ！！」

ドラ達は次々と敵を沈めていった。

暫くして

ドラ「ふう〜だいぶ片付いたな・・・」

シヨット「どんだけ数がいるんだよ・・・」

??「中々やるな・・・ルーキー海賊団ども！」

奥から数人の影が出てきた。

ドラ「テメエ〜がヒヤツキか？」

ヒヤツキ「その通りだ！だが、快進撃もここまでだ！我々がここで終わらせる！！」

ヒヤツキの後ろからさらに3人現れた。

??A「船長？やっちゃってよろしいですか？」

??B「こいつらが例のルーキーか？弱そうだな・・・」

??C「こんなの到手こずっていたあいつらの顔がみたいなあ〜！」

ドラ「なっ!？」

レーツ「まだ、いたのかよ！」

??A「俺たちをあの幹部共と一緒にするなよ！」

??C「実力って奴を見せてやるぜ！」

ヒヤツキ「最終決戦といこうか？」

第50章 最終決戦！ 動き出す敵の大將（後書き）

遂に動き出したヒヤツキ・・・

それと一緒にいた人たちはいつたい！？

お楽しみに！！

第51章 立ちはだかる百鬼夜行海賊団四天王

ドラ「テメエくら・・・何モンだ？」

?? A「我等は百鬼夜行海賊団四天王だ!!」

シヨット「四天王? 3人しかいねえじゃねえか？」

?? B「あれ? 本当だ!? いつの間に!？」

シヨット「いや、気づいていただろう・・・」

シヨットが軽くツツコミを入れた。

シャーク「ウイングがいねえ」

シャークがそうつぶやいた。

ドラ「あ、あいつも四天王なのか？」

シャーク「そうだよ!!」

ヒヤツキ「彼なら部屋で待たせてある。体力が回復していないのでな・・・」

?? A「オレは百鬼夜行海賊団四天王の一人 『黒夜叉のザック』だ!!」

?? B「同じく百鬼夜行海賊団四天王の一人 『黒刃のデス』だ！
」

?? C「同じく百鬼夜行海賊団四天王の一人 『黒銃のデッド』だ
！！」

シヨット「いかにも脇役くせえゝなあゝ」

シャーク「確かに脇役っぽいが腕は確かだぞ！」

ザック「脇役言っくな！！」

デス「サツサとおっぱじめるかあゝ！！まずは船長！！くたばれえ
えええええ！！」

デスが刀を引き抜きドラに斬りかかった。

??「アホか？」

デス「！？」

ズガン！！

デスはドラに攻撃を仕掛ける前に吹っ飛ばされた。

??「ばあゝか！どこの世界に大将と先にやらせる人がいる？」

デス「貴様あゝ！」

ドラ「レーツ！！」

レーツ「テメエの相手はオレだよ！黒刃さん？」

ザック「オレはジャーク中将！！テメエを狩る！！」

ザックはシャークに向かって刃を向けた。

シャーク「望むところだ・・・後悔しても知らんぞ？」

ザック「その言葉・・・そっくりそのまま返してやらあああああ
！！」

ザックはシャークを斬りつけた。

デッド「げっ！？出遅れたあああ！！」

パンツ！

シヨット「出遅れるなよ！三下が・・・」

シヨットの弾がデッドをかすめた。

デッド「嘗めるなあああ！！」

シヨット「別に嘗めてないぜ？お前なんか誰が舐めるかよ・・・汚
い・・・」

デッド「その舐めるじゃねえ！！」

ドラ「どうやら、お前と闘うのはオレみたいだな・・・ヒヤッキ！

！」

ヒヤッキ「そうだな・・・」

レーツ「二刀流鷹 鋭い嘴！！」
ストリートニードル

デス「ちっ！早え」

レーツ「どうした？四天王もその程度か？」

デス「バカか？オレはまだ0 / 0000000000000000・・・」

レーツ「って長いわああああ！！分かったよ！本気はまだ出して無いんだな？」

デス「まっ！そう言うことだ・・・」

レーツ「どうりで弱いわけだ・・・」

デス「何っ！？嘗めやがって・・・黒刃 乱れ刃！！」

デスは刀を二本持ち斬りかかった。

レーツ「くっ！さっきよりも早さが上がっていやがる・・・」

デス「どうした？手も足も出ないか？」

レーツ「確かにスピードは速い・・・だが・・・スキがありすぎだ。」

デス「何っ！？ハツタリがああああ！！黒刃 4枚刃！！」

レーツは剣を鞘に収めた。

デス「諦めたか・・・」

レーツはそのまま目をつぶった。

デス「トドメだ・・・」

レーツ「一刀流居合 鷹爪イーグルス！！」

スパーン！！

レーツ「くっ・・・」

デス「くっ・・・な、何故だ・・・」

デスはその場に倒れた。

レーツ「お前は攻撃の時には必ず無防備になるところがあるんだよ！そこはどこだかは自分で考えな！」

ザック（ちっ！デスがやられたか・・・）

シャーク「戦闘中によそ見とは良い度胸だな・・・指銃シガン！！」

ザック「くっ・・・！」

シャーク「お前ら四天王も落ちぶれたものだ・・・」

ザック「ふざけやがって！！暗鬼 鬼夜叉！！」

シャークに向かって乱舞した。

シャーク「ちっ・・・」（厄介だな・・・）

ザック「海軍元中將も落ちぶれたものだ・・・」

シャーク「そいつはお互い様だろう？」

ザック「ふっ！そうらしいな！おらあ！！」

ザックはシャークに向かって突進した。

シャーク「ここで負けるわけにはいかないな・・・」

ザック「くたばれええええええええええ！！」

ザックは剣を振りかざした。

シャーク「甘い！」

シャークは余裕に受け止めた。

ザック「ちっ・・・力でねじ伏せてやる！！」

ザックは押し返そうとした。

シャーク「オレの武器は刀だけじゃ無いぜ・・・」

ザック「はっ!？」

ザックは反射的に下を見た。

シャーク「惜しかったなあランキヤク嵐脚!!」

シャークは足から斬撃を放った。

ザック「しまっ・・・!!ぐはああああ!!」

もろに攻撃を喰らい仰向けに吹っ飛んだ。

シャーク「お前らとは格が違うんだよ!!」

第51章 立ちはだかる百鬼夜行海賊団四天王（後書き）

なんか、トントントン拍子に話が進んでしまいました・・・

次回はヒヤツキとのVSです!!

楽しみに!!

第52章 大将バトル開始！！（前書き）

―海軍本部―

元帥「騒がしいぞ！何だ！！」

少将「申し上げます！！」偉大なる航路^{グランドライン}”にて王下七武海の一角『
残虐のサード』がやられました！！」

元帥「何っ！？奴がか？」

少将「はっ！さらに別の島で『総大将のヒヤッキ』と交戦中の海賊
も！ただヒヤッキの海賊団が壊滅状態に！！」

元帥「何だと！！これ以上、七武海を減らすわけには・・・誰か使
える奴は？」

少将「クロ帽子のジャックが動けます！」

元帥「仕方がない・・・彼にヒヤッキの所へ向かわせろ！あと、そ
のサードを倒した、海賊の賞金首をあげておけ！」

少将「はっ！」

第52章 大将バトル開始！！

ドラ「とつととケリを付けるぜ！」

ヒヤツキ「はなからそのつもりだ！」

ドラとヒヤツキは睨め合っていた。

ドラ「行くぜ！！水龍拳！！！」

ドラが最初に動いた。

ヒヤツキ「ふんっ！甘い！バケバケ！！！」

ヒヤツキは変化した。

ドラ「！？」

ヒヤツキ「フレイムウォール炎の壁！！！」

ヒヤツキの目の前に炎の壁が現れた。

ドラ「なにっ！？」

シュー

あまりにも高温だったのか蒸発してしまった。

壁が無くなる頃にはドラのワザも消えかかっていた。

ヒヤツキ「炎ならいけると思ったか？バケバケ!!」

ドラ「!?そ、その姿は・・・」

ドラは動揺を隠せなかった。

ヒヤツキ「コレがどうした？」

ドラ「その体、どこでコピーした!!」

ヒヤツキ「何だ？知り合いか？確かかなり昔だな・・・」

ドラ「そいつをどうした!？」

ヒヤツキ「それは海賊だったからぶっ飛ばしたさ!まああの実だったのは良く覚えているなあゝ確か・・・」

ドラ「・・・ゴロゴロの実だろ？」

ヒヤツキ「そうそう!」

ドラ「名前はライって言っただろう？」

ヒヤツキ「そうそう!って知っているんだ？」

ドラ「そいつは・・・オレの親友だああああ!!」

ヒヤツキ「何だ・・・だからそんなに焦っているのか・・・だった
ら何だ？」

ドラ「テメエ！許さん！うおおおおお！！」

ヒヤッキ「なにっ！？ちっ！MAX3億ボルト！！」

ヒヤッキは手から電撃を放った。

しかし、電撃はドラの前に行く前にそれた。

ヒヤッキ「なにっ！？」

よく見ると水が違う方向へ流れていた。

ヒヤッキ「水が邪魔か・・・」

ドラ「許さねえええええええ！」

シュー

ドラの体から蒸気が出ていた。

ヒヤッキ「怒りで熱を持ったか・・・」

ドラ「はああああ！JET水龍拳！！」

ドラは蒸気と水との間の形にある龍を放った。

その龍は熱を持っていた。

ヒヤッキ「2億ボルト！！」

ヒヤツキは電撃を放った。

しかし、簡単に電気を吸い込んだ。

ヒヤツキ「何っ!？」

そのままともに食らった。

ヒヤツキ「ぐはあああああ!！」

ドラ「まだまだ!!!ウォーターブレイド水の剣!!!」

ドラは右腕を剣に変え、ヒヤツキに斬りかかった。

ヒヤツキ「畜生!!!」

ガキンツ!?

ドラ「何っ!？」

??「そこまでだ・・・ドラの気持ちも分かるがこっちにも事情があつてなあ」

ドラの剣を何者かが止めてた。

ヒヤツキ「オメエは・・・」

第52章 大将バトル開始！！（後書き）

すみません！！

2話連続更新と言っていましたか・・・

今日は都合によりできません・・・

楽しみにしていた方・・・本当に申し訳ありません！

明日も1話で終わりそうです・・・

3日から2話更新を頑張りたいと思います！

第53章 政府の対応

ヒヤッキ「お、お前は・・・」

??「ふうゝアブねえゝギリギリ！」

ドラ「ク、クロ帽子の・・・おっさん！」

ジャック「ガクツ！おっさんじゃねえゝ！まだ29歳だぞ！！お兄さんだ！」

ジャックがドラの攻撃を受け止めていた。

ヒヤッキ「何故、貴様が割って入ってくる！」

ジャック「お前に知らせだ！王下七武海の一角『残虐のサード』がやられた！」

ヒヤッキ「何っ！？それは本当か？」

ジャック「ああ、それで政府はこれ以上七武海を減らしたら困ると言うことでお前を助けるとのお達しが来たのさ！」

ヒヤッキ「そいつを倒したのは？」

ジャック「まだ、未確認だ！名前までは聞いていない！最近名をあげ始めたルーキー海賊らしいな！そう、ドラみたいな！」

ヒヤッキ「しかし・・・」

ジャック「お前は海賊の始末・・・だが今回ばかりは訳が違っ！すぐにも本部から招集の命令が来るぞ！」

ヒヤッキ「オレはこいつとの決着を・・・」

ジャック「お前は負けていた！それで終わりだ！！」

ヒヤッキ「ちっ・・・」

??「ああゝあ負けちゃったかゝゝつまらないなあゝ！」

突然奥から声が聞こえた。

ヒヤッキ「お前か・・・ウイング！」

ウイング「おや！クロ帽子の旦那までご一緒でしたか？」

ジャック「今頃の登場か？」

ウイング「ここにいても・・・もう面白くないや！」

ヒヤッキ「ど、どういう意味だ？」

ウイング「オレは今日を以てこの海賊団を抜ける！」

ヒヤッキ「何っ！？」

ジャック「そんなことしたらお前は政府から追われる立場になるんだぞ！」

ウイング「オレはさあゝ強い奴にしか興味は無いんだよね！あと、面白い奴！」

ヒヤッキ「う、裏切るのか？」

ウイング「裏切るねえゝオレはこの海賊団が強かったから入っただけだ！そのうちにこの海賊団を越す海賊が出たらそっちに付くつもりだったよ！」

ヒヤッキ「はなからそのつもりで・・・」

ウイング「まあゝそれもあるけど、この海賊団は退屈なんだよ！もっと刺激がなくちゃ！もっと、相手をいたぶれるような・・・」

ジャック「それで、どうするつもりなんだい？」

ウイング「そこでだ！『水龍のドラ』！オレを君の海賊団に加えてくれ！」

シヨット「バカ言ってるじゃねえゝよ誰が敵だった奴を・・・」

ドラ「そっか・・・良いぜ！」

シヨット「ほら見る！ダメじゃ…えっ？今良いつて言った！？マジで？」

ドラ「ああ！」

シヨット「いつ裏切るか分かんない奴だぞ！」

ドラ「そんな時はそんな時だ！オレが潰してやる！」

ウィング「そう言うことだ！よろしく頼むよ！総大将！今までお世話になりました！それじゃ！」

ドラ「ところでジャックはどうするんだ？」

ジャック「政府に伝えないとな！ドラ！お前の賞金首は確実に上がるぞ！覚悟しておけ！あと、他の連中にも首が掛かりそうだ！」

シヨット「マジか！？」

ジャック「オレはこれで失礼する！ヒヤッキ！お前は後のことを頼むぞ！」

ジャックはそう言うのと体を無数のハトに分解して朝日が昇る空へと飛んでいった。

ウィング「この島の久しぶりに朝だ・・・」

ドラ「よし！オメエーら！！船に戻るぞ！！」

ドラはそう言うとき乗組員達クルーを引き連れ海岸へと走っていった。

空には太陽が輝き始めていた。

戦いの終わりを告げる気持ちに良い朝日だ。

第53章 政府の対応（後書き）

はあゝ疲れた・・・

遠足に行っていたもので・・・

足がめっちゃ痛いです！

そろっと新章に突入です！

コラボを募集しています！！

次回も青楽しみに！！

第54章 束の間の休息

ドラ「ふわああああ」

甲板でドラは大きなあくびをした。

本日は晴天。

気候は春時々夏。

フェアリー「そろつと次の島の気候に入ってくるわ！」

ショット「シャーク！お前また変な発明か？て言うか休息シリーズでお前いつつも何か作ってんだろっ？」

シャークはまた何やら機械を作っているようだ。

シャーク「そおゝかゝ？とりあえず前回のことを反省して改良中だ！」

ショット「また、爆破するなよ！今度は島じゃなくて船が吹き飛ばんだからな！」

シャーク「分かってるって！」

ウィング「君たちは戦いが無ければ暇な海賊さんか？」

ドラ「普段はこううゝのんびりしてんだよ！各自の自由タイムだ！」

ウィング「へえ」

ショット「お前は少しは働けよ！ドラのおかげでこの船に乗れるんだからな！」

レーツ「そう言うお前もな！魚釣れなかったら昼飯ぬきな！」

ショット「へっ？またまた、キツイ冗談を」！

レーツ「本気さ！」（ニコッ）

レーツは笑顔を作った。

ショット「ゾクッ！あの笑顔がまた怖い……」

ドラ「暇だなあ……」

レーツ「だったらお前も魚でも釣っておけ！」

ドラ「ええ、また海に流されたらどうするんだよ……」

レーツ「んなこと言ってたてこの船、能力者が9割を占めているだろ？お前だけ特別は無いんだよ」

ドラ「ええ……オレは疲れているんだ……」

レーツ「そんなの全員同じだ！ボケエ……」

バキッ！

レーツがドラを殴った。

ドラ「いつてえゝ!!」

ドラは頭に大きなたんこぶを作っていた。

その様子を見たウイングが

ウイング「その料理人^{コック}！お前は覇気使えるのか？」

レーツ「バカ言えゝ！そんなもの使えないよ！コレで殴ったのさ
！」

とレーツは海楼石の指輪を見せた。

ウイング「へえゝ面白いなあゝ！」

シヨット「おい！アレなんだ？」

シヨットは急に何かに気づいた。

ドラ「どうした？」

レーツ「敵船か？」

シヨット「敵船じゃないな・・・ほら！」

シヨットが指を指した。

その先には鳥らしきものがたくさん飛んでいた。

レーツ「鳥だな・・・」

ドラ「アレ、焼いたらうまいかなあ」（ジュール）

ドラは想像しただけで涎がでた。

シヨット「お前は食うことだけかよ!？」

シヨットがツツコミを入れた。

シヨット「まあ、何にしろオレには関係ねえな!オレ寝るわ!」

そう言うとシヨットは甲板の柵に寄りかかりいびきをかき始めた。

シヨット「ZZZZZZ・・・」

全員「寝るの早ッ!」

レーツ「確かあゝ鳥の群れの下にはたくさんの魚がいるって聞いたな・・・」

ドラ「マジかあゝゝゝ!」

ドラは涎を出して目を輝かせた。

レーツ「いや、食べる方を想像するなよ!まっ!食料にも困っていたしな・・・」

ドラ「魚だああああ!!」

レーツ「待てっ!!」

レーツが今にも飛び出しそうなドラを引き留めた。

レーツ「オメエは能力者なんだから少しは考えろ!! 助けること
ちのみにもなってみろ! 一般人は一人しかいないんだぞ!」

フェアリー「どうせ・・・一般人ですよ!」

レーツ「あっ・・・いやぁーそう言う意味で言ったんじゃないってえ
ゝゴメンねえゝ!!」

ドラ「じゃ、海に入らなければ良いんだな!」

レーツ「まあ、そう言うことだ!!」

ドラ「よしっ! 水の大きな手!!」
ウォータービッグハンド

ドラは右手を巨大化した。

ドラ「いつけえゝ!!」

ドラは思いつきり手を伸ばした。

ドラの手はまっすぐ目的のどこまでつく海面をわしづかみにして
船に引き寄せた。

ドラ「おりゃあああああ!!」

だが、勢い余ってドラの巨大な手はそのまま昼寝をしているショットに直撃した。

ドンー！！

そして、その勢いでショットは海に放り出された。

ドラ「あっ！？」

ショットは溺れているのをロープで引き上げられた。

引き上げられているショットの顔はやつれていた。

ショット「ドォーラァァいつか・・・撃ち殺す・・・」

引き上げられながらショットはそう言った。

ドラ「ワリィ・・・ショット！」

ドラは謝った。

レーツ「ところでドラ！何を引き上げたんだ？」

ドラ「魚！・・・ってあれ？」

ドラが引き上げたものは・・・

全員が輪になって見下ろした。

一同「……人間!？」

第54章 束の間の休息（後書き）

さて、引き上げられた人たちはいったい！？

次回に続きます！！

今回は一旦、お約束のグダグダタイムです！

ドラ「いや、作戦会議だ！！」

シヨット「いや、いつもグダグダやっているよね？」

ドラ「それ乗り越えてこそ！少年は真の大人になるんだ！」

シヨット「いや、違うよね！」

ドラ「と言っわけで楽しみにしておけよ！」

シヨット「誤魔化した！？そして上から目線！？」

第55章 事前の準備はお早めに！

ドラ「はい、と言うわけで次回から新章に入るので急遽、集まって貰いました！」

レーツ「フライング・タイガー号の食堂を使ってお送りしまぁ〜す！」

シヨット「なに、今日はずっとこんな感じでやるの？」

ドラ「ああ、そうだ！だって、銀。だってこついつのやるじゃん・・
」

シヨット「ていうか、この前もその前も同じこと言わなかったか？
しかも前とメンツ同じだし！」

ドラ「ああ、そくだよ！使い回しにしているんだよ！」

シヨット「何で使い回し？どんだけサボっているんだよ！」

ドラ「まあ、いろいろあるんだよ！」

シヨット「いろいろって何だよ！」

ドラ「大人の事情ってやつさ！」

シヨット「どんな事情だよ！？」

ドラ「まあ、それはさておき・・・
」

シヨット「誤魔化した!？」

ドラ「次回から始まる新章は・・・」

シヨット「新章は・・・？」

ドラ「長編のコラボに決定だあああああああ!!」

シヨット「マジか!？」

ドラ「ああそうだ!」

シヨット「コラボって初めてやるから何か緊張するな・・・」

レーツ「何言っているんだ!俺たちだって数々の名作とコラボをしていただろう・・・銀。しかりぬらり。。。の孫とか・・・」

シヨット「それは勝手にパクッてただけだろう!!」

ドラ「そうだなあゝその後に数々の苦情の電話が・・・」

シヨット「殺到していないからな!メッセージなら分かるが・・・」

ドラ「来るはず無いだろう!最後にちゃんと謝罪したから・・・」

シヨット「じゃ言っなよ!？」

ドラ「それともかくコラボ相手を発表する!」

ショット「ゴクッ」

レーツ「ゴクッゴクッ」

ショット「って何お前だけ飲み物飲んでんだよ!？」

レーツ「気にするな! BGMオンリーなんだから・・・気づかないさ!」

ショット「いや、明らかにゴクッって音一つ多かったよな!」

レーツ「プハア」

ショット「やっぱり飲んでたな!？」

レーツ「だって出番が無いんだもん!」

ドラ「そろそろ良いか？」

ショット「あつ! 良いぜ!」

ドラ「その相手は・・・『デジモン エグザ02』だ!」

ショット「おお、前に俺たちが行った世界かあ」

ドラ「今度は彼らが来るのさ!」

ショット「なるほどあ」

レーツ「だがコラボって行っただて何をするんだ?」

ドラ「そりゃ〜銀。とスケツト。ンスのコラボみたいにするかあ〜」

シヨット「いや、あれはただ部室でピーーーーーしてただけじゃないか!」

ドラ「バカッ!それを言っちゃダメだって!あと、お前が狂ったら俺たちを誰も止める奴がいなくなるだろう!」

レーツ「そうだそうだ!!ちゃんとやれ!!」

シヨット「いや、お前にだけは言われたくないな・・・」

ドラ「そうそう、大事なことを言うのを忘れてた・・・」

シヨット「大事なこと?」

ドラ「ああ・・・」

シヨット「まさか、『コラボやるやる詐欺』じゃないだろうな?」

ドラ「いや、それはない・・・だが彼らはもう既に登場しているぞ!」

シヨット「マジか!?!」

ドラ「ああ、オレが引き上げた奴ら・・・」

シヨット「アレかアアアアア!!!」

レート「あれって言っちゃ失礼だろう！」

ドラ「まあ、適当にドンちゃかやってくれとのことだ・・・まあ、下手すれば賞金首なっちまうからな！」

シヨット「そうしないようにしないとな・・・」

レート「賞金首になったらどうするんだ？今回は長編だぞ！」

ドラ「あれじゃね！例えば『二挺のリユウ』とか？」

シヨット「いや、『金髪のリユウ』かもよ！」

レート「なにせよ暴れすぎは気を付けろってことだな・・・」

ドラ「まあ、軍艦一隻の沈没ぐらいかあ」

シヨット「いやいやいや・・・明らかに暴れすぎだよな！て言うか俺たち賞金アップだから狙われやすくな？」

ドラ「なんとか切り抜ける！」

レート「じゃ、そろそろ締めのお合図だ！次回からは・・・」

ドラ「次回からは『VSデジモンエグザ 4人の勇士編』だ！！絶対見てくれよな！」

シヨット「BGMオンリーも気を付けた方がよくな・・・」

ドラ「この時だけだ多めに見てくれるさ！」

第55章 事前の準備はお早めに！（後書き）

と、言うわけで次回から長編のコラボです！！

トリプルミーミングさんの『デジモンエグザ02』とのコラボです
！！

楽しみに！！

第56章 騒がしい客人達（前書き）

さあ〜始めました！！

長編のコラボです！！

今回はトリプルミーミングさんのデジモンエグザ02とのコラボです！！

どうぞご覧下さい！！

第56章 騒がしい客人達

??「・・・・・・はっ!？」

ガバツ

目が覚めると見知らぬ天井が見え、見知らぬ部屋にいた。

レーツ「おっ!目が覚めたか・・・おつとまだ無理はするなよ!」

??「あ、アンタは・・・」

レーツ「お前には久しぶりって言った方が良いのか？」

??「あっ!？ドラのとこの!」

レーツ「久しぶりだなリュウ!てか何でオレが主人公みたいなこと言わなきゃいけないえゝんだよ!？」

リュウ「てことはここは水龍海賊団の船か？」

レーツ「まっ!そう言うことだな!ちなみにお前のお仲間さんなら別室でぐっすりだ!」

リュウ「そうか・・・」

レーツ「ドラなら甲板にいるぜ!」

リュウ「そうか・・・」

リュウはそう言うつと外へと出た。

ガチャ

ドラ「あつ！目、覚ましたんだな！」

リュウ「ああ・・・久しぶりだな！」

ドラ「そうだな！てか・・・数日ぶり？」

リュウ「あいつらは？」

ドラ「あそこで黄昏れているぜ！」

ドラは指を指すとその先にヒナタとケントとシヨウがいた。

ドラ「ところで何でオメエはあんなところで船を浮かべていたんだ？」

リュウ「それはだな・・・話せば長くなる・・・」

ドラ「ってそれオレが前言った奴だろう！？」

シャーク「話ならオレにも聞かせろよ！」

全員が集まってきた。

リュウ「実は・・・」

時は少し坂登数日前・・・

リュウ「ああゝかったりゝ」

リュウはいつもの用によろず屋のソファで横になっていた。

ドラコモン「だったら仕事しろよ！この無職！！」

リュウ「うるせえゝ黙ってろ！永遠に！」

ドラコモン「ヤレヤレ・・・コレだからガキは・・・」

リュウ「ガキじゃねえゝゝ！！！」

ボカツ

ドラコモンの頭を強打した。

ドラコモン「いつてええええええええええ！！！」

プルプルプルプル・・・

デジヴァイスが鳴った。

リュウ「もしもし・・・」

アグモン博士「あつ！リュウだギャ？すごい発明が完成したギャ！」

リュウ「またポンコツロボットで作ったのか？ご苦労なこつた！じやあな・・・」

アグモン博士『待つだギヤ！今回はすごいギヤ！』

リュウ「はいはい・・・いきゃゝ良いんだろう！見るだけな！2秒だけ！」

アグモン博士『ひ、ひどいギヤ・・・』

プツッ

リュウ「バカトカゲ！行くぞ！」

ドラコモン「誰がトカゲだ！！あとバカじゃないぞ！！」

リュウ「あつ！ワリイワリイ・・・大食いバカトカゲ！」

ドラコモン「多くなっているだろう！！」

二人はいつもの用に口げんかをしながらポンコツは・・・アグモン博士のポンコツけ・・・研究所に向かうのであった。

アグモン博士「今、ポンコツって言ったギヤ！？」

ー研究所ー

リュウ「でえゝ今度は何を作ったんだ？」

ヒナタ「あれっ？リュウさんも呼ばれていたんツスか？」

ケント「また無職が・・・」

（ボソッ）

リュウ「おい！今なんか言ったか？」

ケント「いえ・・・何も・・・」

そう言うとケントは中指で眼鏡をズリあげた。

シヨウ「まあまあ・・・」

リュウ「で、何でこの脇役までいるんだよ！！」

シヨウ「脇役って！？オレはアグモンのパートナーだぞ！！いちや
ワリィのかよ！！」

リュウ「ああ！！」（キッパリ）

シヨウ「アハハハハ・・・」

シヨウは端でいじけだした。

リュウ「よし！バカは放っておいて何を作ったんだ？」

アグモン博士「聞いて驚くなギャ！その名も居場所転送装置だギャ
！！」

リュウ「……………」

ヒナタ「……………」

ケント「ヤレヤレ……………」

ショウ「シクシク……………」

アグモン博士「そのリアクションはなんだギャ??? 言うか最後の方がひどくなっているギャ!??」

リュウ「一番最後の奴は気にするな! いつも通り俺たちに実験台になってくれだろう! で、どうせシステムエラーが起こるんだろう?」

アグモン博士「そ、そんなことないギャ! 確かに実験台にはなって欲しいギャ!」

リュウ「ほれ見ろ! 帰る……………」

アグモン博士「まままま、待つだギャ!! 今回こそは失敗しないギャ!!」

リュウ「本当かあ?」

ヒナタ「まあまあ……………リュウさん! たまには良いじゃないッスか!」

リュウ「たまにはだとおくほとんど毎回こんなオチだろう! てか、ネタ切れってことがバレバレなんだよ!」

ヒナタ「ちよっ！リュウさん！今はそれ関係ないツスよ！」

リュウ「しょうがねえ〜な〜やってやるぜ！」

アグモン博士「本当だギヤ？」

リュウ「その代わり後でカツ丼10年分な！」

ヒナタ「じゃ、オレは最新モデルのバットをお願いするツス！」

ケント「なら、100万ほど・・・」

シヨウ「じゃあ〜オレは・・・」

リュウ「テメエ〜はスツコンでろ！！」

シヨウ「ホギョブウウウウウ！？」

シヨウはリュウに強烈なケリを喰らった。

リュウ「で、どうすれば良いんだ？」

アグモン博士「今回は4人乗りだギヤ！」

リュウ「そうかそうか・・・4人か・・・一人足りないな・・・」

シヨウ「ねえ？オレここにいるよねええええ！！普通はここでオレを連れて行くよね！！」

リュウ「しょうがねえ〜な〜」

シヨウ「おっ！」

リュウ「じゃ、誰か呼ぶか・・・暇な奴くらいいるだろう・・・」

シヨウ「ヒドッ!？」

シヨウはまた隅っこでいじけだした。

アグモン博士（毎度毎度のことながらひどいギャ・・・）

暫くして・・・

リュウ「ちっ！誰も暇な奴いねええゝゝゝ!!」

シヨウ「それじゃ！オレを・・・」

リュウ「おい！3人じゃ無理なのか？」

ヒナタ（中学生のいじめツスか？）

アグモン博士「それは無理だギャ！」

リュウ「ちっ！おい！バカ脇役！いじけてねえゝでさっさと行くぞ！」

シヨウ「待ってましたああああ!!」

アグモン博士「じゃ、準備は良いだギャ？」

リュウ「いつでもOKだ！」

アグモン博士「じゃ、とりあえずスレッド大陸まで転送するだギヤ
！」

リュウ「大丈夫なのかあ」

アグモン博士「99.9%安全だギヤ！」

リュウ「残りの0.1%は何だよ？安全じゃないのか？」

アグモン博士「細かいことは気にせず・・・行ってくるギヤ！！ポ
チツとな！」

アグモン博士は機械のスイッチを押した。

「テンソウカイシ・・・テンソウカンリョウ20%・・・40%」

徐々に数値が上がっていく。

アグモン博士「コレは順調だギヤ！！今度こそ成功だギヤ！！」

博士はうれしくなつて小躍りを始めた。

アグモン博士「ふふふふ」

ドカツ

アグモン博士「・・・・・・あつ・・・・」

博士は調子に乗りすぎて機械に体をぶつけてしまった。

アグモン博士「…………ヤバイギャ…………!？」

「…………システムエラーシステムエラー…………」

アグモン博士「衝撃だけでこんなにかギャ？」

「テンソウイチガズレマシタ…………」

アグモン博士「ああゝずれたギャか…………」

博士はだらだらと汗を掻き出した。

アグモン博士「よし!しいゝらあゝねえゝと!！」

アグモン博士はその場を退散した。

そして、リュウ達が次に目を開けるとそこはどこまでも続く蒼い海の上にいた。

リュウ「あのポンコツウウウ…………!!またしくじりやがったな!！」

何故か3人はボートの上にいた。

リュウ「てなわけだ！」

ドラ「長っ！？一話分終わっちまったぞ！？」

リュウ「気にするな！次回は自己紹介だろうっ」

ドラ「ていうか勝手に決めるなああああ！！」

ショット「おっ！珍しくドラがツツコミを入れている・・・」

レーツ「いや・・・そこは違っだろう・・・」

ドラ「とにかく大変だったみたいだな・・・」

リュウ「つうくか・・・暫くこの船で厄介になるわ！」

ドラ「はっ！？」

リュウ「それがよぉ～さつきからポンコツ博士の野郎・・・通信に出ねえ～んだよ！！と言うわけだ！よろしくな！」

ドラ「うおおおおい！！」

ドラの叫びは天空まで響いたらしい・・・

第56章 騒がしい客人達（後書き）

コラボ編が開始しました！！

どうでしょうか？？

これからドタバタと慌ただしくなりますよぉ

では、次回もお楽しみに！！

第57章 10人の談笑

ドラ「と、とりあえず・・・リュウ以外はよく分からないだろうか・・・簡単に紹介しておくか・・・」

リュウ「そうだな！頼むぜ！」

ドラ「ええ」とまず・・・うちの狙撃手のショットだ！」

ショット「よろしく」

ドラ「狙撃の腕は世界・・・らしい・・・」

ショット「らしいじゃなくて・・・そうなの!!」

ドラ「で、うちの航海士のフェアリーだ！」

フェアリー「よろしくね!!」

ドラ「航海術は普通の人の倍は持っているぞ！」

ショウ「おお!!」

ドラ「何だ!？」

ショウ「何と美しい!!お嬢さん!どうです?今晚・・・オレと一緒にディナーでも行きませんか?」

ショウが突然フェアリーに話しかけてきた。

リュウ「また、悪い癖が・・・」

ドラ「おい！リュウ！」

リュウ「どうした？」

ドラ「あいつ・・・死ぬかもよ！」

リュウ「あの女にやられるのか？あれでも剣の腕はすごいんだからな！」

ドラ「いや、そう言う訳じゃ無くて・・・」

ショウ「どうです・・・こんなぼろい船なんて放つといてオレと一緒に旅をしませんか？」

フェアリー「ア、ハハハハハ・・・」

フェアリーは営業スマイルをしていた。

ドラ「と、とりあえず・・・次に行くか・・・うちの料理人^{コック}のレーツだ！・・・ってあれ？どこ行つた？」

レーツ「ワリイ！ドラ・・・ちょっと待ってくれないか・・・こいつを・・・」

ショット「ぶちのめしてからだ！」

見ると、レーツがショウの胸ぐらを掴みあげ首に刀を当てていた。

その横でシヨットがシヨウウの首に拳銃を突きつけていた。

レーツ「テメエ、何、フェアリーちゃんに馴れ馴れしい口を聞いているんだ？ああん？」

シヨット「テメエどこがぼろい船だつて……誰が改造したと思
っているんだ！？ああん？」

二人の怒りはMAXに達していた。

シヨウ「ひよえええええゝゝゝ！？」

リュウ「あのショウを一撃で……」

ドラ「死ぬかもな！」

リュウ「自業自得だ！」

ドラ「そこまでしておけよ！ そいつも反省しているみたいだからな！」

レーツ「ちえっ！ テメエ！ 今度フェアリーちゃんに近づいたらオレがただじゃおかないからな」

シヨット「ボロとか言っくなよ！」

ドラ「で、こいつがうちの科学者のシャークだ！」

シャーク「よろしく！」

ドラ「いつも変な機械を作っているが・・・腕は確かだ！」

シャーク「そう言うこと」

ドラ「で、次がうちの船医だ！リュウも初めて会っただろう？」

リュウ「そうだな・・・この前はいなかったな・・・」

ドラ「うちの船医のウイングだ！」

ウイング「よろしくな」

ドラ「これが俺たち水龍海賊団だ！」

リュウ「じゃ、こっちも適当に紹介しておくか・・・まずはオレのパートナーのドラコモン！」

ドラコモン「よっ！」

リュウ「で、ヒナタとそのパートナーのコロナモンだ！」

ヒナタ「よろしくッス」

コロナモン「よろしくな！」

リュウ「で、ケントとパートナーのルナモンだ！」

ケント「以後お見知りおきを！」

ルナモン「よろしくお願いします！」

リュウ「で、最後に脇役だ！」

シヨウ（脇役）「おい！？脇役なんだよ！！オレは剣の達人シヨウだぞー！」

リュウ「んなこと言われてもな・・・名前の隣に脇役ってなっているし・・・」

シヨウ（脇役）「何っ！？いつの間に!？」

リュウ「まあ、あいつは放っておいて・・・これが俺たち・・・頼まれたら何でもするよろず屋 デジモンJETだ!!」

リュウ達はいつもの決めポーズをする。

ドラ「よろしくな!!」

レーツ「フェアリーちゃん!! ニュース・クーが新聞を配達に来たよ!!」

フェアリー「あっ！ありがとう!! 今行く!!」

フェアリーは走って船の後ろ側へ向かった。

リュウ「何だ？ニュース・クーって・・・？」

ドラ「ニュース・クーってのは新聞配達をする力モメだ！」

リュウ「カモメが新聞を配達するのか？」

ドラ「ああ！金払うまでどこも行かないんだ！」

リュウ「利口なんだな・・・」

ドラコモン「リュウよりじゃない？」

リュウ「んな訳あるか！？」

ボカツ！！

リュウはドラコモンの頭を殴った。

ドラコモン「イッてええええええ！！」

そこへフェアリーが駆け込んで来た。

フェアリー「ドラ！！大変よ！！」

ドラ「どうした？そんなに焦って・・・」

フェアリー「と、とにかく大変よ！！懸賞金が・・・」

ドラ「上がったのか！？」

ドラは半ば喜んで聞いた。

フェアリー「ええ、それはそうなんだけど・・・ドラだけじゃないの！？」

ドラ「マジか!？」

リュウ「何だ?懸賞金てのは・・・」

ヒナタ「犯罪者に掛けられるアレックスか？」

レーツ「まあ、そんな感じだな・・・で、いくらなんだ？」

フェアリー「まずは・・・『水龍のドラ』 懸賞金・・・2億ベリ
ー!」

ドラ「いやっほおー!!億に行つたあああ!!」

フェアリー「次よ!」

ドラ「まだあるのか？」

フェアリー「ええ・・・『鷹の牙 レーツ』 懸賞金・・・7千万
5千ベリー!」

レーツ「マジか!？」

フェアリー「まだあるわよ!・・・『夜鳥のウィング』 懸賞金・
・1億ベリー!」

ウィング「まあ、それくらいだろうね・・・」

フェアリー「次よ!・・・『海鯨のシャーク』 懸賞金・・・9千
5百万ベリー!」

シャーク「マジか!？」

シヨット「オレは!？」

フェアリー「あるわ!・・・『雪虎のシヨット』 懸賞金・・・8
千5百万ベリ!」

シヨット「マジかああ!？」

ドラ「フェアリーのはあるのか？」

フェアリー「あるわけ無いでしょう!？私はあの時一緒にいなかったんだから!！」

シヨット「そうだったな・・・」

リュウ「あ、あのさあゝイマイチ・・・話がつかめないんだが・・・
懸賞金って何だ？」

ドラ「懸賞金てのはな・・・俺たち海賊や犯罪者に掛けられる金で・・・
その金額でそいつの強さがだいたい分かるものなのさ!」

リュウ「なるほど・・・で？」

ヒナタ「リュウさん今の説明で分からなかったんスか？」

リュウ「イマイチ・・・」

ケント「コレだから・・・無職は・・・」

(ボソッ)

リュウ「ケント!!何か言ったか?」

ケント「いえ、何も・・・」

リュウ「要するに・・・お前らは上級犯罪者って言う訳か・・・?」

ドラ「まあ、そういうことだな・・・」

リュウ「改めて・・・ドラ!オメエはホントスゲエだな!」

ドラ「あつたり前だ!!」

リュウ「オレも賞金首になれるのか?」

ヒナタ「って何リュウさんもうとしているんですか!?!犯罪者ツスよ!?!」

リュウ「なんか・・・面白そおくだろう?」

ヒナタ「そうツスカ・・・?」

シヨウ「よおし!!オレは賞金首になって脇役から脱退だああああああ!!」

リュウ「そうかそうか・・・脱退か・・・無理に決まってるだろうおおおおお!!」

シヨウ「グベラアアアアア!?!」

リュウは強烈なキックをシヨウにお見舞いした。

リュウ「オメエが脇役脱退なんて百年早えんだよ！！シヨウ」
脇役なの！こう言う方程式になっているの！！分かったか？よお
しここテストに出るから気を付けろよ！」

ドラコモン「先生！！分かりました！！ところでリュウ」無職はテストに出ますか？」

リュウの顔が引きつった。

リュウ「ドラコモン・・・！？そんなの出るわけ無いだろうとおおおおおお！！？」

リュウはドラコモンをボコボコにした。

ドラコモン「ズ、ズビバゼン・・・デジダ・・・（すみませんでした）」

（ガクッ）

リュウ「はい！と言うわけで、ドラコモン！バケツを持って廊下に立ってなさい！！！」

ドラ「アハハハハハハ！！オモシレエな！！お前ら！！！」

ヒナタ「違うツスよ！リュウさんが大人げないからツスよ！」

ヒナタはドラに耳打ちした。

ドラ「そうかあ」

コロナモン「ヒナタ！後ろ・・・」

ヒナタ「えっ？どうしたツスカ・・・！？」

ヒナタは後ろを振り向くと見てはいけないものを見てしまった。

それは・・・禍々しいオーラを放ったリュウが手をポキポキ鳴らしながら立っていた。

ヒナタ「アッアハハハハハ・・・ど、どうしたんスカ・・・？」

リュウ「ヒナタくうん・・・誰が・・・大人げないって？」

ヒナタ「え、ええくと・・・」

リュウ「分かるように説明してくれないかな？」

ヒナタ「ひよええええええええええ！？」

ヒナタの声は天空まで響いたという。

第58章 襲撃連発！？

ドラ「ああゝ暇だなあゝ」

ドラは甲板で愚痴をこぼしていた。

どこへリュウがやってきた。

リュウ「て言うか・・・お前らって・・・いつもこうなのか？」

ドラ「ああ！海賊ってのはそんなものよ！まあゝどこぞの海賊が名をあげるために襲撃とかは受けるけどな！時々だけど・・・」

リュウ「それ以外はいつも暇しているのか？」

ドラ「ああそうだ！海賊とかが攻めてこないかなゝ」

リュウ「いや・・・そんなべたな展開が・・・」

そこへショットが駆け込んで来た。

ショット「ドラー！！6時の方向に海賊船一隻発見！ものすごいスピードでこっちに向かって来ている！砲台も見えるぞ！どうせどこぞの海賊が名をあげようとしてきたのかなゝ」

リュウ・ドラ（ベタな展開、来たあああああゝゝ！）

リュウとドラは心の中で思いつきり叫んだ。

ドラ「よし！攻撃を仕掛けてきたら仕返すぞ！みんなに知らせるんだ！準備を整えるんだ！」

ドラは早速指示を出した。

ショット「分かったぜ！」

ショットは直ぐさま船室へと走っていった。

リュウ「おい！攻撃される前にすれば良いじゃないかよ！」

ドラ「いや・・・そんなのじゃもし間違ってたらダメだろう・・・海賊ってのは全部違うのさ！オレの海賊団は『攻撃されたら100倍にして返せ！』てのがモットーだからな！」

リュウ「そんなのもかいねえ」

ドン！！

船の左右で水柱が上がった。

ドラ「おっ！撃ってきた！仕返しだああああ！！野郎共！！俺たちにケンカ売ったことを思い知らせてやれええええええ！！」

ドラはみんなにそう叫んだ。

ドラ「ショットは砲台の準備を！」

ショット「了解！」

ドラ「シャークは船の舵を！」

シャーク「任せろ！」

ドラ「レーツとウイングは乗り込み時の時に備えて準備だ！」

レーツ・ウイング「任せろ！！」

ドラはそれぞれに指示を出した。

リュウ「俺たちは・・・？」

ドラ「ん？まずは見学でもしてて！海賊つてのを教えるからよ！！」

リュウ「いや・・・我慢できないけど・・・3話分も暴れてないと結構頭にくるんだよね・・・」

ドラ「ダメ！」

リュウ「うおい！？もう、我慢できねえ！！ドラコモン！！行くぞ！！！」

ドラコモン「えっ？良いの？」

リュウ「良いから！！進化だ！！」

ドラコモン「はいはい・・・」

ドラ「ちょっ！オメエゝら待てよ！！！」

ボン

ヒナタがドラの肩に手を置いた。

ヒナタ「諦めた方が良いツスよ！リュウさん・・・一度言い出した
らきりがないツスから・・・」

ドラ「だけど・・・奴らは能力者だぞ！！生半可の奴が敵うわけが
！？て言うかオレが主人公だぞ！！良いところはオレにさせるおおお
おお！！」

ヒナタ「って！アンタもツスか！？」

ヒナタはツツコミを入れた。

ドラは全速力でリュウの後を追っていった。

ドラ「待てえええええ！！手柄はオレだあああああ！！て言う
かオレの船だぞ！！」

リュウ「うおお！？走るの早っ！？負けるなドラコモン！進化だ！
」

ドラコモン「ドラコモン 進化！！」

ドラコモンのデータがはがれ新たなデータが書き込まれていく。

??「コアドラモン！！」

ドラ「な、なんだ！？姿が変わった！？つうくか・・・カッケエエ

エエエエエ！！」

ドラの目が輝いた。

リュウ「今回はオレの勝ちだな！」

そう言うリュウはコアドラモンに飛び乗ると海賊船に飛んでいった。

ドラ「あつ！？きたねえぞ！？」

リュウ「勝負にきたねえもクソも無いんじゃないか？ドラ君？」

ドラ「ってそれ、この前俺が言ったやつだろう！？」

リュウ達はドンドン海賊船に迫っていった。

ドラ「畜生……あつ！良いこと考えた！何だあ！最初からそうすれば良かったんだ！と言うか……届くかな？」

ドラは手を前にかざした。

その頃リュウは……

リュウ「ハッハッハッハッハッ！ドラを出し抜いたオレってスゲえなあ！」

リュウは有頂天だった。

リュウ「よし！！突撃だ！！」

リュウはコアドラモンに乗ったまま海賊船に突っ込もうとした・・・
そのとき・・・

リュウ「何っ！？」

海賊船がみるみる海水で包み込めれていった。

そして巨大な水の球体ができた。

リュウ「このワザは・・・まさか！？」

リュウは反射的に振り返った。

船の方を見るとドラがこっちを見てニヤけていた。

リュウ「いや！？そっちの方がセコだったあああああ！！」

コアドラモン「自業自得だよ！」

リュウ「うるせええええ！！」

ーフライング・タイガー号ー

ドラ「頭良いなあーオレって・・・クラッシュュ！！」

そのまま敵の海賊船を押しつぶした。

ドラ「一件落着！」

ショット「ドラ!!!大砲を持ってき……!？」

ドラ「あっ！シヨットワリイも片付いちまった・・・でもまあ
 終わり良ければ全てよしっていうだろう？」

シヨット「レース……あの指輪貸して」

ドラ「??」
(汗)

「レックスへいへい……はいよ！」

レースは指輪をショットに投げて渡した。

シヨット「終わりよければ全て……よしじゃねええええええ！」

ドカツ！！

シヨットの強烈なパンチを喰らった。

ドラ「グベラッ!？」

シヨット「俺たちの苦勞を少しは考えろ！！ア本船長！！」

ドカバキドカバキ・
・
・

シヨットはドラをボコボコにした。

そして・・・

ドラ「ず、ずびばぜんでじだ・・・」

ドラの顔はたんこぶで腫れあがっていた。

ショット「たかう」

そこへリュウが戻ってきた。

リュウ「あれ？ドラって水人間だから殴られないはずじゃ」

ショット「そうでもないんだな」能力者には必ず弱点があつて・・・まず、泳げないだろう」そんなでもって海に入れない・・・それを利用したのが・・・コレ海楼石つてやつだ・・・この石にはな」海の成分が含まれていて能力者に付けると能力が使えなくなり、力が吸い取られるようになるのさ！」

リュウ「へえ」だから・・・面白いモンがあるんだあ」

ショット「もつぱら海軍はコレをたくさん使っている！これで手錠を作ったりなあ・・・」

リュウ「へえ」

ドラコモン「なあ」海軍つて何だ？上手いのか？」

リュウ「いや、話からして食べ物じゃ無いことくらい分かるだろう？お前はどれだけ食い意地を張ってんだよ！？」

リュウがツツコミを入れた。

ドラコモン「だって腹減ってよぉ・・・」

ギョルルウ「

ドラコモンの腹が鳴った。

レート「そうだな・・・飯にするか・・・」

レートはそう言つと食堂へと向かった。

ドラ「いやっほぉ～飯だぁぁぁぁぁ!!」

ドラの声は天空まで響いたという。

第58章 襲撃連発！？（後書き）

て言うか・・・最近この終わり方多くね？

と自分でもそう思ってる・・・

ううーん・・・今回はギャグが少なめだったかな・・・？

まあ、戦闘シーンが入るとどうしても少なくなっちゃうけど・・・

次回は多めにしたいなあーと思っています！！

次回は海軍のお出ましです！！

リユウ達は賞金首になるのか・・・！？

お楽しみに！！

第59章 仕事をするのは真夜中に！！（前書き）

ドラ「良いか・・・お前ら・・・今夜決行だ！」

リュウ「ああ・・・分かっている・・・」

シヨット「やるか・・・」

ドラ「良いか？今回の仕事は失敗は許されねえ俺たちの首を揃えても足りないくらいだから・・・オメエら気を引き締めていけ！」

リュウ「おう！」

シヨット「任せろ！！」

さて、3人が取りかかる仕事とは！？

59章 始まるよおおお！！

第59章 仕事をするのは真夜中に！！

テテテエ~~~~ン テ、テ、テ テテテエ~~~~ン

時は草木も眠る丑三つ時・・・

3人の影が甲板に姿を現した。

テテテエ~~~~ン テ、テ、テ テテテエ~~~~ン

右からショット、ドラ、リュウの3人だ。

3人はそのまま船にある一つの部屋に入ろうとした。

ドラが先に中の様子を見て二人に合図を出し、中に入った。

そして、ドラは心臓を潰すかのように・・・タマゴを三つ、一気に割った。

そして、ショットが長い針を取り出し・・・

ドラが割った卵をかき混ぜた。

ショット「うおおおおおー！！」

そして、リュウがハムの紐を取り、包丁を両手に持ちくると回してから豪快に切り始めた。

リュウ「うおおおおおー！！」

そして、最後に鍋に材料を入れ、一気にドラが炒め出した。

ドラ「うおおおおおおお!!」

ガチャ

レーツが中に入ってきた。

そして、ドラの後ろに來ると後頭部を掴み鍋の中にたたきつけた。

レーツ「バカカアアアアアアア!!」

ズゴーン!!

ドラ「フベシッ!？」

レーツ「何やっているの!？こんな真夜中に人の食堂で!？」

ドラがチャーハン鍋から顔を上げ答えた。

「ご飯まみれになりながら・・・」

ドラ「いやあく丁度この時間って小腹がすくじゃあくん？」

レーツ「いや、だからって何でチャーハン!？それ、明日の朝ご飯!!それ、オレのハム!!それ、オレの卵!!それ、オレのチャーハン!!何してくれてんだよ!？」

テテテエ~~~~ン テ、テ、テ テテテエ~~~~ン

レーツ「つうくか、それ、うるさいんだよ!!止めるよ!!」

ショット「あ、分かった・・・」

電伝虫「ガチャ」

レーツ「て言うか、何で必殺。事人!?何でその曲流すんだよ!？」

ドラ「ほら、仕事って言ったらこれじゃん・・・?」

レーツ「いや、意味分からんよ!？」

ショット「気にするな!レーツ人生いろいろあるぞ!!」

ショットが慰め(?)の言葉を掛けた。

レーツ「いや、それも意味分からんよ!?つうくか、何でショット!!テメエがそっちの役してんだよ!?この役はオメエだろう!!?」

ショット「いやあくたまにはボケてみようかなあくって思ってたね!」

リュウ「そうそう、人間いろいろあるのさ!」

レーツ「つうくかオメエら黙ってる!!」

ドラ「そう、カッパするなよ!そもそもお前が夕飯を食わせてくれなかったのがワリィくんだろう?」

レート「それは、テメエらが昼間、盗み食いするからだろう!?
もう、腹一杯何じゃないの!？」

ドラ「いいか?人間てのはすぐに腹が減る生き物なのさ!」

レート「いや、うまくねえよ!」

ヒナタ「何スかぁこんな真夜中に・・・」

ヒナタ達が声を聞きつけて起きてきた。

ショウ「何だよ!リュウまで何かやったのか?」

ドラコモン「どうせ、無職なんだしな・・・路上さまよっているホームレスにまねごとでもしたんじゃないかねえの?やれやれ・・・」

ケント「ドラコモン!前!」

ケントが注意を促す。

ドラコモン「えっ?前がどうしたって?」

ドラコモンが見上げるとそこにはリュウが禍々しいオーラを出し、手をポキポキ鳴らしていた。

ドラコモン「アハハハハ・・・何しているの?リュウ・・・何か言ったかなぁ・・・アハハハハ・・・」

リュウ「誰が、ホームレスだって?あぁ?」

ドラコモン「アハハハハ・・・サラバ!!」

ドラコモンは危険を察知して逃げ出した。

リュウ「待てコラアアアア!!」

リュウが後を追っかけた。

ドラコモン「誰が待つかよ!!・・・イテツ!？」

ドラコモンは何かにつづって尻餅をついた。

ドラコモン「イテテテ・・・何だあ?」

ドラコモンは見上げるとそこには長刀を持ったフェアリーが立っていた。

フェアリー「アンタ達・・・今何時だと思っているの・・・」

全員「ひよええ!!」

フェアリー「夜更かしは美容の大敵なの・・・いい加減にしてくる・・・?」

ドラ「ええ」と・・・何で長刀持っているのかなあ?」（汗

ショット「ね、姐さん、気を確かに!!」

フェアリー「もう、確かもクソもないわああああ!!いい加減にしろおおおおお!!」

フェアリーは長刀を次々に振り回し始めた。

全員「ひよええええええええええ！？」

乗組員達の叫び声は天空まで響いたという……

続く……

シヨット「つて、終わらせるかあああああああ！？」

ドラ「何だよ……良いところで……」

シヨット「何で、いつもこの終わり方！？て言うかそう言えば全てが終わると思うなああああ！！」

レーツ「おっ！ツツコミ役に戻ったな！これで安心して……」

シヨット「安心できるかあああああ！？何、始まってこれで終わり！？て言うか今回は海軍と戦うんじゃ無かったの！？」

ドラ「それがよゝ海軍……全部ではからっててよゝがら空き

で出動できねえ〜んだって・・・」

シヨット「何それ！？いつでも準備しておけよ！！てかまたグダグダタイム始まっちゃったよ！！」

ドラ「違う！BGMオンリータイムだ！」

シヨット「どっちも一緒だあああ！！折角コラボなのに・・・」

ドラ「安心しろ！今日はゲストを招いたぞ！」

シヨット「いや、ゲストを招けば良いってもんじゃない・・・」

リュウ「ウッス！よろしく！」

シヨット「って、リュウかよー！」

リュウ「ほら、グダグダタイムって言えば・・・デジモンエグザダ
ろうー！」

シヨット「いや、そんなこと言ったらトリミーさんに怒られますよ
ー！」

リュウ「安心しろ！適当に誤魔化せばコロッと騙せるさあー！」

シヨット「いや、そう言う問題じゃ・・・」

ドラ「まっ！とりあえず自己紹介も終わったし・・・時間も稼げた
し・・・」

ショット「どうするんだよ・・・」

ドラ「と、言うわけで次はデジモンブラストエヴォリューション！
リュウタよろしく!!」

ショット「って終わらせるかあああああ!？」

ドラ「何だよ・・・良い感じだったじゃん!」

ショット「良くねえよ!!もつと話を続けるよ!!」

ドラ「うるせえゝ大人は多くは語らねえゝ」

ショット「面倒くさいな!!おい!」

ドラ「それじゃ・・・」

リュウ「と言うわけで次はデジモンブラストエヴォリューション！
リュウタよろしく!!」

ショット「ってお前もしくていいわあああああ!!」

リュウ「いやゝたまにはハメを外したことをしたくてなあゝ」

ショット「いや、ハメ外しすぎだから・・・」

ドラ「まっ！とりあえず・・・まだ、コラボ編は続くけど・・・見逃さずに見てくれよな！」

ショット「何だよ！コレが言いたかったのか？」

ドラ「ま、そうだな・・・」

リュウ「俺たちの活躍も見逃すなよ！！ついでにデジモンエクソシードもよろしく！！」

ショット「って、宣伝もするのかよ！？」

ドラ「デジモンブラストエヴォリションもよろしく！！」

ショット「もういいわあああああ！？」

第59章 仕事をするのは真夜中に!! (後書き)

何かギャグ多めにつて考えたらこうなっちゃった・・・(テヘッ

まあ、次回からはまじめにいきますわぁ)

まだ、コラボ編は続きますが・・・

どうぞ、よろしく!!

リユウ「ついでに、今オレらの作者、トリプルミーミングが書いて
いる、デジモン エクソシードもよろしく!! 絶賛公開中だぜ!!」

くらくら・・・

では、次回もお楽しみに!!

第60章 爆弾処理は迅速に！

水龍海賊団一行はとある無人島に着いていた。

ドラ達は島に食材調達に・・・

リュウ達は帰りを待っていた。

そして、船からは怪しい音が聞こえてくる。

ボカーン！！

突然、煙が上がった。

シャーク「ぶえっへ ゴホッゴホッ・・・」

正体はシャークだった。

シャーク「こまったなあゝ何でオレはいつも発明品を爆弾にしちまうんだあゝ・・・これを何かに役立てられないかな・・・」

暫くして・・・

シャーク「さて、困った・・・こいつをどうしよう・・・」

シャークの目の前には爆弾ができていた。

シャーク「あっ！そうだ！あいつらと呼ばっ！」

そう言うとシャークはリュウ達の部屋へと向かった。

ーリュウ達の部屋ー

シャーク「と、言うわけだ！なっ！」

リュウ「な、何がという訳だあああああああ！？」

リュウが突然でかい声を出した。

リュウ「何？突然部屋に来たかと思ったら爆弾処理！？」

シャーク「良いだろう？よろず屋だろう？」

リュウ「うっ！だが、限度ってモンがあるだろう！！何でよりによって爆弾？」

シャーク「『頼まれたらやってやるよのリュウ』じゃないの？よろず屋じゃないの？」

リュウ「何！？そのフレーズ？流行ってんの？そもそも爆弾なんて企業外だ！」

シャーク「へえ〜じゃ、やってくれないの？」

リュウ「ああ！！今回の依頼は御免被る！！お引き取り願います！」

シャーク「じゃ、転送装置作らないよ！」

リュウ「なっ!?!」

シャーク「良いのかなあ〜オレくらいだよ!転送装置作るの!」

リュウ「テ、テメエ〜・・・」

シャーク「あつ!そう!やなら結構・・・これで交渉は決裂だ・・・」

リュウ「わったよ!やりやあ〜いいんだろう!!」

シャーク「そうそう!その息だ!」

リュウ「で、そうすれだ良いんだ?」

シャーク「ボートに乗ってちよつと沖合までいって爆破してこい!」

リュウ「そうかそうか・・・沖合まで・・・って俺たちも死ぬだろう!?!」

シャーク「安心しろ!水に浸かってから20秒で爆破する!」

リュウ「威力は?」

シャーク「そうだな・・・この船・・・吹き飛ばぜ!」

リュウ「へえ〜吹き飛ばのかあ〜・・・っておい!マジか!!下手すりやあ〜俺たち巻き添いじゃないか!?!」

ケント「あれじゃないですか？」

と、ケントが指を指した。

一同は窓を見た。

そこにはホークスが爆弾を持っていた。

シャーク「おいおい！あんまりさわるなよ！それ、ちょっとした振動でも爆破するから！」

リュウ「マ、マジか！？ほら！鳥！その爆弾、こっちに渡せ！」

ホークスはこっちの見て、爆弾を見て・・・

ヒナタ「ほ、ほら・・・こっちにリーリーリー」

ヒナタは手を伸ばした。

リュウ「ま、まずは置こうか・・・？」

ホークスは言葉が分かったのか床においた。

リュウ「そうそう・・・で、そのまま・・・」

ホークスは爆弾を口にくわえた。

リュウ「で、その爆弾をくわえまして・・・」

ホークスはそのまま飛び去った。

リュウ「で、跳び去りました・・・ってダメだろうおおおおお
!?!」

リュウ達は急いで外に出た。

リュウ「おいおい！何見とれていたんだよ！」

ヒナタ「だってリュウさんが・・・」

ケント「あれじゃないですか？」

ケントが空を指さした。

見るとホークスが爆弾をくわえて、飛んでいた。

リュウ「よし！すぐ、捕まえに行くぞ！ドラ達が帰ってくる前に！」

シャーク「おいおい！爆死する前にだろう？」

リュウ「あんたは黙ってるおおおおおおお!!」

リュウ「クソッ！ドラコモン!!」

そこへドラコモンがやってきた。

ドラコモン「どうしたあゝついに無職だと言つことを自覚したかゝ
？」

リュウ「余計なことは言うな！」

ボカッ

ドラコモン「イッテエエー!!」

リュウ「進化だ!あの鳥を追うぞ!」

シャーク「あと、被害状況も終わったら報告しておいてね!」

リュウ「今、それどころじゃない!!」

リュウ「進化だ!!」

ドラコモン「ドラコモン 進化!!」

ドラコモンのデータが剥がれていった。

そして、新たなデータが上書きされていった。

??「コアドラモン!!」

リュウ「行くぞ!!」

リュウはドラコモンの背中に飛び乗るとホークスを追っかけていった。

ー上空ー

リュウ「鳥ゝ！！待ちやがれえええ！！」

コアドラモン「追いかけてどうするんだ？」

リュウ「爆弾を回収する！俺たちは今は爆弾処理班だ！」

コアドラモン「頑張つてね！オレ、横で見ているねえゝ」

リュウ「オメエゝも手伝うんだ！！」

暫く進むと目の前に軍艦が二隻見えた。

リュウ「あれはあゝ・・・海軍とか言う奴か・・・？」

見るとマリーンと文字が書いてあった。

ホークスが二隻の間に入ったかと思うと次の瞬間爆弾を二隻の間の海に爆弾を落とした。

リュウ・コアドラモン「・・・・・・・・」

次の瞬間・・・

ドゴーン！！

凄まじい爆音が響いたかと思うと次には軍艦がバラバラに大破していた。

リュウ「・・・・・・・・ドンだけ威力あんだあああああ！！」

爆彈被害届

軍艦：二隻大破

乗組員：死者・重軽傷者多数

シャーク「あっ！・・・こっちだったかあ」

シャーク「ありやあゝ実戦用だった・・・シャツシャツシャツ・・・」

リュウの声は天空まで響いたという……

第60章 爆弾処理は迅速に！（後書き）

今回は万屋の皆さんの活躍でしたあゝ

次回こそは戦闘で！！

お楽しみに！！

第61章 猛攻！！海軍ハワード少将 パート1（前書き）

海兵「ハワード少将！！目的の海賊船を発見致しました！！」

ハワード少将「分かった・・・今度こそは目にものを見せてやる・・・」

ハワード少将は高笑いをして船を進めていった。

第61章 猛攻！！海軍ハワード少将 パート1

”偉大なる航路”^{グランドライン}を進む水龍海賊団とデジモンJET。

ドラ「ああゝあ・・・暇だなあゝ」

いつもの様に愚痴をこぼしていた。

ドラ「海軍でも攻めてこないかなあゝ」

シヨット「いや、そんなベタな展開は無いだろう・・・2回もなんて・・・」

その様子を見てリュウが少し焦っていた。

リュウ（ヤバイよヤバイよ・・・大便してたら鍵閉め忘れたくらいヤバイよ・・・）

冷や汗をかいていた。

リュウ（幸いドラは気づいていないけど・・・軍艦二隻も大破したとなつては・・・まあ、戦闘大好き海賊団だから・・・誤魔化せるかあゝ・・・）

など、かなり思いをめぐらせていた。

レーツ「おおゝいドラー!!」

見張り台からレーツが声を掛けてきた。

ドラ「どうした？」

レーツ「12時の方向に軍艦一隻 3時の方向に軍艦一隻 6時の方向に軍艦一隻 9時の方向に軍艦一隻 こちらに向かって来ている！旗印は・・・海軍だ！！」

シヨット・ドラ「ベタな展開来たああああああ！！しかも二回目ええええええええ！！」

ドラ「よし！手分けして沈めるぞ！！」

レーツ「OK！！ホークス！準備だ！！」

シヨット「久しぶりに暴れるぞおお！ベル！いいな？」

ドラ達は準備を始めた。

リュウ（ここは沈めて証拠隠滅だ！）

ヒナタ（それはまずくないツスカ？）

リュウ（証拠改ざんじゃああああああああ！！）

??『ガアゝハツハツハツハツハツハツ！！』

一隻の軍艦から電伝虫のスピーカーから音声を発してきた。

??「オレは海軍 ハワード少将だ！！」

ドラ「ゲッ!？」

レーツ「あのおっさん……ここまで追いかけてきたのかよ……」

シヨット「ドラ!お前……気に入られたんじゃね?て言うかちやつかり階級上がっているし……」

ドラ「冗談じゃねえよ!あのおっさんガス臭くて近づけねえよ……」

シヨット・レーツ「ってそっちかよ!!」

二人はツツコミを入れた。

ドラ「とりあえず……オレはあのガス野郎を止めるから……オメエらは周りの軍艦を沈めてくれ!」

全員「了解!!」

徐々に軍艦が迫ってきた。

リュウ「久しぶりに暴れてやるぜえ」

ウイング「じゃ!お先に!」

ウイングは一足早く一隻の軍艦に飛んでいった。

ドラ「あっ!ズルッ!」

そして、飛び乗れる程の距離に来到一同はバラバラに飛び乗った。

「一号船」

この軍艦にはシヨット・ヒナタ・ウイングが・・・

シヨット「やってやるぜ！！・・・って・・・ほぼ全滅！？」

見るとウイングが毛散らかしていた。

ウイング「ああゝ君たち遅いよ・・・！」

ヒナタ「な、何ッスか・・・その姿・・・」

ヒナタはウイングの格好を見て驚いていた。

シヨット「ああゝお前は見るのは初めてか・・・あれは動物系悪魔
の実『トリトリの実 モデル：鳥』^{クロウ}だ！」

ヒナタ「ぞ、ぞおん・・・？」

シヨット「動物に変化するのさ！まっ・・・俺たちはいらねえゝか
な・・・」

ウイング「少しは手伝ってくれよ！こいつらワラワラと群がってき
てねえゝ」

シヨット「あいよ！ここはオレの戦い場に合わせて良いか？」

ウイング「好きにしな！」

シヨット「サンキュー！吹雪！！」
フリサード

辺りに吹雪が吹き始めた。

シヨット「雪に舞って、雪に散れ！そして塵となるがいい・・・雪
虎 乱れ乱舞！！」
ハリケーン

シヨットは雪で虎を無数に作り出し、そこら中に駆け巡らせた。

海兵「ぐはあああああ！？」

虎に体当たりを喰らい次々に飛ばされていく。

ヒナタ「す、すごいッス・・・負けてられないッス！」

ヒナタ「さっさとケリを付けるッス！ソル！！解放！！」
リベレーション

ヒナタの瞳が赤色へと変わっていった。

ヒナタ「さてと・・・貴様らの相手は・・・オレだ！！」

シヨット「！？奴の目つきが変わった！？」

ウィング「お手並み拝見といきますか・・・」

ウィングは軍艦の見張り台へと飛んだ。

ヒナタ「どこからでも掛かってきな！！」

海兵「見知らぬ顔でも海賊に手を貸した奴も同罪だ！！かかれええ！！」

海兵達が突っ込んできた。

ヒナタ「人間相手はめんどうだな・・・」

ヒナタはそのまま目にも止まらぬ早さで海兵達を斬りつけた。

海兵「ぐはああああああ！！」

ヒナタはそのまま勢いにつて・・・

暫くして

ヒナタ「ここまでのようだな・・・」

ヒナタの瞳は元の色へと戻った。

ヒナタ「はああ・・・終わったッス・・・」

ショット「スゲー・・・賞金首確定だな！」

ヒナタ「あっ！？・・・やり過ぎたッス・・・」

ウィング「中々だな・・・やっぱり・・・君たちは面白いね！」

ショット「とりあえず、沈めるか？」

ウィング「そうだね・・・」

二人は軍艦に向けて必殺技をたたきつけた。

ショット「白虎拳!!」

ウィング「シルバーウィング鋼の翼!!」

ドガン!!

ウィングは二人を乗せて、フライング・タイガー号へと戻った。

第61章 猛攻！！海軍ハワード少将 パート1（後書き）

ええー夜間観測を終えて帰ってきてからの投降でしたが・・・

クラクラする・・・頭が・・・

2時間睡眠はまずかつたな・・・

そんな感じで再開しました！！（昨日から）

今回はパート2です！！

お楽しみに！！

第62章 猛攻！！海軍ハワード少将 パート2

ドラ「よっと！」

ドラが海軍の軍艦の甲板に上がった。

リュウ「待てやあゝ！」

続いてリュウも・・・

ドラ・リュウ「！？」

二人の目の前には海兵達がズラリと並んで待ち構えていた。

ドラ「これまた団体さんで・・・」

リュウ「修学旅行ですか？浮かれてんじゃねえぞ！」

海兵A「海賊を引っ捕らえろおおおおお！！！」

海兵「うおおおおおおお！！！」

一斉に掛かってきた。

ドラ「一気に・・・」

リュウ「下がってろ！！！」

そう言つとリュウは腰から二丁の拳銃を引き抜いた。

リュウ「目の前にご注意を！」

ババババババ

リュウは連射した。

海兵「ぐはあああああああ！？」

リュウ「楽しいショーの始まりだ！」

そう言うところリュウは二丁の拳銃を空に放り投げた。

そしてリュウは今度は背中から『セイクリッド・ドラグーン』を取り出した。

そして

リュウ「真横にもご注意を！！」

そのままブーメランの要領で回転させながら投げた。

海兵達が剣の方に注意が向いているときにリュウは地面を蹴って空へと飛び上がった。

そして、先ほど放り投げた拳銃を掴むと連射した。

リュウ「今日の天気は晴れ時々弾丸だ！！」

ババババババババババ・・・

海兵「ぐはああああ!!」

リュウは打ち終わると甲板に着地した。

そして、返ってくるセイクリッド・ドラグーンを掴もつたとき。

剣の軌道上にドラが立っていた。

リュウ「ゲツ!?!」

ズパーン!!

ドラ「うわあつ!?!」

パシッ

剣を手に取り鞘に収めてから一言。

リュウ「ワリイ……」

ドラは案の定水になっていたが……

ドラ「テメエく何しやがる!!オレが水じゃ無かったら真っ二つで死んでいたぞ!」

リュウ「いや……だからスマンで……」

ドラ「あつそ……喰らえ!」

ドラは床に手を突いた。

そしてそこから水を発生させ、海兵達の足下に広がらせた。

ドラ「水龍奥義 ノックアップストリーム 突き上がる海流!!」

勢いよく水が突き上がり、海兵達を空へとあげた。

ドラ ウォータースラッシュ 「水圧剣!!」

ドラは両手から水の斬撃を放った。

何発も・・・

その中に・・・

リュウ「てめえ！何しやがる！何でオレまで打ち上げるんだよ!？」

ドラ「あつ！ワリイ！手が滑った・・・」(ニッ)

リュウ「テメエ！ゼツテエ！わざとだろう?」

ドラ「気のせいだ・・・」

リュウ「テメエ！オレが剣で切ったことをまだ根に持ってやがるな?」

ドラ「まさかあゝだいたい何で剣を投げるんだ!? 普通は手に収めておくだろう!! 何で投げるの? ああゝ格好付けかあゝ・・・うわあゝいたいわあゝないない!! あり得ない!!」

リュウ「なっ！？テメエゝ人がこうも謝っているのにだめ出しかあゝ偉くなつたモンだなあゝ！？」

ドラ「オレ船長だもん！そりゃゝ偉いぞ！」

リュウ「ピキッ」

リュウの何かが切れる音がした。

リュウ「上等じゃないか！！このさいどっちが上か蹴りつけようじゃないか？」

ドラ「いいじゃねえゝかこの前も中途半端で終わったしなあゝ」

リュウ「いや、あれはオメエゝが謝つたので終わりじゃね？」

ドラ「あれは、・・・・・・・・知らん！」

リュウ（誤魔化したああああああああ）

ドラ「覚悟はいいなあ？水龍拳！！」

リュウ「覚悟を決めるのはテメエゝだ！！」

海兵C「な、何だ！？奴ら勝手に仲間割れを始めたぞ・・・」

海兵E「なら今がチャンスだ！！掛かれええええええええ！！」

海兵達が突っ込んできた。

しかし・・・

ドラ「何だあゝうるせえゝな・・・」

リュウ「こっちは忙しいのによおゝ・・・」

ドラ・リュウ「邪魔!!」

ズガン!!

二人は簡単に海兵達を追っ払うとまたケンカを始めた。

海兵G「な、何だ・・・こいつら・・・めっちゃ仲良いじゃん!？」

ドラ・リュウ「よくねえゝよ!このバカが!!」

海兵を蹴散らすとまたケンカを始めた。

??「ガッハッハッハッハッ!!」

ドラ（!？・・・こゝこの甲高く耳に響く笑い声は・・・）

??「やっと見つけたぞ!水龍!」

ドラ「って!？テメエゝかよ!？ハワード!!て言うか何で4号船に乗ってんだよ!？普通、ボスは1号船だろう!？」

ハワード少将「何となく・・・」

ドラ「はっ？」

ハワード少将「それと一言言っていいいか？」

ドラ「??？」

ハワード少将「人と話すときは・・・ケンカはやめんかあああああああああ！！！」

ドラ「えっ？」

ドカドカドカドカドカ・・・

ケンカを続けながら話をしていたようだ・・・

ドラ「えっ？気にするな！どうせ小説じゃ何しているのか見えないんだからな！と言うか・・・ハワードおメエ！スゲエ！格好しているな・・・」

ハワード少将「い、いや・・・普通だと思っぞ・・・」

ドラ「聞きましたか？全国の皆さん！彼はパンツ一丁でいるのに普通ですって！こんなに治安をまかせて・・・」

ハワード少将「アホかあああああ！？何？見えなきゃ何でも言っているのか？つうかオレは普通の格好だぞ！普通の海軍コートにスーツを着ているどこにでも居る少将だ！！」

ドラ「そうかい・・・リュウー！一旦お預けだ！」

リュウ「はっ？」

ドラ「あのおっさんとはまともによっても勝てねえ」

リュウ「えっ？」

ドラ「とりあえず・・・ドラコモンを進化とか言う奴でかくして空を飛べるようにしておけ！」

リュウ「はっ？何言ってるんだ？」

ドラ「いいから！」

リュウ「はいよ！」

ドラコモンはコアドラモンへと進化した。

そして二人は背中に乗ると空へと飛んでいった。

ハワード少将「何だ？逃げるのか？」

ドラ「また会おうぜ！バカ少将！」

ハワード少将「なっ！？？」

ドラ「水の部屋！！」
ウォータールーム

船ごと水で包んだ。

そして・・・

ドラ「クラッシュ！」

船はがれき化した。

リュウ「容赦ねえな・・・」

二人は飛びながらフライング・タイガー号に戻った。

第62章 猛攻!!海軍ハワード少将 パート2（後書き）

次回はケント達の番です!!

さてさて・・・どうなることやら・・・

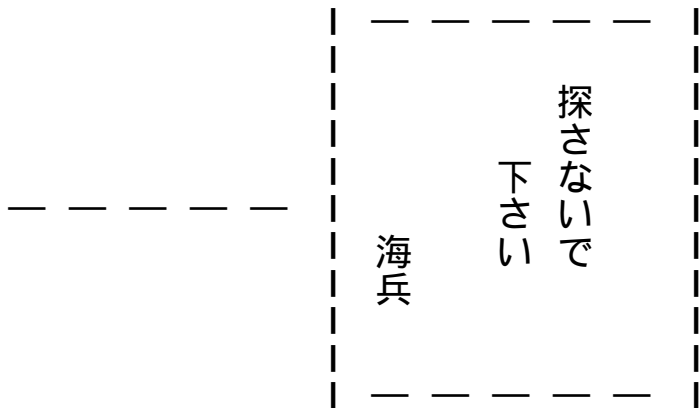
楽しみに!!

第63章 猛攻！！ ハワード少将 パート3

シャーク・レーツ・ケント「……………」

3人は海軍軍艦の甲板で何故か悩んでいた。

シャーク「ということだ……………」



という看板がおいてあったのだ。

シャーク「で、どうするんだ？レーツ？」

レーツ「これは…………探さないでくださいと言っているのだから探さないのが普通だろうか…………しかし相手は海軍その通りに従わなければならないか…………でも、やっぱり探さないのか…………そもそも探さ

ないくださいとはどこまでが本当なのだろうか・・・でも・・・」

シャーク「やかましい!!」

シャークはレーツにツツコミの蹴りを入れた。

ケント「レーツさん・・・何一人で人生の迷路に迷い込んでいるんですか？」

レーツ「探さないください・・・」

シャーク「これじゃちがあかない!!」

ケント「とりあえず行きましようか？ 畏かも知れませんが・・・」

シャーク「そうだな・・・レーツ・・・どうした？」

レーツ「いや・・・ここにも何か書いてある看板があつてな!」

シャーク「また探さないくださいか？」

レーツ「いや・・・『いいえ誰でも』だ」

シャーク「は?」

レーツ「恐らくこれは・・・A CのC Mだろう・・・」

シャーク「マジで?」

レーツ「C Mで『こたまでしょうか?』の所でこれをあげてからの

『ACイ〜』て言っただろうな・・・」

シャーク「なんだそれ！？何で海軍でCMが流行ってんだよ！？」

ケント「・・・・・・・・」

シャーク「て言うかよく考えたらこれって銀○のエリ○ベスのよくしゃべるときに使うプレートじゃね！？」

レーツ「じゃ、○さんと一緒にいたのか・・・」

シャーク「何だよ！？○さんって！？」

レーツ「だって、か○さんって漢字にしたら一文字じゃん！」

シャーク「確かに・・・って何でそんなのがここにあんだよー！」

レーツ「ほらあゝエリ○ベスが失踪したからさ・・・」

シャーク「いや、言わなくていいし・・・」

レーツ「もしかしたら海軍はドラ達の方に集められたんじゃないかね？」

シャーク「そうか！だから気づかれないように・・・この船はおとりかー！」

ケント「と言うことはぼくたちはまんまと一杯食わされた訳ですね・・・」

シャーク「そう言うことになるな・・・」

ドガンー!!

隣の船が爆発した。

シャーク「なっ!?!?.....ってドラか.....やることハンパねえ」
な.....」

レーツ「じゃ、この船壊して帰りますか?」

シャーク「そうだな.....」

3人は船をぶっ壊してフライング・タイガー号に戻った。

そのときの破壊音は天空まで響いたという.....

第63章 猛攻！！ ハワード少将 パート3（後書き）

今回は短くてすみません・・・

次回は頑張ります！

次回はちょっとしたひとときをどうぞ！

だけど・・・波乱あり！？

あと少しでデジモンJ.E.T.のみんなともお別れです！！

次回もお楽しみに！！

第64章 魔界の料理VSダークマター

シャーク「よしっ！できたああああ！」

シャークは歓喜に満ちた声を上げた。

その頃甲板では・・・

リュウ「はあゝそろっと帰りかあゝ・・・」

ドラ「確かさつきシャークができたあゝとか叫んでたぞ！」

リュウ「マジかつ!？」

ドラ「ああ！良かったな！」

リュウ「ああ・・・そうだ！今までのお礼もこめて飯でも作ってやるか！」

それを聞いた途端ヒナタとケントとショウが顔を青ざめて止めに掛かった。

ヒナタ「りゅ、リュウさん！！待つツス！それはいいんじゃないかと・・・」

リュウ「はあゝ何言ってるんだ？借りは返さないとな！」

ショウ「だからって・・・今やるか？」

リュウ「今じゃなければいつやるんだよ？」

3人「うつ・・・」

ドラ「おめえゝの飯は・・・確か上手かったよな？」

リュウ「おっ！お前は味が分かる奴だもんな！」

ヒナタ「いや・・・ドラさんの胃袋が異常なんスよ！」

軽くツツコミを入れた。

そこへレーツがやってきた。

レーツ「じゃ、お言葉に甘えてやってもらうかな・・・」

ヒナタ達はそれを聞いて余計に顔を青ざめた。

ヒナタ「レーツさん！待つッス！！」

ヒナタ達はレーツを引つ張り端へ連れて行った。

レーツ「な、なんだ？」

ヒナタ（レーツさん！リュウさんの料理は激が百個つくほどマズイんスよ！）

レーツ（・・・本当か？）

シヨウ（俺たちがそれを試食したんだ！間違いねえ〜！）

レーツ（まっ！何とかなるだろう！本人の意志は変わらないんだしな！）

ヒナタ（うつ・・・）

レーツ（我慢しろよ！）

何故かレーツに説得され3人は渋々従い二人の所へ戻った。

すると何故かドラとリュウがまたしても口げんかをしていた。

ヒナタ（この人達は仲が良いのか・・・悪いのか・・・）

ドラ「上等じゃねえ〜か！！この際どっちが上手いか勝負するかね？」

リュウ「良いじゃねえ〜か！審査員はこの船に乗っている奴だ！」

ヒナタ・ケント・シヨウ「ええええええええええええええええ！？」

悲鳴に似た大声を上げた。

ドラ「レーツ！食堂借りるぞ！」

レーツ「おう！・・・良いけど・・・」

許可が出た途端二人は飛ぶようにして食堂に走っていった。

それを見送ると・・・

ヒナタ「レーツさん！何で許可なんてだしたんスカ！？なんか勝負することになっていないッスカ！？」

ヒナタはレーツの胸ぐらを両手で掴み揺さぶった。

レーツ「んなこと言われてもおゝ・・・船長命令だし・・・」

ヒナタ「あれ、船長命令だったんスカ！？もうゝ終わりッス！遺書でも書いておこっおゝ」

ショウ「オレも辞世の句を一つ・・・『最後で良いから 味わって みたかった ハーレムを』字余り！よし！」

全員（字、余りすぎだろうゝ・・・て言うか下手だゝ脇役だからしょうがないかゝ）

と、心の中では思っていたが声には出さなかった。

ドガーン！ジャーン！ボカン！・・・

食堂から奇妙な音が聞こえてきた。

全員（あれゝ料理作る時ってこんな爆発音って聞こえたっけゝ）

一同は冷や汗をかいた。

暫くして・・・

ドラ・リュウ「できたぞ!!」

二人がOKの合図を出してきた。

一同は唾を飲み込み食堂に入っていった。

ー食堂ー

ショット（あれえゝ食堂つてこんなにどんよりしてたっけえゝ）

シャーク（あれえゝ食堂つてこんなに暗かったけえゝもっとこう・・・
・明るいイメージが無かったけ・・・）

レーツ（あれえゝ食堂つてこんなに変な臭いしたっけえゝ・・・）

全員（あれえゝ食堂つてこんなだったけえゝ）

一層はそれぞれそう思った。

ドラ「さあゝまずはどっちからの料理を食べるか？」

リュウ「まずはおれからだろう・・・ネツ？おにいゝさん？」

ドラ「オレだよな？ネツ？おにいゝさん？」

シヨット「やっぱ俺たちが食べ比べるのか・・・？」

ドラ「当たり前だ！第三者じゃないと比べられないじゃないか！ネッ？おにいさん？」

リュウ「そう言うことだ・・・ネおにさあさん？」

シヨット「何っ！？名前みたいになっただけど！？」

ドラ「とりあえず・・・オレの料理からだ！おれのはスゲエぞ！『ドラ特製 ミートスパゲッティ』だ！」

ドン！とテーブルにおいた。

シヨット「ってどこがスパゲッティだ！？これ焦げているじゃん！食べ物でも何でもないじゃん！？ただの焦げた何かじゃん！？ダークマターじゃん！！」

ドラ「ダークマターじゃない・・・ダークマスターだ！！」

シヨット「格好つけるなああああああ！！同じじゃないか！？」

リュウ「オレのはもつとすごいぞ！その名も『リュウスペシャルオムライス』だ！」

ドン！とテーブルにおいた。

全員「うつ・・・」

そこにはオムライス（？）が置いてあった。

ヒナタ「これ・・・オムライスッスか？」

リュウ「当たり前だ！オムライス以外に何がある？」

シヨウ「いや・・・魔界の料理だろう・・・」

リュウ「なんか言ったか？」

シヨウ「いや・・・何も・・・」

そのオムライス（？）は何か食べてはいけないようなオーラが放出されていた。

シヨット「て言うか・・・どっちも食べ物じゃ無いよ！！だって明らかに変なオーラ漂っているモン！オムライスってこんなに黒くないモン！」

ヒナタ「何入れたんスか？」

ドラ「ええ」と・・・レシピは・・・パスタたくさん ミートソースたくさん 隠し味にバターたくさん マヨネーズたくさん 甘みを入れるために砂糖たくさん・・・あとは・・・」

シヨット「どんだけ入れてんじゃあああああ！？何？何なの？途中まで合っているのに・・・何が起こったんだよ！？」

リュウ「オレはあくレシピは・・・ご飯たくさん 卵たくさん 胡椒たくさん 砂糖たくさん マヨネーズたくさん バターたくさん

味噌たくさん・・・あとは・・・」

シヨット「そつちも何入れてんじゃあああああああ!？」

レーツ「ま、まあ食べてみるか・・・見かけによらず実はつやつが・・・」(汗)

シヨット「汗垂れてんぞぉー!無理するな!」

シヨウ「オレなら食える、オレなら食える　オレなら食える・・・」

シヨット「お前もお前で何自己暗示掛けてんだぁー無理するなよ!」

ドラ・リュウ「サツサツサツサツサツほら!」

二人が迫ってきた。

ヒナタ「そ、そうツス!」

シヨット「ど、どうした・・・?」

ヒナタ「最後ツスから・・・記念写真でも撮らないツスか?」

シヨット「良いじゃないかぁー!試食会は後でつてことであぁー?」

ドラ「しょうがねえな・・・撮るか?」

一同は助かった気分で甲板に上がった。

ー甲板ー

シヨット「準備できたかぁ〜？」

シャーク「OKだ！！ほらシャッター押すぞ！」

シャークはみんなが並んだところでピントを合わせ、セルフタイマーにセットしてみんなの列に加わった。

ドラ「よし！みんなでカウントダウンのかけ声だ！！」

シヨット「やるか？」

全員「スリー！！」

全員「ツー！！」

全員「ワン！！ピース！！」

パシャ

タイミング良くフレームが押された。

ドラ「よし！これで記念写真はとれたな・・・この写真が現像できたら送ってやるから楽しみにしておけよ！」

リュウ「サンキュー♪」

ドラ「俺たちは離れていても仲間だからな！」

リュウ「ああゝ俺たちは絆で結ばれているからな！」

ドラ「またどこかで・・・」

リュウ「会おうぜ！」

ドラとリュウは互いに握手した。

二人の手は他の人からは大きくたくましく見えた。

そして・・・

その後、魔界の料理とダークマターをみんなが食べたのは言うまでもなかった・・・

その日、帰る予定だったがヒナタ達はトイレにこもり帰れるに帰れなく一日遅れとなった。

当の本人達は笑いながら最後のひとときを過ごしていた。

これは次元を越えた絆の物語である・・・

彼らはまた仲間の大切さを学び、一歩成長していったのだ・・・

く コラボ企画 VS デジモンJET 4人の勇士編く

ー 完ー

第64章 魔界の料理VSダークマター（後書き）

コラボ企画がコレに持って終了します!!

今回の話は実は時季外れだけどスキでもやろうかなーと思っていたんですが急遽二人で料理を作ったらどうなるかなーってことでやってみました・・・

思った異常に手が進み良いものにできたのでは無いかと思います!!

みなさんどうだったでしょうか？

感想待ってまゝす!!

次回からは一新一転して新章をスタート!!

の前に恒例の「水龍海賊団会議」です!!

お楽しみに!!

第65章 物事の節目にはやらなければならないことがある

ドラ「はい、と言うわけで次回から新章に入るので急遽、集まって貰いました！」

レーツ「フライング・タイガー号の食堂を使ってお送りしまぁ〜す！」

シヨット「なに、今日はずっとこんな感じでやるの？」

ドラ「ああ、そうだ！だって、銀。だってこついつのやるじゃん・・
」

シヨット「ていうか、この前もその前もそのまた前も同じこと言わなかったか？しかも前とメンツ同じだし！」

ドラ「ああ、そうだよ！使い回しにしているんだよ！」

シヨット「何で使い回し？どんだけサボっているんだよ！」

ドラ「まあ、いろいろあるんだよ！」

シヨット「いろいろって何だよ！」

ドラ「大人の事情ってやつさ！」

シヨット「どんな事情だよ！？」

ドラ「さて本題に入るとするか・・・」

ショット「また誤魔化した!？」

ドラ「遂にネタ切れらしい・・・」

レーツ「やつぱりなあ」

ショット「そうくるか・・・」

レーツ「だよなあ」

ショット「っておい!!何でネタ切れ!？」

ドラ「いやあ、それがよく椿さんの考えた新キャラを出すつもりでいたんだが・・・同接触すればよいのかでいざこざが起きてなあ」

ショット「大嘘突くな!!起きてないからね!いざこざなんて・・・!!」

ドラ「ここらで終わりにするかあ、って話まででたほどだ・・・」

ショット「マジで!？」

ドラ「まあ、コレは冗談だが・・・ネタ切れらしい・・・」

レーツ「作者!頑張れよ!!」

ショット「いや、応援してどうする・・・?」

ドラ「そこでだ！ここらでアレをやってみてはどうかと思ったのさ！」

シヨット「アレって？」

レーツ「ま、まさか！？アレを使うのか？」

シヨット「いやだからアレって何だよ！？」

ドラ「アレとはなあ……」

シヨット「アレとは……」

ドラ「オレのペンダントの秘密だあああ！！」

シヨット「おおーう……オメエーにしては良いこと考えたなあ」

ドラ「どうやらこのペンダントには何か訳ありらしい……で、それを新章で明かそうって訳さ！」

レーツ「いいじゃんか！」

ドラ「だろ！でさあーこの際……予告みたいやってみないか？」

シヨット「予告ってのは映画みたいにか？」

ドラ「ああ！そうさ！」

シヨット「それやって、実はやりませんの『やるやる詐欺』じゃ無いだろうな？」

ドラ「それは無い！よし！！読者の諸君、目の穴をかつぽじってよく見る！」

シヨット「いや、それ言うなら・・・耳の穴をかつぽじってよく聞け！だろ？」

ドラ「それでは予告編スタート！！」

全ては一人の少年から始まった・・・

それは突然起こった・・・

??「うわぁー！？」

突然空から落ちてきた謎の少年リブラ

彼の島は今、海賊に乗っ取られていて訳を聞いたドラ達はそこへ殴り込みに行こうとする！

ドラ「野郎共！！やってやるぞおおおお！！」

そして、ドラのペンダントが光り出す。

何かを導いているかのように！

そして、そのペンダントの秘密をしる謎の人物がドラ達の前に現れる。

??「そいつの能力くらいテメエで分かってやれよ!」

果たして謎の少年リブラの故郷は無事なのか!?

ドラのペンダントの隠された秘密とは!?

劇場版 ONE PIECE Another World 隠
されたペンダントの秘密

近日公開予定!!

ドラ「もれなく特製3Dゴーグル付いてくるよ!」

ドラ「てな感じだ・・・」

シヨット「あれ?本当に映画になってね?て言うか最後に大嘘付いたよな!」

ドラ「気のせいだ!そうすれば読者もたくさん来るのさ!」

レーツ「大人の事情ってやつさ!」

シヨット「いや、関係ねえだろう!?!」

ドラ「と言うわけで!新章は近々公開だ!!!」

Ryota「・・・何が公開なんだい？」

ドラ「ギクッ!？」

Ryota「お前さあゝ何勝手に人の原稿持ち出してんの？それオレが考えた原案だぜ！」

ドラ「いやあゝ」(汗)

シヨット「どういうことだ？」

Ryota「ネタ切れなんて嘘に決まってるだろう!!何人のダメ人間に仕立て上げてんだあああああ!？」

ドラ「いやあゝここで、はち切れてもってさあゝ・・・」(汗)

Ryota「いや、はち切れすぎだろう?」

ドラ「と、とりあえず・・・この前の写真が現像できたからシャークに渡して送ってもらわ!あと、賞金首の手配書と・・・」

ビュー

シヨット「あつ!逃げた・・・」

Ryota「たくうゝ勝手なことしやがって・・・まあゝ気を取り直して予告の通りなんでよろしく!」

シヨット「でも、何であいつは原案を？」

Ryota「どうせ、目立ちたかつたんだろう？あと、バレルのを計算に入れてなかったなあ……」

シヨット「そう言う問題かなあ？」

Ryota「とりあえず……オレはまだネタ切れになんてなってませんから！！読者の皆さんはお気にせず読み続けちゃってください！！！」

シヨット「それでは次回にお会いしましょう！！！」

Ryota「あっ！それオレの台詞！！！」

第65章 物事の節目にはやらなければならないことがある（後書き）

とまあ、こんな感じで次回から新章です！

準備があるので更新は金曜日頃かと思います！！

お楽しみに！！

ドラ「シャーク！しっかりあいつらに送って置けよ！」

シャーク「任しておけ！オレの転送装置に狂いはない！完璧だ！・・・

・転送完了だ！あとはあいつら次第だな・・・」

二人は写真と手配書をリュウ達デジモンJETに送り届けた。

第66章 空からの使者!?

ドラ「はあゝめんどくせえ」

ドラは甲板で愚痴をこぼしていた。

シヨット「珍しくドラがやる気をなくしている・・・」

シヨットがその様子を見てそう言った。

レーツ「そつとしときな!そういう時もたまにはあるさ・・・」

シヨット「そおゝか・・・あれでもか?」

シヨットはそう言って指を指した。

ドラ「ああゝもうゝ何もかもめんどくせえ・・・もう・・・空から人でも降って人類滅亡って感じで良くねえ・・・もう・・・どうでもいいや・・・」

レーツ「・・・確かにおかしいな・・・」

シャーク「まるでオレが作った『ヤルキナクナル』みたいだな・・・」

シヨット・レーツ「!?!」

二人はその発言にシャークを見て・・・

シヨット「つて・・・それが原因じゃね？」

シャーク「まさか・・・ちゃんと保管庫に・・・」

とシャークは保管庫に向かって行つたが・・・

その直後・・・

シャーク「あああああああ！？」

シヨット・レーツ「やつぱり・・・」

シャーク「保管庫の鍵・・・閉めるの忘れてた・・・」(汗)

シャークは戻ってきてそう言った。

シヨット「で、元に戻すには？」

シャーク「ヤルキデールを使うしかない！」

シヨット「それはどこに？」

レーツ「て言うかそもそも何でそんなもん作つたんだよ？」

レーツが詰め寄った。

シャーク「いやあ、ドラが暇だ暇だうるさいときがあるだろ？黙らせられないかなあ、って思つて作つてみました・・・後でヤルキデールができてから貯めそうと思つただけど・・・」

シヨット「すげえなお前！・・・アレ？今ヤルキデールを作つてから試すつて言った？」（汗）

シャーク「そうだよ！じゃ、作ってくる！」

そう言うときシャーークは実験室へと飛ぶように走っていった。

シヨット「やれやれ・・・」

ドラ「人が降ってきて人類滅亡だあゝ！」

シヨット「まだ言ってるし……」

突然どこからか声が聞こえてきた。

「うわあああああ!？」

そして次の瞬間……

ドガン！！

何か空から降ってきた。

シヨット「ええええええええええ！？」

「レイツ、何だ？」

「シヨット、船に大穴開けるつもりかああああ！？」

レース「いや、そこじゃないだろう?」

二人は駆け寄った。

そこには一人の少年が血だらけで倒れていたのだ。

ショット「なっ!？」

レーツ「ウイングを呼んでくれ!」

そこへ・・・

ウイング「呼んだかい？」

ウイングがタイミング良くやってきた。

ショット「重傷者だ!」

ウイング「本当だね・・・こりゃあゝひどい・・・見た感じ拳銃が何かに撃たれたのかな・・・」

ウイングは謎の少年に駆け寄った。

ウイング「・・・よしっ!手術だ!すぐ集中治療室に運んで!」

ショット「そんなところあつたけ?」

ウイング「この前にシャークに作ってもらった・・・」

ショット「いや、あいつスゲーな!？」

ウィング「レーツ？ホークスを借りるよ！あと君も手伝ってくれ！」

レーツ「お、おう！」

レーツはホークスを呼ぶと少年を担架に乗せ、集中治療室に運んだ。

ウィング「患者さん第一号だあ〜楽しい手術になるなあ〜」
オペ

レーツ「おつかねえ〜こと考えるなよ！」

軽くツツコミを入れた。

二人と一匹は集中治療室に入っていた。

—手術中—

- - - - -
- - - - -

治療室の扉の上のランプが光った。

この少年の登場が今回の冒険の始まりであった・・・

第66章 空からの使者！？（後書き）

新章に突入しました！！

あの少年の正体はいかに！？

次回は厄介なことを頼まれる！？

お楽しみに！！

ドラ「ああ～面倒くせえ～この小説にでるのさえ面倒くせえ～」

シヨット「いや、主人公がそんなこと言うなよ！」（早くヤルキデールを作ってくれよ！シャーク・・・）

第67章 謎の少年の正体は！？

??「ううゝん……はっ!？」

ガバツ!!

少年は飛び起きた。

そこは見知らぬ部屋だった。

そして、ベットに寝ていた。

??「ここは……イテツ!？」

少年の傷がうずいた。

??「そうか……確か……撃たれて……そして……」

少年はベッドから起き上がり部屋から出ようとした。

ガチャ

ドアを開けるとどうやら自分は船に居るみたいだ。

??「どっかの商船かな……」

ドラ「おっ!気づいたみたいだな!」

一人の少年が話しかけてきた。

??「あ、あなたは・・・?」

ドラ「オレはドラ!ウォート・D・ドラ 海賊だ!」

??「か、海賊!?・・・ま、まさか・・・あなたは今話題の超新
星の『水龍のドラ』?」
スーパー

ドラ「おう!そくだ!ところでオメエは何者だ?」

ドラが聞いてきた。

??「オレはリブラ・・・よろしく!」

ドラ「おう!よろしくな!」

リブラ「ところでこの傷は君が・・・?」

ドラ「うちの船医が全部やった!礼なら船医に言ってくれ!」

ドガン!?

リブラ「な、何!?」

リブラは突然の音に驚いた。

ドラ「ああゝ気にするな・・・恐らく・・・」

ドラは爆発音のした方へ向かい・・・

ドラ「おい！バカーク（・・・・）！！今度は何だ！？」

シャーク「誰がバカークだ！！シャークだよ！！・・・ちよつとした改造さ！」

煙の中からシャークが姿を現した。

シャーク「おつ！空から降ってきた奴が目覚めたのか？」

ドラ「まあ、それはさておき何でオメエは空から？」

リブラ「実は・・・オレの島はほんの一週間くらい前に突然海賊がやってきて島をあつという間に占拠したんだ！そして、そいつらは俺たち島民を奴隷のように扱い、こき使ってたんだ！海軍にも要請はしたんだが・・・手に負えなく来た海軍は全滅・・・」

シヨット「なるほど・・・恐らくその海賊はこいつか？」

シヨットは一枚の手配書を出した。

リブラ「・・・・！？ああ・・・こいつだ！」

その手配書にはこう書いてあった。

『邪龍のギガス』と・・・

シヨット「こいつは懸賞金 2億ベリーの要注意人物だ！とんでもない能力を使うらしい・・・だが、滅多に人前には姿を出さないのだが・・・つい最近彼らの海賊団が急速に活動を始めたらしいんだ・・・」

リブラ「それがオレらの島ってことか？」

シヨット「そうだろうな・・・政府も対応に追いついていないそう
だ・・・」

シャーク「邪龍なら聞いたことがあるぜ！奴は大胆な行動は余りし
ない・・・いつも自分の関与した全ての事件を裏で手を出している
厄介者さ！それだから海軍も奴には手も出せない。それに手を出せ
たとしても海軍四大将でもまだキツイほどだ！」

シヨット「そんなヤバイ奴なのか？」

シャーク「ああ・・・そして、奴が自分から動いたときには必ずと
てつもない事件が起こるのさ！」

ドラ「！？」

シヨット「！？」

リブラ「！？」

そこへウィングもやってきた。

ウィング「確か邪龍は王下七武海にも勧誘されたがそれを断った。」

シヨット「で、それでお前は助けを求めに来たってところか・・・で
も何で空から？」

リブラ「ああそれだけ・・・能力者なんだ！」

手に見つかって撃たれたんだ……だけど……最後の力を振り絞って飛んでいたんだ。そこへ君らの船が見えてそこへ……」

ウィング「なるほど……だがその狙撃手はかなりの腕だな……シヨットと同じくらい……いやそれ以上か……」

シヨット「はあ？オレより上ってどういうことだよ！？」

ウィング「正確に狙われていた。腕の骨を一本ずつ折っていた。さらに逃げ出したことを後悔させるためか死ぬか生きるかの半死の状態だった。それを考えて打ったのなら尚更だ。さらに標的は飛んでいて動いているそれを正確に狙うのだからそうなるだろう？」

シヨット「オレより上が居るなんて……で、ドラはどうするんだ？行くのか？」

ドラ「それがよくどう考えてもその島に向かっているみたいなんだよ！砂漠の国『サンドランド』に……」

全員「マジかあああああ！？」

ドラ「ああ……本気と書いてマジ！」

シヨット「じゃ、話は早いな！要するにそいつを倒せば良いんだろう？」

リブラ「だけど……」

ドラ「バカ野郎！俺たちは数々の修羅場を越えてんだ！未知の海賊だろうと！正面からぶつかってやるまでよ！だよな？」

ショット「当たり前だ！」

シャーク「オメエはいつもそうだもんな？さてとこの船の強化しますかな・・・」

シャークは仕事場に戻っていった。

リブラ「じゃ、お願いするぜ！！」

ドラ「よしっ！！野郎共！！『サンドランド』目指して全速前進だ！！」

全員「了解！！」

フライング・タイガー号は新たな冒険が始まる舞台へと進んでいった。

しかし、この決断が自分達の運命を大きく左右することになるとは知らずに・・・

第67章 謎の少年の正体は！？（後書き）

さて、余り更新できていませんでしたが・・・

合間を縫って投稿していきたいと思います！！

最後にちよつとだけ・・・

もう少して100章突破します！（まだ30章も先だけど・・・）

それを記念してBIGなことをやりたいと思っています！！

楽しみに待っていてください！！

それでは次回もお楽しみに！！

第68章 見知らぬ土地には気をつける！

ーサンドランドー

ドラ「ここがサンドランドねえ」

水龍海賊団一行は砂漠の国 サンドランドに来ていた。

シヨット「しかし、何もねえゝなあ」

レーツ「あるとしたら家くらいだろう・・・」

そこら辺一体には砂のようなものでできたビルが建っていた。

ドラ「これもしかして全部砂でできてんのか？」

リブラ「まあ、そんなやつだな・・・」

ドラ「へえゝしかしよくできてんなあ」

ドラはそう言いながらバンバンと触れてみた。

ザザアゝ

触れた部分から一気に崩れた。

ドラ「はっ!？」

ドラの顔から血の気が引いていった。

シヨット「うおい！ドラオメエ！何やってんだよ！人の家壊して！」

ドラ「な、何言ってるの？ち、違うよ・・・ち、ちょっと・・・小突いただけだよ！」（汗）

シヨット「嘘つけエ！！」

ドラ「ま、待て・・・おお落ち着くんだ・・・そうだ・・・落ち着くんだ・・・ままままずはタイムマシンを探すんだ・・・」（汗）

ドラは崩れた砂の中に潜ろうとした。

シヨット「そこタイムマシンの入り口じゃないし！！！」

リブラ「いや、ここらは最近に使われた無いから大丈夫だよ・・・」

ドラ「マジで？」

ドラが砂の中から顔を上げた。

ドラ「何だよ！そんなことなら最初っから言えよ！オレもうドンドン壊すよ！」

リブラ「いや、壊さないのが普通なんだけどな・・・」

ドラ「ところでシャークとフェアリーは？」

ウィング「シャークは船の調整だとよ！フェアリーは肌に悪いからとかで来ないって！」

ドラ「そつか！じゃ、行くか！」

ドラ達は先へ進んだ。

リブラ「と、その前に・・・この先んだけどな・・・」

ドラ「何があんだ？」

リブラ「いや、最近よからぬ噂を聞いてな・・・」

ドラ「何だ？」

リブラ「いや・・・この先にある『レモン砂丘』で砂人間サンドマンが出るらしいんだ・・・」

ドラ「さんどまん？」

リブラ「ああ・・・砂の人間で意識を持たないただそこを通る旅人を襲ってるらしいんだ・・・」

ドラ「へえゝまあ、そんなのオレの敵じゃないな・・・」

リブラ「え？」

ドラ「オレは水人間だ！砂より水のほうが有利だからな！」

リブラ「マジか！？それなら頼もしいな！」

ドラ「だろ？」

ーレモン砂丘ー

ドラ「しかし・・・何もねえくなあ」

シヨット「とりあえず進むか？」

ドラ達は先を進んだ。

暫く行くと

ウィング「あれは・・・」

彼らの前の方に無数の人間が現れた。

リブラ「サンドマン砂人間だ!!」

見るとこちらに向かっているようだ。

ドラ「だったらぶっ潰すまでだ!!」

ドラは体を身構えた。

ドラ「ツインW水龍拳!!」

ドラは両手を龍の形にするとサンドマン砂人間目掛けてぶっ飛ばした。

ドガンー!!

目の前の砂人間サンドマンから次々に破壊されていった。

一瞬で全ての砂人間サンドマンが全滅した。

リブラ「す、スゲエ」

ドラ「どんなもんだい！！ハッハッハッハッハッハッ！」

ドラは高笑いをした。

??「まさか、俺の部下サンドマン達がいとも簡単にやられるとは……」

突然どこからか声が聞こえてきた。

ドラ「だ、誰だ!？」

??「しかし……コレも運命なのか……遂に見つけた……ペ
ンダントの封印者よ……」

ザザア

目の前の砂が突然持ち上がった。

そしてその砂がその砂が人間に変化した。

ドラ「なっ!？」

??「お前だったか……『水龍のドラ』よ!！」

第68章 見知らぬ土地には気をつける！（後書き）

ドラ達の前に現れた人物は一体！？

そして『ペンダントの封印者』とは！？

次回、ドラのペンダントの秘密が明らかに！？

お楽しみに！！

第69章 気が合う二人は・・・

ドラ「何モンだ？」

ドラ達の目の前に一人の男が砂から姿を変えて出てきた。

??「俺か・・・？聞かなくても分かるんじゃないか？・・・俺は・・・『砂鰐のゲイター』だ・・・」

シヨット「何だって！？」

シヨットが悲鳴に近い声を上げた。

ドラ「誰だ・・・？」

シヨット「知らないのか？今話題のお前と同じ超新星だよ！」
スーパールキー

ゲイター「なら話は早い・・・」

ドラ「その超新星のおっさんが何の用だよ？」
スーパールキー

ゲイター「君とお手合わせを願おうか？」

ドラ「はっ？」

ゲイター「君の話は聞いているぜ・・・同じルキーとして力比べがしたいのさ・・・」

ドラ「俺と戦えってか？」

ゲイター「そうだ!」

ドラ「だけど・・・その勝負・・・無理があるぜ!」

ゲイター「何だ?」

ドラ「お前は見るからに・・・『スナスナの実』の砂人間だろう?・
・俺は水・・・砂と水じゃ水の方が有利だぜ?」

ゲイター「なるほど・・・だがどうかな?」(フツ)

ドラ「試してみるかあああ!」?

ドラは身を構えた。

ドラ「水龍拳!!」

ドラは右腕を龍の形にしてゲイター目掛けてぶっ飛ばした。

ゲイター「・・・」

ドガン!!

ドラ「どうだ!」?

辺りに砂煙が舞う。

ドラ「これで懲りたら・・・もうやめるんだな!」

??「何に懲りたらだ?」

ドラ「なっ!?!」

砂煙が晴れ視界が見えるようになった。

見るとそこには砂の防壁で身を守っていたのだ。

ゲイター「俺には攻撃など喰らわないぜ!」

ドラ「んだと!?!コレならどうだ!?!」

ドラは一気に距離を詰めるとゲイター目掛けて殴りかかった。

ドラ「水の槍!?!」
ウォーターランス

ドラは両腕を槍のように尖らせ連続で突いた。

ババババババ・・・

そのたびにゲイターの前には砂の壁ができて攻撃を防いだ。

ドラ「はあはあはあはあ・・・何でだ・・・」

シヨット「ドラ!やめろ!オメエ!じゃ奴には勝てない!いや、俺たちでも勝てない!なぜなら奴は今まで一回も自分の体に傷を付けたことは無いんだよ!?!」

ドラ「何っ!?!」

ゲイター「その通りさ！」

ドラ「一体・・・どうすれば・・・」

??「くせ者発見!!」

どこからか声が聞こえてきた。

ドラ「あっ？」

??「テメエくら誰の許可を得てこの島に来た？」

ドラ「誰だオメエ？」

??「俺様はギガス様の邪龍海賊団幹部 『刺客のデビー』 だ!!」

ドラ「何だ？ゲイターの仲間か？」

ゲイター「バカ言っな！誰が邪龍なんかと手を組むか・・・」

ドラ「はっ？お前邪龍と関係ないの？」

ゲイター「そうだが・・・」

ドラ「まっいつか！」

デビー「いつまで余裕を扱いてられるかな!!オメエくら出番だぞ!!」

ザッ

ゲイターとドラの間にデビーの部下達が現れた。

ドラ「どうやら・・・俺たちがケンカしている間に勝手が変わったみたいだな・・・」

ゲイター「そうだな・・・」

ドラ「とりあえず・・・おっさん！俺はテメエだけを殴る！まっ！他の奴は巻き込まれても知らんけどな！」

ゲイター「おっさんじゃない！！まっ！分かりやすいことじゃないか！最後に一人、立っていた奴が勝ちだな・・・」

デビー「はっ！？お前ら何言ってるの？」

ドラ「ハッハッハッハッハッ！」

ゲイター「ガッハッハッハッハッハッ！」

デビー「お前ら！何を笑っている！？」

ドラ「ハッハッハッハッハッ！」

ゲイター「ガッハッハッハッハッハッ！」

デビー「な、何がおかしいんだ！？」

ドラ「ハッハッハッハッハッハッ！」

ゲイター「ガッハッハッハッハッハッ！」

ドガンー！！

ドラの方から突風が巻き起こった。

デビー「なっ！？」

ドラ「良いか・・・ここからはR18指定だぜ！！」

ドラは剣に変化させた右腕を突き出した。

ゲイター「その通りだな！」

ドラ「クソ野郎おおおおお！！」

ドラは周りの奴らをぶっ飛ばしながらゲイターの方へ走っていった。

ドガンー！！

ゲイターの方からも突風が起こった。

ゲイター「クソ餓鬼iiiiiiii！！」

ゲイターは周りの奴らをぶっ飛ばしながらドラの方へ走っていった。

デビー「！？」

そのまま二人は真ん中ですれ違つと背中を合わせた。

ドラ「おっさん！俺が片づけるまで・・・」

ゲイター「くたばんなよ！！」

ドラ・ゲイター「うおおおおおおお！！」

二人は同時に飛び出した。

第69章 気が合う二人は・・・（後書き）

次回は一時協力戦線！！

お楽しみに！！

第70章 誰にでも知られたくないことはある!!

ドラ「うおおおおおお!!」

力任せに次々襲いかかってくる奴らを切り倒していく。

ゲイター「うおおおおおお!!」

ゲイターも同じく・・・

デビー「な、何故だ・・・たった二人でここまでとは・・・」

ドラ「まだまだ!!倒れんなよ!おっさん!!」

ゲイター「それはこっちの台詞だぜ!あんちゃん!」

ドラ・ゲイター「うおおおお!!」

辺り一面はデビーの部下の亡骸でいっぱいだ。

ドラ「まだまだ!!うおおおお!!」

こんなに斬っても中々数は減らない。

ゲイター「どんだけいんだよ!!」

暫くして

ドラ「はあはあはあ・・・どうだ・・・」

ゲイター「これで結構減ったぞ・・・」

デビー「おのれえゝお前ら！最後のトドメを！！」

デビーが残りの数少ない部下に向かってそう命じた。

ドラ「くっ・・・」

ゲイター「これまでか・・・」

ドラ「だが・・・俺は・・・諦めない！！」

ゲイター「諦めが悪いんでね・・・俺も・・・」

ズバン！！

ドサッ

デビー「なっ！？」

ドラとゲイターは最後の力を振り絞って残りの敵を切り裂いた。

デビー「ま、まさか・・・ありえない・・・たった・・・二人で・・・」

ドラ「どうやらオメエゝだけになったみたいだな・・・」

ゲイター「どうする・・・？」

デビー「ちっ！！覚えとけ！！」(ピーーーーー！

デビーは口笛を鳴らした。

するとどこから鷹が飛んできてデビーは鷹の足に掴まるとどこかへ飛んでいった。

ドラ「あっ！？」

ゲイター「ちっ！逃げ足の速い奴め・・・」

ドラ「アンニャロー！！」

ゲイター「後でケリはつけれるさ！さて・・・俺は先に行くか・・・
奴らの本拠地で突き止めるかな・・・」

ドラ「どうやって行くんだよ？」

ゲイター「忘れたか？俺は砂人間だぞ！」

ドラ「ああ！そっぴやそうだったな・・・」

ゲイター「水龍のドラよ！また後で会おう！次は奴らの本拠地かな？」

ゲイターはそう言つと体を砂に変え、砂の中へと入っていった。

ドラ「さて・・・俺も・・・！？」

突然地面が揺れ出した。

ドラ「な、何だ!？」

ドッパン!!

地面が持ち上がり・・・そして姿を現したものは・・・

ドラ「あああああ!!」

??「待たしたなあ!!陸でもどこでも行けるぜ!!」

?????

デビー「申し訳ありません!!ギガス様!!」

ギガス「お前は何の為に رفتたのか分らないか!!」

デビー「す、すみません!!」

ギガス「お前が謝ったところでもし奴らのデータが取れなかったら俺の首が飛んでしまうんだぞ!!」

デビー「はっ!ははは・・・」

ギガス「まあ、良い!だが次は無いからな!!」

デビー「ああゝ有り難き幸せ・・・」

ギガス「分かったら行け！」

デビー「はっ！」

デビーはそそくさと部屋から退散した。

ギガス「・・・何故ここが分かった？」

ギガスは突然声を上げた。

??「あれ？バレたんだ・・・」

ギガス「まさかもう来たのか？さっきまで水龍と居たではないか！」

??「俺の情報網を嘗めるなよ！」

その声の主はゲイターだった。

ゲイター「しかし・・・お前は何者なんだ？邪龍？先ほどのやつもアレは”グランドライン偉大なる航路”の後半の海『新世界』の強者だろう？さらにざっと見たところで他にもごろつき共もいる・・・お前なんか従えるほどとは・・・」

ギガス「俺なんかとはないだろうよ・・・」

ゲイター「お前は何モンだ？」

ギガス「知らない方が良いぜ・・・？」

ゲイター「いずれ分かることだぜ！」

ギガス「ハッハッハッハッハッ！言うな！お前も！だがコレを聞けばお前も減らず口をたたいてはおられまい・・・」

ゲイター「どういうことだ？」

ギガス「コレを聞くからには覚悟しろよ！」

ゲイター「なっ！？」

ゲイターの廻りにギガスの部下達が囲むようにして現れた。

ゲイター「おいおい・・・こりゃ～新世界の海賊共じゃないか・・・しかもいずれも賞金は億越え・・・こりゃ～ただの隠居好きのおっさんじゃないなあ～」

ギガス「そうさ！おめえ～ら！！世界海賊『影狼』カゲロウの名において始末するんだ！！」

ゲイター「それがおめえ～さんの正体か？とうとう化け皮を剥いだな・・・蛇さん？」

ギガス「だから何だ？この数を相手にどうするのだ？」

ゲイター「確かに俺一人じゃ無理だなあ・・・」

ギガス「そうだとも！」

ゲイター「ただし・・・俺一人の場合だぞ？」

ギガス「は!？」

ドガン!!

突然爆音が響いた。

第70章 誰にでも知られたくないことはある!! (後書き)

ドラが目にしたものとは!?

そして世界海賊『カゲロウ影狼』とは!?

次回、できれば明らかにしたいです・・・

お楽しみに!!

第71章 他人の家に行くときはアポを取れ!!

??「待たしたなあ〜ドラ!!」

ドラ「あつ!! シャーク!!・・・そ、それは・・・?」

シャークは船らしきもの乗って現れた。

シャーク「これか? コレはな・・・『フライング・タイガー号』を改造して新たに変形モードを導入して地中と地上を走れるようになった・・・『ジェット・レオン号』だ!!」

それは、先端にはドリル。

地底探査機のようなものだ・・・

シャーク「とりあえず乗り込め!! 話はそれからだ!!」

ドラ「おう!!」

ージェット・レオン号内ー

ドラ「で・・・どうするんだ?」

シャーク「お前の言ってくれた世界海賊『影狼』はある意味伝説の海賊団だ・・・とりあえず俺の情報網をフル活用して調べてみる!」

ドラ「とりあえず・・・奴らのアジトを調べないとな!どこにある

か分かるか？」

シャーク「今、この島のマップと照らし合わせて照合している！・・・とりあえず奴らのアジトに着いたら・・・」

シヨット「んなもん決まってるじゃないか！！強行突破だろう？」

ドラ「そうだな・・・」

シヨット「それなら任しておけ！！シャークが作った兵器がたくさんあるからな！！」

レーツ「その後は・・・肉弾戦だな・・・」

ウィング「真っ正面からぶつかるとか？」

ドラ「どっちみち戦うんだから真っ正面からだろう？」

シャーク「奴らのアジトが分かったぜ！」

そこへシャークが地図を持って現れた。

ドラ「で、どこなんだ？」

シャーク「意外と近くだった・・・そう時間は掛からん・・・」

ドラ「リブラ！オメエはどうすんだ？」

リブラ「俺か？・・・もちろん参加させて貰うぜ！奴らは所詮はただの道具だからな・・・」

ドラ「え？」

リブラ「いや・・・何でもねえゝ忘れてくれ！暴れるときは暴れさせて貰うぜ！！」

ドラ「お、おう！」

シャーク「無駄口を叩かない方がいいぜ・・・奴らのアジトだ！」

ドラ「もつか？」

シャーク「ああ・・・今このジェット・レオン号は地中を走っている。地上と比べて障害物がないからスムーズなのさ！」

ドラ「なるほどゝ要するに不思議地下だな？」

シャーク「いや、分かってねえゝならそんな反応するなよ！」

ドラ「よし！ショット！！突入準備を頼む！！」

ショット「了解！！」

ショットは武器庫へと向かった。

ドラ「レーツ・ウィングはハッチを開けて俺とすぐに出れる準備を！！」

レーツ・ウィング「了解！！」

ドラ「シャークはこのまま船の操作を！！できれば攻撃もお願いな
？」

シャーク「任せろ！！コレは戦艦だぞ！この船にも攻撃はできるぞ
！！」

ドラ「リブラも一緒にいいか？」

リブラ「いつでも良いぜ！！」

ドラ「OK！！じゃ、みんな行くぜ！！」

全員「おう！！」

ー邪龍アジトー

ギガス「この数・・・どうする？」

ゲイター「確かに俺一人じゃ無理だな・・・」

ギガス「そうだろう？」

ゲイター「しかし・・・俺も腕がまだなっていないな・・・」

ギガス「なに？」

ゲイター「さすがは邪龍・・・良い犬を飼ってんな！良い動きだよ
！だが・・・今のとつさに俺はオメエゝら数人を斬っていたこと気
づかせられねえゝんだから・・・ダメだな・・・」

部下「なっ！？・・・」

数人がその場に倒れた。

ギガス「何だと・・・今の間に・・・」

ゲイター「どうだ？」

ギガス「おのれえゝ・・・オメエゝらやつちまいな！！」

ドガンー！！

不意に爆発音が聞こえた。

ギガス「な、何だ！？」

ゲイター「遅かったじゃねえゝか・・・祭りは始まってんぜ！！」

ドラ「待たせたな！砂のおっさん！！」

ドラが出てきた。

今の音はドラ達が地面を突き破って出てきた音だった。

ゲイター「おっさんじゃねえゝよ！？」

すかさずツツコミを入れた。

ドラ「なんだよ・・・もう始まってんのか・・・？それなら先に言

えよー!!」

ゲイター「いや、もうさっき言ったぞ!」

ドラ「とりあえず!!リブラ達の島民を返せえええええ!!」

ドラ、レーツ、ウイング、リブラが飛び出してきた。

ドラ「俺の相手は誰だああああ!?!」

レーツ「おい!ドラ!自分だけ多く倒すなよ!!俺だつて暴れてえゝんだ!」

ウイング「なら・・・勝負するかゝい?レーツ?」

レーツ「面白れえゝじゃんか!!望むところだ!!」

リブラ「とりあえず・・・片っ端から・・・潰すか・・・」

ドラ「うおおおおお!!」

ギガス「ほうゝあれが水龍海賊団の船長『水龍のドラ』か・・・少しは楽しませてくれるかな?」

ドラ「水龍拳!!」

ドラは敵陣に向かって攻撃を放った。

第71章 他人の家に上がるときはアボを取れ!! (後書き)

最近、更新が少なくてすみませんm(_ _)m

テスト期間中で・・・↑テスト勉強は!?

とりあえず・・・

来週になれば少しは落ち着くので・・・

次回もお楽しみに!!

第72章 人を騙すときはバレずにやれ!!

部下「な、なんだ・・・こいつら・・・つええっ!!」

ギガスの部下達は目の前の強敵にビビッていた。

ドラ「なんだ・・・こんなもんか？」

レーツ「大したことないな・・・」

ウィング「所詮はこの程度・・・」

部下「粹がつてんじゃねえっ!!」

部下達がまとめて飛びかかってきた。

部下「船長を殺せば廻りも崩れるはずだ!!」

一斉にドラ目掛けて飛びかかってきた。

ドラ「・・・ちっ」

部下「!？」

突然横から何かが現れた。

??「バァッカ!いきなり船長^{ボス}を殺せるかよ？」

ドラ「レーツ!!余計なことしなくても・・・」

レート「ウルセェー！！じゃないとウィングとの勝負に負けんだよ！！」

ウィング「なんだ・・・僕に負けそうでそんな格好付けをか？」

レート「うつ・・・」↑図星

レートは図星を付かれ言い返せなくなった・・・

レート「と、とにかく！！こいつらは俺が潰す！！二刀流 鎌鼬！！」

レートは目にも止まらぬ早さで部下達の間を抜けた。

部下「・・・！？」

部下達は次々に倒れていった。

レート「俺と戦いたきゃ特訓でもしてくんだな！」

レートはキリツときめた。

ウィング「よぉ格好付け！！」

ウィングが煽った。

レート「んな！？ルセェー！！」

ギガス「戦場でケンカとは・・・どれほど余裕なんだ？」

ギガスが現れた。

ギガス「自然系も大したことないな・・・」

ドサッ

ギガスは何かをドラ達の前に放り投げた。

一同「!？」

それは傷つきボロボロになっていたギターだった。

ギガス「中々だったが・・・まだまだだな・・・」

ドラ「おい！おっさん！大丈夫か？」

ギター「・・・だ、だから・・・お、っさんじゃ・・・ね、え・・・」

ドラ「あっ！大丈夫みてえだな・・・」

ドラはギターをその場に寝かせた。

ギター「えっ!？それで終わり!？もっとう何か言うこと無いの!？ほら！普通だったらもつとあんじゃん!！」

猛烈にツツコミを入れた。

ドラ「おめえ〜ピンピンしてんじゃん!」

ゲイター「あっ・・・」

ドラ「よし！てめえくぶつ飛ばす！」

ドラはギガスの方に向き直ると腕を鳴らした。

ギガス「こいよ！」

ドラ「上等だ！！水龍拳！！」

ドラは勢いよく放った。

ギガス「ほう・・・威力は大きそうだが・・・力が足りないな・・・」

ギガスはドラのワザを右手一本で受け止めた。

ドラ「なっ！？」

ギガス「どうした？」

ギガスは顔色一つ変えなかった。

ドラ「・・・フツ・・・ありがとよ！水龍弾ける！！」

ギガス「！？」

水龍がギガスの手元から一気に弾けて水飛沫となってギガスに掛かった。

ドラ「バカ正直でありがとよ！お前は俺に力の差を見せようと思ったのかい？それを利用して貰ったぜ」

ギガス「何！？」

ドラ「お前・・・タフそうだから水だけでは足りなそうだね・・・シヨット！」

シヨット「おうよ！」

ドラの後ろから銃を構えたシヨットが現れた。

シヨット「シャークが開発したドラと共用の銃・・・名を『^{エレキ}電気銃^{ガン}』だ！」

ドラ「ってそのまんまじゃん！」

シヨット「喰らいな！！エレキシヨット！！」

シヨットは^{エレキガン}電気銃を発射した。

ギガス「しまっ！？」

ギガスは濡れているから電気を通しやすいので倍のダメージを与えられた。

ギガス「ぐはあああああ！？」

バチバチバチ・・・

ボワン！

ギガスは何故か消えた。

ドラ「何っ！？」

ギガス「ハッハッハッハッハッ！ご苦労さん！」

どこからかギガスの声が聞こえた。

ドラ「ど、どこだ！？」

ギガス「君たちが倒したのは俺の分身さ！」

ドラ「何っ！？」

ギガス「言っただろう？俺は自分じゃ動かないって！後はあいつが相手をしてくれるぜ！」

ドラ「えっ！？」

??「無茶ぶりすんじゃないやねえ〜！」

ドラの目の前に突然人影が見えた。

ドラ「！？」

??「滅^{めつ}！！」

ドラの前にお札を突きだし吹っ飛ばした。

ショット「ドラー!!」

??「水龍のドラもその程度かい? オメエは……いや……
メエらは既に俺の術の中に入ってたよ!」

ショット「ま、まさか……その札に……その服装……」

目の前の男は黒いマントを羽織っていた。

そしてマントの下には黒い着物を着ていた。

レーツ「知ってるのか?」

ショット「ああ……本物は初めてだが……こいつは『術殺士^{ジュツサツシ}』
や『黄泉送り』などと言われている懸賞金4億ベリー『術殺士』
デストールだ!!」

デストール「知っていたか……なら^{はなし}断は早いぜ……消えても
らおうか……」

デストールは札を構えドラ達の攻撃を仕掛けてきた。

デストール「滅^{めつ}!!」

第72章 人を騙すときはバレずにやれ!! (後書き)

最近中々更新ができずにすみませんm(_____)m

これから更新回数が少なくなるかも知れませんが・・・

応援よろしくお願いします

次回はドラの真の能力が開花する!?

楽しみに!!

第73章 邪悪な水龍の誕生！？

ドラ「な、何だ・・・その札？」

ドラががれきの中から姿を現した。

デストール「そうさ！そう来なくちゃ！こんなんで終わったら面白くないからね」

ドラ「だから何だって聞いてんだろぅがああああ！！」

ドラはデストールに殴りかかった。

デストール「ううゝん・・・威勢は良いが力が弱いな・・・」

ドラ「なっ！？」

ドラの技 水龍拳を人差し指一本で抑えていた。

ドラ「なら・・・弾ける！！」

水龍拳は先ほどと同じように弾けた。

水飛沫となってデストールに降りかかった。

デストール「先ほどと同じ方法か？」

シヨット「その通りだ！！」

ショットが電気銃^{エレキガン}をぶつ放した。

デストール「おいしいなあ」

ドラ・ショット「何っ!？」

なんとデストールは札を体の前にたくさん浮かせ攻撃を防いでいた。

デストール「こんなのじゃ俺の術は敗れないぜ・・・」

ドラ「だったら水^{ウォーター}の部屋^{ルーム}!!」

デストール「遅い!!」

デストールは包まれる前に飛び出した。

ドラ「はい!？」

デストール「残念だったな!」

デストールは空中で勝ち誇ったように笑った。

??「いつまでその余裕で居られるかな?砂^{サンド}の衝撃^{クラッシュ}!!」

デストール「何っ!?!いつの間に!」

見るとデストールの真上にゲイターが姿を現していた。

ゲイター「俺を忘れるんじゃない!」

デストール「ぐっ!？」

デストールは攻撃をもろに喰らい地面に落下した。

ゲイター「どうした？もう終わりか？まさか不意打ちで術殺士ともあろう方が負けるのか？」

ゲイターは挑発するように声を掛けた。

デストール「な訳ないだろう・・・俺の目的はまだ果たされないから・・・」

ゲイター「目的？」

デストール「そうだよ！テメエら『封印者』^{スーラー}の魔獣を滅するのが俺の目的だ・・・完全にな！」

ゲイター「なるほど・・・『影狼』も危機を感じた訳か・・・」

デストール「まずは・・・水龍の魔獣を見たいものだ・・・さてどうすれば変身するのかな？」

ドラ「なに？」

デストール「例えばあいつらを滅するとか・・・？」

ドラ「なっ!？」

デストール「そうすれば変身するか!？」

デストールは突然立ち上がると素早くレーツ達に襲いかかった。

ドラ「!?!」

デストール「まずは・・・一人・・・」

デストールはレーツに向き直ると札を出しレーツの目の前にたたきつけた。

デストール「滅!」

レーツ「くっ!?!」

レーツはとつさの判断で刀をクロスし防いだが、力に押され後ろに吹っ飛ばされた。

デストール「彼は暫く動けないぜ・・・さて次は・・・?早く変身しないとドンドン消しちゃうよ・・・」

デストールは次々に襲いかかった。

ドラ「・・・ろ・・・めろ・・・」

ドラは小刻みに体を震えさせた。

ショット「ぐはあああ!?!」

ゲイター（まずい!?!心が不安定だ・・・今の状況で魔獣を引き出したら・・・）

??『暴走するだろうな・・・』

ゲイター（ああ・・・そうなっちまう・・・どうすれば良い？砂鰐？）

砂鰐『・・・そうだな・・・水龍は・・・「封印者」^{スティーラー}の心を感じやすい・・・憎しみがあればそれに同調して最悪・・・暴走する・・・

』

ゲイター（その前に止めなくては・・・）

砂鰐『最悪の事態を考えて俺の準備をして置けよ・・・』

ゲイター（これで2回目だぞ・・・体が持つかどうか・・・）

砂鰐『あくまでも最悪の場合だ・・・』

ゲイター（そうならにようにしないとな・・・）

ドラ「・・・めろ・・・やめ・・・ろ・・・」

デストール「ああん？聞こえねえな？」

ドラ「や・・・やめろって言ってんだろぅがあああああー!!」

ゲイター「マズイ！リミッターが外れる!？」

ドラ「うおおおおおおおー!!」

「???」

ドラ「・・・・・・・・ここは？」

ドラは暗闇の所にいた。

??「ここはお主の心の中だ・・・」

ドラ「誰だ!？」

??「俺か?俺は・・・水龍と呼ばれるものさ!」

ドラ「!？」

ドラの目の前に水龍が現れた。

水龍（黒）「仲間を・・・傷つけさせられるのは・・・もう嫌か？」

ドラ「当たり前だ!！」

水龍（黒）「なら・・・あの黄泉送りを恨むか？」

ドラ「当たり前だ!！」

水龍（黒）「フツ・・・ならもっと恨め!俺が手を貸そう・・・」

ドラ「何っ!??どうすれば?」

水龍（黒）「魔獣解放と叫ぶが良い・・・俺が力を貸してやれる・・・」
ビースト・アウト

』・

ドラ「うおおおおお！！」
魔獣解放^{ビースト・アウト}！！」

ゲイター「しまった！？」

ドラの体が水になり地面に落ち水たまりになった。

そして、そこから地面の水を吸い上げドンドン巨大化をしていき巨大な水の龍になった。

その体は邪悪な黒の色していた。

ドラ（水龍 黒Ver）「グルルルルル・・・」

ゲイター「完全に変化しちゃった！？」

）To Be Continue（

第73章 邪悪な水龍の誕生！？（後書き）

ドラが邪悪な龍に乗っ取られた！？

どうなってしまうんだ！？

次回に続く！！

お楽しみに！！

第74章 邪悪な心に打ち勝て！―ドラの新たな進歩

水龍（黒）「グルルルルル・・・」

ゲイター「ちっ・・・」

砂鰐『どうするんだ？』

ゲイター「様子を見るか？」

砂鰐『そうだな・・・被害は・・・大目に見てこの建物崩壊で免れるかな・・・』

ゲイター「それ結構大惨事だぞ！？」

ゲイターは心配そうにドラを見上げ。

デストール「ハッハッハッハッハッ！それが見たかった！！それを滅したかったんだ！」

デストールはそう言うのと水龍に向かって札を突きつけようとした。

デストール「滅！！」

水龍（黒）「グオオオオオオオ！！」

危険を察知したのか尻尾でデストールをなぎ払った。

デストール「くっ！？」

デストールはとっさに札を大量に出して攻撃を防いだが威力は失われずにそのまま吹っ飛ばされた。

ドガン！？

デストールは壁にたたきつけられ壁はそのまま崩れた。

ゲイター「な、なんちゅゝ威力・・・」(汗

デストール「まだだ！！やっぱあそう来なくちゃ面白くない！！」

デストールは一枚の札を取り出した。

明らかにいつもの札とは違う。

デストール「妖刀召喚！真・封印刀」

札を一本の刀に変えた。

デストール「コレは封印者^{スライヤー}だけを切ることができる妖刀・・・普通のものには切れないものさ！」

そしてデストールは刀を構えると斬りかかった。

水龍は息を吸い込んだ。

砂鰐「まずいあの構えは・・・！？ゲイター！すぐに避難だ！下手すればこの建物自体が崩壊だ！！」

ゲイター「マジか！？何するんだ！？」

砂鰐『良いから！つべこべ言つな！』

ゲイター「はいはい・・・」

ゲイターはすぐに水龍の一味の所へ行くと避難するように呼びかけた。

一味は戸惑っていたように見えた。

水龍（黒）「ゴガアアアアアア！！」

水龍は一気とき放った。

口から水の塊・・・プレスが発射された。

デストール「そんなもの切り裂いて・・・！？」

デストールは斬る余裕がないと気づき慌てて体を反転させ避けた。

が、威力はデストールが思っていた以上に凄まじく、デストールがいた場所はクレーターができていた。それもクレーターとは言えずに巨大な穴になっていた。そこが見えないほどの・・・

デストール「すごい威力だな・・・」

デストールが感心している間に水龍は攻撃を仕掛けてきた。

水龍（黒）「グガアアアアアアア．．．」

咆哮をあげると水龍は体をひねりデストールに向かって突進するような形で宙を浮きすごい早さで迫ってきた。

デストール「さすがは魔獣^{ビースト}．．．結構力が削り取られた．．．ここは引かせて貰うかな．．．」

デストールは水龍に向かって一枚の札を投げた。

デストール「式神・閃光！」

水龍の目の前で激しい光を発した。

水龍（黒）「ゴガア！？」

水龍は光に目をやられて見えなくなっていた。

しかし、スピードは止まらずそのまま前方に突っ込んでいった。

デストール「いずれ．．．決着をつけようぞ．．．そのときにはコントロールできるようにしとけよな！」

そう言い残すとデストールは一枚の巨大な札を出すとそれに乗っかり空を飛んで消えていった。

だが、建物は水龍がぶつかった衝撃で一気に崩壊し始めていた。

ゲイター「水龍を見つけられる可能性は！？」

砂鰐『予測不能だ・・・奴の強運に祈るしかないな・・・』

ゲイター「姿は？」

砂鰐『恐らくまだ水龍のままだ・・・だが、心はまだ黒だ・・・』

ゲイター「OK！あとは抑えるだけだな・・・」

??「グオオオオオオオオオオオオオオ！！」

瓦礫の中からそれ（・・・）は姿を現した。

水龍は怒り狂っているように見えた。

ゲイター「やつこさん・・・かなり怒ってますなあ・・・テメエ
くらしは手伝えよ！」

ゲイターは水龍海賊団にそう促すと前方に走っていった。

ゲイター「体・・・持つかな？」

砂鰐『無茶するなよ・・・』

ゲイター「任せろ・・・OK！バカヤロー♪」

ラップ口調で言った。

砂鰐『悪い癖が始まった・・・』

ゲイター「こうすると気合いが高まるだろう？」

砂鰐『へたくそが・・・』

ゲイター「それ 言うなよ」

砂鰐『楽しそうだな・・・』

ゲイター「じゃ無駄口はここまでだ！行くぞ！『魔獣解放』ビーストアウト！！」

ゲイターの体が砂になり地面に崩れ落ちた・・・

そしてそこから地面の砂を吸い上げ巨大な鰐になった。

ゲイター砂鰐「暴れるぜえー！掛かってこいよ！コノヤロー」バカヤロー」

ラップ口調で挑発する。

水龍（黒）「ゴガアアアアアアアアアア！！」

挑発に乘せられたかどうかは分からないが一つだけ分かったことがある・・・

砂鰐（余計に火に油を注いだんじゃね？）

ゲイター「気のせいさ（^ー^）v」

砂鰐（何だよ！？その顔文字は！？）

ゲイター「今は何故かテンションがおかしいから気を付ける」

砂鰐（・・・もう突っ込まないぞ！）

水龍はまた息を吸った。

砂鰐（来るぞ！！）

ゲイター「OK！掛かって来いよ♪」

水龍（黒）「ゴガアアアアア！！」

一気にブレスを放った。

ゲイター「ならこつちも・・・」

ゲイター サープルブレス
砂鰐「砂の砲弾！！」

こちらも砂の塊・・・ブレスを放った。

そしてその二つの威力は真ん中で丁度ぶつかり爆発した。

水龍はまた体をひねった。

ゲイター「突進か？」

砂鰐（気を付けろあの突進であの建物を崩壊させたんだぞ！）

ゲイター「あいよ！」

そして水龍は体をバネのように弾き砂鰐目掛けて突き進んできた。

それもすごい早さで・・・

砂鰐^{げいた}「肉弾戦なら負けないな・・・」

砂鰐は巨大な口を開け突っ込んでくる水龍を取り押さえようとした。

ドガンー!!

砂鰐^{ゲイター}「くっ・・・キツイなあゝコノヤロー」

かなり後ろに追いやられていた。

砂鰐^{ゲイター}「オメエゝら!!俺が抑えている間にお前らがヤレよ!!」

後ろで構えていた。

水龍海賊団にそう言った。

シヨット「船長を止めねえゝとな・・・」

レーツ「全く手のやける船長だな・・・」

ウイング「後で何かおこつてね?」

シャーク「後で俺の研究の実験台になつてな?」

フェアリー「しょうがないわねえゝ・・・1tくらいの財宝で許してあげるわ・・・」

シヨット「ていうか後半の方・・・もう自分の願望じゃねえゝかあ

あああああ!？」

ショットがありったけの声でツツコミを入れた。

ウィング「まずはシャークが船長^{トラ}を眠らせてね？」

シャーク「あいよ!砂鰐のおっさん!オメエも眠るかもしれねえ
くぜ……」

^{ゲイター}砂鰐「なに……それでも構わん……起きたらこいつが元に戻つ
てることを希望するね!……て言うか今おっさんって言ったよな
!?!絶対言つたよな!?!」

シャーク「暫く眠つてな……」

シャークは水龍に手を近づけた。

そして、手からピンクのオーラを出て、水龍達を包んだ。

シャーク「安らぎを胸に自分の心を取り戻せ……そなたは一人で
はないぞ……」

水龍（黒）「ZZZ……」

水龍は眠りについた。

シャーク「そのまま心を落ち着かせる……さあ、失われた自分を
取り戻せ!！」

包んでいた光が一層に強くなった。

「????」

ドラは何も無い白いところに一人で横になっていた。

ドラ「・・・・ここは？」

??『邪悪な心に奪われるで無いぞ・・・』

ドラ「誰・・・・？」

??『お前の真の光・・・水龍だ・・・』

ドラ「す、水龍？」

ドラの前に水龍が姿を現した。

水龍（青）「我が真の水龍・・・お前の心が憎しみに染まってしまう
い邪悪な水龍に力を取られてしまっていた・・・」

ドラ「そうだったのか・・・」

水龍（青）「だが、お前の仲間が我を導いてくれた・・・邪悪な水
龍が力を失いつつある・・・」

ドラ「!？」

水龍（青）「お前は頼もしい仲間を持ったものだ・・・だが、気
を緩めるで無いぞ・・・お前が憎しみに染まったときまた邪悪な水

龍は力を取るからな！」

ドラ「憎しむなってことか？」

水龍（青）「いや、そう言うわけでは無い・・・憎しみにとらわれたとき自分を忘れるでないぞ！忘れたときがお前は理性を失うからな！」

ドラ「分かった！ところでその邪悪な奴は？」

水龍（青）「その檻じゃ・・・」

水龍が示した先には一つの檻があった。

その中には水龍の黒がいた。

ドラ「二人は一緒にいるのか？」

水龍（青）「我等は最初は同じ一つだった・・・だが、あるとき境界に人格が二つになってしまった・・・それがその邪悪と我だった。それが始まりだ・・・」

ドラ「まっ！いつか一緒になれると良いな！」

水龍（青）「フツ・・・」

水龍（黒）「・・・だから甘ちゃんなんだよテムエ」は！」

ドラ「クロ！」

水龍（黒）「ク、クロ！？・・・なんだそれは？」

ドラ「いやあゝ二人いるからアオとクロで良いかなあゝって？」

水龍（青）「それも良いかのぉ」

水龍（黒）「納得できん・・・それは別として俺たちをまた一緒にするだど？笑わせるぜ！俺は完璧な黒・・・邪悪な心の持ち主なんだよ！戻そうにももうできないぜ・・・」

ドラ「そうか・・・」

ドラは水龍^{クロ}の檻に元へ歩み寄った。

水龍（黒）「！？」

ドラ「ならお前の分も分かってやりてえゝな！！」

水龍（黒）「小僧・・・だから、甘ちゃんなんだよ！俺を分かる前に俺に乗っ取られちゃゝダメだな・・・」

ドラ「その憎しみ・・・俺も分かち合ってやりてえゝんだよ！」

水龍（黒）「バカだな・・・小僧・・・」

水龍（青）「そろそろ戻った方が良いんじゃないか？仲間達が心配しているだろうよ・・・」

ドラ「そうだな！なあ？ここってまた来れるのか？」

水龍（青）「我が呼びかけるかお前が呼びかけるかでここに来ることが出来る。むろん邪悪^{キヤツ}が呼んでもな！ここはお前の中だ！」

ドラ「そっか！分かったよ！じゃあゝな！」

水龍（青）「それと我はお前の側にいつも居るからな！」

ドラ「OK！じゃあゝな！！」

ドラは目を覚ますと寝室で寝ていた。

隣のベットにはゲイターも一緒に・・・

窓の外を見る青い空と青い海が見えた。

どうやらもう出航しているみたいだ・・・

ドラ「・・・痛ッ！？」

全身に痛みを感じた。

??『まだ寝ていたほうが良いぞ』

ドラ「誰？」

??「私だ・・・」

ドラ「アオか？」

水龍^{アオ}「まだその名前には慣れぬのだが・・・」

ドラ「気にするな まっ・・・少し寝るな！」

水龍^{アオ}「クロのやつが少々暴れたみたいだから・・・休息を取るべきだ・・・」

ドラ「あいよ！・・・ZZZZZZ・・・」

水龍^{アオ}「って寝るの早ッ！？」

ドラはまた静かに眠りについた。

第74章 邪悪な心に打ち勝て！！ドラの新たな進歩（後書き）

章完結しそうな雰囲気ですがまだ続きますよ！！

次回、遂にペンダントの秘密が明らかに！？

半分、明らかになってるけど・・・

お楽しみに！！

第75章 ドラのペンダントの秘密（前書き）

遂にドラのペンダントの秘密が明らかに！？

て言うか・・・

ほぼ分かっているが・・・

とまあ～こんな感じで第75章の始まり～

最後にちよつとお知らせが・・・

ドラが目を開けると・・・

ドラ「痛つてえ～まだズキズキする～・・・」

と何気なく窓の外を見ると・・・

外は暗かった。

ドラ「何だ・・・もう夜か・・・」

と寝過ぎていた事に気づきまだから目を離そうとした途端・・・

窓の外を何かが横切った。

ドラ「！？」

ドラは驚いて窓の外に目をやるとそこには見たこともない生物がうようよ漂っていた。

ドラ「な、なんじゃこりゃー!？」

そしてドラは気づいた。

ドラ「ま、間違えねえ……ここは深海だあああああああ!？」

第75章 ドラのペンダントの秘密

ガチャ

扉を開く音がした。

ウイングだ。

ウイング「ドラ・・・目を覚ましたんだね・・・気分は・・・？」

ドラは混乱した顔をしていた。

ウイング「どうしたんだ？」

ドラ「な、なんじゃこりやあああああ！？」

ドラはまた叫び声を上げると部屋を飛び出した。

ウイング「ありや・・・まっ！無理もないか・・・目を開けたらそこは深海だったなんて・・・」（プツ

ウイングは苦笑しながらドラの背を見ていた。

ドラ「こっちも深海！？」「こっちも！？」「あっちも！？」

ドラは船中を走り回った。

ドラ「はあはあはあ・・・どうなってんだ・・・」

パンツ!!

ドラは食堂の扉を勢いよく開けた。

一同「ドラじゃねえかもう大丈夫なのか？」

シャーク「ん？どうした？顔色が悪いぞ・・・」

シャークがドラの異変にいち早く気づいた。

ドラ「な、なんで・・・深海に居んだああああ!!？」

ショット「ああそれか・・・シャークに聞けば分かる・・・」

ドラ「ってやつはおめえかああああ!!？」

ドラはシャークの襟首を掴み揺さぶった。

シャーク「そ、そう・・・お・・・れの・・・せい・・・さ・・・」

シャークは揺らされながらそう答えた。

ドラ「何で!？」

シャーク「それはな・・・」

時は坂登・・・1時間前

「レーツちっ！？海軍だ！」

水龍海賊団は海軍の軍艦に囲まれていた。

「シヨット、船長が不在だということのによぉ」

ウィング「ここはやっぱ強行突破かな？・・・でも衝撃を与えちゃうとドラ・・・起きなくなっちゃうかもよ！」

「ショット」さっさと危ねえ！こと言っな！？」

「レーツ、確かに……衝撃は怪我人には重い負担になるしなあ」

「フェアリー、ど、ど、どにするのよ!？」

シャーク「シャツシャツシャツシャツ……」

シャークが高笑いして出てきた。

一同「この事態で笑ってんじゃねえええええええ！？」

全員でシャークを蹴り飛ばした。

「シャーク・ぐべらっ!？」

シヨット「状況を考える！！」

「シャーク、ま、待て……話を最後まで聞いてくれ……」

一同「あん!?!」

シャーク「こ、こんなこともあるつかと・・・秘密兵器を用意した・・・」

一同「ヒミツヘイキ?」

シャーク「そ、そんな疑いの目で見なくても・・・」

シヨット「そんなもんあんのか!?!」

シャーク「ここで・・・」

一同「!?!」

シャーク「さすがシャークのコーナー!!」

一同「やめろ!?!」

全員でシャークに強烈な蹴りを入れた。

シャーク「ばばばびばばおおお!?!」(またおなじとこおおおお!?!)

シヨット「どうかで聞いたことあるようなコーナーやめろ!?!」

シャーク「と、とにかく・・・聞いてくれ・・・潜水艦を用意した!」

一同「はあ？」

シャーク「だから潜水艦を用意したんだって!!」

レーツ「なら出してみろよ！」

シャーク「OK!てめえくら中に入りな！」

シャークは一同を連れて操縦室に入った。

シヨット「で、どうするんだ？」

シャーク「ま、見て置けよ!ポチツとな！」

シャークは一つのスイッチを押した。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ...

船が揺れ始めた。

シヨット「な、何だ!？」

機械音が聞こえてくる。

ギギギギギギギギギギ...

ガチャン!

機械がはまる音がした。

シャーク「これでOK！テメエら船の外を見てみるや！」

レーツ「外が・・・！？」

窓から外を見ると船が姿を変えていた。

一同「な、なにiiiiiiiiiii！？」

シャーク「これぞ・・・海の王者・・・『バイオレンス・シャーク号』だ！！」

一同「・・・・・・・・」（汗）

シャーク「船体は鯨のようになっていて、両端には我等が水龍海賊団の海賊旗が入っている。そしてこいつは海上にでもこのままで進めるさ！海上に上がればこの潜水艦のてっぺんが少し平らになっていてな・・・海上に上がれば甲板として使えるのさ・・・さらに帆を張る木も取り付けてあるから船のエンジンを使わなくても良いんだ！」

一同「さ、さすがシャーク！！」

シャーク「てな訳だ・・・」

ドラ「すげえええええええええ！！」

??「やれやれとんだ科学者だな・・・」

全員が声がした方向を振り向く・・・

入り口に寄りかかっていた人物がいた。

ゲイター「だった。」

ゲイター「さて・・・俺も話したことがあるんだが・・・良いか？」

ドラ「話したい事ってなんだ？」

ゲイター「単刀直入に言う！そのペンダントについてだ！」

ドラ「このペンダント？」

ゲイター「聞くところに寄ればそれはかの四皇『青髪のジャッカル』から貰ったそうだな・・・？」

ドラ「ああ・・・そうだ！」

ゲイター「そんなとき何か言ってたか？」

ドラ「確か・・・」

ー回想ー

ジャッカル「ドラ！これをお前に預ける！これは、俺の大事な宝物だ！いつか、立派な海賊になって俺に返しに来い！絶対だぞ！それまで、お前が持っている！」

ドラ「いいの？これはジャッカルのこと・・・」

ジャッカル「いいんだ・・・俺たちを越えるんだろう！それくらいはして貰わないとな！」

ドラ「う、うん！！」

ジャッカル「ドラ、泣くな、男だろう！また、会える！」

ドラ「な、泣いてなんか・・・いねーよ！！」

ドラは下を向いて涙を堪えていた。

ジャッカル「ドラ！また会おう！その日まで、俺を忘れるな！」

ジャッカルはポンとドラの頭に手を置いた。

ドラ「って・・・」

ギター「なるほどな・・・」

ドラ「それがどうしたんだ？」

ギター「とりあえず・・・今の話は少し置いとくことにして言うぞ！そのペンダントには『魔獣^{ビースト}』が封印されている・・・」

ドラ「それがあの水龍か？」

ゲイター「そうだ！そしてそいつの持ち主を『封印者^{スリーパー}』と言う・・・」

ドラ「俺とかゲイターとかか？」

ゲイター「そうだ・・・だが俺たち二人だけじゃない・・・この世界何人かが居る・・・」

ドラ「へえ」

ゲイター「そして・・・世界海賊『影狼』と対抗できる唯一に勢力でもある」

ドラ「え？海軍じゃダメなのか？」

ゲイター「ダメだ・・・世界政府が手の中に修めている・・・当然奴らは黙秘だ・・・だが海軍は動けるのだが政府からの中止が出ればそく退却をしなければならない・・・」

ドラ「じゃ、他の海賊は？」

ゲイター「確かに良いかもしれないが・・・俺たち『封印者^{スリーパー}』は影狼の目当てなんだ・・・」

ドラ「どういうことだ？」

ゲイター「奴らはこの『魔獣^{ビースト}』の力を使おうとしている・・・それを防ぐには・・・俺たちしかないんだ！」

ドラ「なるほど・・・」

ゲイター「まだ・・・あるぞ・・・そのペンダントの本当の意味が・・・」

ドラ「そ、それは・・・？」

ゲイター「・・・フツ・・・後は自分で考えな・・・まだお前に教える時期じゃない・・・答えを探して分かなければまた俺が教えてやる・・・そのときには今よりも強くなつてな！ちゃんと『魔獣^{ビースト}』を操れるようにしておきな！」

ドラ「・・・えっ？」

ゲイター「まっ！頑張れよ！とにかく次に浮上したら俺はこの船から出てくしな！」

ドラ「何だ？もう行くのか？」

ゲイター「俺は急がしいんでな！」

ゲイターはそう言うと部屋から出て行った。

ドラ「なあ？水龍・・・おめえゝなら分かるか？」

水龍「さあな・・・」

ー水龍の世界ー

ドラ「ゲイターの言っている意味が良く分からんだけど・・・」

水龍^{アオ}「ハッハッハッハッハッ！そうだろうよ！まだ混乱しとるな？」

ドラ「そりゃそうだよ！いきなり魔獣など封印者って整理ができねえ」

水龍^{アオ}「じっくり考えるんだな・・・」

水龍^{クロ}「じっくり考えている暇はねえかもよ・・・」

ドラ「どういう意味だ？」

水龍^{クロ}「俺の邪悪な心がそう言つのさ！近々戦争が起きるかもって・・・」

水龍^{アオ}「戦争じゃと？」

水龍^{クロ}「本当かどうかは定かではないがな・・・」

ドラ「まっ！なにも起こらなきゃ良いけどな・・・」

水龍^{アオ}「とにかくだ！まずは我等を上手くコントロールできるようにせんとな！」

ドラ「ああ・・・覚悟しとけよ！」

水龍^{クロ}「小僧にはまだ無理だな・・・」

ドラ「んだコリア！？その言葉そっくりそのまま返すぞ！」

水龍^{クロ}「邪悪な心には勝てん・・・」

ドラ「とりあえず俺は戻るぜ！まっ！これからヨロシク頼むぜ！」

ドラはそう言つと元の意識に戻つた。

どうやら船は海上に浮上していたようだ。

ドラ「やってやるぞおおおおおおお！！！」

ドラは甲板に出てそう叫んだ。

く隠されたペンダントの秘密編く
ー完ー

第75章 ドラのペンダントの秘密（後書き）

遂に完結！！

次回からはちょっとスペシャルな事をやります！！

その名も・・・

『夏だ！！海だ！！祭りだ！！夏休み特別SP編』

と言っわけで

初回の次回はコレについての説明等々をラジオ風にお送りしたいと思います！

パーソナリティは水龍海賊団船長のドラと水龍海賊団狙撃手のシヨットでお送りします！！

楽しみに！！

（グダグダにならんと良いんだが・・・）

第76章 水龍ラジオ Let's go! go! (前書き)

ドラ・シヨット「水龍ラジオ Let's go! go!」

ドラ「みなさん!!こんにちは!!夏と言えばやっぱり海!だけど・
・海では泳げない悲しい過去を背負っている水龍海賊団船長のドラです!!」

シヨット「長いよ!あと、それに暗い!」

ドラ「長かった?」

シヨット「もつとコンパクトに!」

ドラ「まあまあ・・・とりあえず君も自己紹介を!」

シヨット「はい・・・皆さんこんにちは!水龍海賊団狙撃手のシヨットです!!ヨロシク!」

ドラ「ホント・・・コンパクトだね・・・」

シヨット「ズバツと言った方が良さそうだよ!」

ドラ「そうかもね!」

シヨット「それじゃそろそろ本題に入って行きますか?」

ドラ「それでは自分の方から紹介をしたいと思います!ええ!このラジオはこれから始まる『夏だ!海だ!祭りだ!夏休みスペシャル

編』の紹介等々をやっていくでもあります！読者の皆様からの質問・要望・・・いろいろ答えて行こうと思っております！」

シヨット「はぁーいそれでは最後までどうかおつきあいください！」

ドラ「それでは・・・」

ドラ・シヨット「行ってみよう！！」

第76章 水龍ラジオ Let's go! go!

ドラ・シヨット「水龍ラジオ Let's go! go!」

ドラ「と言っわけで始めました!水龍ラジオ」

シヨット「どんな感じで進めるの?」

ドラ「あまりよく聞いていないんだけど・・・次回から始まる新章についていろいろと紹介とか募集をしてくれとのことですよ・・・」

シヨット「なるほど」やっぱスペシャルだったらこう・・・スペシャルならではことをしたいよね?」

ドラ「そうだねえ」まさにスペシャル!って感じのねえ」

シヨット「ほかには無いの?」

ドラ「何をするかというと・・・」

シヨット「するかというと・・・?」

ドラ「夏にちなんだスペシャルと言うことで!・・・次回とその次の回では夏と言えばやっぱこれでしょう!『夏祭り花火大会!』!』という感じに前編、後編に分けて更新する予定です!」

シヨット「なるほどお」

ドラ「さらにさらにこのイベント(?)の期間中は読者からの質問

にも答えたいと思います！普段この小説を読んで気になっていたこと、キャラクターに聞きたいこと何でもOKです！質問の答えなどはイベント最終日にまたこの水龍ラジオを通して紹介していきたいと思っています！どしどしご応募をー！！」

ショット「豪華だねえ〜・・・て言うか集まるの？」

ドラ「集まっただけですよ！今までこの小説に意見がきたのは・・・片手一本で数えられるよ！」

ショット「そうだねえ〜全然集まらないもんねえ〜」

ドラ「とまあ〜こんな感じで募集しております！どうぞ！コラボの話題でもよろしいですよ！できる範囲で・・・」

ショット「他には何か？」

ドラ「他？そうだねえ〜・・・これで終わり・・・」

ショット「えっ！？」

ドラ「伝えるべき事はコレで終わり！」

ショット「マジ？」

ドラ「本気と書いてマジだ！」

ショット「だったらラジオにする必要なくね！？」

ドラ「どうやらこうやった方が効率が良いみたいなんだよ！」

シヨット「この後どうするん？」

ドラ「そ、それじゃラジオはまだ始まったばかり・・・タイトルコールの後はゲストの紹介です！」

シヨット「ゲスト来るのか？」

ドラ・シヨット「水龍ラジオ　Let's　go! go!」

ドラ「と言うわけでゲストの紹介です！！我等が小説の作者・・・
Ryotaさんです！」

Ryota「どうもお〜」

シヨット「本当に来たの？」

Ryota「突然オフア〜がありまして・・・急遽来ました！」

ドラ「それじゃ、作者としてこの小説を書いているときの体験談や苦労話などを聞かせてもらえればということで聞いていきたいと思っています！」

Ryota「苦労とかねえ〜正直に言うと最近忙しいからね・・・
中々更新ができないことかな？」

シヨット「そりゃーそうみたいだね・・・七月の更新回数だって片手で数えられるか数えられないくらいだもん！」

ドラ「じゃ、逆に書いていて良かったなんてことは？」

Ryota「そりゃー感想などを書いてくれるとめっちゃうれしいですよ！書いてて良かったって思うよ！」

ドラ「そうですか・・・以上！今日のゲストでした！」

Ryota「これで終わり！？」

シヨット「作者なんてそんなもんツスよ！」

Ryota「ええー」

ドラ「それじゃータイトルコールの後はまだまだ見所満載の夏休みスペシャルについてもっと紹介するよ！！」

ドラ・シヨット「水龍ラジオLet's go! go!」

ドラ「それじゃーどんどん紹介していきますか！て言うかさ俺『それじゃー』って始まり多くな？」

シヨット「それ今言うべき？」

ドラ「何となく思ったから言ってみた」

シヨット「はいはい・・・紹介していますよ！」

ドラ「そうだね・・・それでは次回から始まる夏休みSP！」

シヨット「SPに省略したね」

ドラ「何回もスペシャルなんて言ってられないよ！まずは、見所から！何と言ってもこれは・・・メンバーが豪華！」

シヨット「そうだね・・・メンバー豪華だね！オールスター？」

ドラ「かも知れないよ・・・実際やったけどさ・・・かなりの以前出てきたメンバーでの話だからね・・・」

シヨット「祭りの奴な？」

ドラ「祭りの他にもここでしか味わえない番外編ならではお話が収録されています！このラジオが76章だから・・・85章まで？もしかしたら90章まで引き延ばされるかも！？それは進み具合を見てからのことだそうです・・・」

シヨット「まあ～中には夏関係なくね！？みたいな話も入っていますがねえ～」

ドラ「ああ～そうだね！アレ？って奴だよね・・・」

シヨット「とまあ～見所満載の一ヶ月間です！一本たりとも見逃さないように！」

ドラ「何回更新できるかはやってみたからのお楽しみ！なお、一日のアクセス数が100を越えた時には次か次の次の回で何か面白いことをやるかも！？」

シヨット「とか言っている間にお別れの時間がやってきちゃいましたよ！」

ドラ「あつ！もう終わり？」

シヨット「そうなんですよ！時間があまりないの！」

ドラ「それじゃ次回から始まる『夏だ！海だ！祭りだ！夏休みスペシャル編』どうぞお楽しみに！」

シヨット「何回も言いますが全てが豪華！一本たりともお見逃し無く！」

ドラ「また、この小説への質問・意見・感想等々お待ちしております！！なお、このイベント期間中にやって欲しいこともありましたら募集しております！」

シヨット「この小説への質問・意見・要望・感想などはメッセージが感想などで書いて送って下さい！」

ドラ「あれ？一個増えてるよ！」

シヨット「あれそうだったけ？気にしない！気にしない」

ドラ「水龍ラジオLet's go！go！そろそろお別れです！

番組のパーソナリティは私、ドラと・・・」

シヨット「シヨットでお送りしました!」

ドラ「またこんな番組で会えることを楽しみにして・・・」

シヨット「待ってます!」

ドラ・シヨット「それではごきげんよう!」

第76章 水龍ラジオ Let's go! go! (後書き)

それでは次回から始まるSP・・・

お楽しみに!!

ラジオにもっと出たかったな・・・(笑

第77章 く前編く夏祭り花火大会

パンッパンッパンッ

ドラ「祭りじゃあああああー！」

ここは、毎年海賊達の前で行われる夏祭りの会場である『お祭り島』

当然、海軍はこの時だけは黙認してくれるという有り難い祭りだ。

祭りの主催は毎年変わっていて、今年は水龍海賊団が主催となつての祭りだった。

この島には各地から名のある海賊や駆け出しの海賊達が大勢集まつてくる。

今年はめずらしい花火大会をやるというのだからより一層多くの海賊達が集まつて賑わっていた。

ここで彼らの今日の当番を説明しておこう。

ドラは水ということから金魚すくいを担当。

ショットは射的を担当。

レーツは焼きそば・たこ焼き・お好み焼き・・・などなど出店に出ている全ての料理関係を担当。

ある意味こいつが一番忙しそう・・・

シャークとウィングは夜に行われる花火の準備と打ち上げを担当。

フェアリーは全ての指揮官的な感じ・・・

そんな感じで水龍海賊団は自分の仕事に汗水流していた。

ドラ「よってらっしゃい！みてらっしゃい！」

ドラは水槽の前で目の前を通るお客に声を掛けていった。

海賊A「へえゝ金魚すくいか・・・珍しいなあゝ・・・」

ドラ「あなた方の集中力が試せますよ！網一つ10ベリーだよ！今なら網5つで25ベリーだよ！」

海賊B「へえゝ5つの方がお得だな！じゃ、5つで頼むぜ！」

ドラ「へい！マイドォー！」

ドラは海賊からベリーを受け取った。

そしてドラは金魚すくい用の網を5つ渡した。

海賊B「へっへっへっ・・・やってやるぜ！」

海賊は袖をたくし上げると挑戦をした。

そして数分後・・・

海賊B「どわあああああ!?!」

その海賊の結果は取れた金魚は1匹だった。

海賊B「悔しいiiiiiii!」

その海賊を周りの海賊達が慰めていた。

ドラ「またの挑戦お待ちしております・・・」(ニッ

実はこの金魚すくい普通にやっては成功はできない・・・

ドラが渡した網は5個中4個が水に入れてちよつとの衝撃で破れるという網だった。

これを提案したのはフェアリーで網を作ったのは勿論シャークだ。

一方出店の方ではレーツがせわしく動いていた。

レーツ「くそあく客が多くて早く準備ができねえレストランやっていた頃の連中をひっぱてきたけど・・・やっぱり忙しyyyyyy!」

レーツ自信はお好み焼きを担当していたのだが意外にも客に量が他の所とくらべて明らかに多かった。

その理由は味が上手い・・・

という簡単な理由からだった。

レーツは思った・・・

ロコミはこええ」と

海賊C「あんちゃん！お好み焼き3つね！」

海賊D「こっちは2つ！」

海賊E「こっちは1つね！」

レーツ「へい！毎度！」

レーツは素早く鉄板に具材を広げ注文のあった数だけ焼く。

そしてやけたものから順にプラスチックの箱に詰めていった。

レーツ「お好み焼き3つの方！できましたよ！一つ100ベリーなので300ベリーになります！」

レーツは品物を渡し代金を受け取った。

レーツ「これは意外にも俺が売り上げ一位かな？」

じつは説明し忘れたがドラとショットとレーツは自分の担当の店で誰が一番売上が多いか勝負をしていた。

負けたら1週間雑用係になる。

こちらはシヨット・・・

シヨット「射的やっていかない？」

シヨットは通る客に声を掛けていった。

案外客足が少なかった。

シヨット（ヤベエ！よこのままだと雑用決定！？こうなったら・・・）

シヨットはそこで寝ていたベルを起こすとなにやら話しかけるとベルは大急ぎで船へと走っていった。

シヨット「すこしくらいなら大丈夫だよなあ」

暫くするとベルは重そうに袋を一つ持ってきた。

シヨット「おう！サンキュー！あとで何か食わせてやるからな！」

シヨットはベルの頭をなでた。

シヨット（これで上手くいけば売り上げ一位だぜ・・・¥¥¥¥）

一方シャークたちは・・・

シャーク「よし！これで一通り準備はできたな・・・」

ウィング「そうみたいだね・・・あとは日が暮れるまで待つまでか・・・」

シャーク「そうだな！早いところ打ち上げ場所に持って行くか！」

ウィング「だがどうやってこの量を持って行くんだい？」

シャーク「・・・そんなこともあるうかともう事前に準備はしてあるぜ！」

ウィング「？」

シャーク「5メートルまで耐えられる荷物運び機だ！！」

とシャークは船から引つ張って降ろしてきた。

ウィング「ハハハハハ・・・いつの間にこんなもの・・・」

シャーク「さつさと運ぶぞ！発射台もちゃんと乗っけるよ！そのためにクレーンも取り付けたんだからな！」

シャークたちは発射台や花火の球などを慎重に乗せ打ち上げ場所へ向かった。

その頃島の反対側では・・・

??A「これほどの絶好なチャンスはない・・・」

??B「ああ・・・海軍も居ない今奴らを討つぞ!」

??C「だが・・・相手は大物海賊団・・・一人でも結構な額になるんだぜ・・・」

??D「だから一人ずつ捕らえていく・・・分かったか?」

全員「ああ・・・」

怪しげな人影達はなにやら話していた。

??A「決行は今夜だ・・・心して掛かれ!」

第77章 〽前編〽夏祭り花火大会（後書き）

更新が遅くなり本当にすみませんでしたm(〽) m
ドンドン更新していきたいと思っております!!

次回は後編・・・

怪しげな影の正体は!?

祭りを楽しめるのか!?

お楽しみに!!

こついのをやって欲しいなどがありましたら是非言ってお下さい！
できる範囲で実現したいと思っております！

第78章 〱後編〱夏祭り花火大会（前書き）

いよいよ祭りも終盤を迎えていた。

ドラ達は余計に忙しくなり汗を流しながら働いた。

それを狙って良からぬ者が動き出していた。

?? A「良いか？奴らを討つ絶好のチャンスだ！我等賞金稼ぎ『ギガス・ホール』の名においてな！」

?? B「おう！」

?? C「手始めに俺が船長をやるぜ・・・」

?? D「お前につとまるか？デルタ？」

デルタ「任せな！」

デルタと呼ばれた男はそう言ってその場を離れた・・・

第78章 く後編く夏祭り花火大会

ドラ「よってらっしやい！見てらっしやい！」

ドラは威勢の良い声を上げお客を呼び込んでいた。

ドラ「忙しい〜」（まさか金魚すくいがここまで大反響だったとは・
・・）

ザッ

ドラの後ろに何者かが忍び寄る。

ドラ「誰だ？今忙しいから後にくんないか？」

??「海賊『水龍のドラ』とお見受け致す・・・俺はデルタ！賞金
稼ぎだ！！」

シーン・・・

ドラ「はいよ！残念・・・また挑戦しな！」

ドラはそんなことをそっちのけにお客の相手をしていた。

デルタ「無視られたあああああ！？」

ドラ「はい！次の方！どうぞ！」

ドラはお客に網を渡していた。

デルタ「おい！聞いているか？」

ドラ「だから後にしろって言ってんだろっ！！」

デルタ「そんなに俺を愚弄するとは・・・なら切り捨て御免！」

デルタは剣を抜くとドラに斬りかかった。

ブワン

デルタ「！？」（バカな！？コレは海楼石の剣・・・水には慣れないハズ・・・）

ドラ「後にしろって言ってんのが聞こえねえのか？」

ドラは体がブレながらそう言ったと思うと徐々に消えていった。

デルタ「なにっ！？」

ドラ「こいつは認識をずらすんだよ・・・幻術　水鏡華！！」

デルタの後ろにドラが現れた。

デルタ「なにっ！？」

ドラ「俺とやりてえくなら時と場所を考えな！」

ドラはそう言い残すとデルタを蹴りで吹き飛ばした。

デルタ「ぐはあああああああ!？」

・
・
・
・
・

キラン

ドラ「やれやれ・・・」

ドラはため息をつくとまた出店に戻った。

それを見ていた者がいた・・・

?? A「ば、バカな!? デルタが・・・瞬殺!？」

?? B「やっぱ船長はそう一筋縄ではいかないみたいだな・・・」

?? D「だったら配下の奴から行くか・・・そうだな・・・この『鷹の牙 レーツ』こいつをやる!」

?? A「できるのか? シータ?」

シート「任せな!」

シートと呼ばれた男はそう言ってその場を離れた。

場所は変わりレーツの担当の店・・・

相変わらず言い繁盛をしていた。

レーツ「忙しい・・・こんな時はゆっくりしたいなあゝ」

そう言いながらも相変わらず忙しいそうに手を動かしていた。

ザッ

レーツ「何か用か？用事なら後にしてくれ今忙しいんだから！」

??「自分はシートと申す！いざお相手をして頂きたい！」

レーツ「それはそれはご丁寧に！相手ならしてやっても良いが忙しくてなあゝ」

シート「別にな・・・忙しいは関係ない・・・こっちは賞金稼ぎなんだからな！」

レーツ「なるほど・・・俺の首を狙ってんだ？」

シート「そうだ・・・人と話すときはこっちを向かんかい！？」

シートはシビレを切らしてそう叫んだ！

レーツ「うるせえゝ忙しいんだから！ん？どうした？ホークス？」

鷹のホークスがレーツに話しかけた。

レーツ「ふんふん・・・お前が？できるのか？」

ホークス「クワァア！」

任せろと言わんばかりに叫んだ。

レーツ「じゃ店番頼んだぞ！」

レーツはそう言う向き直った。

レーツ「あと・・・その奥に居る奴ら！こいつがやられたら運んで行けよ！そして俺たち一味には今日は手を出すなよ！」

??（バ、バレてたああああああ！??）

奥の茂みの奴はそう心で叫んだ。

レーツ「こいよ！」

シータ「望むところだ!!」

シータは剣を抜くとレーツ目掛けて斬りかかった。

レーツ「甘い！遅いな！」

そう言うシータの直線距離から素早く外れると・・・

シータ「なっ!?!」

レーツは後ろへ回り込んだ。

レイツ「俺とやりたければもっと腕を磨きな！」

レイツは刀を二本抜くと・・・

レイツ「二刀流 デスザブレード 地獄の刃！！」

シータ「ぐはあああああ！！？」

シータは力をなくしその場に膝を突き倒れた。

レイツ「ふん！その奴ら！こいつを運んできな！」

??「ハ、ハイ！」

そこから二人が姿を現しコソコソとシータを運んでいった。

レイツ「賞金稼ぎはもっと腕を磨きな！」

レイツは出店に戻った。

そして時は流れ・・・

まあゝ3時間くらいたった・・・

辺りはすっかり日が暮れていた。

シャーク「よゝゝし準備はできたぜ！！」

ウィング「こっちもOKだよ」

「
シャーク「よし！夜になればあいつらも少しは落ち着くだろう・・・」

ウィング「一発目、行くかい？」

シャーク「まてまだ時間がある・・・あと・・・5・4・3・2・
1・0 発射！！」

シャークは発射台に点火した。

ヒュ~~~~~

バー~~~~~ン！

夜空にキレイな花火が広がった。

シャーク「やっぱ夏は花火だよな！」

ウィング「ドンドン行くよ！」

ウィングは次々に球を入れ点火していった。

ヒュ~~~~~

バー~~~~~ン！！

ドラ「た〜まや〜」

シヨット「キレイだなあ〜」

レーツ「すげ〜なホークス？」

フェアリー「やっぱ夏は花火ね！」

水龍海賊団一行は手を休めしばし花火に見とれていた。

この夏の一番の思い出だろう・・・

第78章 〱後編〱夏祭り花火大会（後書き）

ちなみに一位はレーツ・・・

2位はドラ

3位はショットだった。

ショットは最初は一位だったが倉庫のお宝を的にしていたことがばれてしまい・・・失格となり一週間の雑用係になった。

フェアリーはかなり怒りショットは結構焦っていた。

まあ自業自得だ・・・

次回は・・・

椿さんのリクエストで肝試しやります！

お楽しみに！！

字しかないので花火の様子が分からずすみません・・・m（―）（―）
m

第79章 肝試しでドッキリ!? (前書き)

ドラ「よし・・・おめえら準備は良いか？」

シャーク「おう！」

ウイング「おう！」

ここは少し不気味な無人島・・・

突然・・・肝試しをやるうと言うことになりくじ引きの結果ドラとシャークとウイングが脅かし役になった。

そして脅かす準備をしていたのであった・・・

さてさて今回はどうなるのか？

79章の始まりです!!

第79章 肝試しでドッキリ！？

シヨット「絶対おかしい！？よりによって肝を試す方なんて・・・
て言っか何で肝試し！？」

シヨットはびくつきながら夜の道を通っていた。

ガサガサ

不意にシヨットの後ろの茂みがざわめいた。

シヨット「ビクッ！？」

ガサガサ・・・

シヨット「だ、誰だ・・・？」

シヨットはおそろおそろ声を掛けた。

すると・・・

??「誰かつてえゝ・・・そりゃあゝオレだよゝ！！」

ザワッ！

いきなり何かが茂みから飛び出した。

シヨット「！？イギヤアアアアアアアアア！？」

それを見た瞬間シヨットは一目散に逃げていった。

その正体は・・・ドラだった。

ドラは自分の体を水で姿を変えフランケンシュタインを思わせるような風貌になっていた。

ドラ「ありゃあ〜やり過ぎたかな・・・？まっ！次はウィングだしな！」

ニッシッシッシッシと笑っていた。

シヨット「はあはあはあはあはあはあ・・・あり得ないだろう！ー！何であんなにクオリティ高けえ〜んだよ！？」

シヨットは困惑していた。

シヨット「普通はもっとう・・・オバケだぞお〜的な感じでなんか被って現れるのが普通だろ！？」

シヨットは猛烈なツッコミを一人でしていた。

シヨット「さすがにもう変身できる奴は・・・あつ・・・一人いた・・・」

ヒラッ

シヨットの頭の上に一枚の黒い羽が落ちてきた。

シヨット「ん？羽・・・？」

シヨットは羽を見た。

すると不意に声が聞こえてきた。

？？「すみませえ〜ん・・・この辺で羽なんて見ませんでした〜？」

シヨット「羽って・・・コレですか？」

シヨットは黒いフードを被った謎の人物にそう言って羽を見せた。

？？「ああ・・・それです〜」

シヨット「ところで羽なんて何に使うんですか？」

？？「えええ〜それはねえ〜・・・ただ拾って貰いたかったただけなんです・・・」

シヨット「？」

？？「お前を食えないからだよお〜！！」

謎の人物はフードをとりシヨットに笑いかけた・・・

シヨット「ふぎやあああああああああああああああ！
？」

ドラ「やり過ぎじゃね？様子見てこようぜ！」

ウィング「そうだね・・・」

ドラ達は叫び声がした方へ向かった。

すると・・・

ドラ・ウィング「な、なんだコレ！？」

二人が目にしたのはたくさんの化け物と泡を吹いて気絶していたシヨットだった。

シャーク「いやあ、まさかこんなに驚くとは思わなかったぜ！」

ドラ「コレなんだ？」

シャーク「これはさっき作ったオレの脅かし機だ！」

ウィング「脅かし機？」

シャーク「ああそうだ！これを一斉に出したらこいつめっちゃ驚いて泡吹いて気絶しちゃったぜ」

ドラ・ウィング「やりすぎだあああああああ！！！」

ちなみにシヨットが倒れてしまい肝試しどころでは無くなってしまったのでシヨットを担いで船に戻り休ませた。

あとでシャークの脅かし機は解体されたことは言うまでもない・・・

・かくして水龍海賊団の肝試し大会はシャークの優勝で幕を閉じた・・・

シヨット「オレ・・・脅かされただけじゃんッ!？」

第79章 肝試しでドッキリ!? (後書き)

いかがだったでしょうか？

次回はクイズ大会をやるつもりです!!

夏関係無くなッ!?

お楽しみに!!

第80章 クイズなんてクソ喰らえ！

水龍海賊団一同「……………」

ドラ「おい！こら！これは何の茶番だ！？」

水龍海賊団一行は謎の海賊団に行く手を阻まれていた。

？？A「だからさつきから言っでんでしょう！」

ドラ「いや……だから……何で」

ショット「クイズなんだあ！？」

？？A「それが俺たちのやり方！！」

？？B「人呼んで謎々海賊団だ！」

ショット「謎だらけかよ？」

ショットが軽くツツコミを入れた。

レーツ「どうでも良いけど……クイズなら得意だぞ！」

シャーク「オレも！」

ウィング「オレも実は……」

フェアリー「私も！」

一同は乗ってきた。

ドラ「何簡単に乗っかってんだよ!？」

??A「決まりだな？」

ドラ「ちっ!じゃやってやるぜ!そのクイズ勝負とやらをな!」

??A「では早速我が船に上がってきてくれ!」

一行は海賊団の船へと上がっていった。

水龍海賊団一行「なっ!？」

一同は船を見てまず驚いた。

ドラ「な、何で・・・」

シヨット「クイズ番組みたいになってんだあああああ!？」

そこはよくやるクイズ番組のようになっていた。

??A「それでは始めましょうか!おっと!申し遅れました!自分はこの謎々海賊団の船長をやっております・・・ナゾーノと申します!」

ドラ「ナゾかよ!？」

??B「助手やってます!ナゾーです!」

シヨット「ほぼまんまじゃん!？」

ナゾーノ「それではルール説明から行きます!ルールは簡単!これから6問問題を出します!そのうち3問解けたらあなた達の勝ちです!」

ナゾー「ただし4問不正解の時は・・・海賊旗を捨てて下さい!」

一同「なっ!？」

ドラ「おい!テメエ!海賊旗がどういうものか知ってて言ってるのか?」

ナゾーノ「そうですけど?」

ドラ「だったら・・・」

ナゾー「あなたたちが勝てば良いだけじゃ無いですか?そうすれば結構ですよ!」

ドラ「ぐっ!」

ナゾーノ「言っておくけどこの船に入っただけじゃ拒否権は無いからね」

ナゾー「それじゃあ!第一問から!」

ナゾーノ「第一問!」

ジャンジャン！

ドラ「この効果音いるのか？」

ナゾーノ「あるところに全く同じ瓜二つの男の子がいました。二人に『君たちは双子だね？』と聞いたところ答えは意外にも『いいえ』だった。それは何故かな？」

ナーゾ「シンキングタイムスタート♪」

レーツ・シャーク・ウィング「む、難しい・・・」

シヨット「得意じゃなかったのか！？」

レーツ「分かった！」

ピンポーン♪

レーツが早速ボタンを押した。

ナーゾ「はい！レーツ君！」

レーツ「それは・・・二人が・・・嘘つきだからだ！」

シヨット「おおーそれっばい答えきた！」

ブブー

レーツ「えっ？違うの？」

ピンポーン♪

意外にもボタンを押したのはドラだった。

ナーゾ「はい！ドラ君！」

シヨット「おいおい！分かったのか？カンじゃダメだぞ！」

ドラ「この問題はちよつとひねくれてんなあゝこの場に居たのは二人だが・・・実はこいつらは三つ子・・・いやそれ以上だ！！」

ナゾーノ・ナーゾ「！？」

ピンポーン♪

ナゾーノ「せ、正解！！」

シヨット「ドラスゲエゝ！！」

シャーク「中々だな！」

ドラ「そつかあゝ簡単じゃねえゝかよオメエゝらの頭がカチカチなんだよ！」

ナゾーノ「では次の問題！！」

ジャンジャン

ナゾーノ「とある町で事件が起きた。こういう事件だ。橋の上から女性が落ちたということだ。橋の向こうから全速力でボートを漕い

できた男性に捜査一課一番の腕利きの警部が聞いたところ男はこう答えた。

『私は確かにこの目で見ました。あの女性が橋から飛び降りるのを』
しかし腕利きの警部はそれを一瞬でウソだと見破った。さてどうしてかな？」

ウイング「分かった！！」

ピンポーン♪

ウイングがボタンを押した。

ナーゾ「さあ、ウイング君答えを！」

ウイング「それはその男は目が見えていなかったから！」

シヨット「それっぽいモンキタアアア！」

ブブー

ウイング「ちっ！」

シヨット「いや悔しがるなよ！」

ピンポーン♪

またしてもドラだ！

ナゾーノ「はい！ドラ君！」

ドラ「これは簡単じゃねえか？ちよつとよく考えれば分かるもの・
・ボートってのはオールを漕ぐときは後ろにいていなければ前には進めない・・よつてこの男が全速力でボートを漕いでいたのなら当然前には見れないはず・・だから嘘だと分かった！」

ナーゾ・ナゾーノ「！？」

ピンポーン♪

ナゾーノ「せゝ正解！！」

ドラ「楽勝！」

シヨット「何だ？今頃クイズ得意キャラか？」

ドラ「うつせえ〜！」

だがドラの快進撃も上手くはいかず連続3問不正解になってしまい最後の問題へと進む。

ナゾーノ「さあ〜これが最後の問題です！これが不正解になれば海賊旗を捨てなくてはいいけません！！」

ナーゾ「最後の問題です！！」

ジャンジャン！

ナゾーノ「私は水槽に1匹の魚を飼っており、ジョンと名づけてい

る。その水槽には、時々ジョン以外の魚を入れるがしばらく放って置くした後から入れた魚は姿を消してしまう。

ところで、ジョン以外で水槽に入れる魚は共通の呼び方をしているのだが、それは何だと思う??

ひらがな2文字で答えてくれ!!」

一同「ええゝむ、難しいゝ」

ナゾ「そうそう先ほど言い忘れましたがあなた方の船の倉庫に鍵を付けさせて頂きました!」

一同「え?」

ナゾ「つまりこの勝負に勝たなければ倉庫の鍵は開けられませんよ!」

一同「いつのまに!?!」

ナゾ「さあゝ答えを!」

ナゾ「ノ達はさらに調子に乗りだしていた。

ショット「分かった!!」

ピンポン」

ここでショットがボタンを押した。

ナゾ「はい！ショット君！」

ショット「答えは勝手にどっかへ行ってしまうから……『ばかだ！』」

ナゾ「ナゾ！？」

ブブー

ショット「マジかよ！」

ナゾ「残念！答えは分かりませんか？」

挑発してきた。

レーツ「分かった！」

ピンポーン♪

ナゾ「はい！レーツ君！」

今度はレーツがボタンを押した。

レーツ「答えは……『どじ』！」

ブブー

レーツ「ちっ！」

ショット「いや、明らかに違うだろう！？」

ショットがツツコミを入れた。

ショット「おい！ドラ分かったか？」

ショットはドラに声を掛けた。

しかし、ドラは何かしきりにブツブツ言っていた。

ショット「ドラ？」

ドラ「ま、まさか！？いや・・・そうだな・・・それしかない！分かった！」

ピンポン♪

ここで遂にドラがボタンを押した。

ナゾ「はい！ドラ君！」

ドラ「オメエら・・・言葉に惑わされすぎだぞ！単純に考えろよ！問題では消えたと言っていたが、しかしどこかへ消えたんじゃないくて・・・正確にはジョンに食われたが正しい・・・よって・・・ここから導き出される答えは一つ・・・『えさ』だ！」

ナゾ「ナゾ」！？」

ピンポン♪ピンポン♪

ナゾ「くっ・・・正解だ・・・」

ドラ「よっしゃあゝ!!」

ドラ達は思いっきり喜んだ。

ショット「て言うか・・・ドラしか活躍してないし・・・てかドラ頭良かったんだな？」

ドラ「いや・・・全然！」

一同「はっ!？」

全員の声が裏返った。

ドラ「嘘だらけの問題は好きだからな！」

ショット「そう言えば・・・こいつができた問題って全部言葉騙しじゃん！」

ショットは思いっきり叫んだ。

ナゾーノ「完敗だよ!水龍海賊団！」

ナゾーノが歩み寄ってきた。

ナゾーノ「約束の鍵だ!ほらよ!」

ナゾーノは鍵をドラに渡した。

ドラ「サンキュー!まっ!今回は楽しかったぜ!」

ドラはシッシッシツと笑った。

ナゾーノ「フツ・今度は負けないからな！」

シヨット「いや・・・もういいから！やりたくないからね！」

ナゾーノ「では水龍海賊団よ！サラバだ！」

そう言うとナゾーノ達の船はドラ達とは反対の方向へ向かった。

ドラ「さて鍵でも開けるか・・・」

ドラ達は早速倉庫に向かった。

倉庫の前に来るとしつかりと錠がしてあった。

ドラ「用意周到だな・・・」

ドラは関心しながら鍵を開けた。

ガチャ

そしてドアを開けた。

そこには・・・

一同「なっ!？」

なんと見ると目の前にまたドアがあり案の定鍵が掛かっていた。

??「フハハハハハハ！」

どこからか甲高い声が聞こえてきた。

聞いたことのある声だった。

ドラ「ナゾーノ!!」

声の主はナゾーノだった。

ナゾーノ「こんなこともあるつかと保険を掛けておいて良かった！
さあ、水龍海賊団よ！第2回戦と行こうか!!」

ナゾーノは声高らかにそう言った。

一同「まだやるのかよお!？」

水龍海賊団一行は思いきつりツツコミを入れた。

―――END―――

第80章 クイズなんてクソ喰らえ！（後書き）

いかがだったでしょうか？

ここで時間の関係上出することができなかった問題を出そうと思います！

分かった方はメッセージで送って下さい！！

（１）３匹のネコが３匹のネズミを捕まえるのに３分かかります。

では、１００匹ネズミを１００分で捕まえるのには

ネコは何匹必要でしょうか？

（２）ある列車に、何人かの客が乗っていた。

最初の駅で乗客全体の６分の１が降りた。

その次の駅で乗客全体の５分の１、以下４分の３、３分の１、２分の１と

降り、最後の駅では全員が降りてしまった。

この間乗ってきた人はいなかった。

最初に何人客が乗っていただろう。

考えられる人数のうち、もっとも少なくなるのは何人だろうか？

(3) 深夜の道路に10本の街頭が並んで光っている。

実は不良品の電球を使っていたらしく2時間に

1つの割合で電球が切れる。

一方、3時間ごとに見回りが現れて、1つだけ電球を取り替えていく。

12時間後には、いったい何本の街頭が点灯しているだろうか？

(1) は理由も添えて下さい！

見事全問正解のユーザーにはその方の書いた小説にポイント入れます！

次回は夏なんで・・・

海へ！・・・ではなくプールへ行きます！

お楽しみに！！

第81章 プールに入るときは時間に気を付ける！

ピー

館内に笛が鳴り響いた。

ここはちよつとしたリゾート地。

子供が遊泳にくるプールだ。

そこで監視員の仕事をしているのが・・・

ドラ「はあゝい！1時間経ったから10分の休憩だ！オメエゝらさつさと上げれ！」

ドラは腕時計を見ながらそう言った。

すると・・・

子供A「はあゝ何で上がらなきゃいけないの？」

ドラ「オメエゝら知らねえゝのか？プールに1時間以上浸かってるとな！唇が青紫を通りすごして大変な事になるんだよ！」

子供B「嘘くせえゝそんな嘘だよ！」

ドラ「ああゝそうかい！なら勝手に泳いでな！どうなってもオレは知らないからな！」

子供C「いいもん！そんな風にはならないから！」

子どもたちはドラを笑うと泳ぎ始めようとした。

そのとき・・・

??「大変です！監視員さん！こいつが動かなくなっただんです！！」

となぜかシャークがドラに声を掛けてきた。

そこには・・・

ドラ「ほら言わんこつちゃんない！唇が青紫色通り越して全身青紫色になってんだろう！だから10分休憩しろって言ったんだよ！」

見ると全身が青紫色になったショットが床に倒れて（？）いた。

ドラ「暖かいお茶を持ってこい！暖かい毛布を！暖かい眼鏡を！付けるんだ！」

ドラは早急に手当を開始した。

ドラ「ほら息はしているか？ほおぐらしっかりしろ！」

ドラはバシバシとショットを叩いた。

ショット「ゲホッ！」

ショットは口からも青い液体を吐いた。

それを見ていた子どもたちは震え上がって・・・

子どもたち「うわあああああああああ!?!」

一目散に出口目指して逃げていった。

ドラ「よし!」

ドラは腕組みをしてそう言った。

??「よしじゃねえええええええええ!?!」

誰かがドラに蹴りツッコミを入れた。

ドラ「ぐふうう!?!」

それはレーツだった。

レーツ「よしじゃねえ〜よ!完全に子どもたちビビッてたじゃん!何帰してんだよ!?!」

ドラ「何言ってるんだ?子どもたちには良い思い出を作らせるだろう?ちゃんとやってるさ!」

レーツ「いや、良い思い出じゃなくて完全に怖い思い出を作らせてんじゃない?!」

ドラ「大丈夫さ!良い思い出つくるさ!」

ドラはニツと笑うと・・・

ドラ「ほらオメエゝら夏の思い出作りだ！」

シヨット・レーツ「おおおおお！！」

シヨットとレーツが浮き輪をしてプールに飛び込んだ。

バツシャーン！

レーツ「いやオメエゝらの思い出作りじゃねえゝんだよ！？それとシヨット！！てめえゝ何自分の仕事サボってんだ！？オメエゝはこの役だろう！？」

レーツはありたっけの声でツツコミを入れた。

ドラ「おいおい！レーツたまにはハメ外そうぜ！」

ポンをレーツの肩に手を置きドヤ顔でそう言った。

レーツ「いや・・・お前の場合はたまにはじゃなくていつもだろう？・・・ところで他の奴らは？」

ドラ「ええゝと・・・フェアリーはそこでバカンス気分・・・」

レーツ「うほゝ」

ドラ「でウィングは・・・」

ブォーン！

プールの水面を何かがものすごいスピードで駆け巡った。

レーツ「な、何だ!？」

ドラ「・・・水上バイク乗ってる!」

レーツ「はあ？」

見るとそこには水上バイクをブンブン飛ばしているウイングがいた。

ウイング「いやっほあゝ! 楽しいゝ やっぱプールには水上バイクだなあゝ」

ウイングは気持ちよさげにバイクを飛ばしていた。

レーツ「いやおかしいだろおおおお!?! 何でプールで水上バイク!? 普通海でやるだろう?」

ウイング「だってドラがハメ外せって言うからさあゝ外してみまして!」

レーツ「外しすぎだあああああああ!?!」

ドラ「ウイング! オレも乗せてくれえゝ!」

ドラはタイミングを計ってバイクに飛び乗った。

ドラ・ウイング「ヒヤッホオオオオオオオオ!」

シャーク「どうだ? オレの最高傑作のプール用水上バイクは?」

レーツ「やっぱオメエゝが作ったんかい!？」

レーツはツツコミを続けた。

レーツ「もう・・・これただのプールじゃねえ・・・これは・・・まさしく猛獣たちのプールだ!？」

レーツはそう一人で唸った。

レーツ（こんなんでもたちを入れると言うことは・・・ホオジロザメの群れの中に全裸の大人を入れるのと同じだああああああ）

レーツは一人で腕組みをして考えた・・・

そして・・・

レーツ「よし!オレもハメ外そう!」

ポンと手を打った。

レーツは浮き輪を掴むとドラ達の中に飛び込んでいった。

ドラ「おっ!レーツも来たのか?」

シャーク「うおおおおお!流れるプールに改造じゃあああああ
あ!」

彼らは好き放題に暴れた。

そして・・・

数日後そのプールは廃館となった。

第81章 プールに入るときは時間に気を付ける！（後書き）

さて8月も終わりに差し掛かってきました！

学生に皆さんは宿題に追われているでしょう！

まあ自分もだけど！（笑

これで息抜きになればうれしいです！

次回もお楽しみに！！

第82章 私立海賊学園高等学校（前書き）

ここは名の知れた悪たれが集まる学校・・・

私立海賊学園高等学校だ。

今日はこんな学校に今までの数々の不良を相手にしてきた先生が赴任してきた。

その名も・・・『魔犬のハワード』

第82章 私立海賊学園高等学校

キーコーカーンコーン

ショット「おい！知ってるか？今日新しい先公が来るんだってよ！」

ドラ「知らねえ〜な〜てか興味無いし・・・」

そしてこのドラが居るクラスはこの学校の中でも一番のごろつき共が集まっていたクラスだった。

ショット「オメエ〜ならそう言うと思った」

レーツ「でも、そいつ今まで数々の不良を相手にしてきたんだってよ！」

ウィング「それくらいよくあるパターンでしょう？暫くしたら病欠になるか不登校になるって！」

ドガン！

教室の隅で爆発音が起きた。

が皆は驚かなかった。

なぜならそのことはいつもの事だからだ。

ゲイター「またシャークか？何やってんだ？」

シャーク「なあと先公用のミニ戦車（ラジコン式）だ！」

ガラガラ

教室の扉が開いた。

??「ええ、本日からこのクラスの担任になったハワードだ！ テメ
エ、らヨロシ……」

ガヤガヤガヤガヤガヤ・
・
・

ハワード「誰も聞いてねえええええ！？」

ドラ「おい！アンタが新しい先公か？このクラスがなんて呼ばれているか知ってんのか？ここはなあゝ3-D。通称『魔^{デス}のクラス』だ！」

ハワード「そうか……でなんだ？」

ドラ「だからここに来たからにはどれくらいで不登校になるかクラス全員で掛けてんだよ！早く学校やめろよ？」

クラス中に笑い声が響いた。

ハワード「オメエ、たしか……ウォート・D・ドラと言った？」

ドラ「あゝそうだよ！だからなんだ？」

ハワード「大人に対する態度がなっていないぞおおおおおお！」

ハワードは強烈な拳をドラにたたき込んだ。

ドラ「ぐふう！？」

ドラは呆気なく飛ばされ教室の反対側の背面黒板に直撃した。

クラスが一瞬で静まりかえった。

そして口を開いた者がいた。

ゲイター「お、おい！何で殴れるんだよ！ドラは『ミズミズの実』の能力者だぞ！て言うか教師が生徒を殴って良いのかよ！？」

ハワード「愛の拳は痛みを感じるんだぜ！そして校長先生からも許可は下りている。テメエらが勝手なことをしたら何でもしていいってね！」

ドラ「上等だあ！コラア〜！」

そこへドラが立ち上がった。

ハワード「ほお〜オレの拳を受けてまだ立っていられるのか？」

ドラ「まだ終わっちゃいねえ〜！！ 直撃型水龍拳！！」

ドラは右腕を龍の顔の形にするとそのままハワードを殴った。

ゲイター「オレもやってやるぜ！砂嵐・剣！！」
サブフルブレード

シヨット「バカ野郎！教室を壊す気か！？」

ハワード「やり過ぎだぞおゝくそつたれが！」

ハワードは二人の技を両腕で受け止めてからその勢いではじき飛ばした。

ドラ・ゲイター「ぐはあ！？」

またしても壁に激突した。

ハワード「と言うわけだ・・・元気なのは良いがほどにしるよ！くそつたれ！」

ショット（なんちゅうゝ野郎だ・・・あの二人を簡単にはじき飛ばすなんて・・・ただものじゃねえゝな・・・）

ウィング「ところで質問だけど・・・何でこの学校に？」

ウィングが突然質問をした。

それは皆が聞きたかったことだ。

ハワード「それは簡単だ！元気のある奴らが居た方が・・・やりがいがあるからだよ！」

全員（ただものじゃねえゝ）

ハワード「それはそうとして・・・その小僧！何してんだ？」

ハワードは教室の隅にいるシャークに問いただした。

シャーク「そりゃあゝあれでしょう・・・ミニ戦車（火炎放射付きラジコン型）だ！」

ハワード「か、火炎放射！？」

シャーク「たしかアンタはガス人間だよな？・・・それじゃ科学の実験だ！ガスに火を付けたらどうなる？うちのクラスはバカばかりだから実際やらないと分からないんだよ！」

ハワード「ちよつとま、待て！教室を・・・破壊する気か？」

ハワードが突然うるたえだした。

シャーク「それじゃゝ科学ショーだ！戦車発進！」

シャークはリモコンでラジコンを動かしハワードに近づけていた。

ハワードはジリジリと後ずさりし始めた。

シャーク「実験開始！！」

ポチッ

シャークがラジコンの火炎放射のスイッチを押した。

戦車の砲台から炎がハワードに向かって吹き出した。

ドガンー！！

その途端鼓膜が破れそうになるほどの爆音が鳴り響き大爆発を起こした。

教室は粉々に吹き飛んだ。

シャーク「あつ・・・やり過ぎた」

全員「やりすぎだあああああああ！！」

しばらくの間3・Dは停学処分を出された。

そしてハワードはというと・・・

ー職員室ー

先生「ハワード先生また病欠ですって！」

電話を受けた先生が職員室の先生方にそう言ってた・・・

第82章 私立海賊学園高等学校（後書き）

これを書いていて思ったこと・・・

シャークやり過ぎじゃね！？（笑

ていうかドラ・・・やられ役じゃん（笑

とまあツツコミ満載だったのでは？

夏休みももう終わりですね！

次回もお楽しみに！

第83章 水龍ラジオLet's go!go!(前書き)

ドラ・シヨット「水龍ラジオLet's go!go!」

ドラ「皆さん！こんにちは！秋と言ったら食欲の秋、スポーツの秋や読書の秋とかあるけどやっぱり自分は睡眠の秋かな？水龍海賊団船長のドラです！」

シヨット「ええ！皆さん！こんにちは！秋と言ったらやっぱり射的の秋でしょう！水龍海賊団狙撃手のシヨットです！」

ドラ「はあ！いい！と言っわけが始まりました！水龍ラジオLet's go!go!」

シヨット「それでは最後までお付き合いください！」

ドラ・シヨット「それでは行ってみよう！」

ドラ「終わるんじゃない？そしてまだ重大発表が残ってます！！」

シヨット「何??」

ドラ「それは・・・100章突破記念とすることでキャラソンのな奴を101章から更新していくつもりらしいよ！」

シヨット「マジでか？ツイに俺たちにも!？」

ドラ「そうだよ！今作者がストーリーを考えながら一緒に作詞しているよ！」

シヨット「どんな感じにナルのかな？」

ドラ「さあ〜と言うことで次回はいつも通り水龍海賊団会議をやるからな！」

シヨット「いやいやグダグダタイムだろう？」

ドラ「何を言っている！！グダグダじゃない！ダルダルだ！」

シヨット「どっちも一緒だろうがあああああ!？」

ドラ「と言うわけでラストになるけど！でも完全に終わりじゃないからね！一年か半年したらまた復活するからな！！」

シヨット「復活するのか？」

ドラ「するだろうよ！だってハ。ター×ハ。ターだって再開したん

だからよ!」

シヨット「しらねえよ!てかこれが最終回ばくなってんじゃん!」

ドラ「これは最終回ではありません!」

シヨット「あつそ・・・」

ドラ「ところで今回の『夏だ!!海だ!!祭りだ!!夏休みスペシャル編』はどうだったでしょうか?」

シヨット「中々更新できなかったな・・・」

ドラ「なんか作者のパソコンが音信不通になつたらしいよ・・・」

シヨット「何だよそれ!?!」

ドラ「そのままの通りですけど何か?」

シヨット「・・・」

ドラ「と言っている間にお別れの時間がやってきました!!!今回の

水龍ラジオLet's go!go!はどうだったでしょう?」

ショット「ほぼグダってたような・・・」

ドラ「次回からも応援ヨロシクお願いします!」

ショット「それではまた!」

ドラ・ショット「ご機嫌よう!」

第83章 水龍ラジオLet's go! go! (後書き)

残りの3日間連続投稿しようと思っていた矢先に自分が使用していたパソコンが言うことを聞かず・・・

なぜかネットワークに接続できませんでした・・・

そこで機嫌を直してくれよぉなどと言いながら(嘘)

九月に入ってから正常に戻った・・・(笑

今更やってももう夏休みじゃねええええ!?

と言うわけでした・・・

次回からは普通の本編に戻ります!

またヨロシクお願いします!!

次回もお楽しみに!!

第84章 最終章つてのは終わりではなくて始まりのことだ！

ドラ「はい、と言うわけで次回から新章に入るので急遽、集まって貰いました！」

レーツ「フライング・タイガー号の食堂を使ってお送りしまぁ〜す！」

シヨット「なに、今日はずっとこんな感じでやるの？」

ドラ「ああ、そうだ！だって、銀。だってこついつのやるじゃん・・」

シヨット「ていうか、この前もその前もそのまた前そのまたそのまた前も同じこと言わなかったか？しかも前とメンツ同じだし！」

ドラ「ああ、そうだよ！この時期なのにコタツを囲んでの会議なんだよ！使い回しにしているんだよ！」

シヨット「確かにコタツ入っているけど！何で使い回し？どんだけサボっているんだよ！」

ドラ「まあ、いろいろあるんだよ！」

シヨット「いろいろって何だよ！」

ドラ「大人の事情ってやつさ！」

シヨット「どんな事情だよ！？」

ドラ「さて本題に入るとするか・・・」

ショット「またもや誤魔化した!？」

ドラ「知つての通り次回から最終章突入だ!」

ショット「あゝもう終わりかあ・・・」

ドラ「バカ野郎!!」

バキッ

ショット「ぐはあああ!？・・・何で殴つたの!？」

ドラ「そんな浮かれ気分はどうするんだ?復活説が出てもな!そんな変な気分しているとボチャンなんだよ!打ち切られてしまうんだよ!」

ショット「大げさな・・・」

レーツ「そこまでにしてそろそろ次回のこと決めたら・・・?」

ドラ「そうだな!次回からは・・・」

ショット「次回からは・・・?」

ドラ「よし!先にテーマを決めよう!」

ショット「章名とは違うのか?」

ドラ「それは後にしてテーマだ！」

レーツ「どんなテーマだ？あつ！こんな奴か？『高級キッチンあり！高級食材あり！』の感動の最終章！！」

シヨット「つてそれほとんどメエゝ願望だろうがああああああああああ！……て言うかそんなんでも全然感動しねえよ！」

ドラ「まっ……方向性はズれてないけどな……例えばこんなのはどうだ？『笑いあり！涙あり！感動のラストステージ！』とか」

シヨット「おおゝ」

レーツ「いややっぱここはオレの『高級キッチンイイイイイイ？』」

シヨット「それは良いって言うてんだろが！！殴られないと気が済まないのか！？」

レーツ「ててて……もう殴られたし……チエツ」

シヨット「いや舌打ちする程じゃないよな！？」

ドラ「じゃここはオレの考えたテーマと言うことだ決定な……」

シヨット「何か今回は立派な会議じゃね？」

ドラ「やるときはやる男だからな！」

シヨット「……………」

ドラ「じゃ最後に章のタイトルだ・・・」

シヨット「さっ！これもサクサクッと決めちゃおうぜ！」

ドラ「……………」(汗)

シヨット「最後の汗は何だああああ！？ま、まさか・・・きめ・・・」

ドラ「な、何言ってるの？全然・・・そう言う事とか・・・じゃないからね……………」(汗)

シヨット「いや完全に目が泳いでるぞ！て言うかカッコの最後に汗つてついてるし……………」

ドラ「わっ！本当だ！ドンマイ！」(汗↑)

シヨット「完璧ノープランの奴がやることだよ・・・」

ドラ「やることはだいたい決まってるだよ・・・あの影狼とかと一戦交えるとか……………」

シヨット「だったらここは・・・『最終決戦！！VS影狼編』とかで良いんじゃない？」

ドラ「却下！」

シヨット「何でだああああ！？」

ドラ「お前が決めると何かむかつく・・・」

シヨット「うおおい!？」

ドラ「よしこは・・・」

シヨット「ま、まさか・・・」

ドラ「・・・・・・・・・・」

シヨット「・・・・・・・・・・」

ドラ「次の・・・・・・・・章タイトルは・・・・・・・・最終手段で・・・・・・」

シヨット「溜めすぎだあああああ!？」

ドラ「・・・・・・・・作者ヨロシク!!」

シヨット「やっぱり作者に無茶ぶりイイイイイイ!？て言うか溜めて溜めて結局はそれかよ!？」

ドラ「言うわけだ!まつ!作者が決めたなら文句は無いから!たとえばシヨットが決めた奴でもな!」

シヨット「ヒドッ!？」

ドラ「次回からは『最終決戦!!VS影狼編(仮)』だぜ!」

レーツ「注意！悪魔でもこの章タイトルは仮の形です・・・実際は変わるかも知れません！ご了承下さい！次回からもより一層面白いものを更新していきます！」（棒読み

ドラ「次回も！！」

シヨット・レーツ「楽しみにな！！」

第84章 最終章つてのは終わりではなくて始まりのことだ！（後書き）

ふう〜今日は無事に成功したな・・・（たぶん

では次回からの新章もお楽しみに！！

第85章 始動する闇の影（前書き）

―ブランドライン
―偉大なる航路深海―

目の前を一隻に潜水艦が通り過ぎた。

それもかなりの大きさなのだ。

その潜水艦の船体にはあるマークがあつた。

それはだれ一人知らない者は居ない・・・

世界海賊『影狼』のマークであつた。

その中では・・・

最終章開幕！！

第85章 始動する闇の影

―影狼艦船内―

?? A「さて諸君・・・いよいよだな・・・」

そこへ一人の男が口をはさんだ。

ギガス「おいおい！待てよ！何で提督でもねえ〜テメエ〜が仕切つてんだよ！」

?? A「提督は今聖地マリージョアに行っている」

ギガス「で？それと何が関係あんだ？それとも提督に任されたのか？」

?? A「そうしておこう・・・だいたい・・・負けてノコノコと帰ってきた奴に言われたくはねえ〜んだが・・・」

ギガス「ノコノコじゃねえ〜よ！あれはオレの分身だったからな！それを言うなら奴だって！」

デストール「まあまあ二人ともケンカはやめとけよ！」

ギガス「オメエ〜だって首ひとつ持って来れなかったじゃねえ〜か！」

デストール「それはそれ・・・そんな大口叩いてると滅しちゃうぞ！」

?? A「さて今後のことだが・・・」

ギガス「どうするんだ？奴らは完全に力を付け出さず・・・特に今話題の水龍」

デストール「大丈夫だ！奴はまだ魔獣^{ビースト}を完全にコントロールできない・・・よってまだ対策の余地はあるぜ・・・」

?? B「待てよ！」

そこへ今まで黙っていた一人が口をはさんできた。

?? A「何だね？」

?? B「奴らは恐らく残りの封印者^{スリーパー}も集めるつもりだぜ・・・じゃなきゃ俺たちにぶつかることはできねえ」

ギガス「それには問題はねえ！よ！そもそも奴らには動機^{キッカケ}が無い・・・」

?? A「だが全員が集まれば少し厄介だな・・・」

ギガス「だったら早急に計画を実行しないと・・・」

?? A「その前にさっきから気になっていたんだが・・・人数が足りないのでは？」

ギガス「そっぴやそっぴや・・・どうせいつもの単独行動だろう？俺たちはただの海賊同盟なんだからよ・・・」

?? A「まあいい・・・他の奴らにはあとで連絡しよう・・・では次だがギガスの向かった島では取るべき物は取った。次の島はここからそうは遠くないいな・・・バジル島だ・・・誰が行くか？」

デストール「バジル島と言えば・・・封印者スレイヤーの拠点だろう？奴が居る」

?? A「ああ・・・そうだけれぐれも感づかれるなよ！それと今回はギガスとデストールはダメだ！」

ギガス・デストール「はあ？何でだよ！？」

面白いくらいに声がもった。

?? A「提督からだ・・・前回のこともあるからな・・・」

ギガス「てことは今ここに居るのと言えはこいつしかいねえ」
「う？」

?? A「と言うわけだ・・・行つてきてくれるな？ヴォルフ？」

ヴォルフと呼ばれた男は黙つてうなずくと一人船室から出て行き自分の船に乗り込むと直ぐさま飛び出していった。

ギガス「大丈夫なのか？あいつで・・・」

デストール「確かに・・・問題はあるぞ！まさかコレも提督が？」

?? A「そうなるかもな・・・さて『世界海賊影狼』の計画実行だ

！！それとお前達は次の準備をしておいた方が良いかもな・・・じきに提督も戻ってくるからな・・・」

影狼艦はまたゆっくりと潜水していった。

時刻は夜・・・

ここは深海満月の明かりももう届かなくなっていた。

第85章 始動する闇の影（後書き）

遂に影狼が動き出した！！

ドラ達はそれを阻止できるのか！？

次回もお楽しみに！！

第86章 火の魔獣火鳥出現！ 炎を纏し封印者

く
グランドライン
偉大なる航路海上へ

一隻の海賊船が目的の島へ目指していた。

目指す島はバジル島・・・

レーツ「しかし本当に居るのか？その封印者スィーラーの一人が・・・」

ドラ「たぶんなあゝあのゲイターが言っていたからな・・・」

ー回想ー

ゲイター「あ！そうそう・・・コレを渡しておくよ！」

とゲイターはひとつの永久磁針エターナルボースをドラに放り投げた。

そこには「BAZIL」と標記されてあった。

ドラ「ここへ行けってか？」

ゲイター「ああそくだ・・・そこに封印者スィーラーの一人が居る・・・奴に会ってこい！」

ドラ「会ってどうするんだよ？て言つか誰か分からんし・・・」

ゲイター「この紙を渡しておいてくれ！中を見るなよ！まあ出した

相手にしか見ることができないけどな・・・お前が探し出せ・・・
奴の能力は火だ」

ドラ「それだけかよ！まっ！良いか！」

ドラは早速紙を開いた。

ゲイター「言っている側から開くなよ！？」

ドラ「何も書いてないじゃんか！」

ゲイター「だから言っただろう！渡す相手にしか読めないって！まあ！頼んだぜ！」

――――

ドラ「てな感じだったけど・・・進路は間違っていないよな？」

ドラはフェアリーに聞いた。

フェアリー「大丈夫！問題なしよ！さっきの島でバジル島の周辺地図を貰ってきたけど・・・この調子でいけばそろっと思えてくるわ！」

ドラ「そうか・・・ショット！！何か見えたか？」

と物見台にいるショットに聞いた。

ショット「今のところ何も収獲なし！」

と言つ返事が返ってきた。

ドラ「まだか・・・」

―一時間後―

シヨット「前方に島を発見！！バジル島かもよ！」

とシヨットが物見台から叫んだ。

ドラ「本当か！？」

ドラは甲板から身を乗り出した。

ドラ「あれか！」

レーツ「そうみたいだな・・・」

そこへ船室から一人甲板に姿を現した。

ウィング「あれ？もう着いたんかい？」

ウィングは大きなあくびをひとつした。

全員「寝てたのかよ！？」

全員でツツコミを入れた。

ウィング「休みの日は10時間・・・」

ドラ「海賊に休みは無いからな!!」

シャーク「よし!船を港に着けるぞ!」

シャークは操縦室へ向かった。

ドラ「さてどんな奴なんだろう・・・」

船はバジル島の港に停泊した。

「バジル島」

ドラ「ここがバジル島・・・至って普通だな・・・」

そこには普通の港町が広がっていた。

レーツ「さつさとその封印者^{スライヤー}とやらを探そうぜ!」

レーツがそう言った瞬間街の広場の方で歓声が上がった。

一同「?」

ドラ「なんだろう!!行ってみようぜ!」

ドラはそう言い終わらないうちに掛けだしていった。

ショット「あつ!探すのが先だろうが!!」

一同はあきれつつドラの後を追っていった。

―広場―

??「さあさあ！次は何を見せようか？炎の魔術を！！」
イリュージョン

観客A「さっきの鳥をもう一度見せてくれ！！」

観客の一人がそう言った。

??「やすい御用だ！」

そこへドラ達がやってきた。

シャーク「なにやってんだ・・・」

その声を聞いてか観客の一人が話しかけてきた。

観客B「何ってあんちゃん！よく見てご覧よ！あそこでやっている人がいるだろう！」

と指を指した。

シャーク「あの人はどうした？」

観客B「あんちゃん旅行かい？あの人にはね海賊なのに海賊からこの島を守っているんだよ！」

シャーク「へえ〜それで？」

観客B「それであゝ月に数回こつやつて街の人たちを楽しませてくれるんだよ！」

シャーク「へえゝちなみに名は？」

観客B「ああ・・・火鳥のバークだよ！」

シャーク「何だつて！？」

シャークはその名を聞き驚愕した。

観客B「まあゝ昔は結構名のある海賊だったんだつてねえゝあんちやん知ってるんかい？」

シャーク「ま、まあゝな・・・教えてくれてありがとな！」

シャークはお礼を言うと一味のところへ戻った。

leet「おっ！どうした・・・顔色が悪いゝぞ！」

leetはシャークの顔色が悪いのに気づいた。

シャーク「・・・あの真ん中に居る奴・・・ただモンじゃねえゝと思っっていたが・・・」

leet「誰なんだ？どつかでみたことあるような・・・」

シャーク「あの懸賞金7億ベリィ『火鳥のバーク』だ！」

全員「なにっ!？」

一味全員が声を上げた。

ショット「あのバークか!？」

というところでショーが終わったようだ。

観客達はゾロゾロと散っていった。

そこにはバーク一人が残っていた。

そしてこちらに気づいた。

バーク「どつかで見たことあるような顔だと思っていたが……てめえくら水龍海賊団だな?でその前にいんのが水龍か?」

バークはそう聞いてきた。

ドラ「ああそうだ!ゲイターって言う奴から手紙を預かってきた!」

そう言っただけでドラはバークに歩み寄った。

バーク「ほう……ゲイターか……懐かしい……だが何でお前が?」

ドラ「とにかく手紙を渡させて!」

ドラは紙をバークに渡した。

バーク「どれ……」

ーバークー

??『ゲイターのやつ何だって?』

バーク「……」

??『なんて書いてあったんだ?』

バーク「……何でもねえゝたわいもない手紙だ……」

??『それは嘘だろう……それなら水龍のガキに渡すはずがない・
・・』

バーク「じゃひとつだけ教えてやるよ!あの水龍のドラ……魔獣
を飼っているぞ!」

??『やはりな……そんな感じがした……じゃ水龍か?』

バーク「そうみたいだな……ま……相性が悪いゝつてとこだな・
・・火鳥^{かちょう}?」

火鳥『そうだな……』

――
――
――

バーク「……………」

ドラ「おおーい!!」

ドラが声を掛けた。

バークが口を開いた。

バーク「なるほど……お前……封印者^{スィーラー}なんだってな!」

ドラ「そうだけど!」

バーク「なら当たりだ……オレも封印者^{スィーラー}だ!」

ドラ「やっぱり……」

バーク「ここには封印者^{スィーラー}全員が集まってくれと書いてある……が
オレはこう言うメンドー事は御免だ……だが水龍のドラよ!オレ
とお手合わせ願おうか!」

ドラ「何でだ!?!」

バーク「こう書いてあるんだよ!『P・S・バークのことだから
即断るはずだ……だったらそこにいる水龍のドラと戦ってみろ!
それで勝ったら来なくて良い……だが負けたときは……分かつ
ているな?まあ……一縄ではいかんからな……頑張れよ(笑)』

」

ドラ「笑うなあああああ!!何勝手に決めてんだよ!!あのおっさん!!実力ってモンが違いすぎるだろうがああああああ」

思いつきりツツコミを入れた。（手紙に・・・）

バーク「いやそうでもないぜ・・・お前の方が有利だぜ！オレは火・
・お前は水だからな・・・」

ドラ「そうだな・・・じゃやってやるぜ！-」

バーク「よし！テメエの力見せて貰おうじゃんか！-」

バークは体に炎を纏った。

第86章 火の魔獣火鳥出現！ 炎を纏し封印者（後書き）

次回バークと大激突！！

さらに影狼からの刺客が！？

お楽しみに！！

第87章 VS 火鳥のバーク 炎と水の激突！！

ー広場ー

バーク「さあゝ掛かってこいよ！！」

バークは身を構えた。

ドラ「上等だああああ！！水龍拳！！」

ドラは早速右手を水龍の形に変えてバーク目掛けて飛ばした。

バーク「威力はありそうだな・・・喰らったらイチコロだな・・・」

バークはヒラリと避けた。

が・・・

ドラ「そう簡単に避けられないぜ！！はああ！！」

飛ばした水龍がバークの横を抜けた瞬間クルリと逆転した。

バーク「何っ！？」

そしてバークの背中に飛んできた。

ドラ「これならどうだ！！」

ドガン！！

バークに直撃した。

そこへ水蒸気が舞った。

ドラ「これで決まったな！」

??「なるほど・・・この盾じゃギリギリだなあ」

ドラ「何っ!？」

水蒸気が消えて視界が見えるようになってきた。

そしてそこには背中一面に巨大な炎の翼で防いでいた。

それも何十に・・・

バーク「これだと・・・10枚くらいは吹き飛んだな・・・」

ドラ「あの技を受けて平気なのかよ!？」

ドラは驚きを隠せなかった。

バーク「それじゃ・・・こっちから行くぜ・・・」

バークは身構えると・・・

バーク「お前なら本気を出しても良いみたいだな・・・覚悟しろよ
!」

ドラ「!？」

バーク「はああああああ!!火炎バースト!!」

バークの回りに炎が燃え上がった。

そしてバークは炎のオーラを纏った。

バーク「行くぜ!!火炎流星群!!」

バークは炎の塊を続けざまにドラに向けて飛ばしそして自分も飛び出した。

ドラ「これは!?!?!ぐっ!?!さすがに...避けき...!?!」

その直後バークの強烈なタックルを喰らった。

ドラ「ぐはああああ!?!」

その勢いで後方に呆気なく飛ばされた。

そして後方の廃屋に直撃した。

廃屋は無残に崩壊していった。

バーク「決まったな...」

ドラ「まだ終わってねええええ!!」

ドラは瓦礫の中から飛び出してきた。

バーク「やっぱそう来なくちゃねえー!!」

ドラ（上手くコントロールできるかは分からないけど・・・）
ビーストアウト
「魔獣解放!!」

ドラの周りを水が包んだ。

バーク「なにっ!？」

ドラ「水龍!!」

バーク「早速お出ましか・・・」

火鳥『手を貸すか?』

バーク「手を貸す? OK! サツとやるぞ! 魔獣解放!（ビーストアウト）!!」

バークの周りを炎が包んだ。

バーク「火鳥!!」

水龍「グルルルルル・・・」

火鳥「ん？」

水龍「ウォーターブレス!!」

水龍は火鳥に向けてブレスを飛ばした。

火鳥「炎迅風 斬撃!!」

火鳥は炎の斬撃波を発生させブレスを消し去った。

火鳥「こつちから行くぜ!! 火炎ブレス!!」

火鳥は火炎のブレスを飛ばした。

水龍はそれを尻尾で難なくはじき飛ばした。

火鳥「なっ!?!」

そして水龍は身を縮めるとバネの用に勢いよく火鳥目掛けて体を飛ばした。

火鳥「はい!?!」

火鳥はとっさに身をひねったが交わしきれずに体を擦った。

火鳥「ちっ・・・」

水龍「グルルルルル・・・」

火鳥（やっぱり・・・奴は上手くコントロールできてない・・・ここはすぐ片付けるべきだな・・・）

「炎陣!!」

水龍の周りを炎が囲った。

水龍「グルルルル!？」

水龍は戸惑いだした。

火鳥「炎流火炎嵐!!」

水龍の回りの炎が一段と激しくなってドラを覆った。

水龍「グガアアアア!？」

そして次の瞬間爆発した。

火鳥「ビーストイン魔獣封!!」

元の人間の姿に戻った。

バーク「少しはコントロールをできるようにしてからやれよ!」

ビースト魔獣モードが解けて倒れているドラに話しかけた。

ドラ「へっ・・・そうみたいだな・・・オレ・・・負けたんか？」

バーク「そうだな・・・今回は引き分けだ!お前がしっかり使えるようになったらまた相手してやる!そのときまでお預けだ!」

ドラ「そうかよ・・・」

ドラはそのまま立ち上がった。

??「スリーパー封印者、二人、見つけた・・・」

ドラ・バーク「!？」

突然二人の方へ歩み寄ってくる者が居た。

黒いフードを被り黒いマントを羽織っていた。

??「魔獣^{ビースト}を寄こせ!この島にある例の物も寄こせ……」

ドラ「誰だデメエ?」

??「誰だか、察し、付いてる、ハズ、このマーク、見れば気づく」

黒い人物は袖をめくるとある腕に書いてある刺青^{タトゥー}を見せた。

バーク「それは!？」

バークはその紋章に見覚えがあった。

第87章 VS火鳥のバーク 炎と水の激突!!（後書き）

二人の勝負は引き分け!?

次回謎の人物が明らかに!!

楽しみに!!

第88章 闇より出でし狂犬 影狼第3師団団長ヴォルフ参戦！

バーク「そ、その紋章は！？」

バークはフードの人物の腕に描かれている物に見覚えがあった。

ドラ「知っているのか？」

ドラが聞いた。

バーク「知っているも何も・・・忘れてくても忘れられない・・・
世界海賊影狼の紋章だ！！」

ドラ「なっ！？じゃ、奴が？」

??「ご名答・・・そしてオレはその影狼第3師団団長魔犬のヴォルフだ・・・」

そう言つと頭を覆っていたフードをめくった。

そこにはいくつもの傷跡が目についた。

バーク「早速幹部級のお出ましか・・・」

ドラ「何だあいつ・・・」

バーク「奴は影狼の中でもかなりのひねくれ者で周りからもある意味嫌われている。しかし戦いとなればその本性を露わにし標的を消すまで狂つたように攻撃に出る。そして奴は・・・動物系^{ソオン}の能力者・

両手を構えヴォルフに突っ込んでいった。

だが・・・

ヴォルフ「遅い・・・」

ヒラリと攻撃を交わした。

ドラ「なっ・・・」（は、はやい！？）

ヴォルフ「張り合いがないなあ~~~~おしまいだ！」

ヴォルフはドラのから空きになっている背後に回り込んだ。

そしてヴォルフは両手を合わせ指先に集中した。

ヴォルフ「ニードルシガン鋭指銃！！」

ドラを突き刺した。

ドラ「ぐはっ！？」

ドラはそのまま地面に崩れ落ちた。

ヴォルフ「まずは一匹・・・お前は魔獣ビースト：水龍の力を持っているみたいだな・・・」

ヴォルフは一步一步ドラに近づいてきた。

そしてドラの魔獣ビーストを抜こうと手を出したとき・・・

スノーショット
??「雪衝撃!!」

ヴォルフ「ぐっ!？」

ヴォルフの差し出した手に雪の弾丸が命中した。

??「うちの船長に手えゝ出すんじゃねえゝぞ!」

ヴォルフ「ああゝ水龍海賊団か・・・」

ヴォルフは声のした方を向き静かにそう言った。

見るとそこには水龍海賊団一行が構えていた。

ヴォルフ「ふっ・・・それくらいがどうした?まずはテメエゝらの船長をやったらオメエゝらの相手をしてやるからよゝ」

ヴォルフはもう一度ドラに仕掛けようとした途端

ヴォルフ「!？」

??「その手をどけろやあゝ魔犬!!」

そこにはウィングが刀を抜いてヴォルフの首に当てていた。

ヴォルフ「今度は夜烏か・・・」

ウィング「久しぶりだねえゝその名で呼ばれるのは・・・」

ヴォルフ「何でデメエーがここにいんだ？そして何故そいつをかばう？」

ウィング「何でかって？それはね・・・今は彼がボクの船長だからさ！」
キャプテン

ヴォルフ「そう言う奴だったか・・・」

ウィング「そういうことさ！分かったらとつとくたばるんだね！」

ヴォルフ「それはこっちの台詞だあああああ！！！」

ヴォルフは勢いよくウィングに飛びかかった。

ウィング「その短気癖はまだ直っていないようだね！」

ウィングはヒラリと交わした。

そして・・・

ウィング「ショット！！ドラを頼むぜ！あとシャーク！船を出しおいてくれ！」

ショット「わ、わかった！！！」

ショットは言われるままにドラを抱えて船に戻っていった。

シャーク「お前はどつするんだ？」

ウィング「すぐ追いつく！オレなら飛んでいけるからな！」

シャーク「分かった!!」

シャークはすぐ船に走っていった。

その後に団員達が続いていった。

ヴォルフ「随分余裕があるみたいじゃないかよ!!」

ウィング「そうかもね」

ヴォルフ「それと何で獣にならない？」

ウィング「そんなことするとすぐに勝負がついちまうだろう?」

ウィング挑発気味にそう言った。

ヴォルフ「んだと!？」

ヴォルフはウィングの挑発に軽々乗ってしまった。

そして次々と攻撃を仕掛けてきた。

ウィング「そんな攻撃じゃオレを倒せないぜ・・・そうだな・・・
本気を出さないと言ったが・・・こっちは時間が無いらしい・・・
すぐ終わらせるぜ!!」

ヴォルフ「なに？」

ウィングは人獣型へと変身した。

ウィング「10秒だ！」

ヴォルフ「あっ？」

ウィング「10秒で片を付けると言っただけだ！」

ヴォルフ「やれるモンならやってみ……っ!？」

ウィングは素早く動きヴォルフを蹴っ飛ばした。

ヴォルフ「ぐはっ!？」（な、なんだこいつ……明らかに攻撃力が上がっていやがる……それも生半可じゃねえ）

ヴォルフは空中に飛んだ。

そして地面に落ちる前に次の攻撃がきた。

ウィング「よかったな！オレの本気と闘えて!!最後は男らしく大技で終わりにしてやるぜ!!」

ヴォルフは思った……

ヴォルフ（オレ……とんでもねえ奴らに手を出したかも!?)

ウィング「からくさせんぶうせんじん唐草旋風千仞!!」

ウィングはヴォルフを上空へ突き上げるとそのまま自分の羽を尖らせ無数の羽の矢を放った。

ヴォルフ「ぐはああああああ！！」

ヴォルフはそのまま力を失い地面に落下した。

ウィング「これでひとつに戦力を潰したか・・・まだこれからだな・・・」

ウィングはバークの元へ行くと

ウィング「火鳥！ちよつと着いてきて貰おうか？」

バーク「ん？なんでだ？」

ウィング「話したいことがある・・・砂鰐から言われていてな・・・このことは手紙ではなく口答で言っただけだって言われてな・・・船まで来てくれ！飛べるか？」

バーク「分かった！そういうことなら着いていくでしょう・・・水龍の様子も気になるしな・・・」

バークは自らの炎で翼を作りウィングと一緒に船へと向かった。

第88章 闇より出でし狂犬 影狼第3師団団長ヴォルフ参戦！（後書き）

遅くなりすみません（――）m

文化祭の準備等でなかなか更新ができず当所の予定よりも大幅に遅れてしまいました・・・

文化祭終了までは更新回数が少なくなると思いますが・・・よろしくお願いします！！

次回もお楽しみに！！

第89章 本物を見分ける！ 影狼第2師団団長ミラージュ急襲（前書き）

ーバジル島 広場ー

広場に一人の男が瀕死寸前になっていた。

ヴォルフ「くっ・・・おのれ・・・夜烏の奴めエ」

ヴォルフはやつとの事で懷から電伝虫を取り出した。

ヴォルフ「てめえゝら・・・今ほど港を出港した海賊船を奇襲し・・・潰せ・・・じゃないと俺たちはもう終わりになっちまう・・・」

ヴォルフは待機させていた部下に連絡を入れた。

??『了解です！！と言いたいけどな・・・』

ヴォルフ「！？・・・誰だ？」

相手が違うことに気づいた。

??『君の部下はもうオレの指示に従って貰っている・・・』

ヴォルフ「ど、ということだ・・・？」

??『簡単に言おう！君はもう用済みと言うことだ。その島に向かいには行かない・・・ちなみに君の部下達はもう水龍海賊団奇襲に向かって貰っている・・・』

ヴォルフ「誰のし、指示だ・・・？」

「？？」・・・あばよ！負け犬！」

相手はヴォルフの間には答えず電伝虫を切った。

電伝虫「ガチャ」（ZZZ・・・）

ヴォルフ「くそっ！！・・・奴の仕業か・・・」

第89章 本物を見分ける！ 影狼第2師団団長ミラージュ急襲

バーク「なるほど・・・だいたい今の様子は分かった!!」

バークは納得がいったかのように腕を組みしきりにうなずいていた。

そこへウィングが現れた。

ウィング「とにかく世界は今大変な方向に向かっているってこと！」

ショット「ドラは!？」

ショットが真つ先に聞いてきた。

ウィング「大丈夫さ! 安静にしておけば二、三日で元通り動けるだろう・・・」

一同「よかった〜」

皆は安堵の息を漏らした。

バーク「さっきの話に戻すが・・・とりあえずオレはそこへ向かえば良いんだな？」

シャーク「そういうことだ・・・」

バーク「たくうゝ折角隠居生活でも楽しもうと思っていたのになあ〜!」

バークは冗談交じりの愚痴をこぼした。

そのときだった・・・

ドン！！

船の横に大砲の弾が着弾した。

船が多き揺れた。

レーツ「な、何だ！？」

ショット「確認してくる！！」

ショットは大急ぎで物見台へと上がっていった。

そして暫くして物見台からショットが叫んだ。

ショット「後方に海賊船・・・？それも結構な数だ・・・」

だがそのショットの声には疑問符が混じっていた。

シャーク「どうした？何かあんのか？」

ショット「いやそれが・・・海賊船らしきものが・・・揺れている・
・・・」

レーツ「揺れている？当たり前だろう！波で揺れるモンだろう！」

ショット「いや違うんだ！！船自体が波打っている・・・」

ウィング「まさか!？」

それを聞いたウィングは思い当たる節があった。

シャーク「なんか知っているのか？」

ウィング「もしかすると・・・厩気楼かもしれない・・・」

シヨット「しん・・・」

レーツ「きろう?」

なんだそれはという感じの顔を二人はしていた。

それを見たシャークはあきれながらこう付け加えた。

シャーク「厩気楼つてのはなあゝ簡単に言つと幻つて奴だ!」

シヨット・レーツ「ああゝなるほど・・・幻ねえゝ・・・じゃあれは本当は無いつてことか・・・じゃ、安心だなあゝ」

シャーク「安心すんな!」

シャークが一喝した。

シャーク「あれが全て幻だつたらさっきの大砲は何だ？」

シヨット「確かに・・・ってことは幻は撃つたのか!？」

シャーク「んなわけないだろう!!」

ウイング「おそらく別の場所からの砲撃だろう・・・そこを見つけないとな!」

とウイングが口をはさんだ。

シヨット「でもどうやって探すんだ? 当てがねえじゃんか!!」

ウイング「そうだな・・・だが攻撃を仕掛けてこない・・・最初の砲撃から何分が経った? これはただの威嚇か・・・警告か・・・」

レーツ「確かに・・・」

??「そう続けざまに攻撃を仕掛けてくると言うこと考えていたが仕掛けてこない・・・そして敵は少し気を緩める・・・そこを狙うと言うわけだ・・・」

一同「!?!」

どこから声が聞こえてきた。

だがその声の主の姿は見あたらない・・・

レーツ「どこだ!?!」

??「どこに居るかって? それはな・・・君たちの目の前さ!」

すると彼らの目の前に一人の人物が姿を現した。

??「初めまして・・・世界海賊影狼第2師団団長ミラージュという者だ・・・」

シャーク「早速、おいでなすつたな！だが一人で敵陣に潜り込んでくるわなあ」

ミラージュ「一人・・・それは君たちの見当違いさ！幻影解除！」
ミラージュ・リリース

ミラージュは指を鳴らした。

その途端・・・

一同「なっ!？」

彼らの船の周りには海賊船が囲っていた。

ミラージュ「この数でどう対処するかな？まあ逃げすることは不可能だが・・・」

レーツ「ちっ・・・片っ端から沈めるしかねえぞ・・・」

ミラージュ「どれくらい強いのか・・・見させて貰おうよ・・・と言ってもただ見るだけじゃアレだから・・・」

シャーク「何だ？条件でもたたきつけるのか？」

ミラージュ「そうだな・・・ジャンプでも読んで待たせて貰うよ・・・」

一同「見物するんじゃないかねえのかよ!？」

息びつたりのツツコミを入れた。

ミラージュ「いやあゝ今週のジャンプまだ読んでなくてねえゝそれなのにウチの提督さんがさあゝ」

シヨット「いや俺たち愚痴聞く係じゃないんだけど・・・」

ミラージュ「君たちは何派だ？まあオレは断然ジャンプ派だが・・・君たちは・・・SQ派かな？それとも最強派かな？」

シヨット「何コレ・・・答えなきゃいけないの!？」

シャーク「んなもん決まってるじゃねえゝか!!断然ジャンプ派だあああああ!!」

シャークは叫びながらミラージュに斬りかかった。

ミラージュ「そうか残念だ・・・同じ者を好む同士・・・わかり合えず・・・終わってしまうのか・・・」

ミラージュに向けてシャークは刃を振り下ろした。

第89章 本物を見分ける！ 影狼第2師団団長ミラージュ急襲（後書き）

くオマケく

ウィング「シャークは俺たちはジャンプ派だと言っていたが・・・
ボクはSQ派だ・・・」

シャーク「え・・・？マジ？」

ウィング「本気と書いてマジだ・・・」

レーツ「オレもSQ派！！」

バーク「オレも！」

ゲイター「オレも！」

シャーク「う、裏切り者おおおおお！！」（泣）

ドラ「そう落ち込むなって！オレはジャンプ派だから」

シヨット「オレもだ・・・」

シャーク「おおお！同士達よ！！SQ派なんて放つところでわない
か！オレらだけにしか分かんないこともあるもん・・・」（泣）

ウィング・レーツ・バーク・ゲイター「SQ派ですいませんでした
あゝ（嫌み）」

―終―

では次回もお楽しみに!!

第90章 遂に重い腰を上げた！？影狼の提督出現！！（前書き）

―影狼艦隊―

?? A 「まあ、勝手な行動をあゝ？」

?? B 「す、すみません・・・」

?? A 「ただでさえ最近の戦力が減ってるんだからさあゝ」

?? B 「しかし・・・ヴォルフとミラージュなら・・・大丈夫なのでは？」

?? A 「無理に決まってるだろう？あいつだもん・・・相手は」

?? B 「は、はあゝ？」

?? A 「とにかくだ！奴らと呼び戻しおいてえゝ」

?? B 「し、しかし・・・電伝虫はすべて使用中でして・・・」

?? A 「小電伝虫もかあゝ？」

?? B 「いえ・・・小電伝虫ならありますが・・・連絡が取れないんです・・・」

?? A 「じゃあ、オレが行かないとダメってかあゝ？くそつたれえ！」

?? B「私もこの船を開けることはできませんので・・・」

?? A「そうだよなあゝお前が離れたらこの船は海底の海王類のすみかになっちまうもんなあゝ」

?? B「では行かれるのですか？」

?? A「まっ！そういうことだねゝたまにはあいつの顔を見るのも悪くはないかなあゝ」

?? B「お気を付けて・・・提督・・・」

?? A「あいよゝ」

遂に影狼の提督が腰を上げた！？

どうなるのか！？

第90章開幕です！！

第90章 遂に重い腰を上げた！？影狼の提督出現！！

水龍海賊団のメンバーは船の回りに群がる敵を相手に奮闘していた。

シャーク「ちっ！数が多い！！嵐脚・月光桜！！」
ランキヤク

シャークは両手を床に付け逆立ちをしながら足を回し周りの敵を蹴散らした。

シャーク「どうだ！！」

だが減らせたのはほんの一握りくらいだけだった。

レーツ「喜んでる暇はねえ！はずだぜ・・・」

レーツが嫌みっぽく注意を促した。

シャーク「わかってらあゝ！！」

レーツ「シャーク！！空中なら何人刺せる？」

シャーク「あん？どどういう意味だ・・・？」

レーツ「空中にあげた奴なら何人いけると聞いているんだ！」

シャーク「その人数分できるぜ！」

レーツ「分かった・・・しくじったら晩飯ぬきな・・・」

シャーク「なっ!？」

レーツは刀を構えた。

レーツ「二刀流 足抜き!!」

レーツは刀を地面すれすれを平行に滑らせて衝撃波を放った。

当然それを受けた奴らは空中へと飛ばされていく。

そこを待ち構えていたシャークが攻撃を繰り出した。

シャーク「嵐脚・ランキヤク桜花百連撃!!」

連続で嵐脚の衝撃波を繰り出した。

敵「ぐはあああああああ!？」

次々に倒れていった。

ウィング「だいぶ減らしたが・・・まだ半分じゃないかあ」

ショット「何人いんだよ!？」

愚痴をこぼしながらも次々に倒していった。

ウィング「そういえば・・・ミラージュは？」

ショット「奴ならあそこで読書中!」

シヨットはますの上でジャンプを読んでいるミラージュを指した。

ウィング「あれじゃなくて本体は？」

シヨット「えっ？本体じゃ無いのか？」

ウィング「あれは幻・・・本体は！？」

シャーク「うぉーい！レーツの奴そちに居るかぁ？」

反対側で戦っていたシャークが大声で聞いてきた。

ウィング「居ないよぉー！！」

シャーク「おつかしなぁ」

ウィング（奴のねらいは・・・何だ？ボクらの力量を見たいというのは嘘・・・だがそんなことくらいでこんな多人数は使う必要が無いはず・・・じゃ・・・目的は他にある・・・）

そこでウィングはひとつの答えにたどり着いた・・・

ウィング「フェイク！！」

シヨット「どうした？」

ウィング「お前ら！！コレはフェイクだ！！」

シヨット「どういうことだ？」

ウィング「おかしいと思っていたがこの敵も幻だ・・・」

ショット「な！」

シャーク「につ！？」

シャークがこちらに引き返して来た。

シャーク「どういう意味だ？」

ウィング「さつきから減っていないと思っていたが・・・こいつらやられた振りをしていた・・・」

シャーク「どういうことだ？」

ウィング「倒れたら後ろの奴が前に出てくる・・・この繰り返しだ・・・そして真の目的は・・・」

ショット「何だ？真の目的って？」

ウィング「考えたら最悪の結果しか出てこなかった・・・」

ショット「最悪だつて！？」

ウィング「奴ら・・・いや奴の目的は・・・ドラだ！！」

ショット「どういうことだ？」

ウィング「ドラの命を狙ってやがる・・・瀕死なら狙いやすいだろう？」

シヨット・シャーク「なっ!？」

ードラの寝室―

??「クッククッククツ・・・まさか今頃自分達の船長が殺される
とはしらずにねえ」

一歩一歩寝ているドラに近づいていった。

そして刀を取り出し斬りつけようとした。

そして刀を振った。

ガキン!!

??「なっ!？」

見ると刀で受け止められていた。

??B「やめなあゝそいつはうちの船長でねえ」

??A「何で貴様が!?!鷹の爪!!」

レーツ「おっ!その名前で呼ばれるのは初めてだなあゝミラージュ
!」

ミラージュ「何故分かった!？」

レート「そんなの簡単だ！こいつが教えてくれた！」

と肩にホークスが止まっていた。

ミラージュ「その鷹が教えたのか？」

レート「まあゝな・・・オレは動物の言葉がわかるんでなあゝ」

ミラージュ「ちっ・・・」

レート「なるほど・・・付き添ってくれていたフェアリーちゃんを
気絶させてドラを殺るつもりだったか・・・」

ミラージュ「ならてめえゝを倒してからだあああああ！！」

レート「少しは刀を使えそうなんだな・・・どこまで実力が試させてもらっぜ・・・」

ミラージュ「自意識過剰もほどにしろい！！」

ミラージュは斬りかかってきた。

レート「くっ・・・」(何だ・・・この攻撃は・・・隙ができない・
・・・全く攻めることができねえゝ)

ミラージュ「どうした？攻撃してこんのか？」

レート「くっ・・・」(や、ヤバイ・・・このままだと・・・)

レーツは直感で危険と悟った。

だが度重なる連続攻撃で交わすこともままならない。

ミラージュ「終わりだ!!」

ミラージュは最後の渾身の一撃を放とうとした瞬間・・・

ぷるぷるぷるぷる・・・

突然電伝虫がなった。

ミラージュは面倒くさそうに電話にでた。

電伝虫「ガチャ」

ミラージュ「もしもし?」

??『ああゝおれだあゝやつと電話にでくれたなあゝ何回掛けたことやらあゝミラージュ! 引き返してこいや!』

ミラージュ「て、提督!？」

ー甲板ー

シヨット「おいおい・・・嘘だろう・・・何だあのかいの・・・」

ウィング「あそこに人がいるが・・・」

ウィングが指を指した場所にはその巨大な潜水艦の先端の場所には
小電伝虫を持っている男が居た・・・

??「探すのに苦労したぜえゝくそつたれえ!!」

- T O B e C o n t i n u e -

第90章 遂に重い腰を上げた！？影狼の提督出現！！（後書き）

ええー風邪を引きました・・・

これも咳をしながら書いていました・・・

朝よりはだいぶ良いので・・・執筆をした次第でございます・・・

遂に提督出現！？

その驚くべき正体が明らかに！！

次回もお楽しみに！！

第91章 影狼提督の素顔が明らかに！？その驚くべき事実とは！？

ウィング「まさか・・・ご本人がいらっしやるとは・・・」

巨大潜水艦の先端部分にいる男に声を掛けた。

??「なめるほど・・・これがあいつの海賊団か・・・知っている顔がちらほらいるねえ」

シヨット「おい！まさかあいつが影狼の？」

ウィング「そうだ・・・奴が・・・世界屈指の男・・・影狼提督リユークだ！！」

リユーク「おいおい！そのあんちゃん！間違っちゃいけないぜ！屈指じゃねえ・・・最強だ！」

リユークと呼ばれた男はにやりと笑みを浮かべた。

ガチャ

そこへ船室から遅れてレーツが姿を現した。

続いてミラージュも・・・

リユーク「よ！ミラージュ！オメエ！こんなところで何してんだ？わざわざオレが迎えに来てやったんだぞ！電話にもでねえ！しょお」

ミラージュ「す、すみません・・・」

レーツ「何しに来やがった！！二刀流砲　JET気流砲！！」

ウィング「バカッ！！やめろ！！」

レーツがウィングの制止も聞かずにリユーク目掛けて技を放った。

リユーク「ほぉ」

レーツの攻撃がリユークに直撃した。

レーツ「！？」（何故・・・避けない・・・！？）

リユーク「その刀の技・・・飛ぶのか？」

レーツ「！？」

レーツの背後にリユークがいつの間にか立っていて刀をレーツの首に当てていた。

リユーク「その技・・・頂いたぜ・・・だが・・・今のオレがやる気があれば・・・テメェの首は確実に吹っ飛んでいたぜえ」

レーツ「ビクッ！？」

レーツは背筋に寒気が走ったのを感じた。

リユーク「・・・」

リユークは無言で刀を鞘に収めた。

そしてクルリと皆の方に向き直ると・・・

リユーク「ここに居るべき奴が・・・いねえくなあ・・・」

一同「!？」

リユーク「船長はどうしたあ」

ガチャ

突然船室のドアが開いた。

??「オ、オレなら・・・ここに・・・いるぜ・・・」

一同「ドラ!？」

扉に寄っかかりながらも何とか立っているドラが居た。

リユーク「おほっ!オメエ怪我したんかあくなっさけねえなあ
」

ドラ「う、うつせえ・・・まさか本当だったのか？」

リユーク「ああ？」

ドラ「本当にアンタが影狼のボスなんかやってんのかって聞いてんだ!バカ親父!」

一同「なにiiiiiiiiiiiiiiii!？」

その言葉を聞きき一同は驚きを隠せなかった。

リユーク「おいおい!実の親に向かって『バカ』はねえ〜んじやないのぉ〜」

ドラ「質問に答えろ!!」

リユーク「答えは分かってんだろ?答えは……」

ぷるぷるぷるぷる……

リユーク「おっと電話だ」

リユークは懷から小型電伝虫を取り出した。

電伝虫「ガチャ……」

リユーク「もしもし?」

??『もしもし提督ですか?』

リユーク「そうだけど?」

??『交渉決裂です!元帥が首を横に振りました!!元帥の言葉を伝えます!「我々海軍は悪に消して屈指にない!!正義が必ず勝つ!!どこからでも掛かってこい!」だそうです……』

リユーク（ニツ）

「了解・・・報告ご苦勞・・・」

??『失礼します・・・』

電伝虫「ガチャ・・・」(ZZZ...)

リユーク「聞いての通りだ・・・計画実行だ！」

ドラ「何？」

リユーク「海軍の元帥さんが俺たちとの交渉を蹴った・・・ただそれだけ・・・では行くとするか・・・ミラージユ！行くよ！」

ミラージユ「はっ！」

リユークは潜水艦へと向かって行った。

リユーク「そうそう・・・ミラージユ？君には少し聞きたいことがあるんでね？・・・ヴォルフのことであろ」

ミラージユ「ギクッ!？」

そして潜水艦は海の中へと沈んでいった。

彼らが去った後の海賊船では・・・

ウィング「まさか・・・ドラの親父さんだとねえ」

ドラ「ああ・・・そうだ・・・った・・・」

ウィング「それとボクから一言・・・彼だけどね・・・彼は複製コピーのリユークと呼ばれているんだ・・・」

ショット「何で今その話を？て言うか・・・複製コピー？」

ウィング「そう！彼は自分の目で見た相手の技を自分のものにしてしまうんだ・・・つまり相手が使った技は自分も使える・・・そして永遠に覚えていられる・・・」

ショット「写。眼かつ！？」

ウィング「とにかく奴には気を付けた方がいい・・・それとその後が気になる・・・これから新聞も目を通しておいた方がいいなあ」

I I T O B e C o n t i n u e

第91章 影狼提督の素顔が明らかに！？その驚くべき事実とは！？（後書き）

〔海軍支部G3 通称：最強の要塞^{ナバル}〕

ウーウーウー

要塞内中にけたたましいサイレンが鳴り響いた。

そして海兵達の慌ただしい靴音があちらこちらから聞こえてくる

シュード少将「バ、バカな……何故奴が……ここに!?!」

司令室で少将はただただ茫然としていた。

シュード少将「……複製^{コピー}のリュークだと……!?!」

少将は司令室のモニターに映るリュークの姿を見ていた。

なんと影狼の提督がドラの父さん!?!

そして海軍の要塞を襲ったリュークの目的とは!?!

次回、その様子をお送りします!!

お楽しみに!!

第92章 影狼の野望 遂に始動!!（前書き）

ウーウーウー!!

支部内にサイレンが響き渡った。

そして足音も・・・

『緊急配備!!緊急配備!!』

シュード少将「バ、バカな・・・何故奴が!?ちっ!リユークめ!
」!

シュード少将はモニター室でモニターに映っているリユークの姿を
凝視していた・・・

第92章 影狼の野望 遂に始動！！

時は坂登・・・1時間前・・・

―海軍支部G3 通称：最強の要塞―
ナバル

海兵A「おい！交代の時間だぞ！」

要塞の出入り口の門の所にいた見張りの海兵にそう告げた。

海兵B「お！もう交代の時間かい？」

海兵A「ああ！どうだ？変わったことは無いか？」

海兵B「全然・・・まあ、こんなところに攻めてくる無謀な海賊は居ないだろう？」

海兵A「そうだな！」

アッハッハッと笑っていた。

そして引き継ぎをしていた。

しかしこの時二人は海中から潜水艦が迫ってきていることに気づいていなかった。

「????潜水艦―

??「見張りは・・・二人か？ミラージュ？」

と操縦室に居るミラージュに話しかけた。

ミラージュ「はい！そのようです・・・リ्यूク提督・・・」

リ्यूク「あいよ」しかし・・・こう警戒が薄いとやる気が起きんねえ」なあ」

ミラージュ「まあ・・・最強という名があるからゆるんでいるんでしょう・・・」

リ्यूク「これだから最近の海軍わなあ」

ミラージュ「一つ聞いて良いですか？」

リ्यूク「ん？何だ？」

ミラージュ「何故・・・私がこの潜水艦の操縦を！？」

リ्यूク「そりやあ」オメエ」決まってるう！・・・さっきはオレが操縦してたからだ！」

ミラージュ「いや・・・提督の方がかなり操縦技術は上だと思えますが・・・」

リ्यूク「何だ？やりたくないのか？あとは・・・アレだ・・・ヴオルフの件な？」

リュークはニツと笑って見せた。

ミラージュ「ビクッ!？」

ミラージュにはそれがどういうこと示すのかが分かっていた。

ミラージュ「ぜ、是非……やらせ貰います!!」

リューク「分かれば良いんだ……」

リュークは席から立ち上がると小型電伝虫を取り出した。

リューク「そんじゃ……行ってくるわぁーあとヨロシクな」

ミラージュ「ええ!？行くって……あの要塞の中にですか!？それも一人で!？」

リューク「ああ……そうだ?何か問題でもあるのか？」

ミラージュ「い、いえ……ですが相手は最強ですよ……」

リューク「あんなのはただの肩書きにしか見えねえー今から証明してやるよ!船は頼んだぞ!あと……軽く浮上してくれないか？」

リュークはそう言い残すと出口の方へと歩を進めた。

―要塞 門付近―

海兵B「それじゃ後は頼んだぞ！」

海兵A「まっ！このまま何も無ければ良いけどな！」

海兵B「何も無いだろうよ！じゃ！」

引き継ぎを終えて海兵が戻ろうとした瞬間・・・

ザザー・・・

突然目の前の海が持ち上がった。

海兵A・B「なっ！？」

二人の目の前には巨大な潜水艦が姿を現した。

そしててっぺん部分から男が一人姿を現した。

リユークだった。

リユーク「あの野郎・・・少しだけって行ったのに70%も潜水艦の姿を出しやがって・・・」

そしてそこから二人の目の前に飛び降りた。

スタッ

海兵A「誰だ！？貴様は！？」

海兵が銃を向けてきた。

リユーク「おいおい・・・そんな物騒なモンはしまちゃいな！」

そしてリユークは手に持っていた電伝虫に話しかけた。

電伝虫『がちゃ・・・』

リユーク「オレだ・・・」

??『提督？今何やってんだ！？こつちは幹部全員集まってるぞ！』

リユーク「おいおい・・・そんな大きい声出すなよー聞こえてるつてば！どこかって・・・海軍支部G3だ・・・」

??『はあ！？何でそんなところに！？』

リユーク「話は後で・・・て言うかすぐ来てくれない？」

??『すぐつて・・・』

リユーク「と言うわけだ・・・頼んだよ！」

??『おい！ちよつと待てええええ！！この自己中大魔王！！』

リユーク「だからでつかい声出すなよーすぐだ・・・頼んだぞ！それまで要員を半分くらい減らしておいてやるからな！」

??『分かった・・・はあー半分は無いぜえーせめて4分の3は残していてくれよー！』

リユーク「それまでに来ればな」

??「なっ!?!上等だ!!すぐ行ってやる!!」

電伝虫「がちや・・・」

リユークは電伝虫を懐にしまった。

リユーク「そうだなあゝまだ名乗ってなかったな!よく覚えときな!オレは・・・世界海賊影狼の提督・・・複製コピーのリユークだ!」

海兵A・B「なっ!?!」

リユーク「そこ通らして貰うぜ!」

海兵A「通すわけ無いだろう!」

海兵B「ここがどこだか知ってのことだろう?」

リユーク「じゃ・・・ちょっとだけ痛いぜ・・・」

リユークは二人の立っている真ん中を抜けようとした。

スウー

海兵A・B「!?!」

二人の間を静かに抜けた。

リユーク「抜き足 鎌融^{カマイタチ}」

海兵A・B「ぐはっ!？」

次の瞬間二人は地面に倒れた。

リユーク「邪魔をしなければ生きれたのになあ」

リユークは門の目の前へと向かった。

リユーク「でっけえゝなあゝ開け方分からないから・・・入るわ!」

リユークは門に手を当てた。

リユーク「摂氏600℃」

シューーーー

リユークの手の所から門が解けていった。

そしてすぐに人一人通れるくらいの大きさになった。

リユーク「お邪魔します」

リユークはその中へとくぐっていった。

そしてその先に見たものは・・・

リユーク「おっと・・・結構歓迎されんじゃないか!しかしこの人数は何だ?パーティでもやるのですか?」

リユークがそこで構えている海兵達に挑発した。

海兵「すでにここは警戒態勢に入っている！！即刻貴様を捕らえてやる！！」

リユーク「おおおゝ怖いねえゝ．．．でも．．．できるのかな？」

海兵「うおおおおおおお！！」

一気に海兵達が攻め込んできた。

リユーク「これまた楽しい祭りになりそうだぜえゝ．．．血のな！！」

リユークは飛び込んでくる海兵達に手を差し出した。

第92章 影狼の野望 遂に始動！！（後書き）

―水龍海賊団―

ウィング「さて・・・そろそろ行きますかあ」

ドラ「どこへだ？」

ウィング「ゲイターの言う招集場所へ！」

ドラ「えっ！？」

ウィング「何だ？聞いていなかったのか？そうだな・・・寝てたもんなあ」

ドラ「そこへは誰が来るんだ？」

ウィング「君と同じ・・・封印者さんさ！」
スィーラー

ドラ「よし！！そこへ向けて出航だ！！」

ショット「いや・・・もう向かっているしな！」

ドラ「えっ・・・！？」

水龍海賊団の船は招集場所へと向かっていた。

更新遅くなり申し訳ありませんm(´`m

次回もお楽しみに!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9323p/>

ONE PIECE ~ Another World ~

2011年12月1日16時55分発行